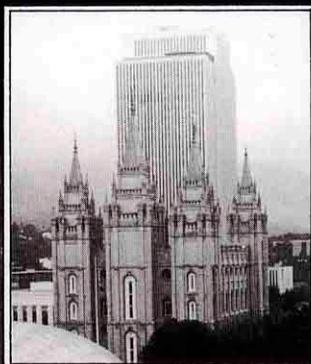


聖徒の道

4 1982

第151回半期 総大会報告





大管長会

左より第一副管長N・エルドン・タナー、大管長スベンサー・W・キンポー
ル、第二副管長マリオン・G・ロムニー、副管長ゴードン・B・ヒンクレー

末日聖徒イエス・キリスト教会 第151回半期総大会報告

1981年10月3、4日の両日、
ユタ州ソルトレーク・シティー、
テンプルスクウェアのタバナクルにおいて催された
大会の説教とその模様

世界中から訪れた教会員と指導者が、ソルトレーク・シティーのテンプルスクウェアにある歴史的なタバナクルとその周辺の建物に再び会して、末日聖徒イエス・キリスト教会第151回半期総大会が開催された。

しかし、第12代大管長スペンサー・W・キンボールは9月4日以来市内のLDS病院に入院中のため、10月3、4日の両日に開かれた各部会に出席することはできなかった。

大管長が欠席する中で総大会が開かれたのは、デビッド・O・マッケイ大管長が病気で出席できなかった1969年の10月大会以来のことである。

1981年10月大会の各部会は、N・エルドン・タナー第一副管長が管理し、司会はタナー第一副管長、マリオン・G・ロムニー第二副管長、ならびにゴードン・B・

ヒンクレイ副管長が務めた。

教会幹部で出席できなかったのは、キンボール大管長のほかに、入院中のG・ホーマー・ダラム長老とセオドア・M・バートン長老、それに南アメリカのウルグアイ・モンテビデオ伝道部を管理しているF・バートン・ハワード長老の3名である。

今回の大会では、過去10年間ほとんどの大会で開催されてきた地区代表セミナーが開かれなかった。次回のセミナーは、1982年4月の総大会に予定されている。

総大会の各部会の模様は、従来のように数カ国語で全世界に放送された。

総大会の1週間前にあたる9月26日の夜、タバナクルにおいて秋の扶助協会大会が開かれ、この模様も世界各地で放送された。

第151回半期総大会報告 1

10月3日(土) 午前の部会

教会役員への支持 ゴードン・B・ヒンクレー 4
 確信：宗教の真髄 ゴードン・B・ヒンクレー 5
 「ああ、聖なる贖い主」 ニール・A・マックスウェル 11
 幸福と昇栄に至る計画 リチャード・G・スコット 16
 総大会に寄せて ハワード・W・ハンター 19
 「だれでも新しく生れなければ」 マリオン・G・ロムニー 22

10月3日(土) 午後の部会

「主はよみがえりぬ」 トーマス・S・モンソン 26
 予言者の生涯に学ぶ ロバート・D・ヘイルズ 31
 福音の光 アドニー・Y・小松 35
 永遠の生命への道を阻む小さなムシ アンゲル・アブレア 39
 王国の力は私たちの中に ティーン・L・ラーセン 43
 「汝ら備えをなせ」 リブランド・リチャーズ 46

神権部会

アロン神権 ボイド・K・パッカー 51
 アロン神権者の務め H・パーク・ピーターソン 57
 「もし汝らに備えあらば怖るることなからん」 L・トム・ペリー 62
 若人への4つの提言 ゴードン・B・ヒンクレー 67
 自由という完全な律法 マリオン・G・ロムニー 72

10月4日(日) 午前の部会

「だれがわれわれの聞いたことを信じ得たか」 ブルース・R・マツコンキー 77
 伝道活動を通して清くなる ウィリアム・R・ブラッドフォード 82
 従うか、従わないか、それが問題だ チャールズ・A・ティティエ 87
 ふれあい テビッド・B・ヘイト 92
 私たちの時代の予言者、ジョセフ・スミス エズラ・タフト・ベンソン 98

10月4日(日) 午後の部会

予言者に従う マーク・E・ピーターセン 103

神の業に敵対するもの	カーロス・E・エイシー	108
「わたしの羊はわたしの声に聞き従う」	菊地 良彦	113
理由を論ず	ポール・H・ダン	116
憐れみ	マリオン・D・ハンクス	120
世界に広まるジョセフ・スミスの証	ジェームズ・E・ファウスト	125
「自分が何者であるか思い起こしなさい」	N・エルドン・タナー	130

福祉部会

愛は限りなく	J・リチャード・クラーク	132
家庭を平安を得る場とするために	バーバラ・B・スミス	139
人に仕えることによって得られる喜び	ジョアン・ランドール	144
奉仕によって証を強める	ナイル・ランドール	147
「高潔な心で受けられるように、知恵を使って与えなさい」	マービン・J・アシュトン	150
福祉の原則に添った生活をする	マリオン・G・ロムニー	156

扶助協会大会における説教

「愛はいつまでも絶えることがない」	ゴートン・B・ヒンクレ	160
転機の時の扶助協会	バーバラ・B・スミス	164
絶えず学ぶことの特権	シャーリー・W・トーマス	170
扶助協会と福祉	マリアン・R・ポイヤ	173
栄えある女性の務め	エズラ・タフト・ベンソン	177

ローカルページ		184
---------	--	-----

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー
ゴードン・B・ヒンクレ

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・バック
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

ジェームズ・E・ファウスト
ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
ローレン・C・ダン
レックス・D・ピネガー
チャールズ・A・ティディエ
ジョージ・P・リー
F・エンツィオ・ブッシュ

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：
ラリー・A・ヒラー
編集副主幹：
デビッド・ミッチェル
子供の頁編集：
ボニー・ソーンダース

デザイナー：

ロジャー・ギリング
制作：
ノーマン・ブライス

聖徒の道 4月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布 5-10-30

印刷所 株式会社 精興社

配送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀 4-9-19

定価 年間予約2,200円 1部350円
海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PRMA 04491A Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

教会役員の支持

副管長 ゴードン・B・ヒンクレー

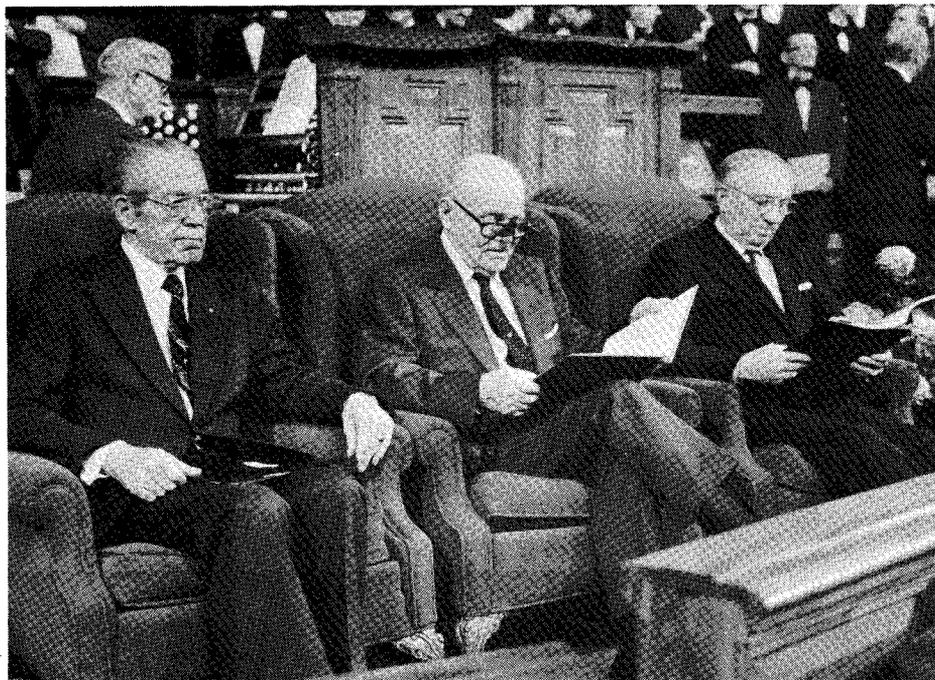
私たちはゴードン・B・ヒンクレーを大管長会の副管長として支持して下さるよう提議致します。この提議に賛成の方はその意を表わして下さい。もし反対の方があれば、同じようにその意を表わして下さい。

私たちはニール・A・マックスウェル長老を十二使徒定員会の会員として支持して下さるよう提議致します。この提議に賛成の方はその意を表わして下さい。もし反対の方があれば、同じようにその意を表わして下さい。

私たちはG・ホーマー・ドラム長老を七

十人第一定員会会長会の一員として支持して下さるよう提議致します。この提議に賛成の方はその意を表わして下さい。もし反対の方があれば、同じようにその意を表わして下さい。

ただ今支持された兄弟たちを除いて、前回の総大会から教会幹部の異動がありませんので、教会幹部、その他管理役員を現状のまま支持して下さるよう提議致します。この提議に賛成の方はその意を表わして下さい。もし反対の方があれば、同じようにその意を表わして下さい。



確信：宗教の真髄



副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

私たちの予言者キンボール大管長のために、これほど惜しめない愛が注がれたことはなかったと思います。私たち主の民は、心を合わせ声を合わせて、主から与えられた祝福に感謝し、キンボール大管長がさらに健康を回復されるように祈るものです。

そして現在入院中のG・ホーマー・ダラム長老とセオドア・M・バートン長老のためにも祈りたいと思います。またバートン・ハワード長老は、ウルグアイの伝道部管理のために欠席していることを皆さんにお知らせしておきたいと思います。

兄弟姉妹の皆さん、皆さんがそれぞれの地で天父の子供たちのために捧げて下さる忠実な働きに感謝します。また、この場に集うために多くの犠牲を払って下さったことに感謝します。明日ここを去る時に、すべての人が命のパンを得たと感じることができるよう祈っています。そしてこの同じ祈りを、各家庭で大会の様子を聴いている方々のためにも捧げます。

私は皆さんを代表して、広範囲にわたる放送を可能にして下さったラジオ、テレビ

局の方々や、通信関係の方々に感謝したいと思います。この方々の働きには、何十万人もの人々が感謝していることと思います。

また、この大会の様子は衛星中継という驚くべき技術により全米の教会員に放送されています。ソルトレーク・シティから北へ数キロ行った丘の上に新しい装置が設けられましたが、本大会の音声と映像はこの装置から電波にのせて赤道の上空3万6千キロまで送られます。そこで電波は増幅されて地上に送り返されます。それを合衆国各地のステーク部センターに設置されたアンテナで受信します。今のところ受信装置を備えたステーク部センターはわずかしかなかったが、今後1年半の間に400から500カ所に設置する予定です。そうなれば、合衆国のほとんどの会員は、それぞれの家庭でラジオ、テレビ、有線放送を通して、あるいはステーク部センターに集まることによって、総大会に出席できるようになります。

教会の発展に伴って、望む人全員をひとつの建物に収容するのは不可能になりました。また、多額の旅費を支払って集うことも難しくなりました。しかし、科学という賜が、もっと便利な方法を与えてくれました。主のみ業が拡大されるにつれて、主は人類に靈感を与え、世界中の教会員がどこにしようとも直接予言者の言葉を聞けるような方法を示して下さいと確信しています。コミュニケーションは、教会員をひとつの家族として結ぶ原動力です。これらの設備がすでに置かれているところ、あるいは間もなく設置される所では、それぞれの必要に応じて、また状況に応じて、互いに情報交換を行なうことができるようになるでしょう。

私事で恐縮ですが、ここで少しお時間をいただいで話すことをお許し下さい。私は

今から20年前の10月大会で、十二使徒評議員会の会員として支持されました。それまでの2年半は、十二使徒補助として働かせていただきました。以来現在に至るまでは多事多端な時期にあたり、教会はデビッド・O・マッケイ、ジョセフ・フィールディング・スミス、ハロルド・B・リー、スペンサー・W・キンボールという靈感を受けた4人の大管長によって管理されてきました。そして、この間に教会は全世界に向かって驚くべき発展を遂げたのです。数百万の人々が教会に加わりました。教会に敵対する声を挙げる人もいました。しかし、いかなる批判も、主のみ業の発展をとどめることはできませんでした。かえって私たちを擁護し、支持する人々が増え、時には多くの人々が教会に加わることになりました。

私個人にとって、これらの年月はまさにチャレンジの時で、苦勞の多い責任と満足感を与えてくれる経験が同居した毎日でした。また、世界中の聖徒の皆さんとお会いする機会でもありました。私は各地で皆さんの家庭を訪問させていただきましたが、その際に温かいもてなしと親切を受けました。心から感謝の気持ちを表わしたいと思います。また集会に出席して、皆さんの証や信仰あふれる話を伺いました。皆さんの悲しみを知って共に涙し、成功を知って多くの人々と喜び合いました。私の信仰は強固になり、知識は増し、神の子供たちへの愛はかつてなかったほど高まりました。

最近のことですが、私は旅をする機会に恵まれ、中華人民共和国、東ヨーロッパ諸国、それにロシアを訪れました。どこへ行っても、善良な人々の温かさに触れました。皆、神様の子供なのです。確かに政治的、思想的には大きな隔たりがありますが、本質的には同じです。すべての人は神様の息子であり、娘なのです。心の奥底では同じ

願望を抱いています。夫は妻を愛し、妻は夫を愛しています。親は子供を愛し、子供は親を愛しています。彼らの心も、機会さえ与えられれば、同じ真理に共鳴するのです。ほとんどの人は、戦争よりも平和を、争いよりは兄弟愛を望んでいます。また、流言よりも真理を求めています。私たちには果たさなければならぬ重大な責任があります。それは、地上に住むこれらすべての人々に永遠の福音を教えることです。多くの門戸はいまだに閉ざされています。しかし、私たちが絶えず祈り求め、そのために備えるならば、主はみこころにかなう時にすべての門戸を開いて下さるに違いありません。その時がいつなのか、私にはわかりませんが、私たちは努めてこのみ業に従っていかねばならないのです。

私は20年以上にわたり教会幹部の責任を果たしてきましたが、その間にアジアの大いなる国々で奇跡的に門戸が開かれ、み業が進められていくのを、この目で見てきました。わずか25年前には伝道開始など夢にも見なかった国々に、現在では10万人以上の会員がいて、強いワード部やステーク部が幾つも組織されています。主が不思議な方法で門戸を開き、そこに住む人々の心に触れられたのです。そして今、同じようなことが他の国々でも起こっています。目には見えなくとも、確かにこのみ業は進められているのです。

私はこの20年間を振り返り、主のみ業が偉大な発展を遂げたことに心から感謝します。

私は新たな責任をいただきました。キンボール大管長、タナー副管長、ロムニー副管長をはじめ、十二使徒、七十人、管理監督会の兄弟たちが、私に信頼を寄せて下さることを感謝します。私のただひとつの願いは、いかなる職に召されても忠実に働く

ことです。私の新たな召しについて、寛大な心と思いやりとを示して下さい多くの方々に感謝します。この神聖な召しを受けることによって、私は自分の持つ弱点に気づきました。もし私がいかなる時であれ皆さんを傷つけるようなことがあったなら、この場で心からおわびします。どうか赦して下さい。この召しながいものであれ、短いものであれ、私は愛と信仰をもって全力を尽くす覚悟です。

聖徒たちが互いに理解し合い、耐える精神と赦す気持ちとを持つように願っています。私たちには、他人の批判や粗探しなどをして、時間やエネルギーを浪費している余裕などありません。主はその民に次のように命じておられます。「すべての談話により、すべての祈りにより、すべての訓戒により、すべての行為によりて、汝の兄弟たちを強くすべし。」これは明確に宣言された戒めであり、次のような素晴らしい約束を伴っています。「見よ、みよ、われ汝と共に在りて汝を祝福し、永久に汝を救わん。」(教義と聖約108：7-8)

さて、ここでみたまの導きを願いつつ、別のことについてお話したいと思います。最近この町で、東部からやってきた著名なジャーナリストが講演を行ないました。私は彼の話を直接聞いたのではなく、新聞で読んだのですが、その中には次のような言葉が引用されていました。「確信は宗教の敵である。」私はこの言葉を心の中で反すうしていました。私の定義では、確信とは完全に信じることであって、これは決して宗教の敵ではありません。むしろ、宗教の真髄と言えるものです。

確信とは、信じて疑わないことであり、信念を持つことであります。また、信仰の力であって、この力は知識に匹敵し、知識になり得るものです。確信は熱意を引き起



こします。反感や偏見、冷淡な態度を克服する上で、この熱意に勝る力はありません。

不安定な基礎の上に、巨大な建造物は建てられません。煮えきらない指導者のもとでは、決して偉大な事業は成功しません。確信がなければ、福音を世に広めて、人々を改宗させることはできないのです。個人の確信の中心をなすものが信仰であり、この信仰こそ、これまでそうであったように、いつの世にあっても宗教生活の根源にならなければなりません。

「あなたがたはわたしをだれと言うか」と主がお尋ねになった時、ペテロの心には何の疑いもありませんでした。「シモン・ペテ

口が答えて言った、『あなたこそ、生ける神の子キリストです。』（マタイ16：15-16）

また、カペナウムの群集に向かって、イエスが御自身を命のパンであると教えられた時も、ペテロは何の疑いも抱きませんでした。この教えが理解できなかった「多くの弟子たちは去って行って、もはやイエスと行動を共にしなかった」と記されています。

「そこでイエスは十二弟子に言われた、『あなたがたも去ろうとするのか。』シモン・ペテロが答えた。『主よ、わたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。わたしたちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています。』（ヨハネ6：66-69）

救い主の死後、使徒たちはみ業を遂行し、主の教義を教え、激しい苦難の中で命までも捧げました。もし彼らが自らが代表する主に対して、あるいは自らが教える教義に対して、わずかでも疑いを抱いていたとしたら、そのようなことができたでしょうか。パウロはキリスト教徒を迫害するためにダマスコへ向かう途中、光に照らされてみ声を聞きました。その後、彼の確信が揺らぐことはありませんでした。パウロは30年間にわたって自らの時間と、力と、命とを捧げて、復活された主の福音を宣べ伝えたのです。自分の慰めや安全など顧みず、当時知られていた世界を巡り歩いてこう宣言しました。「死も生も、天使も支配者も、現在のもも将来のもも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主イエス・キリストにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。」（ローマ8：38-39）

ローマで処刑されたパウロは、イエス・キリストが神の御子であるという最後の証を、自らの死をもって結び固めたのです。

同じことが初期のクリスチャンにも言えます。復活され生きておられる神の御子を信じる何千、何万というクリスチャンが、信仰を否定するよりはと、投獄、拷問、そして死刑をも甘んじて受けました。

もし確信がなかったら、ルター、フス、ツウィングリをはじめとする偉大な人物が勇気をもって推し進めた宗教改革などあり得たでしょうか。

そしてそれは現代にも言えることです。信者に確信がなければ、宗教の大義は弱まり、その教えを広めて人々の心をつらえる原動力も推進力もなくなってしまいます。神学について口論することはできても、行動によって得た個人の証は否定することはできません。私たちが恩恵を受けているこの福音の神権時代は、天父と御子が少年ジョセフ・スミスのもとを訪れるという輝かしい示現によって幕が開かれました。この少年は自分が経験したことを近所の牧師に話しました。すると牧師は非常に軽蔑してこう言いました。「そんなことは全く悪魔の仕わざである、今の時代に示現だの啓示だのというようなことがあるものか。」（ジョセフ・スミス2：21）

他の人々も口をそろえてジョセフを攻撃しました。彼は激しい迫害を一身に受けました。しかし、次のように記しています。

「私は実際に光を見た。その光の唯中に二人の御方を見た。そしてその方々は真実私にお言葉をかけたもうた。私が示現を受けたと言うために憎まれまた迫害されても、なおそれは真実である。そして私がこのように言うために、人々が私を迫害し罵り偽ってあらゆる悪口をあげている間に、私は自分の胸の中で語るようになった。『何故真実のことを話すから私を迫害するのか。私は本当に示現を受けたのだ、私がどうして神に抗えようか。何故世の中の人は、

私が本当に見たものを見ないと言わせよう
と思うのか。私は示現を受けたのであるか
らそれが事実であることを身を以て知ってい
る。私は神がそれを知りたもうことを知っ
ている。私はそれを打ち消すことはできな
かった。また敢て打ち消そうともしなかつ
た。」(ジョセフ・スミス 2 : 25)

この言葉には、みじんの疑いもありません。
ジョセフ・スミスにとってこの経験は、
真昼の太陽が暖かいと同様に、現実のもの
だったのです。彼の確信は決して薄れたり、
揺らいだりはしませんでした。よみがえら
れた主について、彼が後に記した証を聞いて
下さい。

「さて、この子羊に就きて為されたる様
様の証の挙句、われらの為す最後の証はす
なわち『主は実に生きたもう』こと是なり。

われらは、彼がすなわち神の右に座した
もうを見たり、また、御父の生みたもう独
子なりと証したもう声を聞けり。

すなわち諸々の世界は彼の手により、彼
の手を経て、また彼に因りて先に作られ、
また現に作られ、これに住む者たちも皆神
より生れたる息子と娘なることを証したも
う。」(教義と聖約76 : 22-24)

ジョセフは自分の進める業が確かなもの
で、自分の受けた召しが真実であると確信
していたので、それを命よりも大切にしま
した。そして、自らの死を予期しながら、
暴徒の中に無防備のまま自分を置き去り
にするような人々に身をまかせました。ジ
ョセフは自らの血で証を結び固めたのです。

彼に従った人々もそうでした。このよう
な人々の生活や行動の中には、「確信が宗
教の敵である」と言える証拠など少しも見
いだせません。聖徒たちは次から次へと住
みなれた家を追われていきました。ニュー
ヨーク州からオハイオ州へ、そしてミズー
リ州、イリノイ州へと移住し、この盆地に

たどり着いてからも、新たな町を築くため
に多くの人が広大な西部に散っていきまし
た。なぜでしょうか。それは自ら携わる業
に確固たる信仰を持っていたからです。

この長く困難な旅の途中で、聖徒たちは
病に冒され、自然の猛威にさらされ、敵の
襲撃を受けました。そして、多くの者が命
を落としました。ミズーリ川からソルトレ
ーク盆地に至る道の傍らには、6,000人余
りの聖徒が葬られています。彼らは自らの
命よりもさらに真理を愛していたのです。

この精神は今も受け継がれています。私
は数年前に、デビッド・O・マッケイ大管
長の美しい言葉を手紙に書いたことがあり
ます。それは次のような言葉でした。

「夜が明けると陽が昇って朝になること
をあなたが少しも疑わないように、私はイ
エス・キリストが人類の救い主であり、啓
示により予言者ジョセフ・スミスに回復さ
れた福音を通して、世の暗闇を一掃する光
であられることを確信しています。」

愛するスペンサー・W・キンボール大管
長もこのように言われました。「私は、イエ
ス・キリストが神の御子であり、世の人々
の罪のために十字架におかかりになったこ
とを知っている。イエス・キリストは私の
友であり、私の救い主、私の主、そして私の
神である。」(『キリストにあって永遠の望み
を抱く』「聖徒の道」1979年2月号, p.120)

この確信があるからこそ、教会は前進し
てきたのです。迫害や嘲笑に耐え、財産を
犠牲にし、愛する者を残して遠方の地へ福
音を携えて行ったのです。この確信が、最
初から現在に至るまで、み業を推し進めて
きました。数百万の聖徒たちが、このみ業
は真実であり、神は私たちの永遠の御父で
あり、イエスはキリストであると信じてい
るのです。この信仰は私たちの生活の中で
大きな原動力になるに違いありません。

現在、3万人の宣教師が多くの家族の犠牲のもとに伝道しています。なぜそのようなことをするのでしょうか。それは、このみ業が真実であるという確信があるからです。教会員数は500万に達しようとしています。この驚くべき成長をもたらしたものは何でしょうか。それは、毎年聖霊の力を感じて改宗する何十万もの人々の心の中に生じる確信なのです。教会には効果的に機能する福祉プログラムがあります。多くの人はこれを見て驚嘆の声を挙げます。このプログラムが成功しているのも、参加する聖徒の信仰があるからなのです。

教会が発展するにつれて、私たちは何百もの礼拝堂を新しく建てなければなりません。お金のかかる仕事です。しかし、聖徒たちは収入の中から建築資金を納めるだけでなく、きちんと正直に什分の一を納めています。このみ業が真実であるという確信を持っているからです。

素晴らしいことに、真理を知りたいと願う人はだれでも、この確信を得ることができます。主御自身がその方法を教えておられます。「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。」(ヨハネ7:17)

確信を得るには、神のみ言葉を学ぶことです。真理の源を熱心に捜し求め、祈ることです。福音を実践し、教えに従って生活することです。私は自分の経験からためらうことなく約束します。これらのことをすべて行なうならば、聖霊の力によって、確信と証と確かな知識とがもたらされるでしょう。

世の多くの人々には、これが信じられないようです。神のことは神のみたまによら

なければ理解できないという原則がわからないのです。努力が必要です。謙遜さがなければなりません。祈りも必要です。しかし努力の報いは必ずあり、証は確かなものとなります。

もし私たち主の民が、それぞれこの確信を失うようなことになれば、教会は他の多くの組織と同じように衰退してしまうでしょう。しかしその心配はありません。常に増大する教会員が、自らの確信を捜し求めてそれを見いだすに違いないからです。この確信は証と呼ばれ、聖霊の力によってもたらされ、いかなる逆境の嵐にも耐え抜くものです。神に関する事柄について考えの定まらない人、約束を避ける人、不確かなことを語る人、このような人には黙示録の言葉が当てはまります。

「わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう。」

(黙示3:15-16)

兄弟姉妹の皆さん、この素晴らしい大会を始めるに当たり、皆さんの上に主の祝福があるようにお祈りします。また、確信をもって真理に対する証を述べたいと思います。永遠の父なる神は生きておられます。確かに生きておられます。イエスはキリストであり、人類の救い主、贖い主であり、私たちの救いを計画された御方です。私たちが携わっている業は神のみ業です。この教会はイエス・キリストの教会です。教会で奉仕する機会は実に素晴らしいものであり、またそのことへの私たちの信仰は固く揺るぎないものなのです。イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

「ああ、聖なる贖い主」



十二使徒定員会会員
ニール・A・マックスウェル

兄 弟姉妹の皆さん、私は心から主に感謝しています。また、愛するキンボール大管長と副管長の方々に感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。私は十二使徒という召しをいただきましたが、使徒と呼ばれる人々の中で、私ほど未熟で資格に乏しい者はおりません。

あらゆる面で申し分のない妻に、愛と感謝を伝えたいと思います。寛大で立派な両親や姉妹たちに、また王国のみ業に務め、永遠の伴侶と結婚した子供たちに、私の愛と感謝の気持ちを伝えたいと思います。

使徒としての召しをお引き受けした以上、私は生涯を捧げてその責任を果たさなければならぬと考えています。そこで、つたない言葉ではありますが、私はへりくだって聖なる贖い主を讃美し、証を述べたいと思います。

主はさまざまな名前と呼ばれます。創り主、独り子、平和の君、助け主、仲保者、神のみ子、救い主、メシヤ、救いの導き手、完成者、王の王。しかしどのような尊称で呼ばれようとも、人類を救い得る唯一の名は、イエス・キリストをおいてほかにあり

ません。(教義と聖約18：23参照)

主はその属性と、知識と、偉業と、経験において、まさに比類なき御方であります。にもかかわらず、主は私たちを「友」と呼んで下さっています。(ヨハネ15：15参照)

私たちは無条件で主を信頼し、礼拝し、敬愛することができます。この地上に生を受けた者の内、主以外に完全な御方はいらっしゃいません。(イザヤ46：9参照)

主の知恵と業績は、全人類の能力と実績を総合したよりも、はるかに優れたものです。(アブラハム3：19参照)

主は私たちの善い行ないを喜ばれますが、主に対して私たちがどのような立場に立つのかを考えると、私たちは主の足もとにも及ばないことがわかります。だからこそ、私たちはひざまずいて主を礼拝するのです。

重い病にかかっているからといって、その苦しみを主に訴えることができるでしょうか。主は人の理解が及ばない方法で、私たちが苦しみや病に遭わずつと以前に、それらをすべて御自身の身に引き受けて下さいました。(アルマ7：11—12；マタイ8：17参照) 私たちの犯す罪の重さの故に、主はすべてのもの下に身を落されました。

(教義と聖約122：8参照) 主が経験されたような深き底に、私たちは落ちたことはありませんし、これからもそのような経験をすることはないでしょう。この贖罪によって、私たちを救う主の力は完全なものとなったのです。この試しの世にあって主から教えを授かる私たちは、主の贖いに心から感謝を捧げます。カルバリの丘には、アブラハムとイサクの友であるイエスの命を救う雄羊はいなかったのです。

自分の家がないからといって、家のない生活がどんなものか、主に話そうとする人がいるでしょうか。ある時、イエスは次のように言われたではありませんか。「きつね

には穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子にはまくらする所がない。」(マタイ8:20)

誤解されたり、裏切られたりしたからといって、そのことを主に訴えようとする人がいるでしょうか。友人がしりごみしたり、「わたしは漁に行くのだ」と言った場合は、どうでしょうか。(ヨハネ21:3参照)

不義について主に教えを説くことができるでしょうか、あるいは司法制度の誤りを、律法を定められた御方のせいにする事ができるでしょうか。この御方は威厳をもって、律法の曲解や悪質な裁判に耐えられたのです。

孤独にさいなまれるからといって、「ひとりでさかぶねを踏まれた」主に、見捨てられた者の気持ちについて何を教えることができるでしょうか。(教義と聖約76:107; マタイ27:46参照)

子供を授からない人々は、主に頼ることはできないのでしょうか。主は子供たちを愛し、「天国はこのような者の国である」(マタイ19:14)と言われたではありませんか。また、「子供たちを一人一人近よせてこれに祝福を与え、かれらのために御父に祈り」、そして涙を流されたではありませんか。(Ⅲニーフアイ17:21-22)

思いやりや憐れみについて、主に説教しようと思う人がいるのでしょうか。主は十字架上で苦しみの絶頂にあった時でさえ、隣の罪人を慰めて、「あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」(ルカ23:43)と言われたのです。

自分の地位を求める強い誘惑があったからといって、妥協したことへの言い訳をすることができるでしょうか。サタンがこの世のすべての国々とその栄華とを見せ、「これらのものを皆あなたにあげましょう」と言って巧みに誘惑した時、御父への驚くべ

き忠誠を示されたのは、ほかならぬ主でありました。主は断固としてその誘惑を拒まれたのです。(マタイ4:8参照)

人生の思いもかけない皮肉ななりゆきについて、私たちは主に何を教えることができるでしょうか。主が亡くなられた時、残された、たった1枚の着物さえくじで分けられました。しかし主にとって、この地球は足台だったのです。主は人類が再び渴くことのないように、生ける水を与えて下さいました。それなのに、十字架の上で主に差し出されたのは、酔いぶどう酒でした。(ヨハネ4:10-19; マタイ27:48参照)

最後の敵である罪と死から私たちを解放してくれた主に、自由について何を教えることができるでしょうか。

自由を尊重しながらもそれに伴う苦難に不平を言う人が、主の福音によらずして、神との真の和解に至ることができるでしょうか。

貧しい人々を養うことに携わっているからといって、群衆に食べ物を与えることについて、主に何を教えることができるでしょうか。

医療に従事しているからといって、病人を癒すことについて、主に何を教えることができるでしょうか。

自分の奉仕がだれにも気づかれず、感謝されなかったからといって、その心の痛みを人類の贖い主に訴えることができるでしょうか。癒された十人のうちの一人の内、イエスに感謝を捧げたのはたったひとりでした。イエスはこうお尋ねになりました、「ほかの九人は、どこにいるのか」(ルカ17:17)

人間の寿命を延ばす研究をしているからといって、全人類の復活を可能にされた御方に何を教えることができるでしょうか。

科学者が真理の糸を幾つか発見したか

らといって、真理全体を編まれた御方に何を教えることができるのでしょうか。

勇気について、主に何を教えようというのでしょうか。体の5箇所特別な傷をお持ちの主に戦傷者に贈られる勲章を見せたとて、何になるのでしょうか。

新しき世界を創造し、その他の世界を過ぎゆかせられるのも、主がお持ちの「力の言葉」によるのではないのでしょうか。(モーセ1:35-38参照) そのように大宇宙を統治する御方であるにもかかわらず、主は十二使徒の一人一人と親しくお話しになり(Ⅲニーフアイ28:1参照)、後にはニューヨーク州の片田舎に住む農家の一少年を召されたのです。

主は私たちに、主がお造りになった天の星を観察して、「みいつ堂々と進む神を」見るように勧めておられるではありませんか。(教義と聖約88:47参照) 天体がそれぞれの軌道を運行するように、教会から離れた人々がやがて真理の道に立ち返るのを見る時、私たちはそこに主の栄光と力を感じないのでしょうか。

主がお造りになった世界は数多く、コンピューターを操作する人間でもそれを数えることはできません。それにもかかわらず、主は「あなたがたの頭の毛までも、みな数えられている」と教えておられるではありませんか。(マタイ10:30;モーセ1:35-38参照)

復活された主は、^{とら}囚われの身のパウロのかたわらに現われて、彼を激励し、ローマでも証をするように召されたではありませんか。(使徒23:11-12参照) 同じように、義人がつらい経験をしている時、そのかたわらには必ずイエスがおられるのです。

この良き羊飼いは、栄光に満ちた贖いの後に、墓からよみがえり、ノアの時代に不従順に陥った失われた羊たちのもとを訪れ



られました。(Ⅰペテロ3:18-20参照)そして、アメリカ大陸にいる他の失われた羊のもとを訪れたではありませんか。(ヨハネ10:16;Ⅲニーフアイ15:17, 21参照) そのほかにも、主の訪れを受けた失われた羊がいるかもしれません。(Ⅲニーフアイ16:1-3参照) 私たちは良心的な行ないについて、主に何を教えられると言うのでしょうか。

何ひとつとして私たちが主に教えることはありません。しかし、私たちは主のみ言葉に耳を傾け、主を愛し、敬い、礼拝することはできます。主の戒めを守り、聖典に親しむことができます。そうです、主を忘れてみこころに背きやすい私たちではあり

ますが、決して主から忘れられることはないのです。私たちは主の「業」であり主の「栄光」です。主は決して私たちを迷わせたりされません。(モーセ 1 : 39 参照)

ですから、私は主を讃美し、主のみ業をたたえます。主の栄光を表わすにはあまりにも拙い言葉ではありますが、この時満ちたる時代に特に召された主の証人として、主のみ業が完きものであることを証します。

主のみ業が祝福ばかりで教えに欠けるなどと言う人は、何と危うい状態にいますでしょうか。十字架ばかりを強調して、復活を説かないのであれば、何と狭い視野で物事を見ていることになるでしょうか。カルパリの悲劇ばかりを語って、パルマイラの回復を伝えなければ、何とも偏った教えになってしまいます。それはちょうど、主を拒んだカペナウムの村ばかりを強調して、福音を受け入れたエノクの市について語らないのと同じことです。あるいは、古代のイスラエルの不信仰や墮落ばかりを説いて、何十年にもわたって義しい生活を送ったバウンテフルの人々を無視することと同じです。

イエス・キリストは、紅海やシナイ山でのエホバであり、復活した主であり、パルマイラの丘では天父の代弁者を務めた御方です。あの時、パルマイラの丘には、たったひとりの少年がいただけでした。

主は生きておられ、恵みに満ちておられます。主はすべての国々にその国民にかなう光を送られ、神の道を彼らに宣べ伝えさせておられます。(アルマ 29 : 8 参照) 世の光であられる主が、それぞれの国にどの程度の光を送るか、お決めになるのです。

間もなくすると、すべての人が主にまみえる時がやってきます。主のみ前であらゆる人がひざをかがめ、「イエス・キリストは主である」と告白することでしょう。(教義

と聖約 76 : 110—11 ; ペリピ 2 : 10—11 参照) 祈るためにひざまずいたことのない者でさえ、急いでそうすることでしょう。不敬な言葉を吐く時を除けば主のみ名を口にしたことのない者もまた、主を拝して告白することでしょう。

かつてあざけりの中で(王を象徴する)紫の衣をまといわれた主が、間もなく、贖いの血を表わす「赤き装い」をして再臨されるのです。(教義と聖約 133 : 48—49 参照)

その時、すべての人は主の正義と憐れみが完全なものであることを悟るでしょう。

(アルマ 12 : 15 参照) さらに、神が冷淡であられたのではなく、人が神をないがしろにしたのであり、それによっていかに多くの苦しみが生み出されるか知るでしょう。

そして、人類の真の歴史がおぼろげにではなく、はっきりと映し出されるでしょう。

(I コリント 13 : 12 参照) 大戦争も小さなたき火のように瞬時に消え去り、人類の歴史上の出来事が「時の壁」に描かれた絵のように次々と現われては消えていくでしょう。

しかしその前に、末日の厳しくも栄光ある背景の中に、まず私たちの行ないが映し出されるのです。

地上には善と悪の激しい対立があるでしょうが、エノクの市の聖徒たちとの美しい再会も行なわれます。そうです、国々には分裂が起こりますが、主の家々はさらに固く一致して、地上に栄光をもたらすのです。ハルマゲドンは間近に迫っています。しかし、アダム・オンダイ・アーマンも目の前にあるのです。

その一方で主は私たちに、夏の終わりの陽射しから何を悟るようにと言っておられるでしょうか。主は、試練によって私たちの信仰と忍耐力とを試すと言われなかったでしょうか。

狭き門へと続く細い道を見いだす者はき



次とその扉を閉ざし、様々な出来事は、嵐に舞い散る木の葉のように過ぎ去っていくでしょう。そして、福音のともし火で暖をとる人々は、身と霊とが震えるのを覚えることでしょう。しかし、この信仰の輪の中にいる私たちは、そのような中にあっても、神の目的が決して挫折しないことを知っています。なぜなら、「主は始めから一切のことを知って居たもうから、そのすべての御業を世の人の中に成就するためにある方法を備えておきたもう」(I ニーファイ 9 : 6) と記されているからです。

私はへりくだって、主が遣わされるところであれば、どこへでも参ることをお約束します。そして主のみむねのままにみ言葉を語れるように努力します。主の特別な証人として完全にその責任を果たすには、私自身の生活を特別で完全なものにしなければなりません。私はこのことを、身の震える思いで自覚しています。話を終えるにあたり、「聖なる贖い主」と題する讚美歌の歌詞を読みたいと思います。この詞の願いは、私自身の願いでもあります。

わめて少ないと主御自身が宣言されたではありませんか。(マタイ 7 : 13—14 参照) また、全地に散らされた聖徒たちが、邪悪と暴動と迫害のうずまく中で、神の力と義によって武装すると言われたではありませんか。主は「ひとつの清き民をわがためにおこさん」と欲しておられるのです。(I ニーファイ 14 : 12—14 ; 教義と聖約 100 : 16 参照)

主のみ業は、あたかも台風の目のように、静かに進められています。初めに主は、聖徒の只中でこれを統治され、次いで全世界の民を治められます。(教義と聖約 1 : 36 ; 133 : 2—3 参照)

人類の歴史は、嵐が近づく時のように次

ああ主よ、見すてたもうな……
罪人なる我を 受け入れ……
我が叫びを 聞きたまえ……
我が悩みに 応えたまえ……
苦しむときに 我をあわれみ……
危ういときに 我が盾となり……
主よ、我を見守りたまえ……
ああ、聖なる贖いの主よ……
我を赦し、忘れたまえ、我が罪を、
主よ、助けたまえ……
ああ、聖なる贖いの主よ

イエス・キリストの聖なるみ名により申し上げます。アーメン。

幸福と昇栄 に至る計画



七十人第一定員会会員
リチャード・G・スコット

私の息子はおもちゃのロボットを持っています。歩くことのほかにシンプルな動きが幾つか取れるようになっています。転んだ場合も、少し大変ですが、自力で起き上がることができます。このロボットは、何の感情もないままに、プログラムされた機能を自動的にこなすのです。このロボットには、成長したり予定のコースを変更したりする能力はありません。また外部からの力、特にそれがロボットの必要を満たすものには即座に反応しますが、内部のバネでも壊れようものなら、機能を停止してしまいます。サタンは、できることなら天父の子供を皆ロボットのようにしてしまいたいと思っています。

それに比べ、主の計画は何と異なっていることでしょう。幼な子の誕生を考えてみて下さい。神によって創造され(モーセ6:36)前世で成長した霊は、骨肉の体を幕屋として宿ります。父親と母親は、神と共にこの神聖な経験に携わるのです。両親は子供を愛し、導き、また鼓舞しながら育てます。子供は救い主の教えを正しく理解し、それに従うことにより、規則に規則を加え

て学んでいきます。そしてその教えを実践することにより、自立した、愛らしい、また神に喜んで仕える息子、娘に成長していくのです。そのような子供たちの持つ可能性には限界がありません。また神の戒めにとごとく従順であるならば、いつしか神のみもとに戻り、主の栄光にあずかり、昇栄のみ業を分かちことができるのです。そのような人は、この世においても同じように、言葉に尽くせないほどの幸福を味わうことができるでしょう。

この世の人生は試しの場です。神は言われました。「われら……これらの者の住まうべき地を造らん。而して、これによりて彼らを試し、何にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。」(アブラハム3:24-25)

試しの場は人により異なります。肉体的な制約をもって生まれた人もいれば、寝たきりの人、健康がすぐれない人もいます。また、経済的な苦勞の多い人、良い両親の模範から縁の遠い人、忍耐力を試されるために多くの試練を受ける人もいます。私たちが耐え忍ばなければならない悲しみや苦しみは、神の戒めに従わなかった結果であることが多いのですが、私たちの行く手に障害らしく見えるものの多くは、私たちが成長するよう、愛すべき創造主が用いておられるものなのです。

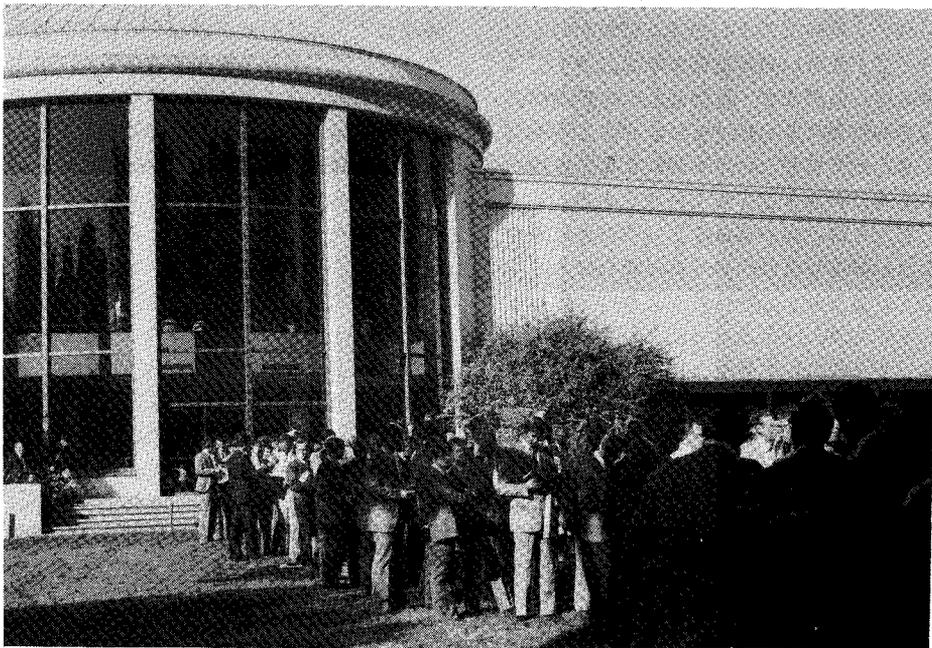
人生はもともと容易なものではありません。むしろ試しと成長の期間であり、困難やチャレンジ、苦勞が入り混じったものです。私たちは常に世の中から圧力を受けています。しかしこの圧力は、もしも私たちが真っ向から立ち向かったならば、個人の成長と発展を促す最良の機会を提供してくれます。そして逆境に打ち勝つことにより、私たちは人格を磨き上げ、自立心を養い、自尊心を育み、正しいことである限りその

努力は報われるのです。

信仰により自由意志を使う人は、チャレンジに会うたびに成長し、悲しみによって清められ、平安な心で暮らすことができます。その反対に、自己の欲望やこの世的な欲望を満たすことに熱狂する人は、いつしか悲劇的な深みにはまっていけます。彼の場合、誘惑が自由意志を使う動機として最大の影響を及ぼしています。

人生の圧力や、人からの誤った教えにまどわされて道を見失うことは一度や二度はあるものです。しかし、澄んだ目で見れば、主の計画かサタンの計画かは、はっきりわかります。サタンは神が自由独立の存在として定めたもうた霊を、悪癖や欲望や罪のとりこになった人間にしてしまうのです。サタンの強制を伴った計画は、前世の評議会が却下されたとはいっても、人をとりこにし、破壊しようとする意図を失くしたわけ

ではありません。サタンは、自由意志という神聖な賜を不当に使わせようとしています。人の目に触れないような誘惑を駆使して権力や力への欲望を満足させるように、また肉体的な欲望に自らをまかせないように誘うのです。そしてサタンは、肉欲に従う者を知らず知らずのうちに縛り上げていきます。このような人は、悔い改めない限り、自分の永遠の行く末に関して自力でコントロールすることのできないロボットと化してしまいます。サタンは巧妙に人を惑わすことにより、神を情容赦のない裁き主、遠く離れた存在の神、私たちの行動を細かい所まで監視する存在として思いこませるのです。神は、そのような御方ではありません。神は優しく、忍耐があり、理解のあるお父さまです。そして私たち一人一人のことに深い関心を持ち、私たちの幸福を願ひ、私たちの永遠の進歩のために献身的



に働いて下さる御方です。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。

それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。」(ヨハネ 3 : 16 -17)

この世において幸福を得るには永遠の救いを得る場合と同様に正しい決定の積み重ねが必要ですが、その決定はどれひとつとして難しいものはありません。逆に正しい決定は私たちを鍛え、まわりにあつて私たちを徐々にむしばんでいく影響に対して抵抗できる人格を身につけさせてくれます。崇高な人格とは、優れた資材で作られた貴重な磁器のようなものです。というの、その人は信仰で型どられ、終始一貫した正しい行ないで注意深く技巧を凝らされ、人を高める経験でできたかまどで焼かれるからです。それは美の結晶であり、お金では買えないものです。しかし、この磁器は、わずかな罪でもくだけてしまうことがあります。ただ自制というものによって保護された時にのみ永遠にまで持続できるのです。

私たちは、真の謙遜さというものを養わなければなりません。それは謙遜にみせる能力ではなく、心から謙遜になる神聖な賜のことで、謙遜さとは正しい人格というかけがえのない肥沃な土地です。それは、人が成長するための種に芽を出させます。そして信仰を通して耕され、悔い改めにより刈り込まれ、従順と労働によって強くされる時、その種は霊という実りをもたらすのです。(アルマ 26 : 22 参照)そして最後には神からの靈感と力がもたらされます。この場合の靈感とは主のみ心を知ることであり、力とはその靈感を通して与えられたみこ

ろを成就する能力のことです。(教義と聖約 43 : 15-16 参照) そのような力は私たちが最善を尽くした後に神の恵みにより与えられるものです。(II ニーファイ 25 : 23 参照)

私はここで、幸福への道を見つけたある人の心の思いを皆さまにお伝えしたいといます。「私は、主から本当に深く愛されている。幸福のために主は私が望むことをすべて行なって下さる。その能力の鍵を握るのは私自身。ほかの人が助言や提案、勧告、説明を試みることができて、私は自分の幸福のため、また永遠に成長するために基本的な決定をしていく責任と自由意志を主から与えられている。聖典を読み、それについて考える時、また心からの信仰をもって祈りの中に天父を求める時、私は安らぎで包まれる。心から悔い改め、主の戒めに従順になり、また、ほかの人のことを心から思い、そのために働く時、恐れは私の心から消えてしまう。私は、自分の歩むべき道をはっきり印すために用意された神の助けを受け、その意味を解釈することができる状態にある。友人や監督、ステーク部長、いや教会幹部でさえも私のためにそれを行なうことはできない。それを行なうことは私に与えられた神聖な権利である。私は安らぎを覚え、幸福になることを学んだ。私は、今こそ報いのある人生、実りのある人生、意義のある人生を送ることができる。」この人は、不幸のとりこになったロボットではありません。また私たちも、救い主の教えに従うために自由意志を上手に使う限り、ロボットになることもありません。

私は、幸福や昇栄のための救い主の完全な計画が末日聖徒イエス・キリスト教会に見いだされることを証致します。主が皆さま方に、理解と、平安をもたらして下さいますようにイエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン。

総大会に寄せて



十二使徒定員会会員
ハワード・W・ハンター

毎年この季節になると、今は西部の十字路として知られるこの場所に、末日聖徒イエス・キリスト教会の大会への出席のため、世界各国から何千という人々がやって来ます。ロッキーの頂に近いこの谷間に移住者たちが幌馬車でやって来てから、多くの年月が流れました。開拓当時、大会は重要な意義を持っていました。信仰と献身にあふれた人々が思いを新たに、自らの信仰をより堅固なものとするために共に集ったのです。それは今も同じです。

総大会は再び霊を奮い立たせる時機です。神が生きておられて信仰深い人々を祝福して下さるといふ知識と証がより深く、また確かなものとなるからです。この季節はまた、イエスが救い主であり生ける神の御子であるという理解が、主に仕え、主に従おうと決意する人々の心に燃え上がる時でもあります。また指導者から人生に必要な霊的な指針を授かる時です。さらに、良き夫、良き妻、良き父親や母親、従順な息子や娘、良き友人や隣人になるために奮起し、新たな決意をする時でもあります。

総大会の雰囲気に入ろうとする時、もう

ひとつの思いが胸をよぎります。それは、受けた幸福への感謝の念です。私たちは、この時満ちたる神権時代に福音が回復されたことを理解することにより、どれだけ多くの祝福を受けてきたことでしょうか。私たちは、同じような気持ちを持って世界各国から集まった人々とここで交わります。そしてだれもが、人間はすべて文字通り兄弟姉妹であるという知識から来る喜びと平安を見つけてくれることを願っています。なぜなら人間は、人種、皮膚の色、言語、宗教の違いにかかわらず、すべて神の子だからです。聖典を見てみましょう。

「主は……万人が主の御許へ来て主のめぐみにあずかるように招きたもうている。それであるから、主の御許へくる者は黒人と白人、奴隷と自由人、男と女の区別なく誰を拒みたもうこともない。また主は異教徒さえもかえりみたもうから、神の御前にはユダヤ人も異邦人もみな平等である。」(II ニーファイ26:33)

大会に出席するにあたって私たちは、世界中の同胞や兄弟姉妹へのひとつの義務を思い起こします。それは、私たちに授けられた賜であり、かつ彼らに与えることのできる最大の賜、つまり完全な福音の知識を分かち合うという義務です。ナザレのイエスが人類の救い主であることを全世界に宣言するのは、私たちに課せられた責任です。イエスが贖いの犠牲により私たちの罪の代価を支払い、死人の中からよみがえり、今日もなお生きておられることを宣言するのです。また私たちは、天の御父がどのような御方であるかを人々に知らせる必要があります。すなわち、感情と感覚と体を持ちたもうた御方であり、愛にあふれた父であり、悩み事や困った事がある時にはいつでも相談に行ける御方であることを知らせるのです。

きょうここに集っている私たちは、救い主の福音について特別な、また独特の知識を持っています。私たちに初めて接する人が最も驚くことは、私たちが神の生ける予言者によつて導かれているということと全世界に宣言していることです。主と話し、主に導かれ、主から啓示を受ける予言者をいただいていることを、私たちは宣言しているからです。

では、以上述べたような事柄が真実であると、どうしてわかるのでしょうか。それは、今日の時代に神が民に語られたからです。天が開かれ、神が人に言葉を授け、永遠の真理が全人類の御父から世の人々に与えられました。父なる神と御子イエス・キリストがこの神権時代に住む人間にみ姿を現わされ、話をされたのです。事実主イエス・キリストは、何度となくみ姿を現わされました。

私たちは、天父が私たちを愛しておられ、物心両面にわたって幸福な生活が送れるように配慮して下さっていることを知っています。また、神の御子であり私たちの長兄でもあられるイエス・キリストが、神のみもとに帰る道を用意して下さいました。私たちは知っています。私たちがこの地上に來たことには神聖な目的がありますし、神の御計画の中で私たちは重要な役割を果たすようになるのです。またその計画については、詳細を知っているだけでなく、私たちに与えられた責任についての具体的な指示も受けています。

私たちのメッセージを聞いて、ある人には論理や実証を越えていると思われることをなぜ「知っている」と主張できるのか、不思議に思う人がいます。それに対して私たちは、コリントにある教会に宛てた使徒パウロの声明をもって答えます。

「目が見ず、耳がまだ聞かず、人の心にま

だ思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた。

しかし神はそれをみたまによって私たちに示して下さいました。みたまはすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるからである。

いったい、人間の思いはその内にある人間の霊以外にだれが知っていようか。それと同じように、神の思いも神のみたま以外には知る者がない。

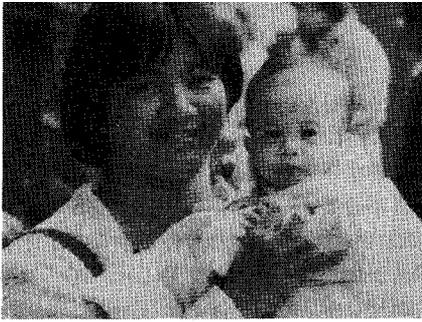
わたしたちが受けたのはこの世の霊ではなく、神からの霊である。それによって神からあふれるばかりに賜わった恵みを得るためである。

この賜について語るのも、わたしたちは人間が教える言葉を用いないで、みたまの教える言葉を用い、霊によって霊のことを解釈するためである。」(ジョセフ・スミス 訳 I コリント 2 : 9-13)

この世につける知識や知恵、それに物質的と言われるものはすべて肉体的な感覚を通して、この世的な方法で私たちに与えられます。物に触れ、見、聞き、味わい、においをかぐことにより私たちは学ぶのです。しかしながら霊的な知識は、パウロが言うように、霊の源となるところから霊的な方法で私たちに与えられます。パウロはこう続けています。

「生まれながらの人は、神の賜物を受けられない。それは彼には愚かなものだからである。また御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない。」(I コリント 2 : 14)

私たちは、霊的な知識を得る唯一の方法が、イエス・キリストのみ名のもとに聖霊を通して天父に近づくことであることを知りました。この方法を実践し、しかも霊的に備えができていれば、以前に見えなかったものや、聞こえなかったもの、すなわち



パウロの言葉を借りれば、神が「備えられたもの」を見たり聞いたりすることができま
す。これらはみたまを通して授かるものな
のです。

私たちは、天父との間には今日でも意思
の疎通があり、主から導きを受けていると
信じ、世の人々にそれを証するものです。
旧約の時代や救い主が生きておられた時代
と同じように、今も神は私たちに語りかけ
られるのです。私たちは世の人々にこう告
げたいと思います。「この大会で話される
ことに耳を傾け、お考え下さい。ここで話
す人が与える指示と勧告をお聞き下さい。
そして祈りの気持ちをもって熟考したなら
ば、聖霊を通してもたらされるあの心温ま
る確信が、指示と勧告の言葉が真実である
ことを証してくれるでしょう。」

あるひとりの予言者を通して語られた主
のみ言葉を読みみたいと思います。

「神はその御名を信ずるすべての者たちに
憐みをかけたもうから、あなたたちがまず
神の言葉を信ずるように望みたまう。

あなたたちがもし目をさましてふるい立
ち、その能力をつくして少しなりとも信じ
ながら私の言葉を実際にためしてみるなら
ば、たとえ信じようとする望みを起すだけ
でもよい。しかし、私の言葉の一部でも
受け入れるほどの信仰ができるようになる
まで、この望みを育ててゆけ。

今、神の御言葉を種子になぞらえて話す
と、あなたたちが一つの種子を自分の心の
中に蒔くとき、もしもその種子が真理の種

子すなわち善い種子であって、あなたたち
が不信心の心でこの種子を抜きとったり、
主の『みたま』に逆らったりすることがな
ければ種子は次第に胸の中でふくれ始める
であろう。そこで、あなたたちは種子がふ
くれ始めることを感ずると、次のように思
う。すなわち、これはまことに善い種子、
善い言葉に違いなく、私の心を大きく開き、
私の理解力を増し、私はようやく好い味を
感ずると。」(アルマ32：22、27-28)

人生の偉大な目的を探し求めている人、
私たちがなぜこの地上にいるのか、また主
が私たちに、地上にいる間何をせよとおっ
しゃっているのか知りたい人に対して、私
たちは近代の予言者の言葉を引用して、こ
う申し上げたいと思います。

「いかなる人も福音の原則を軽々しく論じ
てはならない。むしろすべての人に、真理
を理解しようと熱心に求めさせ、末日に地
上に回復された天の真理に親しむよう子供
たちを教えさせなければならない。」(「福
音の教義」p.5)

主の業に働くこと、すなわち主の王国が
この地上にあって、主のメッセージに耳を
傾け、福音を受け入れ、戒めに従うすべて
の人々のために備えられているということ
を世の人々に宣言するよう主から委ねられ
ていることは、何と栄誉なことでしょうか。
ブリガム・ヤング大管長が語ったように、
この業は前進し続けるのです。「あらゆる
大陸を貫き、あらゆる地方に至り、あらゆる
国々に広まり、あらゆる者の目に達し、
神の目的は成し遂げられるであろう。かく
して大いなるエホバは、み業は成ったと告
げられることだろう。」(ジョセフ・スミス、
History of the Church 「教会歴史」4：
540)

これらのことをイエス・キリストのみ名
により証します。アーメン。

「だれでも新しく 生れなければ」



第二副管長
マリオン・G・ロムニー

ヨハネによる福音書の17章に、イエスが弟子たちのために、御父に祈られた時の言葉が書かれています。「永遠の生命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。」(ヨハネ17:3)

11人の弟子たちが、イエスが神の子であると理解していたことを、私たちはこの祈りからはっきりと知ることができます。イエスは彼らに、御自分が神の子であり、天父から遣わされた者であることを教えられました。彼らがその心と霊に、イエスの教えは真実であるという証を受けていたことは、次のヨハネの言葉から明らかです。

「これらのことを語り終えると、イエスは天を見上げて言われた、『父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。』

あなたは、子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。

わたしは、あなたが世から選んでわたしに賜わった人々に、み名をあらわしました。

彼らはあなたのものでありましたが、わたしに下さいました。そして、彼らはあなたの言葉を守りました。

いま彼らは、わたしに賜わったものはすべて、あなたから出たものであることを知りました。

なぜなら、わたしはあなたからいただいた言葉を彼らに与え、そして彼らはそれを受け、わたしがあなたから出たものであることをほんとうに知り、また、あなたがわたしをつかわされたことを信じるに至ったからです。」(ヨハネ17:1-2, 6-8)

使徒たちが永遠の生命を授かったのは、救い主のメッセージを聞き、イエスをキリストとして受け入れたからです。

「唯一の、まことの神……と、また、イエス・キリスト」(ヨハネ17:3)に関する知識は、全世界で最も重要なものです。人は無知のままでは救われることができないとジョセフ・スミスが言ったのは、この知識のことを言っているのです。この知識を持っていないことが、すなわち啓示の中で「人は無智にして救われること不可能なり。」(教義と聖約131:6)と記されている無知なのです。

私たちは、知識の源泉はひとつだけではないことを心にとどめておかなければなりません。人間の正常な感覚器官を通して得られる知識があります。そういう知識を得るために努力することを忘れてはいけません。主は私たちに、感覚器官を通して得られる、その類の知識をすべて身につけるように命じられました。

もうひとつ、直接の啓示を通して与えられる、神聖な事柄に関する知識があります。それは宗教上の知識と呼ばれることもあり、大きくふたつに分けることができます。そのひとつは、聖典の中に与えられている、膨大な量の宗教的な知識です。時の初めか

らこの方、父祖アダムの時代から今日に至るまで、主は予言者を中に立て、啓示という手段によって、霊に属ける事柄を教えてこられました。それは人生の真理を教えるものであり、神とその愛子、偉大な救いの計画、救い主、贖い主としてのイエスの使命が説かれています。そして、宗教的な知識にはもうひとつ、靈感という啓示を通して、一人一人に与えられる個人的な証があります。

聖書に記されている神の啓示の言葉には、だれもが触れることができます。モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠に書かれている啓示された霊的な知識についても、その人が望むならば触れることができます。

聖書を読み、研究はしているものの、理解できないでいる人が数多くいます。この

話のテーマでもあるヨハネ伝17章に記されている祈りの中で、イエスが言われたことを理解できない人も数多くいます。それはなぜでしょうか。聖霊の力によって理解の目が開かれていないからです。そういう人人には自分自身の証がないのです。

永遠の父なる神と、その遣わされたイエス・キリストを知るためには、古代の使徒たちがしたと同じように、神の啓示を受けることによって、それらのことを学ぶ必要があります。新たに生まれ変わらなければならないのです。私が言おうとしていることについて、記録された救い主の教えの中から例をひとつ挙げ、話してみたいと思います。

ヨハネ伝の3章です。ニコデモという、サンヒドリンの一員でもあった、とても学



識豊かな人が、夜になってイエスを尋ねて来たという箇所があります。彼にはまだ、日中にイエスを尋ねて来るだけの勇気がなかったのです。そして、その夜イエスに会ったニコデモはこう言いました。

「先生、わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っています。神がご一緒でないなら、あなたがなさっておられるようなしるしは、だれにもできはしません。」(ヨハネ 3 : 2)

この言葉の中で、ニコデモは、イエスがどのような御方であるか理解していないことを、はしなくも披瀝ひれきしてしまいました。神の御子も彼の目には、ひとりの偉大な教師としか映らなかったのです。しかし、ニコデモにそれ以上のことを求めるのは無理でした。なぜなら、彼のイエスに対する認識は、見聞きした奇跡に基づくものだったからです。これを見て取られたイエスは、神に属ける事柄は通常の感覚では理解できないことを教えられました。

「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」(ヨハネ 3 : 3)

ニコデモはこの世的な事柄については聡明な人でしたが、この簡潔な真理の言葉を理解することができませんでした。実際、彼の答えにはその当惑振りがよく出ています。

「人は年をとってから生れることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎にはいつて生れることができますでしょうか」(ヨハネ 3 : 4)

イエスはなおも彼の理解の目を開こうとして、言葉をつがれました。「だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。」(ヨハネ 3 : 5) ここで救い主が言われたのは、人は新たに生まれ変わらなければ、神の国を見ることもその中に入ることもできないということです。

しかし、それでもニコデモは理解できませんでした。そこでイエスは次の偉大な律法について話されました。「肉から生れる者は肉であり」つまり、私たちが普通の感覚を通して学ぶ事柄は、この世的な枠を脱することができないということです。そして、こう続けられました。「霊から生れる者は霊である。」(ヨハネ 3 : 6) 靈感という過程を経て学ぶのが、神に属ける事柄であり、みたまに属ける事柄であるということです。

永遠の父なる神と、その遣わされたイエス・キリストとを知りたいと思うなら、みたまによる知識を得なければなりません。教会員がその過程を経てきていることは言うまでもないことです。皆バプテスマを受け、教会員として確認され、聖霊の賜を授かるための按手札を受けています。これらの儀式によって扉が開かれるのです。これに従わずに生まれ変わることは絶対にできません。しかし永遠の生命を得るには、聖霊の力によって、永遠の父なる御方が神であり、イエス・キリストは世の贖い主であるとともに神の御子であり、私たち一人一人の救い主であるという、個人的な証を実際に受けられるようになるまでへりくだり、自分自身を清めなければならないのです。

もうひとつ例を挙げてみたいと思います。それは私の家族に関することで、私事を引き合いにするのは恐縮なのですが、この話のテーマにふさわしいと感ぜられますので、皆さんの許しを得て、お話したいと思います。私の妻は、朝に夕に祈りを捧げ、毎日のように炉辺で福音の原則について語り合うような家庭で育ちました。妻の教育を受けたいという思いは非常に強く、大学に行きたいと考えていました。しかし父親は大学に行くのは男の子だけでよいという考えの人でした。大学への切ない思いを抱きな

がら、彼女は大学を出た人々に対する畏敬の念を深くしていきました。アイダホ・フォールズでステーク部の日曜学校の役員をしていた彼女は、ひとつのクラスで教えていました。ところがそのクラスに、ひとりの教会員でない人が出席するようになったのです。その人は同じ日曜学校の役員をしているある兄弟の奥さんで、アイダホ大学を出ていました。学歴でそれに匹敵するものを持っていなかった私の妻は、彼女の前に出ることに、いささか気後れを感じました。

そのクラスでは、ある課で予言者ジョセフ・スミスの最初の示現について学ぶことになっていました。妻はそのレッスンの準備をしている時に、あの女性もクラスに出席するのだということに気がついて、はっとしました。そして考えました。「私みたいな何も知らない女の子が、天父と御子が実際に天から降って、14歳の男の子の前に姿を現わしたなんて言ったら、あの人は何て思うかしら」と。そう思うと恐ろしくなり、そんなことは絶対にできないと心に決めました。そして泣きながら母親のところへ行き、こう言いました。「お母さん、私このレッスンはできないわ。ジョセフ・スミスが天父と御子に会ったかどうか、私にはわかっていないの。確かにそのことは、小さい時からずっとお父さんやお母さんに教わってきたし、そう信じてもいるけど、自分自身のもので理解していないの。あの人に笑われるに決まってるわ。クラスであの人に前にして教えるなんてとてもできない。」

妻の母親もさほど教育を受けた人ではなく、この世的な標準からすれば決して学の有る人とは言えませんでした。が、永遠の父なる神と、その御子イエス・キリストに対する信仰は持っていました。そしてこの時、娘にこう言ったのです。「ジョセフ・スミス

がああ示現を受けることができたのは、何をしたからかしら。」

「それはお祈りをしたからでしょう。」

「なら、あなたは どうして そうしないの。」

若い娘は自分の部屋に戻り、自分の人生で初めて、天父が生きておられるのか、また御子と共に本当に予言者ジョセフにみ姿を現わされたのかを知りたいという、心からの望みをもって全能者のみ前に行ったのです。部屋を出て来た彼女は日曜学校のクラスへ行き、喜びと真の証と確信をもってレッスンを行ないました。彼女はみたまによって生まれ、知識を得たのです。

さて、愛する兄弟姉妹の皆さん。霊的な経験をせずに、永遠の生命を受け、永遠の父なる神と、その遣わされたイエス・キリストを知ることはできません。もし、まだその知識を得ていない人がいたら、熱心に求めるようにお勧めします。皆さんはすでにその方法を知っています。それは集団で体験することではありません。一人一人が自分で受けるべきものであり、皆さんと皆さんの教えを聞く人々が共に経験しなければならぬことなのです。私たちはみたまによって教えなければなりません。救い主は「汝らもし『みたま』を受けざる時は教うべからず」また「この『みたま』は、信仰の祈りによりて汝らに与えらる」と言われました。

すでにバプテスマを受けている皆さんには、みたまを受ける権利が与えられています。その望みを持ち、祈り求めて下さい。神は与えて下さいます。

皆さんが永遠の父なる神と、その遣わされたイエス・キリストを知り、そのことがすなわち永遠の生命であるということを知るように、へりくだり、イエス・キリストのみ名によって祈るものです。アーメン。

「主はよみがえりぬ」



十二使徒定員会会員
トーマス・S・モンソン

先日ひとりの旅行者に、「ソルトレーク・シティーに滞在している間、何を見物したらよいでしょうか」と尋ねられました。私はとっさに、「テンプルスクウェアもいいですし、近くのキャニオンヘドライブに出かけるのもいいでしょう。ビンガムの露天掘り銅山の見物やグレートソルトレークでの水泳はいかがですか」と答えました。本当は「墓地で1、2時間過ごしてみられたらいかがですか」という言葉が口まで出かかっていたのですが、誤解されるといけないので言いませんでした。私が旅行する時には、どこに行った時でもその町の墓地を訪れることにしています。いろいろな考えごとをしたり、人生の意味や皆が一度は経験しなければならぬ死について思いをはせたりするのです。

ユタ州のサンタクララの町の小さな墓地でのことですが、雨ざらしになった墓碑にスイス人の名前をたくさん見つけました。その多くは、「シオンに来たれよ」との招きに応じて祖国スイスに親族や家を残し、この地域に移住して開拓の業に従事し、そして今は「安らかな眠り」についている人々

です。彼らは、春先の洪水や夏の干ばつ、乏しい収穫や厳しい労働に耐え抜き、犠牲という伝統を残してくれました。

大きな墓地には、自国のために戦った戦没者がまつられており、私たちの感傷を誘います。戦争によって夢を破られた人、希望を絶ち切られた人、若くして去っていった人々に思いをはせざるを得ません。

フランスやベルギーで何エーカーにもわたって白い十字架が並んでいるのを見ると、第一次世界大戦がいかに悲惨であったか、うかがい知ることができます。フランスのベルダン市は、市全体が広大な墓地であると言ってよいでしょう。春になってお百姓さんが畑を耕すたびに、ヘルメットや銃身があちこちで見つかるそうです。こうした遺品の数々は、戦争で地を文字通り朱に染めた何百万の人々のことを思い出さずにはおきません。

ペンシルベニア州のゲティスバーグなど、南北戦争の戦場となった町を旅すると、兄と弟が戦ったその傷跡を見るような思いがします。農場や財産をなくした家族もいれば、持てるすべてを失ってしまった家族もいます。アブラハム・リンカーン大統領がリディア・ピクスビー夫人に宛てて書いた手紙を引用しましょう。

拝啓

マサチューセッツの軍務局長からの報告によって、あなたの御子息5人が戦場で栄誉の戦死を遂げられたことを知りました。さぞかし悲しんでおられることと拝察致します。

言葉がいかに不十分なものであるかを知りながらも、一言、あなたの御子息たちが命を投げ出して救って下さったこの国に代わって、感謝の気持ちを記したいと思います。

願わくは天の御父があなたの心の傷を癒

し、あなたが愛する御子息たちとの良き思い出を胸に抱きながら、自由という祭壇にささげられた多くの犠牲に対する誇りをもって過ごされるように祈るものであります。

敬具

アブラハム・リンカーン

(1864年11月21日付, *Selections from the Letters, Speeches, and State Papers of Abraham Lincoln* 「アブラハム・リンカーンによる書簡・演説・声明文選」 p. 109)

ホノルルのパンチボウル墓地やマニラの太平洋記念墓地を歩いておりますと、第二次世界大戦で戦死した兵士のすべてが、緑の芝生に覆われた墓地に埋葬されているのではないことがわかります。大海原の波の底に沈んでいる遺体が数多くあるのです。

真珠湾攻撃で亡くなった人の中に、アイオワ州フレデリックバーグ出身のウィリアム・ボールという海兵がいました。彼が1941年のその日に散った他の戦士者と異なる点は、その英雄的な行為にあるのではなく、彼の死によって一連の悲しい出来事が彼の家で起きたということにあります。

ウィリアムの幼な友達でウォータールーに住んでいたサリバン家の息子5人が、海軍に志願しました。彼らはウィリアムのあだを討つために5人共同で戦場に出兵されるよう要請し、海軍はそれを許可しました。ところが1941年11月14日、この5人の兄弟の乗った巡洋艦ジュノーは、ソロモン諸島のガダルカナルで海のもくずと消えてしまったのです。

2カ月後、5人の母親のトーマス・サリバン夫人は、普通の電報によってではなく、特使を通して、5人の息子が南太平洋での戦闘で行方不明になり、生存の見込みはないとの報を受けました。結局、彼らの遺体は発見されませんでした。

「人がその友のために自分の命を捨てる

こと、これよりも大きな愛はない。」(ヨハネ15:13) このイエスの言葉以外に彼らの石碑に刻むにふさわしい言葉はあるでしょうか。

人の一生が他の人々に途方もない影響を与えるということについては、あまりよく知られていませんし、ましてやめったに人の口にのぼることはありません。12歳のビーハイブのクラスの教師であったある姉妹も、そのようなひとりでした。彼女は子供がいませんでした。夫と共に長い間願ひ求めていたのですが、祝福は来ませんでした。その代わり彼女は、永遠の真理と人生の教訓を教えることによって、ビーハイブの少女たちにその愛を示しました。しかし、そうした彼女を病魔が襲い、彼女は27歳の若さでこの世を去りました。

毎年戦没者記念の日が来ると、彼女のビーハイブのクラスの生徒だった子供たちはお墓参りをしました。最初のうちは7人もいた教え子も4人、2人と減り、最後にはひとりだけとなりました。しかし最後に残った生徒は毎年欠かさず墓参りをし、感謝の心を象徴するアイリスの花束をささげています。彼女がこの墓参りを始めてから今年で25年の歳月が流れました。今、彼女は若い女性の教師に召されています。彼女がなぜ実りある人生を送っているかは明らかです。自分の教師から得た靈感を鏡のように照り返しているのです。この教師の人生も、彼女が与えた教訓も、墓碑の下に埋もれているわけではありません。自己を顧みずに養い、育てた生徒たちの人格を通して、今も生き続けているのです。主イエス・キリストも、永遠にわたって私たちに影響を与える教師です。かつて主は、砂に指で文字を書いて教えを説かれました。(ヨハネ8:6 参照) 砂に書かれた文字は時の流れと共に消え去っても、主のこの地上での生涯



を消し去ることはできません。

詩人ソーントン・ワイルダーは、死について次のように描写しています。「この世を去った愛する者たちについてわかること、それは、彼らが私たちに、死者を身近な存在として感じるよう願っているということだ。この世を去った人々への一番の贈り物、それは嘆きではなく、感謝である。」

これは2年前、ソルトレーク・シティーの東にあるヒーバーバレーで起こったことです。ある日、父親と母親が家に戻って来ると、上の3人の息子が倒れて死んでいました。その晩は非常に冷え込んで、降り積もった雪が風で吹き飛ばされてその家の煙突をふさいでしまったため、家中に一酸化炭素が充満してしまったのです。

このケラー家の合同葬儀は、私の人生の中で最も霊的な経験のひとつとなっています。近所の人々は仕事を休み、子供たちも学校から早く帰って、お悔やみの言葉を述べるために教会堂に集いました。私は3つの光るひつぎが、悲しみに満ちた御両親やおじいさんおばあさんを従えて礼拝堂の前の方にかつがれていく光景を、時と記憶の続く限り決して忘れることはないでしょう。

最初に話をしたのは、学校のレスリングのコーチの先生でした。彼は長男のルイスについて、涙をこらえながら、震える声で話をしました。「ルイスはチームの中で最も才能に恵まれた選手というわけではありませんでした。しかし、彼ほど練習熱心だった子はいません。技術に欠けるところは、強い意志で補っていました。」

次いで、次男のトラビスの教会の指導者が立って、彼がスカウトやアロン神権の責任をよく果たし、友達にとって素晴らしい模範であったことを話しました。

最後に、一番下のジェイソンについては、小学校の担任の先生が話をしました。その姿から、有能な教師であることが一目でわかる人でした。彼女はジェイソンがおとなしい子ではにかみ屋だったことを述べた後、ジェイソンからもらった手紙について触れました。それにはジェイソンの手書きで、たったひと言「せんせいが だいすきです」と書いてあったそうです。彼女はその手紙ほど心の温まる手紙は受けたことがありませんでした。こうして彼女は、こみ上げてくる思いに声をつまらせながら、やっとのことで話を終えました。

その日は悲しみと涙の一日でしたが、私は立派にこの地上での使命を果たしたこの3人の男の子が、永遠にまで及ぶ教訓を残して行ったことをしみじみと感じました。

レスリングのコーチは「単に技術面だけではなく、一人一人の選手の心を見続けていきたい」と話しましたし、青少年の指導者は、すべての若人が教会のプログラムの恩恵を十分に受けられるよう努力すると誓いました。ジェイソンの先生は、ジェイソンのクラスの子供たちの顔を、何も言わずにじっと見つめていました。彼女は何も言いませんでしたが、その目は、心に深く決意するものがあることを物語っていました。

「私はこれから子供たち一人一人を愛していこう。子供たちが真理を求め、才能を伸ばし、喜んで奉仕できるように見守っていこう。」

マービン・J・アシュトン長老も私も含めて、その葬儀に出席した人はすべて、変わるのです。ひとり残らず、主が言われた完成に向けて努力するのです。その決意の源はどこにあったのでしょうか。そうです。悲しみと心配を乗り越えていったこの3人の子供たちと、心を尽くして主に信頼を寄せる両親の不屈の精神です。両親は自分の理解のみに頼ることなく、あらゆる点において主を認め、主が道をまっすぐにされることを信じながら過ごしていくでしょう。(箴言3:5-6 参照)

この3人の素晴らしい子供たちの母親が私に送ってくれた手紙の一部を、ここに御紹介しましょう。これは、子供たちが亡くなって少ししてから送られてきたものです。

「私も夫も、胸が張り裂けそうに感じるものがしょっちゅうあります。日々の生活が大きく変わってしまいました。家族の半分を亡くした今、料理もせんとくも買い物も、何と変わったことでしょうか。子供たちの話し声やからかい合っている声、子供たちの部屋から聞こえてきていた物音などが、なつかしく思い出されます。皆、なくなりました。日曜日は静寂そのものです。聖餐の祝福やバスをする息子の姿は、今はありません。日曜日は文字通り家族の日でした。私たちは考えました。これで子供たちが伝道に出ることも、結婚することも、私たちが孫の顔を見ることもなくなるんだなあ。今さら生き返らせてと言うわけではありません。でも、あの子たちを喜んで手離したわけではないのです。私たちは前と同じように、教会の責任や家庭の仕事を始めしています。今の唯一の願いは、私

たちが永遠の家族となるにふさわしい生活をしたいということです。」

ケラ一家やサリバン家、またそれ以外にも愛する家族を亡くされたすべての方々に、私の心からの証と決意、それに私の実際の経験をお話したいと思います。

私たちは、一人一人が前世において天父と共に生活していたことを知っています。この世に来たのは、完成へ向かう永遠の旅路の中で、いろいろなことを学び、生活をし、進歩するためです。若くして亡くなる人もいれば、老年まで生き長らえる人もいます。しかし大切なのは、どれだけ長い間生きるかではなく、いかに生きるかということです。こうして死が訪れ、人生の新たな1ページが始まるのです。では、その後はどうなるのでしょうか。

何年か前のこと、生死の境をさ迷うある若い父親の傍らに立っていた時のことでした。彼は私の手を取り、じっと目を見つめて、お願いするようにこう言いました。「監督、私はもう死にます。死んだ時に私の霊がどうなるのか教えてください。」

私は答える前に、天からの助けを求めました。ふと見ると、ベッドの傍らのテーブルにモルモン経があります。そこで手に取ると、モルモン経がひとりりで開いてアルマ書40章が出てきました。これは私が今ここに立っていることが確かであると同じように確かなことです。私は声を出して読みました。「さて死んでからよみがえる時までの霊の有様はどうであるかと言うに、ごらん、あらゆる人の霊はそれが善であっても悪であっても、この死ななくてはならぬ肉体を離れるとその霊に生命を与えたもうた神が備えたもうところへ帰るのである。これは天使が私にお示しになった。

その時義しい人の霊はパラダイスとと見える幸福な有様、すなわち安息と平和な有



様に入り一切のわずらいと憂いと悲しみとを離れて息む。」(アルマ40：11—12)

この若き友は目を閉じ、心からの感謝の気持ちを表わしながら、静かに今述べたパラダイスへと旅立たれました。

続いて、霊と肉体とが再びひとつになる、栄光の復活の日が訪れます。一度再結合した霊と肉体は、もう二度と離れることはありません。イエスは悲しみにくれるマルタにこう言われました。「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。

また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。」(ヨハネ11：25—26)

「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。」(ヨハネ14：27)

「わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意に行くのだから。……

わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。」(ヨハネ14：2—3)

この栄光に満ちた約束は、マリヤとほかのマリヤが墓に入った時に成就されました。墓が空になっていたのです。医者であったルカはこう記しています。

「週の初めの日、夜明け前に、女たちは用意しておいた香料を携えて、墓に行った。ところが、石が墓からころがしてあるので、中にはいってみると、主イエスのからだが見当らなかつた。

そのため途方にくれていると、見よ、輝いた衣を着たふたりの者が、彼らに現れた。

……このふたりの者が言った。『あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。』(ルカ24：1—5)

「もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。」(マタイ28：6)

この事実こそ、全キリスト教徒に響き渡るおとずれです。復活の事実こそが、すべての人に、人間の理解を越えた測り知ることのできない平安をもたらすのです。そして、フランダースの草原や大海原の底で、また小さなサンタクララの町や平和なヒーバーバレーで愛する者たちを亡くした人々に、慰めを与えてくれるのです。復活は永遠の真理です。

私は主の十二使徒として未熟な者ではありますが、死が克服され、墓を越えた勝利がもたらされたことを証申し上げます。御自身で成就することによって聖なるものとなった主のみ言葉が、私たちすべてにとって現実の知識となるように祈るものです。主のみ言葉を心に思い浮かべ、かみしめ、敬いましょう。主はよみがえられました。これらのことを心から祈りつつ、イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

予言者の生涯に学ぶ



七十人第一定員会会員
ロバート・D・ヘイルズ

私たちの救い主、イエス・キリストが教えを施す際に使われた例の中で多いのは、救い主御自身のまわりで起こった日常の出来事からのものです。同じように現代の予言者も、日常生活の中から人々を教えます。短い言葉ながらも力強く、「わたしについてきなさい」と教えるのです。

では、私が現代の予言者から学んだことを紹介しましょう。

私たちは、多くの病気と闘ってきたキンボール大管長の勇気を見て、たくさんのお話を学びます。大管長は、苦痛や逆境を克服することによって肉体と霊を清め、イエス・キリストへの信仰を強めることができました。身をもって示して下さいました。立ち向かわなければならなかった試練という点から見て、まさしくキンボール大管長は現代のヨブと言えるでしょう。

旧約聖書のヨブの話は、私たちが一生のうちで遭遇する3つの大きな試しについて教えてくれます。第1に、財産のことです。ヨブは財産を全てなくしました。第2に、信仰と証を揺るがす病気です。第3は失望です。ヨブは言いました。「なにゆえ、わたし

は胎から出て、死ななかったのか。」(ヨブ3:11)「わたしは自分の命をいとう。」(ヨブ10:1)しかし、ヨブから学べる一番の教訓は、「すべてこの事においてヨブは罪を犯さず、また神に向かって愚かなことを言わなかった」(ヨブ1:22)ということです。私たちはあまりたびたび逆境に遭うと、それを罪を犯すことの弁解とし、イエス・キリストの教えや、私たちを導いてくれる予言者、家庭、友人から離れてしまいます。しかしヨブは証を失わず、神は生きておられ、自分は神のみもとに住むのだというその揺るぎない信仰によって祝福を受けました。

ヨブ同様に義人であるキンボール大管長は、喉頭ガンや心臓手術、腫瘍、脳血栓の手術など、多くの試練を克服してきました。キンボール大管長の経験は、私たちが同じような試練や苦しみにあった時にどう対処したらよいかを教えてくださいます。

キンボール大管長は罪を犯さず、また神に向かって愚かなことを言いませんでした。大管長は多くの身体上の試練の間、正直で、証を失わず、神をほめたたえてきました。私たちは大管長がぐちをこぼすのを聞いたことがありません。それどころが大管長のチャレンジは、「この山地をわたしにください」なのです。(ヨシュア14:12参照)

キンボール大管長の逆境を克服する勇気と信仰は、私たちすべての模範であり、私たちも人生の逆境を乗り越えられることを示すものです。私たちの苦痛は、大管長の苦痛に比べれば小さなものです。喉頭ガンの手術後、キンボール大管長は声が出せませんでした。神殿での証会の時、その大管長にマッケイ大管長が証をするように頼みましたが、息の音で証をしました。後で大管長はマッケイ大管長に、紙に書いてこう尋

ねました。「なぜ私に証を頼んだのですか。」マッケイ大管長はこう答えました。「スペンサー、君は声を取りもどさなければならぬ。君にはまだ大きな使命が残されている。」(何と素晴らしい愛の模範でしょう。)キンボール大管長はこの言葉に従いました。そして発声法を開発し、残った片方の声帯を使って声を取りもどし、偉大な業を行ってきました。キンボール大管長の予言者としての使命は、他のいかなる神権時代の予言者の使命にも比肩し得るものです。

カミラ姉妹は、大管長と共に献身的な働きを示してきました。サモアでのある晩のことですが、大管長夫妻は40度の高热に襲われました。しかし次の朝、最初にバスに乗ったのは大管長夫妻でした。そして大管長は集会を管理し、単に耐えただけでなく、すべての人への心遣いを示しながら一日の多忙なスケジュールをこなしたのです。

キンボール大管長は十二使徒に召された時、涙を流してその召しを受け入れました。自分がそのような重責にふさわしいかどうか悩んだのです。しかし電話を切った後で、カミラ姉妹はこう言いました。「スペンサー、あなたならできますよ。」カミラ姉妹は、伴侶とひとつになるという点で完璧な模範です。自分の健康について聞かれると、「夫が健康な時は、私も健康です」と答える彼女です。

キンボール大管長は、教会幹部に召された私にひとつの教訓を残してくれました。大管長は私に、ソルトレークに来て残りの生涯を教会幹部として仕えてもらえませんかと言いました。私は涙ながらにこう答えました。「大管長、何と行ってよいかわかりません。」すると大管長は、「はい、とだけ言って下さい」と言いました。予言者からの召しを受ける時には、自分の決意や愛、情熱を述べるのに雄弁はいらないのです。

予言者はそうしたことをすでに承知しているのです。

キンボール大管長は、いつでも一人一人に心からの愛をもって接しようとしています。

私たちが地域大会の準備をしていた時のことです。私が大管長のオフィスに入っていくと、大管長はドアに背を向けてタイプを打っていました。タイプを終えると私の方に向きを変えて、私を迎えてくれました。一方の手には、「赦しの奇跡」を読んだある若人からの32ページにおよぶ手紙、もう一方の手には、悔い改めようとしているその若人への大管長自らがタイプをした手紙が握られていました。メッセージは明らかでした。それは、「どんなに忙しくても、助けが必要な人を忘れてはならない」ということです。

大管長の宣教師としての証は、人を恐れることのない証です。1976年8月3日から5日にかけてデンマークのコペンハーゲンで地域大会が開かれた時、キンボール大管長はトルバルセン作の美しい彫刻「キリスト像」を見に行きました。ソルトレークやロサンゼルス、ニュージーランド神殿の訪



問者センターにある像はその複製です。「キリスト像」を少し鑑賞した後で、キンボール大管長は管理人に証をしました。ペテロの像の方を向いて、ペテロが右手に持っている大きな鍵の束を指した大管長はこう言いました。「教会の大管長であるペテロが持っていた神権の権能の鍵は、今、この神権時代の長である私が持っています。」それからこうも言いました。「あなたは毎日石でできた使徒を管理していますね。でもきょう、あなたは生ける使徒の前に立っていません。」そしてタナー副管長、モンソン長老、バッカー長老を管理人に紹介し、デンマーク語のモルモン経をプレゼントして、予言者ジョセフ・スミスについて証しました。管理人はみたまを受けて心を動かされ、自分が予言者と使徒の前にいることを感じました。彼は後で私にこう言いました。「きょう私は神の僕に会いました。」

キンボール大管長は、心と勢力と思いと体力とを尽くして勤勉に働く人です。しかし周囲の人には自分のペースに合わせることを要求せず、それぞれのペースで働くように言います。大管長は、デスクの「実行」という標語が示すように、行動の人です。

大管長と共に働いた人は、大管長の模範の中に「やってみます」とか「ペナトを尽くします」とかいう言葉はないと言います。その模範と愛によって、皆もっと高い目標を掲げ、歩みを速め、完全に向かって進むとします。大管長は人に、その人が持っている以上の力を出させ、ついには目標を上回る成果を残させるのです。

1977年2月に開かれたメキシコおよび中央、南アメリカ地域大会の計画をしていた時のことです。私たちは標高3,600メートルのボリビアのラパスで集会を開くことにしていました。アーネスト・L・ウィルキンソン博士とラッセル・M・ネルソン博士

の話では、心臓と血圧がそれだけの高さに慣れるまでには、4時間から6時間の休息時間がないと無理ということでした。ところが、大管長は大会の間はきわめて多忙で、なかなか休みはとれないのです。(事実、ふたりの医師は、大管長の看護のために教会幹部に随行しました。)

私はタナー、ロムニー両副管長に、ラパスに着いたら大会を始める前に大管長を休ませてくれるようお願いしました。しかしふたりは笑って、「あなたがやって下さい」と言うのです。

やがて、その地域大会の計画の詳細が大管長会に提示されました。見てみると、キンボール大管長はラパスの次の所にふたつの赤い印をつけました。そこには大管長が出席しない集会がふたつ書いてありました。大管長は「このふたつの会は何ですか。なぜ私が出ないのですか」と尋ねました。少しして、私は「大管長、それは休息の時間です」と答えました。すると大管長は「ヘイルズ長老、あなたは疲れていますか」と言ったのです。

私たちはラパスに着き、最初の集会は文化活動でした。大管長は休みませんでした。私は頭痛をおぼえました。頭が割れそうで、3,600メートルの高さに慣れるために酸素吸入をしました。しかしキンボール大管長は全く酸素を使いませんでした。それどころか、2,000人の聖徒を歓迎し、抱擁し、握手をしたのです。

そして最後の集会の後、大管長は、アルティプラノから来ていた1,000人の愛するレーマン人と握手をしたいと言ったのです。彼らは大管長と抱き合い、力強く握手をしました。大管長は彼らに愛を示そうとされたのです。

ウィルキンソン博士は、3,600メートルの高さにもかかわらず大管長があまりにも活



発なのを心配して、できるだけ早く休むようにアドバイスしました。すると大管長は言いました、「私が知っていることを知っていたら、あなたは私に何も言わないはずで。」大管長は、私たちがイエス・キリストの再臨の備えをしていることを強く感じているのです。そして、そのメッセージが世界中にその国の言葉で伝えられなければならないことを知っているのです。

キンボール大管長は教会幹部にこう話しました。「私は死を恐れませんが、私が恐れることは、救い主にお会いした時に、『もっとよくできたのに』と言われることです。」王国を前進させようとする予言者の献身とその言葉が、緊迫感をもって伝わってくるのでしょうか。「ヘイルズ長老、疲れているのですか。」休んでいるとその言葉が耳にこだま

します。キンボール大管長と同じ心を持っては、私たちは心と力と思いと体力を尽くして働くことでしょう。

私たちが大管長に体を休めるように言うと、大管長は決まてこう言いました。「皆さんは私を忙しさから救ってくれようとしていますね。でも私は救いではなく昇栄を望んでいるのです。」そして、主が予言者である自分を守ってくれる。自分のために教会の歩みを遅くしてはならないと言うのです。

予言者ジョセフ・スミスは次のような勧告を受けました。

「わが子よ、汝心安かれ。汝の不幸汝の困苦はただこれ束の間なり。

然り而して、もし汝よくこれを耐え忍ばば、神は汝を高きに挙げたまわん。かくして、汝あらゆる敵に勝つことを得ん。

汝の友だちは誠に汝を援け、温き心と親しき手もて再び汝を歡び迎えん。」(教義と聖約121：7—9)

願わくは主の祝福が私たちにあり、このみ業が急を要すること、そして何が予言者を駆り立てるのが理解できますように。大管長は宣教師です。それは、全人類がみたまにより教えられ、バプテスマを受けなければならないことを知っているからです。そしてふさわしくあるならば、私たちは永遠の生命を受け、昇栄して、父なる神とイエス・キリストのもとに帰り、永遠に共に住むことでしょう。

私は、今日、予言者が啓示によってこの教会を導いていることを証します。いつでしたか総大会の最後に、キンボール大管長は「人々は『主よ、主よ』と言うが、私の言うことは行なわない」と言いました。願わくは私たちが「主よ、主よ」と言うと同時に、今日この教会を導く予言者たちの言葉とその模範に従うように、イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン。

福音の光



七十人第一定員会会員
アドニー・Y・小松

何年前か前、私は責任を受け、最近完成した礼拝堂を奉献するために南太平洋のある島を訪れました。献堂式の晩、私たちは何人かの地元の指導者とその建物のところに行ってみて、驚きました。建物の電気が消えていたのです。

建物に入ると、教会員たちが礼拝堂に座っていました。私たちは電気が消えた原因を尋ねました。監督の話では、きょうの午後、建築の管理者が来て献堂式のためにすべて点検をしたということでした。ところが献堂式の始まる前になって、何らかの原因で近所の家には電気がついているのですが、教会の電気だけが消えてしまったのです。私たちは考えられる問題箇所はすべて検査したのですが、原因がわからず、結局そのままの状態で献堂式を始めることにしました。

礼拝堂の前に置かれた石油ランプの光だけを頼りに式は始められました。私は、献堂式がこのような暗闇の中で行なわれたのは教会歴史上、初めてのことでないかと思いました。

会衆の中の信仰深い兄弟姉妹は私と同じように心の中で主の祝福があつて電気がつき、献堂式を無事に終えることができるようにと祈っていたに違いありません。

話し手が一人一人話し始めました。まだ電気はつきません。聖歌隊が美しい声で讃美歌を歌いました。まだ、電気はつきません。最後に私が立って話をしましたが、依然としてあたりは真つ暗でした。私は会衆に向かって献堂の祈りをするので皆さんも一緒に加わってくれるようお願いしました。その時突然、礼拝堂の電気が揺らぐようにしてついたので。私たちは主の大きな祝福にどんなに感謝したことでしょう。私は心に圧倒されるものを感じ、このような祝福を与えて下さったことに心からへりくだり、柔和な気持ちになりました。しかしこの礼拝堂の光も、私たちの祈りに答えて下さったこの大きな祝福に対して私たちの心にもつた愛の光に比べれば、ほんの小さなものでした。

その時、私は予言者モロナイの言葉を思い出しました。

「さて私モロナイは少々言いたいことがある。私は、信仰とはまだ見ない物事を望むことであると世の人に教えたい。それであるから、あなたたちは自分がまだ見えないからと言って疑ってはならない。信仰の度を試してからでないと目で見えるような証明が得られないからである。……」

世の人々の中に信仰がなければ神は人の間に奇蹟を行うことができないので、人々が信仰してからでないと神は人に現われたまわなかった。」(イテル12：6，12)

確かに主は、私たちが信仰の試しを受けた時や、希望を持って祈った時に、祝福を与えて下さいました。

私たちの中には、この人生で愛の光を求めている人々が大勢います。そのような人々の中に、国の法律を破り、刑務所に入ったことのあるひとりの若者がいました。この若者は脱走を企てたもののすぐに捕らえられ、刑務所に連れ戻されたという経歴の持ち主でもありました。彼の人生は全く暗黒と悲劇の連続でした。しかし、愛ある監督の絶ゆみない努力によって、この若者は改心し、再びキリストへの道を歩み始めたのでした。謙遜でつましい気持ちで悔い改めることによって、聖霊がこの若者の心を動かすようになったのです。

刑期を終えて刑務所を出る時、その門の前で彼を迎えたのは、長い間彼を励まし続けてきた監督でした。監督は両親、兄妹も一緒に連れてきていました。彼らもこの若者の出所を心から祝福しました。若者の身勝手な行ないのために苦しみ、眠れぬ夜を送った日も多くあったはずなのに、彼を温かく迎えてくれた監督や家族に、この若者はどれほど感謝したか知れません。家族の皆さんはこうした苦しみの中にあっても、信仰を揺るがすことがありませんでした。そして奇跡が起こったのです。現在、この若者はワード部の長老定員会会長として働いています。

この若者の人生を霊の暗黒状態から真理と光明の状態に変えたのは一体何の力でしょうか。これこそ、監督がこの若者へ示したキリストの純粋な愛だったのです。(モロナイ7:47参照)

予言者ニーファイは次のように述べています。「ごらん、主はこれをしてはならないと迎せになっている。従って主なる神は、人は皆慈悲すなわち愛の心を持たなくてはならないと言う命令を与えたもうた。もし



も人に愛の心がなかったならば人は何の価値もない。それであるから、もしも人が愛の心を持っているならば、シオンで働く者を死なせてはおかないであろう。」(IIニーファイ26:30)

また私たちが忘れてはならないことは、多くの試練と心痛に耐え、しかも刑期を終えた時に両手を広げて歓迎した、この若者の家族の信仰と勇気です。モロナイはこう述べています。

「レーマン人の心を改めさせてかれらに火と聖霊のパプテスマを受けさせたのはニーファイとリーハイとの信仰であった。レーマン人の間にあの大きな奇蹟を行ったのはアンモンとその同僚たちの信仰であった。キリストが降誕したもうさきの者でも、キリストが降誕したもうたあとの者でも、奇蹟を行った者はみなその信仰によって奇蹟を行った。……

いつ何時でもまだ信仰のない中に奇蹟を行った者はない、すべて奇蹟を行った者はまず神の御子を信じた。」(イテル12:14-16, 18)

予言者モルモンはまたこう説いています。
「……奇蹟は信仰によって行われ、……キリストの御言葉によれば、キリストの御名を信ぜずに救いを得る者はない。……」

それであるから、もし人に信仰があるならばその人に希望もまたなくてはならない。信仰がなければ希望もまたないからである。よく言うておくが、その人の心が謙遜であって柔和でなければ信仰も希望も持てるはずがない。

……人がもしその心が柔和であってへりくだり、また聖霊の力によってイエスをキリストであると認めるならば、その人に愛がなくてはならない。」(モロナイ7:37-38, 42-44)

この愛の大切さについて、使徒パウロはコリント人への手紙の中で次のように述べています。

「たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鑼ひょうほらと同じである。たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。

愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。

愛はいつまでも絶えることがない。」(I

コリント13:1-8)

教会ではこの愛ある行ないをする機会がたくさん与えられています。その幾つかは友情の手を差し伸べることから始まります。あるワード部大会で、ひとりの年輩の兄弟がそのよい例を話してくれました。

日曜学校の会長をしていたこの立派な兄弟は、証を述べるように頼られました。彼は12年間も教会に不活発でしたが、その間いろいろな問題で右に左に押し流され、結局、深い絶望に陥ってしまったのでした。このように人生が真つ暗闇に思われていた時に、フェローシップの手が差し伸べられたのです。まずホームティーチャー、続いて監督、ワード部の会員とその援助の手は広がってゆきました。教会に活発に来るようになり、会員たちの、偏見やわかまりのない温かい気持ちを知って、この兄弟はこのイエス・キリストの福音が真実であり、悔い改めた人々の帰ってくる所があることを改めて知ったのでした。主は人々を赦されます。そして、主に従う人々もまた他の人々を赦します。友情の手が差し伸べられ、罪人は悔い改め、そこに愛の輪が完成するのです。

予言者モルモンは次のように教えています。「それであるから私の愛する兄弟らよ。愛はいつまでも消え失せることがないから、あなたたちにももし愛がないならあなたたちは空しい者である。ほかのものはみな消えてなくなるものであるから、すべてにまさる愛を固く守れ。

この愛はキリストの純粋な愛であって永遠につづくものである。従って終りの日にこのような愛を持っている人はさいわいである。」(モロナイ7:46-47)

教会での管理の職を忠実に果たす時、ま

た心の思いが行ないに表われることを思い起こす時、そして神の王国で私たちを待つておられる救い主にその愛を示す時、私たちが希望と愛をもってそれらのことを行なえますように。人類を招く主の鐘は、讚美歌にあるように「主に来たれ」と高らかに鳴り響いています。

主に来たれ 重荷を負い

罪にまけし者よ

主をたよる者をみな

天へと導きまさん

主に来たれ 闇の中

迷うとも主、守らん

主の愛は 汝見つけ

闇より導かん

主に来たれ 主の愛に

祈れば聞きたまわん

おお、知らずや天使くんだり

汝がそばに在ますを

主に来たれ 国々や

島々より来たれ

「われに来よ」と主は呼ぶ

すべての人を呼ぶ（讚美歌81番）

愛する兄弟姉妹の皆さん、私は心からへりくだって証します。イエスはキリストであり、世の救い主であります。私たちが「主に来たれ」という招きの声に耳を傾けるならば、主は忠実で義なる者に約束しておられるすべての祝福を必ず与えて下さいます。これらのことをイエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。



永遠の生命への 道を阻む小さなムシ



七十人第一定員会会員
アンゲル・アブレア

ある異常とも思われるほど暑い日の午後のことでした。私はアルゼンチンの大草原パンバスの農業地帯を走っていました。太陽はかげろうの立つのが見えるほどハイウェイにぎらぎらと照りつけていました。しかし、私の心は平安で、ゆったりとしていました。それもそのはずです。私は買ったばかりの新車、しかも工場から送られてきたばかりの新品の車に乗っていたからです。エンジンは大きく、馬力も強いのでクレーをかけてとばしてもびくともしません。

ところが、突然車のラジエターの温度が上昇し始め、エンジンの調子がおかしくなりました。ついに水温計が危険域を示すようになったので、私は車を道路の脇に停めました。機械についての私の知識は限られていましたが、それでも何とか故障の原因がわからないものだろうかと考えました。正直言って、私は買ったばかりの新車がこのようなことになったことに少々腹が立っていました。フロントカバーを開けると、ラジエターのところに無数の小さなムシが詰まっていた。このムシが冷却装置をだめにし、車を停めなければならないことになっ

たのです。そして、数百匹のムシでも力を合わせれば100馬力以上の力を持つエンジンさえも止めることができるという現実をまざまざと見せつけられ、私は啞然としてしまいました。それが、タカとかワシとか言うのならわかりますが、わずかに数百匹のムシのためなんです。

私はこの出来事から、私たちの生活の中でしばしば起こることについて考えさせられました。すなわち、私たち一人一人が内に秘めている驚くべき可能性、つまり私たちを永遠の生命へと導く可能性について考えたのです。

予言者ジョセフ・スミスは次のように述べています。

「あなた方は、自分自身いかにすれば神となり、神の祭司、王となれるかを学ばなければならぬ。あなた方の前の神々がすべてなしたと同じように、すなわち、小さき者から大なる者へ、恩恵に恩恵を加えられ、昇栄から昇栄へ進むことにより、ついに死者の復活を成就し、永却の光輝のうちに住まい、永却の力を付与されて座す者たちと同じく栄光のうちに座すのである。……

彼らは神の相続人となり、イエス・キリストと共同の相続人となるであろう。それはどういうことか。それは、すでにその状態に達した人々と同じように、神と同じ力、同じ栄光、同じ昇栄を受け継いで、神の状態に到達し、永遠の力ある王座に昇ることである。」(Teachings of the Prophet Joseph Smith 「予言者ジョセフ・スミスの教え」 pp. 346—47)

私たちは何度このような小さな「ムシ」のために昇栄に至る可能性の芽をつみ、力を弱めていたことでしょう。

新聞の見出しに出るような重大な罪のために人生の旅路の途中で拘留される人は比

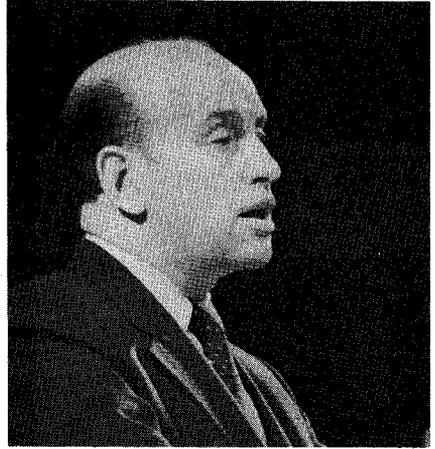
較的まれだと思えます。一般に、私たちが屈するのは、あの大きなワシのような鳥ではなく、ほんの小さな「ムシ」なのです。

このことをさらに詳しく説明するために、日の光栄に至る私たちの素晴らしい旅路の妨げとなる障害物の幾つかについて述べたいと思えます。

皆さんは安息日を聖く守らないことから来る霊的な退廃^{いはい}について考えたことがありますか。この戒めは単に仕事を休むというだけではありません。安息日を聖く守ることは本来、靈性を高めることであり、来るべきことに私たちを備えさせることです。この戒めを守ることによって、私たちは悪に打ち勝ち、さらに多くの主の戒めを守ることができるようになり、世の汚れに染まらずにいることができます。(教義と聖約 59：9 参照)

安息日のことでもっと詳しく言うと、皆さんは聖餐会に出席しなかったり、あるいは出席しても誤った態度でいることからくる霊的に不涵養^{ふかんよう}な状態について考えたことはないでしょうか。教会員がバプテスマの時に交わした神聖な誓約は、聖餐を受ける時の主要な思いでなければなりません。私たちがこれを行なうことができるならば、主のみたまは常に私たちと共にあるはずです。

いかなる教会員も毎週この誓約を新たにすることなく、みたまを保つことはできません。聖餐の目的をよく理解するならば、私たちは単に話を聞くためではなく、もっと大切なことのために、すなわち御子イエス・キリストのみ名によって天父と交わした神聖な誓約を新たにするために、聖餐会に出席するようになるでしょう。毎週開かれる聖餐会には出席しないし、悔い改めもしない人は、霊的な平安と恵みを危うくしているのです。



皆さんは、祈りを怠る時や、日々の祈りの中から満足のゆく経験を得ていない時、それが自分の救いにとってどういう意味があるのか考えてみたことがあるでしょうか。私たちは絶えず「祈りの力」について語ります。しかし私たちはⅢニーフай 18：18—20に話されている約束が成就するよう喜んでその代価を支払っているでしょうか。

「われ、まことにまことに汝らに告ぐ、汝らは誘惑に負けざるよう、たえず目を覚して祈らざるべからず。そはサタンが汝らを支配して麦のごとくにふるわんと欲すればなり。されば汝らはわが名によりてたえず御父に祈らざるべからず。而して、汝らが必ず受くと信じて、わが名によりて御父に乞い求むるものは、その正当なるものなる限り、すべて汝らに与えらる。」(Ⅲニーフай 18：18—20)

次に、私たちは教会の指導者を支持する時、指導者を助ける義務を負っていることを認識しているでしょうか。手を挙げることは、助けることを誓約する印です。指導者を批判し、責める時、私たちは文字通り誓約を破る者となるのです。ジョセフ・F・

スミス大管長はこの問題に関して次のように述べています。

「教師であろうと、監督会であろうと、高等評議員会であろうと、定員会であろうと、あるいは大管長会であろうと、正式に権限を与えられた教会の管理役員に従わないと言い始め、そして断固として心にこのことを思い、行動に移し始めた瞬間、この人は、神権と教会からもたらされる特権と祝福を自ら断ち切り、神の民から身を引いているのである。なぜなら、この人は主が教会の中に制定された権威を無視しているからである。」（「福音の教義」p.43）

私はこれまで、人々が什分の一を納めない理由を数えきれないほど耳にしてきましたが、そのほとんどは信仰の欠如が原因でした。

1957年に、アルゼンチンで新しく支部長に召された私は、什分の一の大切さについて知ってもらうために会員たちと面接をすることにしました。そして什分の一を納めることが難しいホセという立派な兄弟と話をするようになりました。私は、勇気を奮って尋ねました。「ホセ兄弟、あなたはなぜ什分の一を納めないのですか。」ホセ兄弟は私がこれほど単刀直入に言うとは思っていませんでした。

ホセ兄弟はしばらく黙っていましたが、こう答えました。「支部長、御存じのように私にはふたりの子供がいます。今月は子供たちに学校に履いて行く靴を買ってやらなければなりません。とにかく、どう計算してみても、什分の一を払うだけのお金がないのです。」

私はすぐに言いました。「ホセ兄弟、私は約束します。あなたが什分の一を忠実に納めるならば、子供たちは学校に履いていく靴を手に入れ、あなたも家で必要なお金に事欠くことはないでしょう。主がどのよう

な方法でそれをなさるのか私にもわかりませんが、主は必ず約束を果たして下さいませぬ。もしそれでもお金が足りないようなことがあるならば、あなたが什分の一として払った分を、私にあなたに返しませぬ。」

家に帰る途中、私は一体正しいことをしたのだろうかかと悩みました。私は何と云えば、当時結婚をし、仕事も始めたばかりで、決して経済的にゆとりのある状態ではありませんでした。私はホセ家族のことよりも自分の足元の方が心配になってきました。家に帰ると、妻は心から私の支えになってくれ、すべてうまくいきますよと言ってくれましたが、私はその晩、だれにも増して熱心にホセ兄弟の経済状態が良くなるようにと祈ったのでした。

それから1カ月後、再びホセ兄弟と話をする機会がありました。ホセ兄弟は目に涙を浮かべ、声が詰まって十分に話すこともできないほどでした。「支部長、とても信じられないのです。私は什分の一を納め、必要なもの全部買うことができました。その上子供に新しい靴を買ってやることもできたのです。別に給料が上がったわけでもないのですが、とにかく全部できたのです。主が約束を果たして下さいませぬことがよくわかりました。」

それ以後、ホセ兄弟は什分の一を忠実に納めています。

これまで、私たちが永遠の道を進んでいく時に出くわすほんの小さな「ムシ」のために起こる問題について述べてきました。もちろん、ほかにもたくさん問題があります。たとえば、自制心の欠如のために知恵の言葉を破る人が多くいます。個人と家族の備えのプログラムを守らないでいろいろと言い訳をする人もいます。また系図の責任に無関心な人や、神殿に参入して死者のために必要な業を行なうことを忘れる

人もいます。また無関心から、あるいは怖れから伝道活動に参加しようとしません人もいます。これらはそのほんの一例です。

私たちは前述の戒めのひとつかふたつを守らなかったというだけで、教会員としての資格を失うことはおそれないと思います。しかし、これらの小さな「ムシ」は個人であろうが組織であろうが霊性の向上、すなわち個人が秘めている本当の可能性まで根底からだめにしてしまうのです。

「そは人自らの中に自由の意志ありて己れの事を自ら為す者なればなり。従って人善を為さば決してその報いを失わざらん。」
(教義と聖約58：28)

主は失敗させるために私たちをこの世に送って下さったものではありません。私たちはこの世の旅を終え、再び主のみ前に戻る

ために必要なすべての才能と能力を与えられてこの世に生まれました。私たちへの最大のチャレンジは、私たちが昇栄に至るために主から与えられたすべてのものを忠実に、勇気を持って用いることです。私たちがそれを実行し、「神の口より出るすべての言によりて生く」(教義と聖約84：44) ならば、この人生の旅路の終わりに、その旅立ちの時に味わったと同じ栄えある経験を得て、「神の子たちはみな喜び呼ばわった」(ヨブ38：7) というようになるでしょう。

私は、主がそのために必要な助けを与えて下さり、私たちがこの栄えある目標に向かって努力する時、いつも私たちを祝福して下さることを証します。これらをイエスキリストのみ名によって申し上げます。アーメン。



王国の力は 私たちの中に



七十人第一定会員会会長
ディーン・L・ラーセン

ある時パリサイ人が救い主に向かって、**あ**神の王国はいつこの地上に来るのかと尋ねました。(ルカ17:20参照)パリサイ人たちは昔から、神の王国は大いなる力を顕示し、地上を広く治めるものと教えられてきたからです。ですから、パリサイ人のこの質問は、神の国はこの世のどの国とも違うものである(ヨハネ18:36参照)と言われた主の言葉に説明を求める抗議の質問だったわけです。

この時、主が言われた答えの中にひとつの大切な教えを見ることができます。それは、神の王国における力の源に関することです。主はこう言われました。「神の国は、見られるかたちで来るものではない。また『見よ、ここにある』『あそこにある』などとも言えない。神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ。」(ルカ17:20-21)

救い主は、神の王国の本当の力というもののは外見的なものではなく、そこに住む人人の生き方の中にあることを、質問した人に示そうとされたのです。み国の力はその中にいる人々の清さ、愛、信仰、誠実さ、真理への献身の深さにあります。この大い

なる教えが、パリサイ人には理解できませんでした。これは今日の私たちにとっても大切な教えです。

今や私たちの教会は自由世界のほとんどの国に広まり、いたるところで集会が開かれています。また、すべての教会員が比較的楽に行ける距離内に神殿が建つのも遠いことではありません。集会や活動に参加する教会員の割合は、かつてないほど高い数字を示しています。これらは皆よい兆しです。これらが内なる力の強さを示すものであったらいいと思っています。この20世紀、特に最後の10-20年間における教会の発展には目を見張るものがあります。また、伝道活動の成功を見て意を強くしています。しかし、このような外見的な力の増大に気をとられて、救い主の命令を忘れるようなことがあってはなりません。主は神の王国がこの世的にあつと言わせるような方法で現われることを追い求めている人々に、こう命じておられます。「神の国は、実にあなたがたのただ中にある……。」(ルカ17:21)

数カ月前のこと、私はあるステーキ部の大会に出席しました。そのステーキ部の統計記録は全く素晴らしいものでした。その記録から判断してみても、このステーキ部は献身的で忠実な末日聖徒たちの集まりであろうことがすぐに察せられました。ステーキ部長との最初の面接で、ステーキ部長がこの素晴らしい記録を私に見せたがっているのはもっともなことだと思いました。この面接に備えて、ステーキ部長の机の上にはすでに報告書が出来上がっていたのです。私はこの報告書に目を通す前に、こう尋ねました。「ステーキ部内の人々についてどのように感じておいでですか。彼らの靈性は昨年よりも高まっていますか。」私は、会員たちの靈的面の強さについてステーキ部長がどう見ているか個人的な意見が聞き

たかったのです。彼はこの時とばかり、統計報告書に手を伸ばしました。彼が私の質問の意味をはき違えたので、私はこう説明しました。「統計報告書は後で見せていただくとして、その前にステーキ部内の会員についてどう感じているかをお聞かせ下さい。」

報告書にはないこういった類の評価を求められたことで、ステーキ部長は不満を感じ、また当惑している様子でした。彼が不満を感じていることを読み取った私は、それ以上追求せず、統計記録に目を移しました。その記録は、「量」に関しては一目瞭然で、驚くほどの発展ぶりを示していました。確かにこの報告書は、教会員の質である霊性を示す大切な記録だったのだと思いますが、残念ながら私が求めていた鋭い洞察をステーキ部長から引き出すことはできませんでした。その時私はステーキ部長の顔に、幾分困惑の色を感じました。そしてそれは次第に濃くなって、面接の終わりには物思いに沈み、憂いさえ表われてきました。その沈んだ表情は、午後の集会から夜の集会までずっと続き、私は何だか心配になってしまいました。

翌日、一般大会でステーキ部長の話になりました。何とも驚いたことに、ステーキ部長は前日の私との面接のことを会員たちに話し始めたのです。私が統計報告書をすぐに見なかったことが残念でしかたなかったこと、そしてその気持ちは夜になってもおさまらなかつたことを話しました。夜このことを考えていると、大会の前の週に経験したある出来事が思い出されたということです。

彼は、手術をしたある会員を病院に見舞いに行きました。すると病室に看護婦が検温のために入って来ました。そして患者の足元にある表に記されているデータを注意深く見た後、新しいデータを記入しまし

た。それが済むと、患者の傍らに立って、脈を計り、額に手を当て、何やら質問しその答えを聞いていました。看護婦はあのようにして表に表われない、患者の重大な兆候を見分けていたのです。ステーキ部長はそう話していました。

このことを思いめぐらしていると、昨日の私の質問の主旨がわかってきたということです。ステーキ部長はこう続けました。「そうなのです。ラーセン長老は私に、統計報告書には表われていない霊に関する重大な兆候を把握しているか尋ねられたのです。」

さらに続けました。「きょう私はこういった霊に関する大切な兆候、表には現われない事柄についてお話したいと思います。」この時のステーキ部長の話は、これまで聞いた大勢のステーキ部長の話の中でとりわけ印象深い、素晴らしい話でした。おもしろいことに、ステーキ部長は話の中で統計記録を一切引用しなかつたのです。

今日、世界各地における教会の急激な発展を見て励まされ、将来の見通しの明るいことを力強く感じています。また、まだまだ向上の余地はあるものの、会員たちの活発な働きをうれしく思っています。主に任せ、み業のために犠牲を惜しまない会員たちの自発的な態度は賞賛に値するものです。

では、私たちの心の中にあるみ国はどうでしょうか。内なる弱さを完全に断ち切っていないことを示す証拠がいくつもあります。家庭の問題は増大し、離婚が一般化してきています。この世のものや物質への執着があらゆる面に見られます。また、信頼と誠実の原則にのっとっていないビジネスのやり方も珍しくありません。人間関係にあっても、礼儀やまごころがしばしば無愛想で粗野な振舞いにとってかわっています。結婚の誓約を脅かす男女の乱交や不貞が私たちを取り巻いています。

主は末日聖徒イエス・キリスト教会を「全地の面に於ける唯一の真にして生命あり而も主なるわれの悦ぶこの教会……われ悦ぶとは一人一人を指すにあらずして、わが教会員全体に就きて言えるなり」と認めておられる一方で、各会員に次のような条件を出しておられます。「すなわち、主なるわれは罪を見ていささかもこれを許すを得ざればなり。」(教義と聖約1:30-31)

また別の折に、主は主の教会の会員に次のように警告しておられます。「見よ、速に世に住める人々の上に来る……

而して、このことはわが家に始まり、わが家より出で行かんと主は言う。

また、まず汝らの中に在る者の中、わが名を知ると公言するもわれを知らず、またわが家の中にありてわれを汚せる者より最初にこの事あるべしと主は言う。」(教義と聖約112:24-26)

教会が目覚ましい発展を続けているこの時期に、自分自身を見つめて靈的に重大と思われる兆候を調べるのはとても大切なことです。末日聖徒の中にも誘惑に負けて、世の中で禁じられていることを追い求める人が年齢に関係なくたくさんいます。多くの場合、それをずっと続けていくつもりで行なうのではないのです。ほんの少しの間、それも逃すのは惜しいと思つてのめり込んでいくのです。そのような状態から立ち直る人もいますが、多くの場合悲劇が訪れ、結局破滅と失望を招くこととなります。

このようなことを続けていると大変なこととなります。その影響は仲間うちだけにとどまらず、愛や信頼を傾けてくれる人々にまで、惨めで、想像を絶するほどのものをいつまでも与え、彼らを煩わせることとなるのです。

その結果、人間性ははなはだしく低下し、教会と神の王国における本当の力、影響力

は減少してしまいます。それは人類にとって大きな損失です。また教会全体としても、主の祝福を守り通す力を危険にさらすことになります。

主の祝福を信頼して時代の風潮に流されない人、闇から立ち直った人や立ち直ろうと努力している人に、心からの賛辞を贈りたいと思います。あなた方は私たちの希望です。真の強さです。あなた方は最終的に重大な違いに気づくでしょう。あなた方こそ、地を取り巻いている悪の力と戦う最後の偉大なる対抗勢力なのです。神はそのゆえにあなた方を祝福されるでしょう。

私は主の約束を思う時、将来が明るいことを感じます。主の王国が雄々しく立ち上がることを知っているからです。それにしても、私たちに対する主の次の言葉を読む時、身が震える思いがします。

「そもそも今は警めを告ぐる時にして、多くの言を費すべき時にあらざるなり。主なるわれは、末の世に於て欺かれざればなり。」(教義と聖約63:58)

神の王国の力はその中にいる人の数によって決まるのもなければ、発展の度合いやその中にある建物の美しさによって決まるのでもありません。また、人の数や規定されたことへの表面的な従順さによって測られるものでもありません。本当の力は愛や従順、奉仕という地味で、表には書き表わせない行ないの中にこそあるのです。そしてこのような行ないは、指導者の目に公のものとしては映りません。これはまさしく導きと恵みを施す主のみ業に匹敵するものと言えるでしょう。

今こそ私たちは、表には現われない靈的できわめて大切な兆候を調べてみる時ではないでしょうか。「神の国は、実にあなたがたのただ中にある」のです。イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

「汝ら備えをなせ」



十二使徒定員会会員
リブランド・リチャーズ

私はこれまで何度となくこの総大会の壇上に立ち、ひとりの宣教師として、教会員でない方々に、この教会は今日この地上における唯一の真実の教会であること、すなわち人間の知恵ではなく、天の使いの命令によって立てられた教会であることを申し上げてきました。

これはかねてから考えていたことですが、きょう私は、教会の不活発会員の方々にお話をしたいと思います。そうした不活発会員の中には立派な末日聖徒の家庭に育った当然活発に教会に集っているはずの方々も大勢います。さらに私は、不活発会員を抱えている皆さんにも一言申し上げたいと思います。

主は、モーセを通して、「これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり」(モーセ1:39)と言われました。そうだとすれば、私たち霊の子供が不死不滅と永遠の生命を受けるためにどうすればよいか、それを知る方法を主は与えて下さっているはずで、その方法を教えるのがこの偉大な教会の使命です。

教会員の中には、なぜこの教会があるのかを御存じでない方が大勢いるようです。イエスは次のように述べておられます。「あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。」(ヨハネ5:39)

さらに主は再臨の時に裁かれる人々について触れ、こう言われました。「その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。そのとき、わたしは彼らにはっきり、こう言おう、『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ。』」(マタイ7:22-23)

パトモス島に流された黙示者ヨハネに、天の声が臨んでこう言いました。「ここに上ってきなさい。そうしたら、これから後に起るべきことを、見せてあげよう。」(黙示4:1) 天使はヨハネに多くの素晴らしい示現を見せました。新しい天と地が創られ、その時には、病気や苦痛、悲しみや死はなくなり、神の栄光が地上を覆うため昼に太陽を、夜に月を置く必要がなく、すべての人が主の光の中を歩むので、「主を知らない」と言う人はひとりもいない、そのような時が来ることが示されたのです。(黙示21:1, 4, 23-24参照)

これから起るべきことをすべて目にしたヨハネは、それを示してくれた天使の前にひざまずいて拝もうとしました。その時、天使はこう答えたのです。「そのようなことをしてはいけません。わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書の言葉を守る者たちと、同じ仲間である」(黙示22:8-9)

これより少し前、天使は死んでいた者が大いなる者も小さき者も共に神のみ前に立っているのを見せました。そして、数々の書物が開かれ、すべての人はその書物に記されている事柄とその行ないによって裁かれること、死も黄泉もその中にいる死人を出ずことを示しました。(黙示20:12-13参照) 天使はまたこう言いました。「この第一の復活にあずかる者は、さいわいな者であり、また聖なる者である。この人たちに対しては、第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する。」(黙示20:6) このように、第一の復活の朝に出て来るにふさわしい者になることは、何と素晴らしいことではないでしょうか。

しかも天使はこうつけ加えています。「そ

れ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかつた。」(黙示20:5) 人の子が聖なる天使たちと共に天の雲に乗ってこられ、キリストのために死んだ人々が墓からよみがえり、生者で信仰ある者が空中高く上げられてまたたく間に変えられる時に、一千年の間、墓の中に取り残される方に賭ける人がいるでしょうか。私の好きなローマの哲学者キケロは、このはかない現在よりも、長い来世をどう生きるかの方がもっと興味があると述べています。

今日、通常的生活形態で言うと、子供たちは私たちと同じように、12年から20年の間学校に通って、この世で豊かに暮らし、文化的で洗練された生活を楽しむ方法を学びます。75年から100年の人生に12年から20年かけて備えるとすれば、終わりのない



人生に備えるには、一体どれだけの年月が必要でしょうか。

モルモン経の予言者アルマはこの世は主に会う備えをする時であると言っています。(アルマ34：32参照)私たちはこの短い現世よりも長い来世をどう生きるかにもっと関心を持つべきだと思います。そして、長い来世が一体どれ位続くか私たちは立ち止まって考えたことがあるでしょうか。

おそらく皆さんは、私がこの話をするのを以前に聞いたことがあると思います。私は妻と結婚して35年になった時、こう言いました。「ママ、きょうから3,500万年後には、私たちはどうしているだろうか。」

すると妻はこう言いました。「そんなバカげたことどこから考え出してきたの。考えるだけでも頭がへんになってくるわ。」

「でも、君は永遠の生命を信じているんだろう。」私は言いました。「時間は人のために定められたものであって、神にはもともと時間というものはないと教えられてきた。それは永遠に続く輪のようなものであると。(このことを予言者ジョセフ・スミスは指輪を使って説明しています。『指輪を切ると、初めと終わりができる。でも、切らなければ初めもないし、終わりもないのである』)」そして、私はこうつけ加えました。「ママ、もしそれが事実だとしたら、僕たちはこれからの3,500万年間もうまくやっていたいかなければならないね。」

キケロが短い現世よりも長い来世の方がもっと興味があると言ったのはこのようなことではなかったでしょうか。

救い主はその教えの中で、自らこの地上を統治する権能を持って降りてくる再臨の時に向けて私たちを備えさせるために、多くのたとえ話を使って話をされました。そのうちの幾つかをここで御紹介したいと思います。

そのひとつにタラントのたとえ話があります。皆さんも御存じのように、このたとえ話はある人が遠くに旅に出る時、その僕たちにそれぞれ財産を預ける話です。その人はひとりに5タラント、もうひとりに2タラント、そして残りのひとりに1タラントを預けました。やがて旅から帰ったその人は、僕たちとその持ち物を数え始めました。すると5タラント渡された者がこう言いました。「ご主人様、あなたはわたしに5タラントをお預けになりましたが、ごらんのとおり、ほかに5タラントをもうけました。」そう言って、僕は主人に10タラントを渡しました。すると主人はこう言いました。「良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。(多くのものを管理する者となることは何と素晴らしいことではないでしょうか。)主人と一緒に喜んでくれ。」(マタイ25：20-21)

(私たちは皆、同じタラントを受けているわけではないのですが)2タラントを預けられた者も2タラントをもうけ、その忠実さに対して同じようにほめられたのでした。しかし1タラントを預った者はそれを地の中に隠しました。そして、こう言ったのです。「ご主人様、わたしはあなたが、まかない所から刈り、散らさない所から集める酷な人であることを承知していました。そこで恐ろしさのあまり、行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。ごらんください。ここにあなたのお金がございます。」(マタイ25：24-25)

すると主人はどうしたと思いますか。「さあ、そのタラントをこの者から取りあげて、十タラントを持っているものにやりなさい。おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであ



ろう。この役に立たない僕を外の暗い所に追い出すがよい。彼は、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。」(マタイ25：28-30)

泣き叫んだり、歯がみをしたりする所に追いやられることがわかっていて、どうして人は終わりのない来世を待ち望むことができるのでしょうか。

次に、再臨に備えることについて救い主が述べたもうひとつのたとえ話を紹介しましょう。それは、10人のおとめのたとえ話です。御存じのように、そのうちの5人はあかりの油を用意していましたが、残りの5人は用意していませんでした。そして、「花婿が来る」と呼ぶ声が出たので、油を持っていた5人は外に出て花婿を迎えました。残りの5人は油を借りたいと思いましたが、分けてもらうほどなかったのです。彼女らは油を買いに出かけなければなりません。油を用意していた5人は婚宴の部屋に

入って行き、残りの5人が戻ってきた時にはすでに部屋の戸は閉まっていたのです。(マタイ25：1-13参照)不活発な人々がこの教会に戻ってくる必要があると感じておられなかったとしたら、イエスはどのようにしたとえ話をされたのでしょうか。

次に紹介するのは、金持ちとラザロのたとえ話です。皆さんはラザロが金持ちのテーブルから落ちたパンくずを食べ、犬がラザロのでき物をなめていたことを覚えているでしょう。それから、金持ちもラザロも死にました。ラザロはアブラハムのふところに入って行きました。すなわち、ラザロは誉れを受けたのです。しかし金持ちは苦しみの中に入っていったのです。金持ちは、アブラハムのふところにいるラザロを見上げて、こう叫びました。「父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。ラザロをおつかわしになって、その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの火炎の中で苦しみもだえています。」しかし、アブラハムはこう言いました。「わたしたちとあなたがたの間には大きな淵がおいてあって、こちらからあなたがたの方へ渡ろうと思ってもできないし、そちらからわたしたちの方へ越えて来てもできない。」(ルカ16：24-26)

金持ちはすぐに地上にいる5人の兄弟のことを思い、こう言いました。「父よ、ではお願いします。わたしの父の家へラザロをつかわしてください。わたしに五人の兄弟がいますので、こんな苦しい所へ来ることがないように、彼らに警告していただきたいのです。アブラハムは言った、『彼らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよからう。』……

アブラハムは言った、『もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼ら

はその勧めを聞き入れはしないであろう。』
(ルカ16:27-29, 31)

イエスはまた再臨に関して次のように述べておられます。「そのとき、ふたりの者が畑にいと、ひとり取り去られ、ひとり取り残されるであろう。ふたりの女がうすをひいていると、ひとり取り去られ、ひとり残されるであろう。」(マタイ24:40-41)

自分の仲間が、もし取り去られたり、1千年間も取り残されたらどう感じるでしょうか。

イエスはこのような麗わしいたとえ話を何の理由もなく語られたものではありません。イエスはこう言っておられます。「それで、わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない。岩を土台としているからである。

また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。」(マタイ7:24-27)

苦難の嵐に耐えられない砂の上に家を建てたい人がどこにいるでしょうか。

私は、皆さんが再臨に自分自身を備えるよう強くお願いします。

予言者エレミヤはどう言ったか覚えていますか。エレミヤは、「こののち『イスラエルの民をエジプトの地から導き出した主は生きておられる』とは言わないで、『イスラエルの民を……そのすべて追いやられた国から導き出した主は生きておられる』と

いう日がくる」(エレミヤ16:14-15)と書いています。そして主は多くの漁夫を呼んできて、彼らをすなごらせ、多くの獵師を呼んでもろもろの山、もろもろの丘、および岩の裂け目から彼らを狩り出させると書いています。(エレミヤ16:16参照) 散乱したイスラエルの民を集めるために3万人の宣教師が全世界に出ているのは、まさにこのことを指しているのです。

エレミヤはまたこう言っています「主は言われる、背信の子らよ、帰れ。わたしはあなたがたの夫だからである。」(エレミヤ3:14)

何という素晴らしい約束でしょうか。聖きみたまの勧めに耳を傾ける時、私たちは主と結婚したのと同じ状態になるのです。

さらにこう言っています。私は、「町からひとり、氏族からふたりを取って、あなたがたをシオンへ連れて行こう。わたしは自分の心にかなう牧者たちをあなたがたに与える。彼らは知識と悟りをもつてあなたがたを養う。」(エレミヤ3:14-15)

世界の歴史をひも解いてみて下さい。このロッキー山脈の谷に集められたように、町からひとり、氏族からふたりと人々が集められた場所を、ほかに見いだすことはできません。永遠の父なる神からみこころにかなう牧者たちを与えられ、きょうこの大会で皆さんが聞いたように、あるいはあす聞くように、その牧者たちの話を聞ける場所は、ほかにはないのです。

これが私の証です。神の祝福があつて皆さんとその家族が活発に、しかも与えられた才能と賜を使って神の王国の建設に力を注がれるよう祈っています。私の愛と祝福が皆さん方の上にあるように祈り、これらを主イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

アロン神権



十二使徒定員会會員
ボイド・K・パッカー

私は、神権会の時はいつも早目にタバナクルに来て、執事、教師、祭司の方々と握手を交わします。彼らに会うには、大勢の長老や七十人、大祭司の間を通りぬけて行かなければなりません、そうしてアロン神権者の方にお会いすることは十分に価値があります。大神権を持っている私たちは、兄弟であるアロン神権者の皆さんに敬意を表します。

私は皆さんに、アロン神権の目に見えない力について話したいと思います。12歳の少年ならもうそのことを学んでもよい年です。皆さんも大きくなるにつれて、この導きと守りの力を身をもって体験することでしょう。

力というものは目に見えなければ存在しないと考える人もいます。でもそうではないことが納得してもらえます。うっかりしてソケットの中に指を入れた時のことを覚えていませんか。目にこそ見えはしませんが、皆さんは確かにしびれるような電気の力を感じたはずで。

電気を見た人はだれもいません。最も優れた装置を持った科学者にさえ見えないの

です。でも感じることはできます。そしてその働きは目に見えます。電気は、計ったり制御したり、光や熱やエネルギーを生み出すことができるのです。目に見えないからと言って電気の存在を疑う人はいないのです。

皆さんには神権の力が見えません。でも感じることはできます。そしてその結果を見ることができます。神権は、皆さんの生活の中で導きと守りの力となるのです。例を挙げてみましょう。

ウイルフォード・ウッドラフ大管長は、教会に入った後で、伝道に出たいと思いました。こう書いています。

「私はまだ教師だ。海の向こうに行って福音を宣べることは教師の職務ではない。だから教会幹部に伝道したいとはとても言えない。教会の職を求めていると思われるからだ。」(Leaves from My Journal「私の日記から」p.8)

彼は主に祈りました。そして、だれにもその気持ちを話すことのないまま祭司に聖任され、アーカンソーに宣教師として送られました。

ウッドラフ兄弟と彼の同僚は、ワニのいる湿地や泥沼を何百マイルも歩き、疲れ果ててしまいました。ウッドラフ兄弟は、ひざに強烈な痛みを覚え、もう歩くことができず、同僚は、彼をその場に残したまま家に帰ってしまいました。そこでウッドラフ兄弟は、泥の中にひざまずいて祈りました。そして痛みが癒され、ひとりで伝道を続けました。

3日の後、ウッドラフ兄弟はテネシー州のメンフィスに着きました。疲れ果ててお腹はすき、体は泥にまみれていました。彼は一番大きな宿屋に行き、食物と寝る場所を求めました。でもお金はありませんでした。

宿の主人は、ウッドラフ兄弟が説教者であることを知ると、彼を笑い者にしてやろうと考えました。そして、もし友達に説教をしてくれたら、食べ物あげようと言いました。

そこでメンフィスの金持ち、上流社会の人々が大勢集まり、この泥にまみれた宣教師を見てすっかりおもしろがりました。

だれも歌や祈りをしてくれないので、ウッドラフ兄弟がひとりで両方しました。彼はひざまずいて、主にみたまを求め、集まった人々の心が理解できるように祈りました。そこでみたまが訪れ、ウッドラフ兄弟は大いなる力を得て説教をしました。彼は、嘲笑しようとした人々の隠れた悪事をあばいたのです。

説教を終えるころには、この謙遜なアロン神権者をあざける者はだれもいませんでした。それから後、彼は親切なもてなしを受けました。(Leaves from My Journal 「私の日記から」 pp. 16—18)

ウッドラフ兄弟は、アロン神権の導きと守りの力を受けていました。この同じ力を皆さんも持つことができます。

アロン神権についてごく基本的なことをいくつかお教えしましょう。

「第二の神権はアロンの神権と称えらる。この神権はアロンとその子孫に代々授けられたものなればなり。」(教義と聖約107:13)

アロン神権は別の名前でも呼ばれます。それを挙げて、どういう意味かを説明しましょう。

小神権

まず、アロン神権は時々、小神権と呼ばれます。

「何故にこれが小神権と称えらるるかと言わば、そは大神権すなわちメルケゼデク神権に従属して、外形的儀式を執り行う権

能を有すればなり。」(教義と聖約107:14)

これはつまり、大神権であるメルケゼデク神権が常に、小神権であるアロン神権を管理するということです。アロンはアロン神権の大祭司、つまり管理祭司でした。しかしモーセはメルケゼデク神権を持っていたので、モーセがアロンを管理していました。

アロン神権が小神権と呼ばれるからと言って、あまり大切な神権ではないということは決してありません。主は、「メルケゼデク神権に……欠くべからざる付属の職」と言われました。(教義と聖約84:29参照)大神権者はだれでも、アロン神権に属する儀式を行なうことを心から榮譽に思わなければなりません。それらは靈的に大きな重要性を持っているからです。

私は、十二使徒定員会の会員として聖餐のパスをします。私は、人が決まりきった仕事と言うそのパスの責任を受ける時、たとえようもない誉れを感じ謙虚な気持ちになります。

レビ神権

アロン神権はまたレビ神権とも呼ばれます。このレビという言葉は、イスラエルの12人の息子のひとりの名前です。兄弟であったモーセとアロンはレビ人でした。

アロン神権がイスラエルに与えられた時、アロンとアロンの息子たちは管理をする責任を受けました。そして他のレビ族の男性は、モーセの犠牲の律法を含めた幕屋の儀式を担当するように割り当てられました。

犠牲の律法はアダムの時代から守られていました。それは、メシヤの犠牲と贖罪によって訪れる救いを象徴するものでした。このモーセの犠牲の律法は、キリストの十字架上の死によって成就しました。

古代の人々は、この犠牲の儀式を通して

キリストの贖罪を待ち望みました。私たちは今、聖餐の儀式を通してキリストの贖罪を思い起こしています。

この古代の犠牲と現代の聖餐はどちらも、キリストと、キリストが血を流されたことと、私たちの罪に対する贖いを中心としたものです。そして昔も今も、この儀式を行なう権能はアロン神権者が持っているのです。

確かにこの責任は神聖なものです。これによって皆さんは、これら古代の主の僕たちと兄弟関係に入るのです。したがって、アロン神権者に与えられた儀式を行なう時に謙遜になるのは当然のことです。

これでなぜアロン神権あるいはレビ神権と呼ぶかがおわかりでしょう。この名前は与えられた義務を表わしており、この神権そのものであることがわかんと思います。

準備の神権

最後に、アロン神権は準備の神権と呼ばれることがあります。これもまたふさわしい名前です。若人に大神権や伝道、神殿結

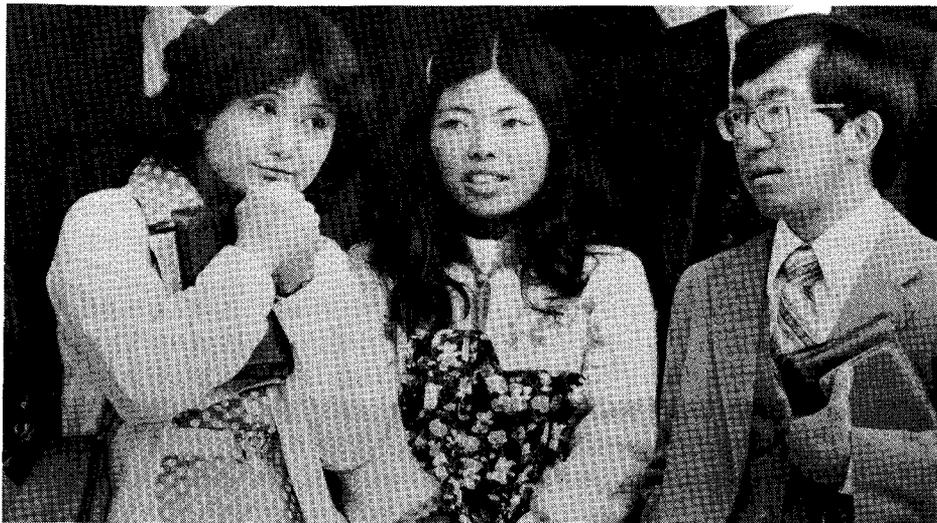
婚の備えをさせる神権だからです。

私は、アロン神権の祭司の職にあったパプテスマのヨハネが、古代において主の降誕の道を備えたことをとても意味のあることだと考えています。彼はまた、「予言者ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリにアロン神権を回復し、大神権に備えさせました。主はこう言われました。「パプテスマのヨハネより大きい人物は起らなかった。」(マタイ11:11)

皆さんは、メルケゼデク神権がどのような働きをするかについて、お父さんや指導者の行動から学ぶことができます。皆さんは長老や七十人、大祭司、祝福師となり、また宣教師や定員会指導者、監督会、ステーク指導者、そして父親として働くための備えをしているのです。

またここにおいででの執事や教師、祭司の人の中には、将来、使徒や予言者となって、この教会を管理する人も出てくることでしょう。皆さんは備えなければならないのです。

このように、アロン神権を準備の神権と



呼ぶことはふさわしいことです。

神権の原則

ではここで大切な神権の原則について幾つかお話ししましょう。皆さんはアロン神権を受ける時、そのすべてを受けます。あなたの神権には3つの権能があります。それを理解していただきたいと思います。

まず、神権そのものです。あなたは聖任を通して、儀式を行なう一切の権能を得、アロン神権の権威を持つようになります。

次に、神権には職があります。そして、その各々がそれぞれ特権を持っています。執事、教師、祭司の3つの職は、皆さんが十代の時に授けられるかもしれませんが。しかし第4の職である監督の職は、皆さんが大人になって、大祭司となるにふさわしくなった時に授けられるでしょう。

執事は、「常任の教職者として教会を守護」します。(教義と聖約84:111; 20:57—59参照) 定員会は12人の執事によって構成されます。(教義と聖約107:85参照)

教師は、「常に教会員を守護し、彼らと共にありて彼らを強」(教義と聖約20:53)めまします。教師定員会は24人の教師によって構成されます。(教義と聖約107:86参照)

祭司は、「説き、教え、釈き、勧め、パプテスマを施し、聖餐式を執り行ない、各教会員の家庭を訪れ」ます。(教義と聖約20:46—47参照) 祭司定員会は48人の祭司によって構成され、定員会会長は監督です。(教義と聖約107:87—88参照)

皆さんは常に3つの職の中のひとつを受けています。しかし、次の職を受けても、前の職の権能はそのまま残ります。たとえば祭司になった場合、教師や執事の時にこなしていたことをすべて行なう権能があるのです。大神権を受けた時も、小神権のすべての職に属する権能を行使することがで

きるのです。

14年間管理監督の職にあったリグランド・リチャーズ長老は、「私は大人の執事にすぎない」とよく言います。

聖任には決まった形式というものはありません。神権を授け、職を与え、特別な祝福の言葉を与えるようにします。

以前私は、ジョセフ・フィールディング・スミス長老とある集会に出席しました。その時だれかが、ある背教者が出した手紙について質問しました。その手紙とは、ある言葉が省かれたので、教会にはもう神権の権能はないという内容のものです。スミス大管長はこう言いました。「そのことについて話す前に、その手紙を出した人について少しお話ししましょう。」そして大管長はその人がどういう人かを述べ、「ですから彼は全くのうそつきです。」と言って結びました。

神権の職は神権の一部ですが、神権はそのどの職よりも偉大です。

神権は、罪を犯して資格を失わない限り、永遠に皆さんのものです。

私たちは活発で忠実であれば、この権能を理解できるようになります。

さて、皆さんが定員会の会長に任命されると受ける別の権能があります。つまり、会長会に与えられる権能の鍵です。

この神権と神権の職、つまり執事、教師、祭司の職は、聖任によって受けます。しかし会長会の鍵を受けるのは、任命によってです。

皆さんが執事になる時には、普通はお父さんが聖任しますが、ほかにふさわしい神権を持った人が聖任することもあります。

しかし皆さんが定員会の会長に召される時は、監督が任命します。会長会の鍵は、その鍵を持っている人からでないといけないのです。

皆さんのお父さんは、監督であれば別ですが、その鍵は持っていません。

この会長会の鍵は一時的なものです。しかし神権とその職は永遠のものです。

もうひとつ、皆さんが神権を受けられるのは、権能を持ち、それが教会員に知られた人からだけです。(教義と聖約42:11参照)

神権は卒業証書ではありません。証書のように手渡されたり、メッセージや手紙のように配られたりするものではないのです。正しい聖任によってのみ与えられます。そこには権能を受けた神権者がいなければなりません。その人が皆さんの頭に手を置き、聖任するのです。

教会幹部に旅行が多いのはそのためです。神権の権能の鍵を渡しに行くのです。世界中のすべてのステーク部長は、教会の管理役員の一から按手によって権能を受けています。これには例外はありません。

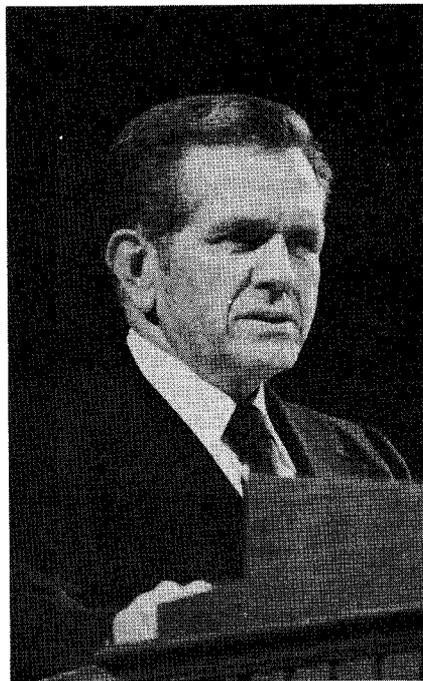
次のことを覚えてください。主は神権をとて、とて大切に思っておられます。だれによってどのように授けられるか注意深く見ておられます。隠れたところでは決して行なわれません。

私は、権能がどのように与えられるかを話してきました。皆さんが力を受けるか否かは、この神聖な目に見えない賜をどう扱うかにかかっています。

皆さんの権能は聖任によって、そして力は従順とふさわしさによってもたらされます。

ここで、私の息子がどのようにして従順を学んだかを話しましょう。彼が執事の年齢の時のことですが、私たちはワイオミングの祖父の牧場に行きました。彼はもらった馬を馴らそうとしていました。その馬は野生の馬でした。

囲いの中に入れ、重い端綱をつけてロープでつなぐのに丸一日近くかかってしまい



ました。

私は息子に、慣れるまでずっとつないでおかなければならないこと、話しかけたりそっとさわったりすることはできるけれども、どんなことがあっても綱をほどいてはならないと言いました。

そして、やっと私たちは夕食を食べに帰りました。息子は食事をそそくさすませると、急いで馬を見に戻りました。ほどなくして息子の叫び声が聞こえました。私は何が起こったかわかりました。馬の綱をほどいたのです。息子は馬を自分で馴らそうとしたのでした。そして馬が逃げようとしたので、直感的に、私が絶対にしてはいけないと言っておいたことをしてしまいました。離れないように綱を手首に巻きつけたのです。

外に出て見ると、馬が走りまわっていて、

手首に綱を巻きつけたままの息子は、大またでのめるように走っていました。そして倒れてしまいました。もしも馬が右に曲がっていたら、彼は門の外に引きずり出され、そのまま山の方に引張られて命をなくしていたことでしょう。しかしその馬は左に曲がり、一瞬罅いのすみの所で止まったので、綱をくいにかけ、息子の手首に巻きついた綱をかううじてほどくことができたのでした。

それから私たちは話しました。「もし君がああ馬を乗り回そうと思うなら、君の力のほかに何か使わなくちゃならない。ああ馬は君より大きいし、ずっと強い。それはいつまでも変わらない。でも、もし従順になるように馴らしたら、乗れるようになるよ。これがまず君が学ばなくちゃならないことだ。」こうして息子はとても大切なことを学んだのです。

それから2年後の夏、私たちはまた牧場に行きました。息子の馬は冬中、群れと一緒に走りまわり、私たちが行った時は、川のそばの草地にいました。私は丘の上から、息子と娘がそっとその草地に近づくのを見ていました。馬はそれに気づいて、逃げようと思いました。そこで息子が口笛を吹くと、彼の馬は足を止め、群れを離れて彼の所に走り寄って来たのです。

こうして彼は、目に見えないものにも偉大な力があることを知ったのです。その目に見えないものとは、従順です。

従順は馬を馴らす力を彼に与えましたが、神権に対する従順は、自分をコントロールすることを教えました。

皆さんは生涯を通じていずれかの神権定員会に属することになります。そして、定員会の他の会員から助けを受けることでしょう。

それ以上に、皆さんは他の定員会会員を

助けるという特権を受けます。

私がこれまでアロン神権について話してきたことは、ほとんどがメルケゼデク神権にも当てはまります。職の名前が変わり、権能がたくさん与えられても、原則は同じです。

神権の権威は、ごく普通の義務を果たすことからもたらされます。集会に出席し、割り当てを受け、聖典を読み、知恵の言葉を守るなどによってです。

ウッドラフ大管長はこう言いました。「私は何千マイルも旅して、祭司として福音を説いた。そして、会衆にかつて話したように、主が私を助けてくださり、私がおの職を使徒職と同じように大切に扱う限りにおいて、主はその力を表わし、私の命を守ってくださった。主は神権を持つ人を、祭司であれ、長老であれ、七十人であれ、使徒であれ、その義務を全力を尽くして遂行する限りにおいて助けてくださるのである。」(Millennial Star「ミレニアル・スター」1905年9月28日, p. 610)

バプテスマのヨハネは、アロン神権をこのような言葉で回復しました。

「汝ら、われと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導きと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして……。」(教義と聖約13章)

執事、教師、祭司の皆さんは、神聖な権能を与えられています。天使の導きと恵みが得られますように。また神権の力が、愛する若い兄弟の皆さんと皆さんの子孫の上についていつまでも留まりますように。福音は真実であり、神権は、アロン神権を持つ人々に対して偉大な力、つまり導きと守りの力を持っていることを証します。イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

アロン神権者の務め



管理監督会第一副監督
H・パーク・ピーターソン

神 権者の兄弟の皆さん、私にとって今夜のこの神権会は特別な意義があります。御存じの方もおられる通り、私たち夫婦には5人の娘がおります。皆器量もよく、才能にも恵まれ、信仰も深く、私にとっては掌中の珠であります。しかし、私たちには息子がおりません。幼少時代、日曜日に私はよく父や兄弟と一緒に神権会に行ったものでした。父となった今、私はいつもひとりで行きます。神権指導者として、私はこれまでアロン神権に関連して何千人という少年と面接をし、また教えてきました。それは素晴らしい経験となつてはいますが、自分の息子たる者に教えたことは一度もありません。父と息子のキャンプにも数え切れないほど行ったことがあります、一度として息子と行ったことがないのです。

しかし、今夜、アリゾナのあるステーキ部センターに、12歳になる初孫がアロン神権の執事として、初めてこの神権会に出席しているはずで、男の子にカウボーイブーツを買ってやるのを楽しみに、私は20年間この初孫が生まれるのを待ちこがれました。この子の初めてのクリスマスに、私は

ブーツを1足買ってやりました。

今夜、私はこの子が持つ神権というものについて、この子の知らないことを教える意味でお話したいと思ひます。と同時に、この子の友達、すなわち彼の執事定員会の会員をはじめ、執事、教師、祭司など教会のすべての若い男性を対象にお話したいと思ひます。今夜は特に、皆さんが持っているこの特別なアロン神権の権能についてお話しします。

現在、この特別な権能があまり意味のないものであると思ひている人が皆さんの中にいるかもしれません。この権能を授けられたことに奮い立ちながらも、どうしてそういう気持ちになるのか理解できずにいる人もいるでしょうし、中には、この権能を授かる資格のない人もわずかながらいるのではないでしょう。

ここで、ちょっと私の孫に向かって話させて下さい。数週間、アリゾナ州の君のワード部の聖餐会に出席した時のことだが、私は皆の前に座り、君はそこに座っていた人に聖餐をパスしていたね。君は「救い主の記念」にパンと水を私にパスしてくれた。アロン神権者としての責任のもとに、神の戒めを守るために命をも捧げるといふ気持ちを新たにしてくれるのを助けてくれたのだよ。私は君の祖父であり、メルケゼデク神権も持っているが、君の持つ権能がこの誓約を新たにしてくれる助けとなったんだ。あの時、君と一緒にそれができることが本当に素晴らしいと思つたよ。君の顔にちょっとした笑みがあるのを見て、君もそう思っているのだなと思つたのは、私の思い違いではないと思う。私もかつて、大管長会や十二使徒定員会やほかの教会幹部に聖餐をパスしたことがあるということを知っているかい。君も私も、この同じ神権の権能を使って、お互いに主との誓約をかわす助けをするこ

とができるなんて、素晴らしいことだと思わないかい。

聖餐の時間というのは特別な時で、君はその間、大切な役割を果たしているのだよ。君は以前の君と少し違っている。主は、ほかの人を助けるために、御自身が持つておられる権威と権能を少し君にあげようとおっしゃった。つまり、君が以前にできなかった神聖なことを、いくつか君にもやらせてくださるのだ。では、具体的にどんなことがあるのか教えてあげよう。

君がふさわしい生活をしたならば、教師としてワード部の会員の家庭を訪問し、彼らが福音の教えを理解できるように助けることができる。恐れることはないのだ。訪



問先の家の人々にみたまの助けを借りて話すことができるようになって、自分でもびっくりすることだろう。私たちのところに来るホームティーチャーのひとりも、アロン神権を持つ少年だ。毎月来てくれるし、3週間前には、一緒にお祈りをして、その中で私たちの家庭を祝福してくれた。皆とてもいい気持ちになったことは確かだ。

君は神権者だから、ワード部の会員から断食献金を集めたりして監督を援助することもあり、困っている人の世話をする機会が与えられることだろう。困っている人を助けることほど満足感の得られる責任はほかにはない。断食献金を集めることは祝福だよ。君は間接的に監督と貧しい人を助けていることになるんだ。君が集めた献金で監督が食料品を買い、家賃を支払うことになるだろうし、そうしてもらった未亡人の顔に笑みが浮かび、目に涙があふれるのを君は見ることになるかもしれない。

君は、成長するにつれてさらに多くの責任が課せられることだろう。この会には大勢の祭司が出席しているが、君は祭司になった時、聖餐を執行することができるようになる。バプテスマも施すことができるんだ。考えてごらん。今夜ここにいる少年たちと同様、昔バプテスマのヨハネが救い主にバプテスマを施したのと同じ権能を持つことができるんだ。バプテスマを施すことができたのも、アロン神権があったからだということを君は知っていたかな。

兄弟の皆さん、これらのすべてが、いやこれ以上のものが、もしふさわしければ皆さんに与えられるのです。時々、神権者としてふさわしい人間でいるのがむずかしくなることがあります。今の世の中でティーンエージャーとして生活することは容易なことではありません。だれでも、自分の仲間認められたいと願う時期が一度は必ず

あることですし、また仲間に受け入れられる必要もあります。時によっては、これは、お父さん、お母さんに好かれるのと同じくらい大切なのです。学校でこのようなプレッシャーを受けると、たとえ「ノー」と言うのが正しい時であってもなかなか「ノー」と言えないし、反対に「イエス」と言うのが正しい時でもなかなか「イエス」とは言えません。忠実なアロン神権者になるためには、本当の勇気が必要なのです。

私はひとつのことに気づきました。それは、神権の力が、いくつかの簡単な規則に従う人に与えられるということです。この力は、私たちがそれを受けるのにふさわしい生活をして初めて受けられるもので、自動的にやって来るものではありません。不幸なことに、悪い習慣に陥ってもあまり気に留めない人もいますし、過ちを犯しても悔い改めないでいる人もいます。そのような人は、たとえ神権は続けて持っていても、やがて神権の持つ力の一部を失ってしまうでしょう。どういうことかおわかりになりますか。

たとえば、教会で話すための準備や学校でのテストのための勉強をする時、靈感に満たされる権利とか、何か正しくないことを求められた時に「ノー」と言う勇気とか、病気の両親や兄や妹のために祈る時に必要な力とかがそうです。

神権の力をもっと大きくしたい、毎日の生活の中でもっと靈感を得たいと思ったら、私なら次のことを実行します。

1. 毎日10分から15分聖典を読みます。多分、まずモルモン経から始めるでしょう。たとえそれが初めて、あるいは3回目であっても、読んでいることがすべて理解できなくてもかまいません。要は、何度も読むことです。

2. 朝と晩、必ずお祈りをします。私は幼いころ、夜お祈りをするのを忘れてしまうことがありました。お祈りをしたくても、眠かったり、ほかの理由で忘れてしまうのです。少し大きくなってからは、いいことを思いつきました。

もし私があなただったら、どこか近くの空地に行き、握りこぶしぐらいの大きさの石を拾ってきます。そして、きれいに洗ってから枕の下におきます。夜ベッドに入り、頭を枕に休める時、「ガチン」ということにでもなったら、ベッドから出て、ひざまずいて祈ることを思い出すのではないのでしょうか。それがすんだら、石はベッドのそばの床において寝ます。朝は朝で、祈りを忘れてベッドから飛び下りると、石を踏んづけて「痛い！」ということになり、ひざまずいて朝の祈りをするようになることでしょう。良い習慣を身につけるためには、何かそれを思い出させてくれるものが時には必要なのです。

3. 今夜、伝道に出たいと思う気持ちを与えて下さるよう祈る決心をします。心からそういう気持ちになるまで、毎日祈ります。そして今からでも伝道資金を貯め始めます。今夜家に帰ったら、ふたのある空かんか空びんを捜します。そしてきれいにしてから、自分の部屋におきます。什分の一を納めてから、伝道のために少しずつ貯金を始めるのです。

ここで、非常に深刻な過ちを犯し、そのためにこれまでお話ししてきたこの特別な力を授かっていない人のために、一言つけ加えておきましょう。主は、私たち全員に偉大な約束をされました。こうおっしゃっています。「見よ、およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし。」(教義と聖約58:42)

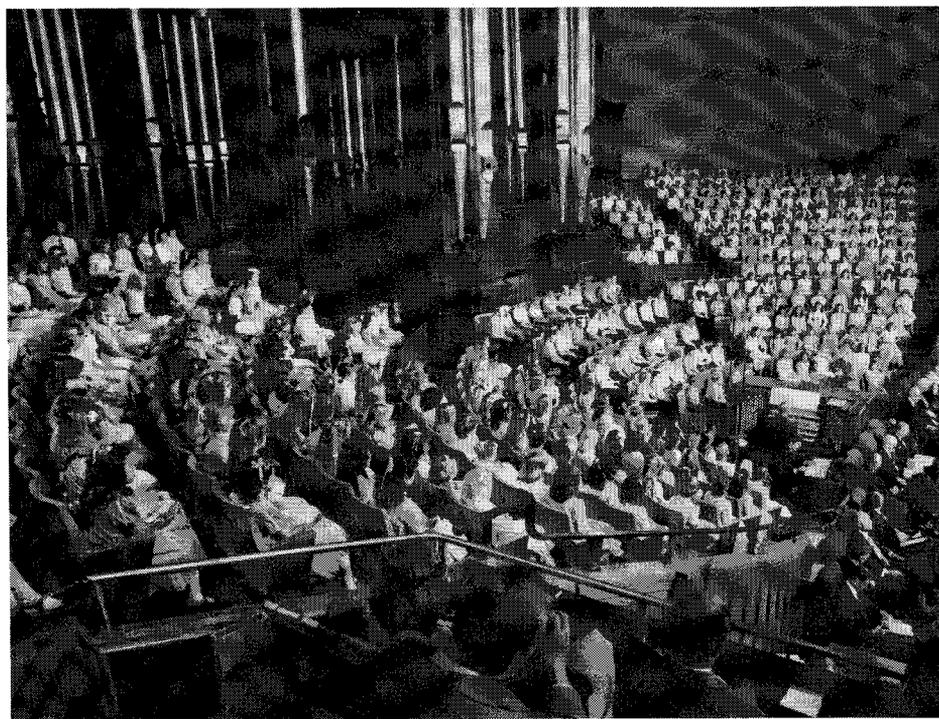
考えて下さい。もし私たちが次のことを行なったなら、主は私たちのした間違いを忘れて下さるのです。「人罪を悔い改めしや否やは、見よ、彼は自らこれを告白しその罪を捨つべければ、その悔い改めたことはこれによりて知るを得べし。」(教義と聖約58:43)

深刻な過ちを犯した場合、生活を正す第一歩はお父さんかお母さんに相談することです。もしそれができなかつたら、あすでも監督に会いに行ってください。監督と話した後で、簡単に祈れるようになったことにきっと驚くことでしょう。会って良かったと思うことは間違いありません。

今ここで話に耳を傾けている若い兄弟たちは、ひとり残らず主のみ手の中の器として、多くの神聖な神権の責任を、必要とあ

らば奇跡をも行なうことができます。私は皆さんを大いに愛しています。今夜ここで教えられたとおり、皆さんがもっと一生懸命がんばられるよう切望しています。最後に、私の経験を話して終わりたいと思います。

数年前、アリゾナ州のあるワード部で監督として働いていた時のことです。その時のティーンエージャーのグループには、ほとんどが正しいことを行なおうとする勇気を持った少年が集まっていました。親近感があり、つらい時にはお互いに助け合う風潮ができていました。ほとんどが近くの高校に入りました。数からしてみれば、総生徒数のほんの一部にすぎませんでした。ある時、彼らは学校で、教会の会員でない女の子と知り合いになりました。彼女の環境は普通ではありませんでした。と言うのも、



彼女は耳が聞こえないばかりか、心臓にも欠陥があったのです。相手の言っていることを理解するための唯一の手段は、くちびるの動きを見、それから意味を読み取ることでした。クラスでは、彼女は教師の言っていることが見えるようにいつも最前列に座りました。優秀な生徒ではありませんが、耳が聞こえず、遊ぶこともできないのですから、皆についていくことは大変なことでした。彼女は、参加者というより傍観者でした。それこそ、サイドラインから試合を見つめる傍観者だったのです。

さて、先程のティーンエージャーのグループですが、自分たちのサークルに彼女を招待したのです。彼女は親切に促されて次第に心を開き、彼女の両親の許可もあって、グループの中のひとりの家庭で宣教師からレッスンを受けるようになりました。こうして彼女は、自分とそう年齢の違わない、ふたりの19歳の長老から教えを受けました。聞くことすべてが気に入る、信じることができました。心に温かいものを感じ、やがてバプテスマの日取りが決められました。私たちも招待されました。白い衣をまとった彼女と宣教師のひとりが水の中に入りました。彼女の名前が呼ばれ、次のようにバプテスマが施されました。「われはイエス・キリストより権能を受ければ、天父と御子と聖霊との御名に由りて汝にバプテスマを施す、アーメン」(教義と聖約20:73)

次は確認です。何人かの神権者が輪になり、彼女の頭に手をおきました。当人には自分を確認する人のくちびるの動きが見えないことが、私にはわかっていました。与えられる祝福は、彼女には聞こえないのです。私は祝福の言葉に注意して耳を傾けました。後で私のオフィスに彼女を招き、内容を説明しようと思ったのです。

彼女を教会の会員として確認したのは、

19歳の長老の声でした。この長老は祝福を続けました。私には異例としか思えない約束を、この長老はし始めました。事実、彼の言葉に少なからず不安を感じたことは確かです。しかし、長老が祝福を続けて与えているのを聞いているうちに、静かで安らいだ靈感を感じるようになりました。少し後で、私は彼女の前に座って言いました。

「長老が与えてくれた祝福について教えてあげましょう。すばらしかったですよ。」

彼女はしばらく黙っていましたが、うるんだ目で、「監督、祝福が聞こえたんです」と言いました。

彼女はいやされたのです。耳が聞こえるようになったのです。福音や人生の祝福に、何の制限もなく携わることができるようになったのです。

この話から学ぶことはたくさんありますが、私はアロン神権者の皆さんにひとつのことを覚えてほしいと思います。それは、あの19歳の宣教師、神聖なメルケゼデク神権を持った長老のことです。彼は伝道のために自分を備えました。彼は、主のみ手の器としてふさわしい者、奇跡を行なう者となりました。そして彼女の頭に手をおいた時に、みたまを感じました。それは天からのメッセージで、彼を通して彼女への特別な祝福が与えられたのです。その祝福を伝える人として彼が選ばれたのです。

彼は耳を傾け、従い、神権の権威と権能によりその若い命が完全なものとなるように祝福しました。

願わくばあなた方若人が救い主との個人的なつながりを強めることができますように。主は生きておられ、あなたの名前を御存じです。あなたを親しく知っておいでです。アロン神権の業に働く皆さんに主の力と祝福がありますように。イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

「もし汝らに備えあらば 怖ることなからん」



十二使徒評議員会会員
L・トム・ペリー

世界を旅して回っていると、人々の間にある重苦しい空気に触れることが随分あります。人々の憂いは戦争や戦争のうわさ、飢饉から、麻薬中毒、異常気象、環境汚染、肥大化した行政組織に至るまで様々です。私は、主への信仰を持たないそのような人々がなぜ未来に対して悲観的になるのか、理由がわかります。確かに今は困難な時代です。しかし、困難な状況の原因について考えると、それらが人為的なものであり、したがって人間の力で解決できるものであることもわかります。

主は次のような約束をして、私たちに励ましを与えておられます。「もし汝らに備えあらば怖ることなからん。」(教義と聖約38:30) イエス・キリストの福音は希望と明るい見通しを与えてくれます。私たちは幸せを手にするために、努力し、恐れを取り除こうとしています。主がその子供たちのためにこの地上で定められた方式と秩序に従うためには、備えがなければなりません。

教会の指導者たちは、創設以来、適切な方法で私たちを教え、訓練してきました。

私の考えでは教会の歴史の中で最も困難と思える頃のことですが、主は、予言者ジョセフ・スミスがリパティエの牢獄に不当な理由で拘禁されていたその時を選んで、彼に神権に関する啓示を与えられました。救いを求める予言者の叫びに、主はこう答えられました。

「流水いつまでか濁りてあらん。如何なる力かよく諸天の運行を止めんや。何人かよくかよわき腕をさし伸べて、神の命じたまえる水路を流るるミズーリの流を止め、またはこれを逆流せしむることを得んや。もし、よくこれを為し得れば全能の神が末日聖徒の頭上にいと高き所より知識を注ぎたもうを止むることを得ん。

見よ、召さるる者は多けれども選ばるる者は少し。選ばるることなきは、これそもそも何の故ぞ。

そは、人々の心甚しくこの世に属けるものの上であり、唯々人間の誉を得ることをのみ望み、次の如き一つの戒めを知らざるによる。

曰く、神権の権能は天の能力と固く結びつきて離るべからざるものにして、天の能力は正義の原則によりてのみ支配し運用し得るものなり、と。」(教義と聖約 121:33—36)

人の成長、完成への歩みが、その人の神権を行使する能力に左右されるとしたら、確かに私たちは、より完全にその権能を行使し、自分自身を備えるように、絶えず努力しなければなりません。

教会の各地のステーキ部を訪問してみると、ステーキ部やワード部のレベルでは神権組織が非常に良くその役割を果たしているのがわかります。大まかな言い方をすると、最大の弱点はアロン神権、メルケゼク神権のふたつの定員会の中にあります。神権の鎖の中の、この重要な輪に対して責

任を持つ方々に、指針となる言葉を幾つかお話したいと思います。

スティーブン・L・リチャーズ副管長が神権定員会を3つの面から定義したことがあります。彼の言う神権定員会の3つの面とは、「まず第1は、学びの場。第2は兄弟愛の場。そして奉仕の場」です。(Conference Report「大会報告」1938年10月, p. 118) この定義を私たちの定員会に当てはめながら考えてみましょう。

第1の学びの場としての定員会についてですが、教義と聖約には次のように書かれています。

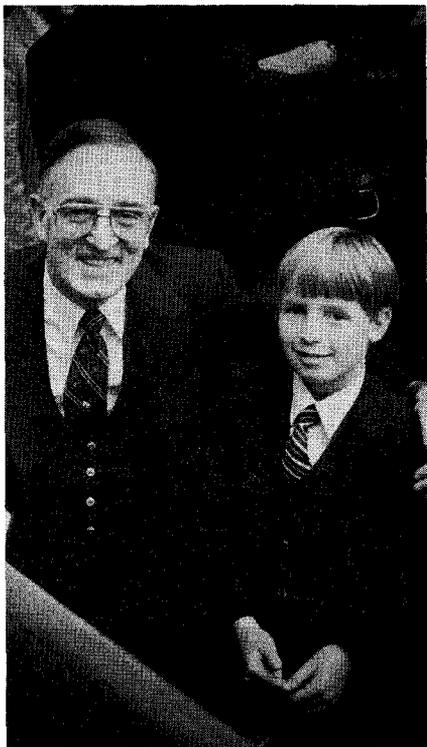
「そは、必ずしもすべての人信仰なきが故に、汝ら努めて求め、互いに智恵ある言葉を教うべし。然り、汝ら最も善き書より

知恵ある言葉を探し求めよ。また正に研究と信仰とによりて学問を求むべし。」(教義と聖約88: 118)

定員会の集会には、主の律法を教えるという目的があります。その時忘れてならないのは、神権者としての義務について教えることです。宇宙の不思議について推論を披瀝し合う場ではありません。原則の応用の仕方を教える、実際の役に立つ、大切な時間なのです。レッスンでは、良き夫、父親、定員会会員になるにはどうしたらよいかということ、また、同胞に対する責任について教えるなければなりません。

この夏、私は南ワイオミングの小さな町で、ある大祭司グループの集会に出席しました。その時のレッスンのテーマは義認と聖別でした。教師がよく準備してレッスンに臨んでいることは、すぐにわかりました。ところが、ひとつの質問に対する答えが元になって、レッスンの流れがまったく違ったものとなりました。ひとりの兄弟がこう言ったのです。「レッスンを聞いていて、大分考えさせられるところがありました。ひとつ思ったことがあります。それは、折角学んだ知識も、毎日の生活に役立てる方法がわからなければ、すぐにどこかに消えてしまうということです。」

そして、彼は定員会の活動としてひとつの提案をしました。実はその前日の夜、町に住むひとりの人が亡くなりました。その人自身は教会員ではありませんでしたが、奥さんがこの教会の会員でした。そしてこの大祭司は夫に先立たれた婦人を尋ね、悔やみの言葉を述べてきました。その帰り道、彼の目に留まったのは、亡くなった兄弟が残した見事な畑でした。故人が人生のすべてをかけて築き上げたものです。アルファルファも小麦も刈り入れを待つばかりでした。突然襲ってきた不幸に対して、この姉



妹に一体何ができるのでしょうか。今までに経験したことのない責任に対して、心の準備をする時間などまったくなかったからです。

彼がグループの人々にした提案は、学んだ原則を実践し、その未亡人と子供たちが将来の生活設計についてきちんとした答えが出せるようになるまで、彼らの畑仕事を手伝っていこうというものでした。その集会の残りの時間は、彼女を援助するための計画について話し合いました。レッスンで学んだ原則が即実行に移されたのです。

レッスンが終わって部屋を出る時、兄弟たちの中には温かな気持ちが通い合っていました。ひとりの兄弟が戸口の所でこう言うのが耳に入りました。「この計画こそ、定員会の活動をもう一度まとまりのあるものにするために、私たちが求めていたものですよ。」ひとつのレッスンを通して、兄弟愛が深まり、助けを必要としているひとりの人のために奉仕計画が立てられたのです。

兄弟の皆さん、定員会を神の聖なる神権をいただく者としての義務、責任について、導きを与えてくれる最上の教えを学ぶ場でしょうではありませんか。

第2は、兄弟愛の場としての定員会です。もう何年も前の話ですが、私はある祭司定員会のアドバイザーに召されました。それは教会が優秀定員会表彰プログラムを始めた頃のことでした。このプログラムはすべての定員会が会員一人一人に関心を向けるように奨励するために設けられ、個人ではなく、定員会としての業績を表彰するものでした。

私が担当した定員会は元気一杯の献身的な若者で構成されていました。ひとりを除いて、彼らは皆定員会の責任をほぼ100パーセント果たしていました。そのひとりとは父親を前の年に亡くしたビルという少年

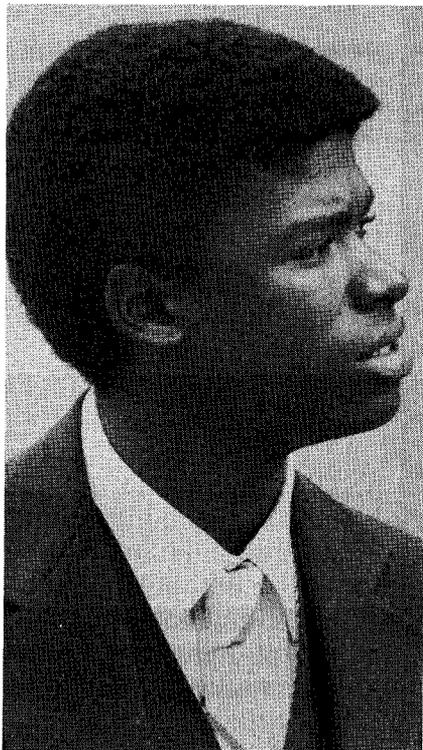
で、彼は人生の大きな痛手にどう応じていったらよいかわからず、苦しい日々を送っていました。彼の母親はビルが自分自身を取り戻すことができるように、ありとあらゆることをして助けましたが、彼は集会から足を遠ざけ、悪い習慣に身を染め始めました。

ビルが姿を見せなかったある集会の後で、ひとりの定員会会員に、ビルと連絡を取り、定員会の集会に出席するように励ますという責任が与えられました。その定員会会員は母親としか会えませんでした。話によると、ビルは土曜の夜遅くなるまで家に帰って来ず、日曜日は朝になっても目を覚まさないということでした。2週間経ってもビルは定員会の集会に来ませんでした。そしてもう一度彼に連絡を取ろうとしましたが、結果は同じでした。

そして3週目の集会、ビルはやはり来ませんでした。会員たちは顔を見せないビルのことをとても心配していました。彼らにとってビルを抜きにしては、完全な定員会はあり得ず、それ以上集会を持つことも考えられませんでした。私は幾つか提案を出してもらいました。答えは早く決まりました。皆で彼の家を尋ね、そこで集会を開こうというのです。

私たちは自動車でビルの家へ行きました。母親がとても協力的で、私たちをビルの寝室に案内してくれました。ビルはぐっすり寝込んでいました。私たちは元気よく開会の讃美歌を歌って会を始めました。その第一声でビルは、まるで鉄砲で撃たれたかのような驚きようで起き上がり、一体何かと部屋を見回しました。

その後の出来事は私の人生の中でも、本当に素晴らしい体験でした。定員会の一人一人がビルに自分の愛を伝え、その後で皆がベッドの周りにひざまずいて祈りを捧げ



ました。祈りを終えて立ち上がったビルの頬には涙が伝っていました。私たちは握手をして彼の家を出ました。定員会がまた完全な姿を取り戻しました。ビルは定員会会員の愛を知らされ、自分もその群れの中に入りたと思ったのです。

十二使徒評議員会会員を務めたラジャー・クラウソン長老がこのように言ったことがあります。「地上の神の神権者は会員相互の利益と、教会の前進とのために、定員会に組織されています。定員会がレッスンを学ぶだけの場であったとしたら、その目的のほんの一部しか達成されていないことになります。……兄弟愛の精神が定員会のすべての計画、活動を推し進める力とならなければなりません。この精神が賢明な方法

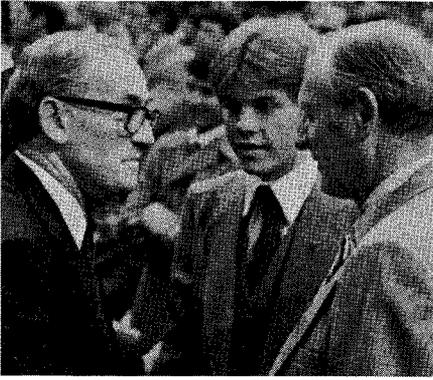
で、絶えず養われているなら、どのような組織もこれに勝って神権者の心を引きつけることはなくなるでしょう。」定員会一人一人の会員と兄弟愛の絆を築こうではありませんか。

第3は、奉仕組織としての定員会です。「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」(ルカ22:32) 御父の天の王国の会員の義務は、神の子供たちに対する奉仕の業です。

ジョセフ・F・スミス大管長がまだ子供の頃の話です。ある時彼は、おじに当たる予言者ジョセフ・スミスがマンションハウスで開いたパーティーに出ていました。そこには大勢の人々がいて、楽しい時を過ごしていました。突然ドアが開き、ぼろぼろのひどい身なりをしたひとりの男が入ってきました。汚れた風体のその人は、何の手入れもしていない髪とひげを長く伸ばし、まるでこじきのような有様でした。その時予言者は、この人が入って来たドアの真向かいにいました。ジョセフは立派な体格をした人でしたが、飛ぶようにして部屋の中を進み、みすばらしい姿のその人に両腕をかけたかと思うと、大切な身内にもするのように、彼を抱きしめました。その男の人は同じ神権の絆で結ばれた兄弟でした。彼はそれまで苦しい目に遭いながら、兄弟である神の予言者のために、口では言えないほどの犠牲を払ってきたのです。(スティーブン・L・リチャーズ『神権定員会の3つの定義』*Improvement Era*「インブループメント・エラ」1939年5月号, p. 294) 教会の歴史を見ると、定員会の兄弟に大きな愛と理解をもって仕えた人々の記録がたくさんあります。

スティーブン・L・リチャーズ副管長の言葉を読んでみましょう。

「神権の簡潔な定義として『人に託され



た神の権能』ということがよく言われますが、私もこの定義は的を得たものだと思います。しかし、実際の面から、奉仕という観点に立って神権を定義したいと思いません。私がよく口にするのですが、それは『完全な奉仕計画』という定義です。なぜそう呼ぶかという、この賜の本当の意味と力を知りたいという気持ちは、授けられたこの神聖な権能を実際に使うことによってしか湧いてこないからです。神権は奉仕のための道具です。その用い方と目的とは奉仕という観点からすべて明らかにされており、神権を用いることを怠る人は、ややもするとそれを失う場合が多くあります。啓示を通して、怠惰な者は『その地位に居るに値せず』（教義と聖約107：100）とはつきり言われています。」

リチャーズ長老はこう続けています。

「神権は決して静的なものではありません。授けられさえすれば、後は何もしなくてもよいというものではありません。しかし、人によっては、そのように考え、それを受けたことに慢心し、満足し切っている場合があります。そのような人が偉大な永遠の裁き主のみ前に行って、『私は地上で大祭司の職にありました。今ここに来たのは、大祭司としての報いを頂くためです』

と言う姿が目につかぶようです。それに対してどのような答えが与えられるかを考えるのは難しいことではありません。きっと、このように問い返されるのではないのでしょうか。『あなたは大祭司として何をしましたか。授けられたこの偉大な権能をどのように用いましたか。この権能をもってだれに祝福を与えましたか。』このような質問に対してどう答えるかによって、報いが決められるのです。』（*Conference Report* 「大会報告」1937年4月、pp. 46—47）

兄弟の皆さん、どのように奉仕すべきかを、定員会の会員に教えようではありませんか。

私は、将来への不安から自分自身を解放するために、私たちにできる最も大切な備えは、地下室に積んだ1年分の貯蔵物や預金、金庫にしまった株券、債券ではないと思います。それらのことも家族を守るためには大切なことですが、真の心の安らぎは、神権組織を理解し、神権の原則を賢い方法で応用する時に見いだせるものではないのでしょうか。神権組織の土台となるのは、正しく組織、訓練され、機能を果たす神権定員会です。

それぞれのワード部、ステーキ部に帰り、神権定員会という組織の中で、自分はどれほどの備えを受けているか再評価してみてください。神権の義務について兄弟たちを訓練する学びの場としての機能を果たしているのでしょうか。会員一人一人に祝福をもたらす兄弟愛の場として、その役割を果たしているのでしょうか。自分たちが属する家族、教会、地域社会に奉仕しているのでしょうか。

今宵皆さんが、向こう何か月間かの最優先順位を神権定員会の強化に置き、固い決意の下に奮起されるように望むものです。へりくだり、イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン。

若人への 4つの提言



副管長
ゴードン・B・ヒンクレー

話の責任を受けましたので、これからお話ししたいと思います。神権会は素晴らしい集会です。きょうこの会で聞いたことを、私たちがずっと心にとどめておくことができればと願っています。

人が先のことを考えないために陥る問題について考える時、私はだいたい前の新聞の切り抜きを思い出します。その新聞は、イギリスで最初に発行された新聞です。少し冗談になりますが、お許し下さい。私が申し上げたいことの背景として紹介します。

あるイギリスの会社が西インド諸島に資産を持っていました。ところが、激しい嵐のために建物のひとつが壊れたので、それを修理するためにひとりの男が送られました。この人は、その時の経験をこう書いています。

「被害にあったという建物に行ってみると、ハリケーンのために屋根のれんがが数カ所飛ばされていました。そこで私は屋根の上に滑車を取り付け、それを使って数回、たるに一杯につめたれんがを屋根に上げました。こうして修理し終わりましたが、れんががたくさん残りました。

そこで私はロープを引っ張ってたるを屋根まで上げ、それから屋根にのぼって余ったれんがをたるに入れました。そしてまた下に降り、固定してあったロープをはずしました。

ところが運悪く、れんがを入れたたるは私よりも重かったため、私はあっと言う間に空中につり上げられてしまいました。私はそのままロープにつかまっていたのですが、途中で、落下してくるたるに肩を直撃されました。

そして上まで来ると、滑車の取り付け台で激しく頭を打ち、滑車に指をはさまれました。またたるが地面に落ちたので、底が割れて、れんがが皆こぼれました。

次の瞬間、たるよりも重い私は、今度は急激な勢いで落ち始めました。途中でたるとすれ違う時に向こうずねに大けがをし、下に落ちたら落ちたで、こぼれたれんがの角であちこちを切ってしまいました。

この時、私はもう気が動転していたので、ロープを放してしまいました。するとたるが落ちてきて、頭に当たり、私は病院にかつぎ込まれました。

私は病氣療養休暇を要求します。」

この話を聞いて、皆さんは、人はそんなに愚かで先の見えない状態になれるものかと思うでしょう。しかし人々の生活を見るにつけ、計画し、考え、他の人の意見を聞き、福音の教えに従うことをしないために障害にぶつかり、傷を負っている人がいるのに気づきます。私は、今夜アロン神権の若人に向けて話された事柄に感謝しています。きょう集まって下さった方々の中には、洋々とした未来が待ちかまえている若人の皆さんがいます。そこで私は、皆さんが先に話した状態に陥らないために話したいと思います。

私は若人に4つの提言をしたいと思いま

す。それは、(1)頭を使いなさい、(2)公平でありなさい、(3)清くありなさい、(4)誠実でありなさい、ということです。

1. 頭を使いなさい。

頭を使うと言っても、ずるがしこくなるということではありません。賢明になりなさいという意味です。未来のために賢明に心と手を鍛えて下さい。皆さんはひとり残らず末日聖徒イエス・キリスト教会の会員です。そして、神の息子です。皆さんには人生を最高のものにする責任があります。どのような教育を受けるか今計画して下さい。そして、その計画が実現するように努力するのです。

皆さんは混迷の時代に生きています。社会は、能力のある訓練された人を求めています。教育を途中でやめないで下さい。

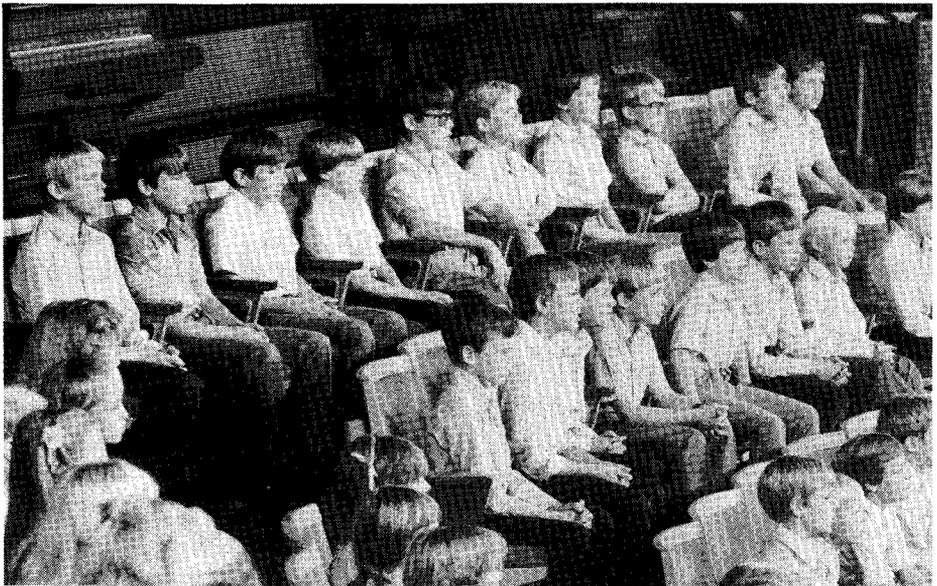
だからと言って、すべての人がプロにならなければならないとは言いません。何を選ぼうとも、選んだものに磨きをかけてほしいのです。そして資格を得て下さい。ま

たどの分野であれ、経験や知識のある人から学んで下さい。教育は専門家への近道です。教育を受けることにより、皆さんは過去の誤りを繰り返さずにすみます。どのような職業を選んでも、教育を受けることによってそこに到達する道は早まるのです。

主は私たちにこう言っておられます。「汝ら最も善き書より智恵ある言葉を探し求めよ。また正に研究と信仰とによりて学問を求むべし。」(教義と聖約88:118)

教会は長年にわたって、一般教育、宗教教育に限らず、教育に多額のお金をつぎこんできました。またこの業が始まった時から、指導者は教育を受けることの大切さを説いています。

賢明であって下さい。その時だけの楽しみのために、未来に光を与える教育を放棄することがないようにして下さい。長い目で人生を見ましよう。皆さんのほとんどは、これから先長い間この地上にいるのですから。皆さんの身だしなみ、態度、ふるまいに



頭を使って下さい。ファッション雑誌から抜け出したような格好をしなさいと言うのではありません。身だしなみを整え、言葉づかいをていねいにし、礼儀正しい行ないをしてほしいということです。皆さんはモルモンです。意識するしないにかかわらず、皆さんの行動により教会は良くも悪くも言われます。

頭を使って下さい。アルコールやタバコ、麻薬にふけるような近視眼的なことはさげましょう。頭のいい人のすることではありません。こうした勧告に耳を傾けずに、コカインやマリファナなどの麻薬を使用すれば、心のコントロールが失われてしまいます。薬によって一時的に気持ちは高まっても、その副作用はひどいものです。害にしかないものになぜお金を使うのですか。なぜあなたの将来をだめにしてしまう習慣のとりこになるのですか。

ビールなどのアルコールは何の益にもなりません。お金はかかるし、良心は鈍り、アルコール中毒になることもあります。アルコール中毒は屈辱的で危険であり、死に至ることさえあります。タバコも命を縮めます。研究によれば、タバコは習慣になり、肺を弱め、統計的に見れば1本吸うごとに寿命を7分縮めることとなります。

頭を使って下さい。主の言葉に聞きしたがいきましょう。主は、主の言葉にしたがう聖徒にすばらしい約束を与えて下さいます。「また智恵と知識の大いなる宝まことに秘れたる宝を見出さん。而して走れども疲れず、歩けども気を失うことなからん。」(教義と聖約89：19-20)

若人の皆さん、皆さんは走れども疲れず、歩けども気を失うことのない体を持ち、知識と理解力を増したいと思いませんか。もしそうであれば、皆さんの自由を奪い、健康を損い、心をくもらせ、命を縮めること

をやめようではありませんか。

2. 公平でありなさい。

私たちは、末日聖徒が大部分をしめる高校で、教会員でない生徒が自分たちは差別されていると不平を言うのを耳にしています。皆さんのほとんど、いやすべての人は伝道に出るでしょう。そして友情や仲間の大切さを知るようになるでしょう。こうした原則を実践し、感謝と思いやりの心をもって他の人々に接するのは今です。高校時代に、クラスメートの友情を通じて教会員になる人はたくさんいます。私は、私の声の届く範囲にいるすべての若い兄弟たちが、教会やその民に反対している仲間を偏見の目で見ないように願っています。

ここでつけ加えたいのですが、私は、そういった差別を受けているという訴えには根拠がないと思っています。しかし真実であろうとなかろうと、私たちは教会員でない人々に積極的に接し、彼らを勇気づけ、思いやりと親切により彼らが教会のすばらしいプログラムに参加できるようにしようではありませんか。

エドウィン・マーカムの詩にこうあります。

「彼は壁を作って私をしめだした、
敵意、反感という壁を。

しかし私には愛がある、

愛という壁を作って彼を入れるのだ。」

(*The Best Loved Poems of the American People* 「アメリカ人の好きな詩」 p. 67)

このように言うと、モルモンの兄弟はモルモンでない姉妹(あるいはその反対)とデートするように言っていると取られるかもしれませんが、そうではありません。教会に忠実で活発な相手とデートをすれば、幸福で永遠に続く結婚にいたる可能性が大きいということなのです。そして、そうした結婚はたいい主の宮で行なわれます。

私が言っているのは、ふるまい方、つまり人を見くびり、中傷するあらゆる態度のことなのです。

スポーツ競技では、やじを飛ばしたりすることはやめましょう。もちろんアンパイヤやレフェリーは間違いをします。また選手もルール違反をすることがあります。しかし、どんなにやじを飛ばしてもスコアは変わりません。

公平でありなさい。皆さんはこれから人生を歩んで行くわけですが、大学に入って勉強やその他のことをする時、人から疑いをかけられるような不公平な行動は取らないで下さい。競争は正々堂々と行なうべきです。不道德で、不正直で、不公平な行ないは、特に末日聖徒には無縁のものでなければなりません。

公平でありなさい。公平さという標準についての最良のルールは、主から与えられたこの言葉です。「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。」(マタイ7:12)

3. 清くありなさい。

主は「潔くあれ」と言われました。(教義と聖約38:42) 私は特に道徳的な清さについて話したいと思います。個人の徳という点で、天が下において純潔に代わるものはありません。

今の時代、世の中の人々は純潔を軽く見えています。しかし教会の若人である皆さんはそうであってはなりません。末日聖徒にとって純潔を失うことは、自尊心や相手に対する尊敬の心を失い、心や体をコントロールする力を失い、神権者としての高潔さを失うことになるのです。もちろん悔い改めも赦しもあります。しかし同時に、胸の痛みや嘆き、失意を経験することでしょう。そして、教会での将来の奉仕の機会にも暗い影をおとすこととなります。



私は固苦しくなれとは言いません。徳高くあれと言っているのです。固苦しいことと徳高いことは大違いです。

清くあって下さい。あなたの読んでいる本をチェックしてみましょう。ポルノグラフィの類のものは百害あって一利なしです。そうしたものは、皆さんの心の中で自制心を弱めるような思いを作り出すだけです。またあなたから金を取り、その代わりに下劣な欲望を与えることだけを目的にした映画からは、何も良いものは得られません。

4. 誠実でありなさい。

皆さんは高貴な血統の生まれです。今はそのことがわからないかもしれませんが。つまり、皆さんの背後には、驚くべき勇敢な行ないをした人がいるということです。彼らはたくさんのむずかしい決定をし、多くの場合、そうした決定のために高価な代価を払いました。中には、真理を捨てるくらいならと、命を犠牲にした人もいました。

1897年、ウイルフォード・ウッドラフ大管長が90歳の時、たくさんの子供と若人がこのタバナクルに集いました。この時、数々の悲しみや苦労を経験し、また同時に主の偉大な業を愛するこの老人は、皆の前に立ち、考えぬかれた言葉で次のように話しました。

「私は皆さんと共に長くこの世に生きることはないでしょう。そこで皆さんに少しお話したい。皆さんは神の王国であるこの教会で地位を得、神権の力を受けています。天の神は皆さんを指名し、今日この時代に召されました。このことをよく考えて下さい。若人の皆さん、幹部の声に耳を傾けて下さい。神に近くあり、若いころからよく祈り、神のみたまを求めることを学んで下さい。これを行なうならば、皆さんは努力に応じて啓示のみたまを受けられるでしょう。」

(Wilford Woodruff: *History of His Life and Labors* 「ウィルフォード・ウッドラフの生涯と業績」 pp. 602—603)

ここで3人の18歳の若者について話したいと思います。1856年、1,000人以上の人々が大変な苦勞をして大平原を渡っていました。その中には皆さんの先祖もいたかもしれませんが。彼らは不運なことが続いて出発が遅れてしまったのです。そのためワイオミングの山地で雪と寒さに襲われてしまいました。そして、毎日のようにだれかが死んでいきました。

ヤング大管長は、10月の大会が始まるうとしていた時にその状態を知りました。ヤング大管長はただちに牛や荷車、御者を召し、その聖徒たちを救出するように命じました。こうして最初の救援隊がマーチン隊を発見したのですが、負傷した人々を運べるだけの数の荷車がありませんでした。しかし移動しないことにはどうしようもありません。

11月3日にスウィートウォーター川に着いた時、ごこえるように冷たい川には、氷のかけらが浮かんでいました。今までの旅のことや衰弱している人がいることを考えると、川を渡るのは無理だと思えました。凍りつくような川に足を入れることは、死に行くようなものだったからです。かつ

ては屈強でならした男たちも、凍った地にすわりこんで泣きました。女や子供たちも泣きました。多くの人がこの試練に立ち向かえなかったのです。記録にはこのようになります。

「救援隊の3人の18歳の少年が進み出て、驚いたことに、遭難した手車隊のほとんど全員を背負って、氷の流れる川を渡った。水温から来る痛みは激しく、後に3人ともその時のことがもとで命を失った。この英雄的な行為について耳にしたブリガム・ヤング大管長は、子供のように泣き、後にこう皆に宣言した。『この行為により、C・アレン・ハンチントン、ジョージ・W・グラント、デビッド・B・キンボールは、神の日の光栄の王国で永遠の救いを得るであろう。』」(ソロモン・F・キンボール、*Improvement Era* 「インブループメント・エラ」1914年2月号、p. 288)

この少年たちが皆18歳であったことに注意して下さい。彼らはアロン神権者でした。彼らの行為は偉大であり、自分の健康を、そして後には命までも犠牲にして、彼らは人々の命を救ったのです。

皆さんはそうしたアロン神権者たちの遺産を受け継いでいます。兄弟たち、この遺産に対して誠実であって下さい。

われら受けし 信仰持ち
殉教者の持つ 真理を信じ
いましめ守らん 手に心に 霊にも
(「シオンの若者真理を守り」
讃美歌150番)

以上が私の若い兄弟たちへの4つの提言、つまり頭を使いなさい、公平でありなさい、清くありなさい、誠実でありなさい、です。主は皆さんに神権を授けられました。皆さんがこのすばらしい特権にふさわしく生活するよう、イエス・キリストのみ名によりへりくだり祈ります。アーメン。

自由という 完全な律法



第二副管長
マリオン・G・ロムニー

これから「自由という完全な律法」について話を進めて行きたいと思います。

若い頃、私はパトリック・ヘンリーの有名な「自由を与えよ、さもなくば死を」という言葉にいたく心を動かされました。

しかしこの自由という言葉は、なかなかうまく定義できません。アブラハム・リンカーンはこう言っています。「この言葉にはふさわしい定義がなかった。私たちは皆自由を主張するが、その言葉が同じ意味で使われているとは限らない。自分自身と自分の所有物を勝手気ままに扱うのが自由だと考えている者もいれば、他人や他人のものまで思うままにするのが自由だと考えている者もいる。」

リンカーンはこうも言っています。「狼を追い払う羊飼いは、羊からは命の恩人として感謝されるが、狼からは恨まれるだけである。」(1864年4月18日の演説、ジョン・バートレット、*Familiar Quotation*より)

リンカーンの頃に比べ、時代は変わりましたが、自由という言葉がいろいろな意味で使われていることに変わりはありません。一般によく言われる自由は次の3つに分類

できるようです。(1)政治的な自由、(2)経済的な自由、それに(3)自由意志です。

これらすべてを含んだ、いやそれ以上の自由を得ることができるようになりたいものです。私の言うそのような自由とは、これら3つの自由が目指す真の心の自由です。言いかえれば、予言者ジョセフ・スミスが「絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くな(らん)」(教義と聖約121:45)と述べて予示している祝福された状態のことです。このような状態に達し得た人こそ、イエスの言われた「ほんとうに自由な者」(ヨハネ8:36)と言えます。そこには完全な自由があります。

政治的、経済的な自由や個々の自由意志は、真の心の自由の一因とはなりますが、それを保証するものではありません。2、3の例を挙げて説明しましょう。

まずはじめに、政治的な自由と力についてですが、この最たる例が、アレキサンダー大王の偉業でしょう。何者も恐れない勇氣とあふれんばかりの活力、豊かな想像力に恵まれた彼は、32歳の若さで当時知られていた世界の王者になりました。しかし、彼は本当の自由を知りませんでした。自分自身を治めることができなかったからです。そして33歳の年に、自身の不節制にたたられ、真の自由をまったく知らぬまま、この世を去ったのでした。

英国の政治家であるウルジー枢機卿は、真の自由を得る上で政治的な自由や権力がいかにひ弱なものであるか、悲しくも自覚しました。御存じかと思いますが、彼は英国の王たちに仕え、政治的な権勢と自由を欲しいままにしました。しかし最後には、気の短い国王にすべてを取り上げられてしまったのです。人生に敗れ、幻滅感の中にたたずむ彼は、部下にこう嘆いています。



「それにしても、なあ、クロムウェル、おれが陛下に仕えたせめて半分の熱意で神に仕えていたら、こんな年になって、素っ裸で敵の中に放り出されることはなかつただろう。」（「ヘンリー八世」第三幕第二場、中野里皓史訳）

数年前、ある雑誌に『今世紀、巨万の富を築いた人たち』という記事が載っていました。その記事によると、彼らの中にはこのような富を築いたものの、破産して恥辱の内に死んで行った人や自殺した人、投獄された人がいるということです。彼らは束の間でしたが経済的な自由を得ていました。しかし、経済的な自由から真の自由を得た人はひとりもいなかったのです。

政治的あるいは経済的な自由だけで完全な自由が得られるという説はあまり聞きませんが、「自由意志」という言葉を「真の心の自由」の同義語として使う話をよく耳にします。確かに、神からいただいた思いのままに選択する権利は、真の自由に欠くことのできないものです。それなしには、政治的であれ、経済的であれ、個人的なものであれ、いかなる自由も享受することはできません。自由意志は私たちが受け継いで

いる最大の賜のひとつです。そのことを私たちは、天の御父に心から感謝しています。エデンの園で、神は人にこの自由意志をお与えになりました。（モーセ7：32参照）

自由意志は確かに貴いものですが、それ自体が私たちの求める完全な自由でも、また必ずしも完全な自由をもたらすものでもありません。事実、自由意志を行使したのために、政治的、経済的あるいは個人的な自由よりも、かえって束縛を受けるようになった人の方が多いくらいです。

例えば、ニーファイ人もある時、自分たちの自由意志を使うことによって、政治的束縛を受けるはめに陥ってしまいました。しかもそれは、最も自由を尊重する政府のもとで起こったことなのです。記録によれば、「ニーファイ人の国法と政治とはみな人民の投票できめられたが、そのころ悪につく人の数が善につく人の数よりも多かったから、国法が乱れて腐敗し国民が亡びようとしていた。」したがってニーファイ人は「国法もしくは正義の道をそのまま執行すると亡びるほかにはなかつた。」（ヒラマン5：2—3）このような状況の下で、ニーファイ人は政治的自由を奪い去るよこしまな統

治者を選び出してしまいました。そしてこの統治者たちが、常に自由を擁護しようと努めてきた義人に代わってその地位に就いたのです。

ジェレドの民は彼らの自由意志によって王を選んだがために、捕虜の身となってしまいました。(イテル6：21—30；7：1—5参照)

このようなことは、イスラエルの歴史の中で繰り返し起こっています。イスラエルの民は、神の定められたさばきづかさによる統治を拒み、王を与えよとサムエルに訴えました。サムエルは、国王を立てれば、イスラエルの子孫は捕虜となり、重税と夫役を負わされ、戦いに送り出されるだろうと警告しました。「ところが民はサムエルの声に聞き従うことを拒んで言った、『いいえ、われわれを治める王がなければならぬ。われわれも他の国々のようになり……』」(サムエル上8：19—20)

そこでサムエルはサウルの頭に油を注いで王にしました。そのうちに、サムエルが予言したように、イスラエルの民は重い負担に苦しみ、息子や娘は王の奴隷となり、戦争が始まりました。国はイスラエルとユダのふたつの王国に分裂し、やがて両国の民はそれぞれ他国の捕虜になって連れ去られました。彼らは政治的な自由を失うどころか、国家として存続することすらもできなくなってしまったのです。

創世記には、自由意志を誤って使ったために経済的な自由を失ってしまった典型的な例が記されています。エジプト人は緊急時の備えを自分から進んでしようとせずに、政府に任せきっていました。その結果、飢饉がやってきた時、政府から食糧を買わなくてはなりません。初めのうちはお金がありましたが、それが無くなると、家畜や土地を売り、あげくのはては自らを奴

隷の身に落として、食いつないでいったのです。(創世41：54—56；47：13—26参照)

私たちがこの1世紀の間、彼らと同じ道をたどってきました。皆さんに勧告します。働くことを勧めずに、政府の援助に頼らせようとする教えには、十分気をつけて下さい。アレキサンダー・ポープはその著作の中で、金持ちの給仕をしていた小作人の不平を次のように表わしています。

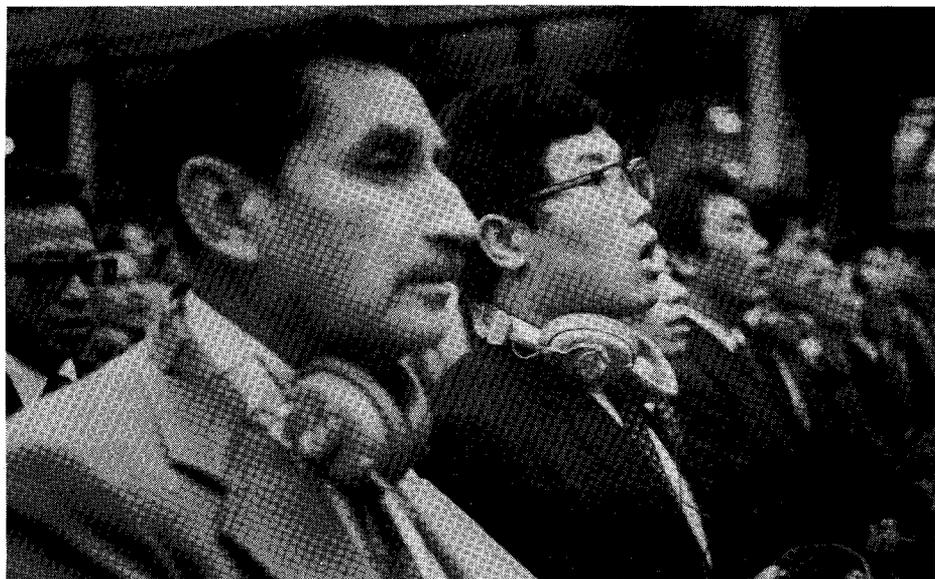
「お願いでございます、御主人様。

このようなデザートでは、ございません。どうか、私の粗末なほったて小屋と、パンのくずと、それに自由とを、お返し下さい。」(“The Sixth Satire of the Second Book of Horace”)

自由意志を正しく使わなかったために個人の自由を失った人の悲劇的な出来事は、日常生活の至る所に見られます。酒を飲まずにいられないアルコール中毒者、錯乱状態の麻薬中毒者、さらにひどい例としては、性転換を受けた男性、このような人たちが自由を得ていると言えるでしょう。

自由意志を誤って用いれば、政治的、経済的、個人的な自由が失われますが、自由意志それ自体は、永遠の原則ですから、なくなることはありません。しかし、自由意志はその使い方によって、適用できる範囲が広がったり狭まったりします。間違った決心をすればその度に、自由意志を使える範囲は狭まります。しかもそういった自由意志の使い方をすればするほど、失った自由を取りもどすのが難しくなるのです。そしてあるところまでくると、もはや元の状態には戻れなくなり、惨めな奴隷となるだけです。自由意志を使うことによって、しだいに自分の行動範囲が狭まり、ついには自由意志のない身動きできない状態に追い込まれてしまうのです。

このような人々に向かって、レーマン人



の予言者サムエルは言いました。

「あなたたちが貧に苦しむ時……主に歎願をするであろうが、その時がまだ来ない中に破壊がすでにやってきてあなたたちの滅亡がきまってしまうから、歎願をしてもむだである。……その日あなたたちは烈しく泣き叫び悲しみに暮れて言う。……

『ああ、私たちは主の御言葉が伝わってきた日に悔い改めたらよかったものを。……私たちは悪鬼にかこまれ、私たちの身も霊も亡ぼそうとしている悪魔の使たちに取り巻かれている。……主よ、私たちから汝の怒りを取り去ることを叶えたまえ。』とはその日にあなたたちの言う言葉であろう。

しかし、その時がまだこない中にあなたたちの試しの時はすでに過ぎ去って、あなたたちが自分の救いを受ける日はぐずぐずしている間に永久になくなってしまい、あなたたちの亡びはきまってしまう。」(ヒラマン13：31—32, 36—38)

この哀れな人々は、サタンとそれに従う

者どもに支配され、皆さんもよく知っているように、「滅亡の子」となるのです。(教義と聖約76：26参照) 彼らは最終的に外の暗闇に投げ出されますが、このような罰は、彼ら自身が自由意志を使って行なった選びの当然の報いなのです。はじめに創造主から自由意志を授けられたという事実も、最も恐ろしい罪の縄目から彼らを救うことはできません。

誤った選択をすると、自由意志の適用範囲が制限されて奴隷への道を歩むこととなりますが、その逆に正しい選択をすれば、自由意志は一層拡大されて完全な自由へと導かれることとなります。事実、その過程において政治的、経済的、個人的な自由を失ったとしても、真の心の自由を得ることができるのです。

例えば、ジョセフ・スミスについて考えてみてください。彼は自由という自由をほとんど奪われながらも、真の自由を満喫していました。ジョセフが人生で経験したこと

は、ある意味で使徒パウロのそれに匹敵するものです。パウロは何度もむちで打たれ、投獄され、しばしば死に直面しました。これらの経験を振り返って、彼はコリントの聖徒たちへ次のように書き送りました。

「ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、そして一昼夜、海の上を漂ったこともある。

幾たびも旅をし、川の難、盗賊の難、同国民の難、異邦人の難、都会の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢えかわき、しばしば食物がなく、寒さに凍え、裸でいたこともあった。」(Ⅱコリント 11:24—27)

このような苦難に遭いながらも、パウロは死の直前にローマの牢獄から愛するテモテあてに次のような書簡を書いて送りました。

「わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。

わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。

今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。」(Ⅱテモテ 4:6—8)

パウロの心は、完全な自由を確かに味わっていたのです。

使徒パウロは、自分の勝ち得た報いが他の人にも授けられると結んでいます。このことから、私たち一人一人がその報いに到達する道が備えられているに違いないと私

は信じています。

何年も前になりますが、オハイオ州のクリブランドを車で旅行した時のことです。ある建物に次のような言葉が刻まれていました。「律法に従う者は自由を得ん」。律法という言葉^{おきて}を正しく理解しさえすれば、この言葉に究極的な真理を見いだすことができるでしょう。これにひとつの言葉をつけ加えると、「キリストの律法に従う者は自由を得ん」(教義と聖約88:21参照)となります。これこそ、自由に関する完全な律法であり、完全な自由への道を示すものです。

ヨハネによる福音書の第8章には、イエスとユダヤ人の役人たちの間に交わされた議論が記されています。もちろん、イエスの言葉は拒絶されましたが、中には信じる人もいました。イエスは自分を信じた人々に向かってこう言われました。

「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。

また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるのである。」(ヨハネ 8:31—32)

このようにキリストの律法に従うことによって得られる自由こそが、真の自由であり、最高の自由なのです。そして最も素晴らしいことは、周囲の人々が何をしようとも、あるいは国々に何が起ころうとも、それにはかかわりなく、私たち一人一人がこの自由を手にするということです。私たちがしなければならぬことは、キリストの律法を学んでそれに従うことであり、これはすべての人にとって、この世で最も大切な目的なのです。

私たち一人一人が完全な自由への道を歩めるよう、神がみ守りたもうように、イエス・キリストのみ名によりへりくだって祈ります。アーメン。

「だれがわれわれの聞いたことを信じ得たか」



十二使徒定員会会員
ブルース・R・マックンキー

これからお話する質問について、私と一緒に考えていただきたいと思います。

もし皆さんがイエスの時代にエルサレムに住んでいたとしたら、ペテロや使徒たちのように、イエスを神の御子として受け入れたでしょうか。それとも、アンナスやカヤバのように、あの男は悪霊につかれている、ベルゼブルの力によって奇跡を行なうのだ、と言って攻撃したでしょうか。

もし皆さんがナザレヤカナ、カペナウムに住んでいたとしたら、数人の貧しい漁師たちが宣べ伝えるその新しい宗教を信じたでしょうか。それとも、何の救いももたらさない先祖伝来の宗教に固執したでしょうか。

もし皆さんがコリントやエペソ、ローマに住んでいたとしたら、パウロが説いた聞きなれない新しい福音に耳を傾けたでしょうか。それとも、当時広まっていた突飛な思想や伝統、礼拝の方法などを信じて行なったでしょうか。

もし今、ニューヨークやロンドン、またはパリに住んでいるとしたら、あるいはシカゴやロサンゼルス、ソルトレーク・シテ

イーに住んでいるとしたら、神が現代の世に新たに啓示された新しくも古い宗教、新しくも古い福音、そして新しくも古い生き方を、皆さんは受け入れるでしょうか。それとも、古代の聖徒たちの間に設立された教会とは似ても似つかぬ教会を支持するでしょうか。

もし皆さんが使徒の声を耳にし、使徒の証を直接聞くことができたなら、また主の僕を通じて主からのメッセージを聞くことができたなら、どのような反応を示すでしょうか。信じるでしょうか、それとも拒むでしょうか。

もしある人が真剣な態度で、ジョセフ・スミスが神から召され、彼を通して永遠の完き福音が回復され、地上に主の教会が再び設立されたと告げたら、皆さんはこの天からのみ言葉を信じるでしょうか。それとも、アンナスやカヤバのように現状を固守し、どこにでもある人の創った様々な宗教に自分の永遠の救いを委ねるのでしょうか。

これらの質問に加えて、私は厳粛に宣言したいと思います。私たちは主の僕であり、全世界のあらゆる人々に伝えるメッセージを主から授かっています。

私たちは弱点のある、知識に乏しい取るに足らない存在です。自らの力だけでは何もできません。しかし、主の力に頼るならば、失敗することはありません。私たちが助け導いているのは、主の力なのです。

私たちは将来起こることを知っています。近い将来、燃え上がる炎のように、戦争と疫病と荒廃が全世界を覆うでしょう。

それは悲しみと嘆きに満ちた暗黒の時代です。天体はその光を失い、人々は恐怖と不安で気を失うでしょう。(ルカ 21:26 参照) 国々は混乱に陥り、どこに行っても平安や安全を見いだすことはできなくなるでしょう。

激怒した指導者たちがスイッチを押しさえすれば、恐ろしい兵器がわずかに半日にして何百万もの人々の命を奪う時代です。

これほどひどい時代はかつてありませんでした。不正がはびこり、ソドムのようなあらゆる倒錯と邪悪がもてはやされています。啓示によれば、この状態は良くなるどころかますます悪化し、人の子が再臨される時まで続くのです。

今や世の中は邪悪と災いに覆われ、人々は主の儀式から離れて永遠の誓約を破り、その多くが俗世の道を歩んで肉欲におぼれ、よこしまな心を抱えています。この故に、主は同胞に伝えるようにと私たちにメッセージを託されたのです。

「されば、主なるわれ、この世に住める人々に襲い来るべき禍わざはひを知れば、わが僕ジョセフ・スミス(二代目)を呼び天より語りて彼に誠命まことのみことばを下せり。」(教義と聖約1:17)

それでは、全世界の人々に伝えるメッセージとは何でしょうか。それは回復の知らせです。恵み深き神が完全なる永遠の福音を回復されたという、喜ばしいおとずれです。また「すべての人類は福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得る」という神聖な言葉です。

回復されたメッセージには、3つの重大な真理が含まれています。救いを得ようとする者はだれでも、これらの真理を受け入れなければなりません。その真理とは、第1に、キリストが神の御子であること、第2に、予言者ジョセフ・スミスが神聖な使命を受けたこと、第3に、末日聖徒イエス・キリスト教会がまことの神の教会であること、この3つです。

そして、私たちはこの喜ばしきおとずれを宣言し、福音を宣べ伝え、警告の声を挙げ、主御自身がかつてのように地上におられたら語られるであろうみ言葉を伝えるよ

う主から命じられているのです。

私たちに与えられた役職や地位、神聖な使命は、昔の予言者や使徒に与えられたものと変わりません。私たちが神の使いであり代理人です。昔の予言者や使徒のように、地上において結び固めたことを天において永遠に結び固める権能を持っている神のみ業の執行者なのです。

世の中には、モルモンはクリスチャンではないとか、主イエス・キリストに対するモルモンの信条や忠誠心は疑わしいと言う人がいます。

もし「クリスチャン」という言葉が、キリストを信じ、キリストを神の御子として完全に受け入れることを意味するならば、また真の福音を完全な形で永遠に保持することを意味するならば、あるいはペテロやパウロが信じていたことを信じ、彼らの属していた教会に属することを意味するならば、さらに飢えている人に食べさせ、裸でいる人に着せ、同胞に愛を示し、自らを世の汚れに染まらないようにすることを意味するならば、(教義と聖約59:9参照)、末日聖徒をおいて真のクリスチャンと呼べる人がどこにいると言うのでしょうか。

私はできるだけ明確にわかりやすく、ありのままに申し上げたいと思います。私たちはキリストを信じています。主の戒めを守るために全力を尽くしています。キリストは私たちの主であり、神であり、王であります。私たちが受け入れたのは、まさに主の福音です。

私たちはキリストのことを話し、キリストのことを喜び、キリストのことを説教し、キリストのみ名において予言します。(IIニーファイ25:26参照) 私たちを救いうる名は、キリストを別にしては、天下のだれにも与えられていません。(使徒4:12参照)



私たちはこのように教え、証します。キリストは天父の長子であり、神に似た御方です。またキリスト御自身が全能の主であり、偉大なるエホバであり、地球と命あるすべてのものの創造主であります。

私たちはまた、キリストはイスラエルの神であり、約束されたメシヤであり、天父の独り子であることを知っています。

主イエスは骨肉の体を持たれ、マリヤを母、神を父とされた御方です。そして母から死すべき性質を受け継ぎ、御父から不死不滅の力を受け継がれました。

死すべき身でありながら神の御子であるという主の二元性が、永遠無窮の贖罪を可能にしました。そして、人類は、アダムの

墮落によって世にもたらされた肉体と霊の死から解放されたのです。

モルモンはイエス・キリストを二の次にして予言者ジョセフ・スミスを崇拜している、こういった誤解も一部の人にあるようです。

ジョセフ・スミスがその靈性と偉大さにおいて、最も卓越した予言者として十指に数えられることは確かです。また、天上において予言者の中の予言者、聖見者の中の聖見者としての地位にあることも真実です。ジョセフ・スミスは、エノク、アブラハム、モーセと並び称されているのです。しかしながら、救いはアブラハムの中にもモーセやジョセフ・スミスの中にもありません。キリストの中にもみあるのです。

予言者はすべて主の僕であり、その使命は主のみ言葉を教え、主のみこころを行なうことです。福音を宣べ伝えて、儀式を執行するのです。人々をキリストのもとへ導くために召されているのです。

ジョセフ・スミスについても同じです。彼は神にまみえ、天使の導きと恵みを受け、永遠の示現が開かれるのを目にしました。彼を通して福音が回復され、主は彼に王国の鍵を授けられたのです。

現代のこの神権時代において、ジョセフ・スミスは主から啓示を受け、救いの知識を知らされました。そして主のみこころに従って、この地上に「唯一^{まこと}眞の生命ある教会」を組織しました。(教義と聖約1:30参照)

この教会は真理を信じる人々の組織であり、聖なる福音を信じる人々の集まりです。福音とは救いの計画のことであり、大神権がそれをつかさどります。そして教会は、地上における主のみ業を統制し、信じて従うすべての人々に救いをもたらす執行機関です。

ですから私たち主の僕は、主の戒めに従

って、全世界の人々にこのメッセージをお伝えするのです。私たちは、ジョセフ・スミスを通して再び明らかにされたキリストについて証するものです。あらゆる地に住む人々にお勧めします。どうぞキリストを信じてキリストの教会に加わり、御父と御子が住んでおられる王国を受け継ぐ者となって下さい。

このように勧めるのはいにしへの予言者たちだけではありません。今の私たちにも同じ責任があります。そして、彼らと同じように私たちもこう宣言するのです。悔い改めて福音を信じなさい。天の王国は近づいた。(マタイ3:2参照) バビロンを捨て、シオンに逃れなさい、シオンのステーク部に避難しなさい。聖地に立って動いてはいけない、人の子の再臨に備えるのです。(教義と聖約45:32参照)

救いは真の福音を受け入れ、その律法に従って生活する人々にもたらされます。祈りの中で、みたまが注がれるよう力の限り主を呼び求める人々に与えられるのです。

パウロは次のように述べています。「しかし、信じたことのない者を、どうして呼び求めることがあろうか。聞いたことのない者を、どうして信じることがあろうか。宣べ伝える者がいなくては、どうして聞くことがあろうか。

つかわれなくては、どうして宣べ伝えることがあろうか。」(ローマ10:14-15) 確かにその通りです。「信仰は聞くことによる」のです。(ローマ10:17) すなわち、神によって召された正当な権限を持つ人が、神のみ言葉を教えることから始まるわけです。昔と同じように現代においても、「神は、宣教の愚かさによって、信じる者を救うこととされた」のです。(Iコリント1:21)

私たちの伝えるメッセージは、歓喜と栄光、誉れと勝利のおとずれです。真の信仰

を持つ者は、キリストとその福音にあって常に喜びを得るのです。

回復された福音を受け入れるすべての人が、末日の戦争や疫病や破壊を免がれるとは言いません。しかし、その苦しみや悲しみは、福音の喜びの前に跡形もなく消えさせてしまうでしょう。

主に忠実で正しい人が、邪悪で不信仰な人と共に命を落とすようなことが、これから先もあるでしょう。しかし、キリストを知り、キリストに結び固められている私たちにしてみれば、生けるとも死すとも、それは問題ではないのです。

真理や正義を貫くために、あるいは宗教や家族、自由を守るために、たとえ命を落としたとしても、心配する必要があるでしょうか。

私たちは、どん欲な心と将来に対する不安を抱いてまで生き長らえようとは思いません。福音を受け入れ、キリストという仲保者を通して神と和解した私たちは、たとえ安らかな世界へ召されて、そこで義人の復活を通して得られる受け継ぎを待つことになっても、何ら心配することはないのです。

キリストに希望を持つならば、輝かしい不死不滅のうちによみがえり、アブラハム、イサク、ヤコブと共に神の王国を受け継ぐ者となり、もはやそこから追われることはないのです。

イザヤは次のように記しています。「だれがわれわれの聞いたことを信じ得たか。主の腕は、だれにあらわれたか。」(イザヤ53:1)

だれが私たちの言葉を信じ、私たちのメッセージに耳を傾けるでしょうか。だれがジョセフ・スミスの名をたたえ、彼を通して回復された福音を受け入れるでしょうか。その答えはこうです。もしイエスの時代

に住んでいたら、主や予言者や使徒たちの言葉を信じたであろう人々です。

皆さんがジョセフ・スミスの言葉を信じるならば、イエスや古代の使徒たちが語った言葉も信じたことでしょう。

ジョセフ・スミスと彼のメッセージを拒むならば、ペテロやヤコブを拒み、彼らのメッセージにも耳を貸さなかったことでしょう。

皆さんの時代に主が遣わされた予言者を受け入れることは、予言者を遣わされた主を受け入れることと同じです。

回復された福音を拒み、この末日に神より遣わされた人々が語った救いの計画に文句をつける人は、古代の予言者や使徒の口から同じ教えを聞いたとしても、やはり拒んだことでしょう。

私は主の僕である私たちに課せられている義務、すなわち全世界の人々に回復のメッセージを伝えることについて、わかりやすくお話ししました。私たちは現在、許される時間と才能と手段のすべてを尽くして、この義務を果たしています。

では、このメッセージを聞いた人はどうしたらいいのでしょうか。ジョセフ・スミスによって示された福音やイエス・キリストをまだ受け入れていない神の子供たちは、何をすべきでしょうか。この地上に生を受けた人はだれでも、真理を探求し、真理を信じ、真理に従って生活する義務があるのではないのでしょうか。

皆さんがいかなる宗派・教派・団体に属していようと、心に次のように自問してみるようにお勧めします。

私は昔の聖徒たちのように、義に飢えかわいているだろうか。(マタイ 5 : 6 参照)

私は心を開き、積極的にすべてのものを識別して良いものを守っているだろうか。

(1テサロニケ 5 : 21参照)



私は天から下された新たな光と真理を進んで受け入れるだろうか。また、あらゆる時代の人々を貴い存在として御覧になる恵み深き神により、この世にもたらされる光と真理を受け入れるだろうか。

ジョセフ・スミスが神から召されたことや、ジョセフ・スミスとその後継者に、いにしへのペテロ、ヤコブ、ヨハネの有していた王国の鍵を授けられたことが事実かどうか、確認する勇気が私にあるだろうか。

個人に与えられる啓示は、この世にあって平安を得、来たるべき世にあって永遠の生命を得るにはどうすればよいかを教えてください。その啓示を得るために、私は喜んで犠牲を払うだろうか。

神が私たちに永遠の福音を授けて下さったことを証します。すべての人がこの福音のもとに来て祝福と共に味わうことができるように願っています。

すべてをイエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

伝道活動を通して 清くなる



七十人第一定員会会員
ウィリアム・R・ブラッドフォード

私は、永遠の父なる神と御子イエス・キリストが、この神権時代に姿を現わされたことを心から証致します。栄光に満ちたこの御二方は、実際に少年ジョセフ・スミスの前に立って話しかけられました。

このことが起きたのは1820年です。以来天は変わることなく開かれています。イエス・キリストの完全な福音が、啓示によって回復され、天使が神のみ使いとして遣わされました。また私たちは、神のその子供たちとの交わりを記した記録を与えられました。そして神の息子、娘たちの昇栄のための救いの計画は真実であるという聖霊の証が、あふれるばかりに注がれてきました。

真の教会すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会は、イエス・キリスト御自身の指示の下に組織されました。

そして予言者と使徒が召され、天よりの権能を授けられました。彼らは全世界どこにあっても、イエス・キリストの特別な証人です。

予言者と使徒は、鍵を持っており、イエス・キリストの福音を宣言すべく門戸を開くために遣わされています。そして彼らの

働きにより道は開かれ、福音は全世界に宣言されつつあります。

主の靈感と導きを受けたこれらの予言者、聖見者、啓示を受ける者は、イエス・キリストの弟子たちに呼びかけ、神の命令に従って彼らを送り出してきました。その命令はこうです。

「**而して**、この末の世にわが選びたる弟子たちの口より、すべての人々に警めの声は及ばん。

この末の世の弟子たちは進み行けど、一人もこれを止むる者なからん。そは主なるわれ、彼らに命じたればなり。

この故に汝ら世の人おそれおののけ、そは主なるわれ**誠命**の中にて命じたることは成就すべければなり。」(教義と聖約1:4-5, 7)

現在、188の伝道部で約3万人の宣教師が働いています。彼らは82の国や領地で、48の言語を使って回復された福音を宣べています。

その結果、多くの天父の子供たちが福音を聞き、福音が真実であるという証を得てバプテスマを受け、主の真の教会に入っています。現在では約500万人の会員がいます。

私たちは謙虚な気持ちで、この伝道活動の成功を大いに喜んでいますが、同時に、ここに至るまでは、主のみ手と主の弟子たちの献身的な働きがあったことも承知しています。しかし、なすべきことはまだまだ多く残っているのです。

私たちは伝道活動について大いに急ぐべきことを感じていますが、果たして、私たちにその歩みを速めることができるのでしょうか。

問題は、この業に携わる義務があり、かつ実際に携わることのできる人々が皆、基本的な原則と、この福音を全世界に宣べ伝

えよという神の厳命が与えられた目的を本当に理解し、信じているかどうかです。

現在のところ、3万人の宣教師が働いていますが、本来ならばその何倍もいて当然であり、また可能はずです。もし彼らが自らを備え、与えられた義務を果たすために歩みを進めるならば、伝動活動は私たちが限界と考えている線をはるかに超える速さと規模で進められることでしょう。

私はこの点について深く考え、祈りました。そして、何を話したらよいかとあれこれ考え、また、話す力を神に願い求めました。この業に忠実であるべき人々を動機づけるためです。

そうするとある言葉が心に浮かんできました。わかりやすい言葉です。しかもこれまで何度も教えられてきた言葉ですから、それをお話することは、皆さんがこれまで何度もお聞きになっていることを繰り返すこととなります。

この言葉は私たちに、キリストの下に来て、キリストによって完全な者となるようにと招いています。つまり、「心を尽くし、勢力を尽くし、思いを尽くし、体力を尽くしてキリストに仕える」という言葉です。もし私たちがこの言葉通りに行なうならば、私たちは罪の赦しを得、一点の汚れもない清い者となります。そして天父のみもとに帰ってまた共に住み、天父が送っておられるような生活をすることができます。

救い主は、御自身に仕えることを条件として、私たちに素晴らしい祝福を与えようとその手を差し伸べておられます。主が言われるこの奉仕の意味をよく考えてみると、それは基本的に、福音の心理を知らない人々に教えることであるということがわかってきます。

ところが、その言葉の簡潔さや、それが神から命じられたものであるという事実、

さらには永遠の祝福という確かな約束をもってしてもなお、本来なら主に仕えるべきであり、それができる状態にしながら、奉仕しようとしめない人々がいるのです。

そうすると、彼らは本当に伝道の業のふたつの目的を理解し、信じているのだろうかと首をかしげざるを得ません。伝道のふたつの目的は、第1に、宣教師自身を清めることであり、第2は、改宗者に回復されたイエス・キリストの福音の真理を伝え、主の教会に入るためのバプテスマへと導くことです。これは、清めの道を歩む宣教師にもたらされる確かな、そして当然の成果です。

サタンはこの業を妨害しようとしています。サタンは狡猾に、しかも執拗にその力を及ぼしてきます。この業を行なう義務があり、またそれをする力を持ちながらサタンのえじきになろうとしている人が数多くいます。

目をくらまされて真実から道をそれるようになり、偽りと無価値なものに、ちょっと試してみるだけだからと言って足を踏み入れている人がいます。

伝道の業に召される年齢に近づきつつある若人の皆さん、あるいは現在その年齢に達している若人の皆さんに申し上げたいと思います。

皆さんの中には、心の中でこのように言っている人がいないでしょうか。「だけど、僕の立場をわかってくれていませんね。僕の場合は事情が違うのです。僕は将来、立派な弁護士か医師、または運動選手、とにかく何らかの分野で一流の人間になるつもりなんです。まさかあなたも主も、この大切な時期に僕が学業から離れることを要求はされないでしょう。伝道は、僕の将来の計画の差しさわりになるんです。」

またある人々はこう考えています。「え

え、伝道のことは知っています。でも、あなただっただ僕のようにガールフレンドがいたら、彼女を置いて行ったりはしないでしよう。僕のいない間に彼女がどうなるともわからないでしょう。」

さらにこのように考えている人々もいます。「伝道は費用がかかり過ぎます。私は今の仕事に就いて聞かないし、車とステレオを買ったばかりなんです。それに、ようやく独り立ちの生活を始めたばかりなんです。今それを捨てることはできません。とてもそんな余裕はありませんよ。」

またこんなことを考えている人もいるでしょう。「私の場合は資格がありません。罪を犯していますし、今は教会にも行っていませんから。宣教師になろうと計画はしてきましたのですが、道はずれてしまいました。今は、宣教師に要求される標準も守っていないのです。」

もし私が皆さん一人一人から話を聞くことができるとしたら、多分どの場合にもひとつの共通点があるはずですよ。それは、いづれも神への義務を果たさないことを正当化しようとしている点です。

皆さんの多くは、両親の正しい勧告や教えに逆らってまで、自分の立場を正当化しようとしています。御両親は皆さんを愛しておられます。そして、皆さんにその気さえあるなら、正しいことをするためにどのようにも皆さんを援助するでしょう。

しかし残念なことに、正当化する皆さんに対して味方をする両親もまたいるのです。そういった親は皆さんの将来の計画は立てていますが、その中に伝道のことは入れていません。そしてこのように言います。「うちの息子は優秀な弁護士か医師、さもなければスポーツの花形選手になるつもりです。ですから、学業を中断して、2年間も世の中でぶらぶら遊ばせるわけにはい

きません。伝道はだれかほかの人にさせて下さい。うちの息子は特別ですから。」

もし私が、そのように自分を正当化している若い男性や、両親と個別にお話できるなら、私は自分の弁舌の能力をすべて尽くしてこう言うのですが、「一体あなたは自分を何様だと思っているのですか。神は、弟子たちを通して回復された福音を全世界に宣言すべしという、厳しくも神聖な戒めを、予言者を介して与えられました。これは神の知恵です。それと自分の知恵とを対等に考えるのは、どのような根拠があつてのことなのですか。その弟子とはあなたのことなですよ！」

ここで、主が、「何事もなすことなく」、疑いの心を持っている人々に対して何と言われたか、主御自身の言葉を見てみましょう。

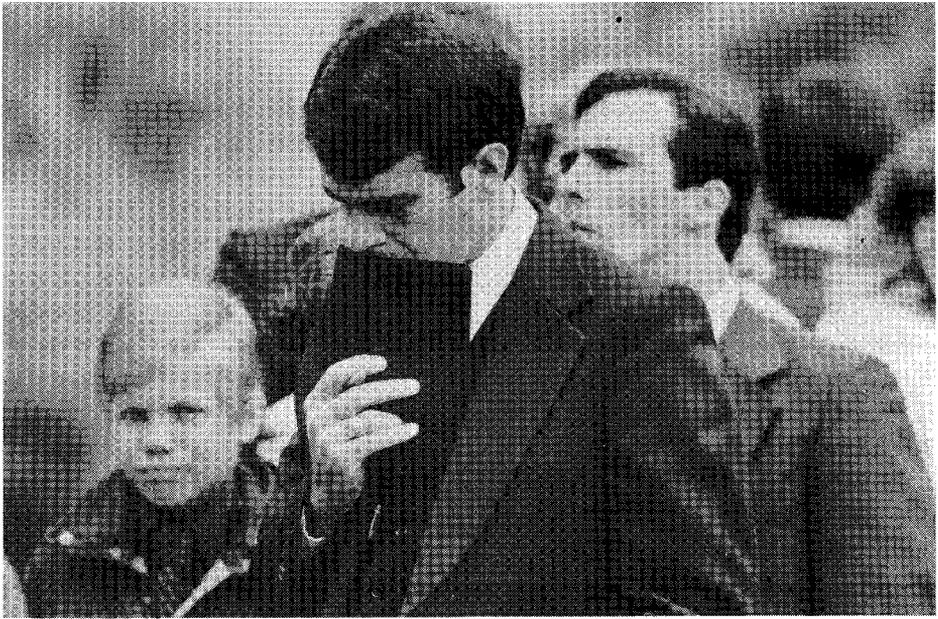
「主は言う、人間を造りしはわれにあらざるや。われ、わが命に従わざる者を罪なしとせざらんや。」

主は言う、われ約束してこれを果さざりしことあらんや。

われ命を下すに人これに従わずば、われ我約束を取消し祝福を与えず。

その時、人々心の中に言わん。こは主の御業にあらざる、主の約束果されざればなりと。されどかくの如き人は禍なるかな。その報いは地の下に潜み、天よりの報いあらざればなり。」(教義と聖約58：29-33)

皆さんは、この世での地位や職業に伴う名声や肩書きが、忠実な人々に与えられた神の約束と比べてそれほど変わらないものだなどと本気で考えているのでしょうか。神は、「王位、王国、公国、その他権能」を約束しておられます。また「最高の栄に進むを得てあらゆる事に光栄を受くべし」と、さらには「この光栄は最高完全の光栄にして、永久にその子孫の続くことなり」(教義と聖約132：19)とも約束しておら



れるのです。永遠の生命を約束して下さっているのです。

皆さんに申し上げたいと思います。皆さんには言い訳や正当化をする余地はもうありません。皆さんは今、自分自身の永遠の救いを容易ならぬ危険にさらしているのです。

教育は後で受けることができます。皆さんが伝道の業を終えて帰って来る時には、主は皆さんに教育の道を開き、ふさわしい職業を備えて下さるでしょう。

次に、ガールフレンドの件について言えば、天父は御自身の選ばれた娘、愛し慈しんでおられる娘を与えたいと思っておられます。清らかで、永遠の価値というものを理解し、昇栄めざして努力している娘、聖なる神殿であなたと結び固めることのできる娘を与えたいと思っておられるのです。とはいえ、もしあなたが自分自身をその人の永遠の伴侶としてふさわしい者にするのを忠実に行なわなければ、絶対にこのことは期待できません。伝道によってあなたが清められた後に起こることだからです。

誤解のないように若い女性の皆さんにも

申し上げますが、これは皆さんにも当てはまります。多くの女性はこう言います。「彼が行ったら私はどうすればいいのでしょうか」と。あなたは彼を引き止めます。そして彼との交際でも、守るべき一定の線を踏み越えたところまで許し、往々にして彼の決心を鈍らせてしまいます。時には、彼の伝道に出るための資格を失わせてしまうようなことさえします。そのようにして、あなた自身も自分に約束された祝福を得る資格を失うのです。

彼を伝道に行かせて下さい。それもただ行かせるだけでなく、励ましてあげて下さい。彼の人生のこの時期において、彼に一番大きな影響を与えるのは、たぶんあなたひとりでしょう。あなた次第ですべては決まるのです。どうぞ、彼が清い生活をし、伝道の準備ができるように助けてあげて下さい。

そうなれば、たぶんあなた自身も宣教師として働きたいと思うでしょうし、またそうすべきです。今では多くの女性宣教師が伝道しています。若い男性に約束されているのと同じ祝福が、皆さんにも与えられる

のです。女性の皆さんのこの人生における最も重要な役割は母親としての務めですが、まず伝道に出るのが良いと思います。

自分は罪を犯したから伝道には出られないと思っている人々に対して、私は、望みを捨てないようにと申し上げたいと思います。立ち返るすべはあるのです。悔い改めの計画は生きています。あなたは完全にふさわしい状態にもどることができます。主の意にかなう償いをし、主の業の中に身を置くことができるのです。

宣教師として働くべきであって、しかもそれが可能な若者たちのことで監督やステークス部長と個別に話をするのができたら、私はこのように申し上げるでしょう。「あなたが判士です。彼らがその義務を理解し、果たすようになるまで、彼らや彼らの両親に働きかけるのは、あなたの神聖な義務です。

果物は、実がなり、成長して熟しても、だれも収穫して保存することを気にかける人がいなければ、地面に落ちてだめになっていってしまいますが、あなたは彼らをそのようにしてはなりません。もしそのようなことをすれば、間違いなくあなたが責任を問われることとなります。神の法廷に立って、彼ら一人一人の名前を挙げて申し開きをする時が来るでしょう」と。

伝道は素晴らしい計画です。私たちを清める手段です。宣教師というのは、秩序と規律という伝道の環境の中に、しかも万事がみたまど調和して行なわれる状態に置かれると、非常な変化を体験します。天が開き、力が注がれ、奥義が明らかになり、習慣が改められます。そして清めが始まります。宣教師はこの過程を通して、暗やみの世界にイエス・キリストの福音を放つ光の器になっていくのです。

なすべきことはたくさんあります。皆さんは、その業を行なうためにこの時代に生

まれるべく「キリストと共にこの世より隠され」ていた素晴らしい世代なのです。(教義と聖約86:9参照)

皆さんは備えをしなければなりません。今すぐ自分自身をふさわしく、役立つ者とする必要があります。皆さんがそうしなければ、み業は皆さんを抜きにして進められていきます。幾分ペースは落ちますが、とにかく進んでいきます。皆さんがみ業に加わらず、その義務を果たさないとしたら、皆さんはどうなるでしょうか。どのようにして清められるのでしょうか。

皆さんが伝道の義務を果たさないとしたら、皆さんから福音を学べたかもしれない人々は、いつかほかのだれかから福音を聞く機会があるでしょう。しかし、皆さん自身はどうなるでしょうか。どのようにして清められるのでしょうか。

伝道は宣教師のためにあるのです。伝道は、素晴らしい「時の贈り物」です。わずかではありますが、この地上で天上の生活をかいま見ることができる時です。また心身を清め、新たな活力を与える時であり、聖霊によって昇栄への偉大な計画に関する知識を確認することのできる時であり、日の光栄に入る者となるための最高の機会なのです。

人々を教え改宗に導くことは、この過程の自然の成り行きです。皆さん自身を清めるためには、皆さんが他の人々に仕えなければなりません。人々への奉仕の中で最も尊いものは、真理を教えて人々を神の王国に連れて来ることなのです。

それゆえ、長老たちを遣わし、あらゆる部族、国語、民族にわが福音を宣べ伝えよと命じられているのです。(教義と聖約133:8参照)

イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

従うか、従わないか、 それが問題だ



七十人第一定員会会員
チャールズ・ディアイエ

『おれたちは戦わねばならない、それが定めなんだ。』我々が目を覚ましてからずっと、ひとりの男がひどいぬかるみの中に身をこわばらせ、のどを鳴らすようにしながら、しわがれ声を上げていた。彼の体が重そうに寝返りを打った。『おれたちは持つてるものをみんな犠牲にしなくちゃならんのだ。人もやせ馬も、それに心も命もだ。楽しみなんかありゃしない。四人同様の生活さ。おれたたちの手に残ってるのはそれだけさ。お前さん方、敵を負かして、戦争に勝つためには何でも我慢しなくちゃならん、無法なことでも、目に入ってくる恥知らずで胸こそ悪いことでもだ。でもおれたちがこんな犠牲を払わなくちゃならんとしたら……』ぶざまなかつこのその男はここまで言うと、また寝返りを打ってから言葉を続けた。『それはおれたちが、進歩のために戦争してるからで、お国のためなんかじゃない、間違ったことを敵に回してるんで、どこかの国と戦ってるわけじゃないんだ。』(アンリ・バルビュス、*Under Fire* 「砲火」より)

『おれは死にたくない。』壁を背にした肉

体が絶叫した。銃殺隊に無表情な声の命令が下った。『構えっ。撃てっ。』そして静寂がその場に残った。兵士たちは兵舎に戻った。彼らの眼前で今行なわれたのは、脱走兵の処刑であった。(同上)

ついこの間、ある伝道部で、宣教師と神権指導者の間にこのような会話がありました。

「長老、あなたは主の予言者から、主に仕えるように召されたのですよ。主の予言者のサインが入った、召しの手紙を受けた時のことを覚えていますか。それには、あなたが個人的なことを一切あとにして、すべての時間を捧げて主に仕えるように求められると書いてあったでしょう。」

答えはすぐに返ってきました。「僕はもう伝道したくありません。この国の人も好きじゃないし、この国も好きじゃないんです。食べ物も嫌いなんです。」

「それでは、何をしたいのですか。」

「ええ」と、宣教師はゆっくり答えました。「僕は自分の車を運転したいんです。家に帰りたいんです。」

何年も前、ある所で子供たちとその両親が、居間に座って家族会議を開いていました。事態は深刻の度を深めていました。子供たちは、父親と一緒に家にいてくれるようにと必死の思いで訴えていましたが、少ししてから、父親はこのように言いました。「それはできない。私も自分自身の人生を送らなくちゃならない。」そして父親は家を出て行ったのです。

2週間前、サンフランシスコのある場所でのことでしたが、新聞にこのような短い記事が載っていました。「死を決意した3人が、ベイ・ブリッジから身投げした。」

およそ2千年前、ある場所に5千人のユダヤ人が集まっていた。主イエス・キリストに従った5千人の人々です。そこで

はまた別の会話がありました。群衆は言いました。「『先生、いつ、ここにおいてになったのですか』。

イエスは答えて言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。あなたがたがわたしを尋ねてきているのは、しるしを見たためではなく、パンを食べて満腹したからである。

朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために働くがよい。これは人の子があなたがたに与えるものである。父なる神は、人の子にそれをゆだねられたのである」。

そこで、彼らはイエスに言った、「神のわざを行うために、わたしたちは何をしたらよいでしょうか」。

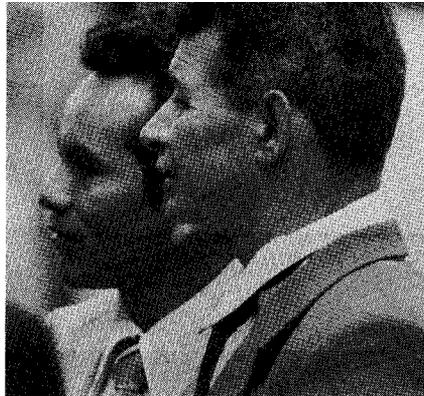
イエスは彼らに答えて言われた、「神がつかかわされた者を信じることが、神のわざである。」(ヨハネ 6 : 25—29)

「わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう。」(ヨハネ 6 : 40)

この時、ユダヤ人たちは不平を言いました。弟子たちの中にさえつぶやく者はいました。しばらくの沈黙があった後、ふたつの決定が行なわれました。

ひとつはこのように書かれています。「それ以来、多くの弟子たちは去って行って、もはやイエスと行動を共にしなかった。」(ヨハネ 6 : 66) 彼らは自分の好きな道を選んだのです。

もうひとつはこのようにあります。「そこでイエスは十二弟子に言われた、『あなたがたも去ろうとするのか』。シモン・ペテロが答えた、『主よ、わたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです』。(ヨハネ 6 : 67—



68) 十二弟子たちは、その唯一まことの道に従いました。

放棄する、見捨てる、投げ出す、あきらめる、手放す、信仰を捨てる、身をひく、退却する、やめる——これらの言葉はどれも、大体同じような意味あいを持っています。私たちは義務といわれるもの——国家に対する義務、教会に対する義務、家族に対する義務、自分自身に対する義務、神に対する義務——に直面して、心に動揺を覚える時がありますが、今挙げた言葉の中には、必ずそうした人生の一つ一つの場面に当てはまるものがあることに気づくはずです。

心が揺れ動くとは、道を選択する際に二の足を踏むこと、また、同時にふたつの方向に進もうとすることです。つまりふたりの主人に兼ね仕えようとすることです。歴史を通じて人が直面してきた最大の誘惑のひとつは、自分自身のために働き、自己の欲求を第一に満たそうとする誘惑です。この選択が義務を放棄しても構わないという気にさせるのです。金持ちであれ貧乏であれ、力があれ謙虚であれ、あるいは忠実であろうとなかろうと、皆この誘惑にさらされています。

人生の難問に答えていくことは、決してたやすいことではありません。それで私たちはしばしば、人生の中で出会う人々、すなわち天父、自分自身、親、監督、隣人に

対して、最後通告を出すことがあります。什分の一を納めるのはやめます、家を出ます、解任して下さい、自殺しますなどと様々です。無言の抵抗から不平あるいは暴力に至るまで、最後通告には様々な形があります。

自分のことだけを考え、我欲を満たすことを第一にすることに對して、主は創世の以前からこのように警告しておられます。

「彼らは主の義を打建てんために主を求めずして、あらゆる者おのが心のままに振舞いおのれらの神の姿を求めれども、その姿は人の世の像にしてその本質は一個の偶像なり。そは古びて……すなわちついに亡ぶべき大バビロンにて朽ちん。」(教義と聖約1:16)

主はまた、私たちがこうした状態に陥らないように道を示して下さい。

「されば、主なるわれ、この世に住める人々に襲い来るべき禍を知れば、わが僕ジョセフ・スミス(二代目)を呼び天より語りて彼に誠命を下せり。

またこの誠命を受けたる者たちもこの教会の基礎を置き、人に知られぬ所よりまた暗き所より、全地の面に於ける唯一の真にして生命あり而も主なるわれの悦ぶこの教会を明るみに出す能力を与えらるを得。われ悦ぶとは一人一人を指すにあらずして、わが教会員全体に就きて言えるなり。」(教義と聖約1:17, 30)

主と予言者の教えはすべてこの不変のメッセージを伝えていますが、それは生ける予言者と教会を通して、世の人々に主と御父を知るように勧めるためです。ひとたびこのことを理解すれば、終りまで耐え忍ぶという決心をする時の助けとなるでしょう。

神、自分自身、家族、教会、そして国家に対する変わらぬ義務は、私たちが全力を傾けて努力すべき目標のひとつです。そして

その目標を与えられたのは主なのです。主はニーファイ人に次のように教えています。

「故に、われまた天にまします汝らの父が完全なるごとく、汝らもまた完全となることを。」(IIIニーファイ12:48)

繰り返しますが、この言葉は、落胆させたり義務を放棄させたりするために与えられたものではありません。逆に、備えをして恐れることのないようにさせるのがねらいです。では何のために備えるのでしょうか。それについて、主は私たちに「神の口より出るすべての言によりて生」(教義と聖約84:44)き、心と勢力と意思と体力を尽くして神に仕えるために(教義と聖約59:5参照)備えるべしと何度も命じておられません。

従順と奉仕のうちに耐え忍ぶということ、義務の放棄とは相反するものです。道をそれず、歩み続けること、最後まで持ちこたえること、試練にあつても心をぐらつかせないこと、辛抱強く耐え忍ぶこと、困難に耐えること、苦しみや悲しみ、破壊的な力に負けず、それに打ち勝つことなのです。

逆境に遭遇した時に励ましとなるのは、私たちは決して独りではないということです。主はジョセフ・スミスにこう言われました。「苦しみを忍べ。汝は数多の苦しみを受くべければなり。されど、これに耐えよ。見よ、われは汝と共に在ればなり。誠に、われ汝の生涯汝と共に在らん。」(教義と聖約24:8)

ジョージ・Q・キャノンはその著「福音の真理」(Gospel Truth)の中で次のように書いています。「それは私たちすべてに関係がある。私たちは時々大きな苦しみを受けるが、私たちが本当に誠実であるかどうかを見るために試しを受ける必要があるのではないだろうか。そのようにして私た

ちは自己の姿、自己の弱さを知るようになるのである。しかも主は私たちを御存じであり、私たちの兄弟姉妹もまた私たちを知っている。

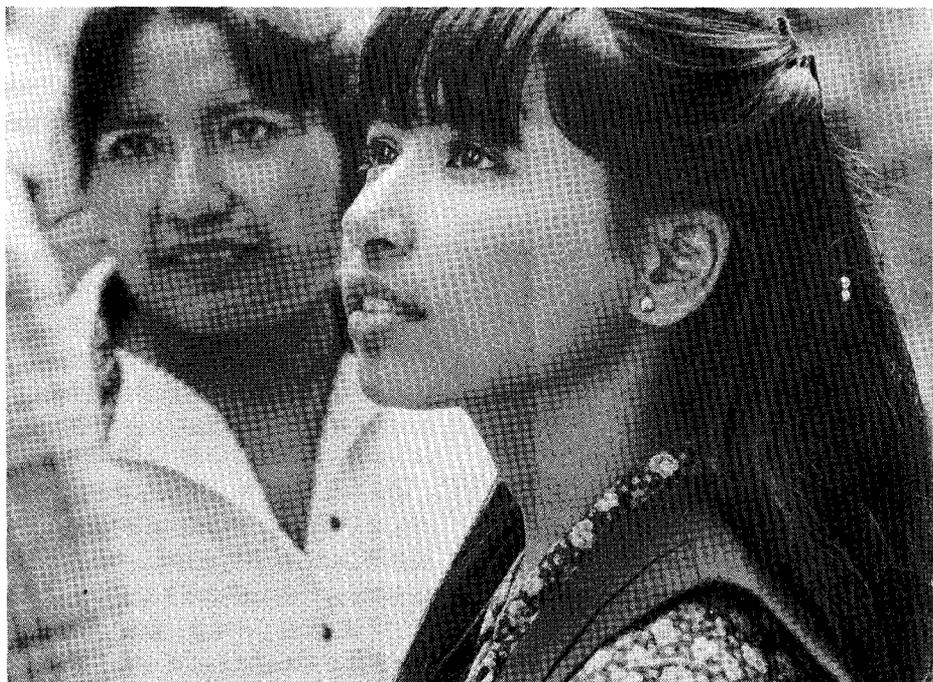
それであるから、忍耐という賜をいただくことは、優しく快活な態度を身につける上でも、また、落胆したり、悪い気持ちに負けたり、忍耐力を失くしたりして怒りっぽくなったりしないようにするためにも大切なことである。これは、すべての人が持つべき尊い賜である。」(ジェレド・L・ニュークヘイスト編, 2:198)

もちろん障害や難関はあります。人は時として素直さを失くすこともあります。そして、中には絶望して、将来への希望や信仰を失くしてしまう人々もありますが、主のメッセージはいつも変わりません。あきら

めてはいけません。なぜなら主が生きておられるからです。主は私たちの救い主、贖い主であり、平和の君です。人生に対する大きな自信、永遠の生命への確かな基は、主イエス・キリストにあります。ほかに道はありません。

道はひとつしかありません。私たちが神に対して持っている義務についての教えが、自分自身や家族、教会、国家に対する義務を決定します。いささかの動揺も許されません。それは、「誰もよく二人の主^{つか}に兼ね事^{つか}うることを得ず。そは一人を憎みてほかの一人を愛し、一人に忠義をつくしてほかの一人を見くびるべければなり。故に、汝らは神と富とに兼ね事^{つか}うること能^{あた}わず」(IIIニールファイ13:24)とあるからです。

ジョージ・アルパート・スミス大管長は、



その祖父から聞いた言葉を引用してこのように語っています。「主の領域と悪魔の領域との間には、はっきりと定められた境界線がある。あなたがこのまま主の側にとどまっているならば、敵はそれを越えてあなたを誘惑しに来ることはできない。主の側にいる限りあなたはまったく安全なのである。しかし、……もしあなたが境界線を越えて悪魔の側に行くならば、あなたは悪魔の領域に入ったことになり、悪魔に支配される身となる。そこで悪魔はあなたに働きかけ、あなたをその境界線からできる限り遠ざけようとするであろう。悪魔は、安全な場所から引き離すことがあなたを滅ぼす唯一の手段であることを知っているのである。」(ジョージ・アルバート・スミスによる引用、*Conference Report*「大会報告」1945年10月、p.118)

根気強く聖霊の導きを求め、神の戒めに従って生活することが、永遠の生命に通じるのです。

人は教会とこの世、また、善と悪、真理と誤謬ごりやうといった、ふたつの力を前にしていることを考えた場合、これらの力が全く違ったふたつの方向に進んでいるという事実を知って、心を乱さないようにするためには一体どうすればよいのでしょうか。それには両の足を教会の側において立ち、変わることなくすべてを捧げるように自分自身を備えることです。

王様と道化師の古い話があります。ある日、王様は道化師にほうびを与えようと思いました。そこで王様は道化師を呼び、見事なつえを差し出して、こう言いました。「自分以上のばかに出くわすまで、この美しいつえを持っていてもよいぞ。」

時が経ち、王様は大変重い病気にかかりました。そこで王様はある日、その道化師を呼んで、自分が帰ることのない長い旅に

出ることを話しました。その時、道化師は王様にこのように尋ねました。「ところで王様は永遠に続くその旅のために何か準備をなさいましたか。」

王様は、「いや」と答えました。

すると道化師は、例のつえを王様に手渡して、こう言いました。「王様、もし王様が永遠の旅のために何も準備をしておられなかったのだとしたら、このつえは王様のものです。王様は私以上のばかですから。」

私たちは準備ができていますでしょうか。私たちは最大の誘惑に立ち向かうために、自らを備えているでしょうか。その誘惑とは懐疑心や試練の中で主のみ業に対する義務を放棄することです。それは他の義務を放棄することにもつながります。

ハムレットは、絶望して自滅する寸前のところまできていた時、「生きるか、死ぬか」という問いを口にしました。(「ハムレット」第3幕第1場56行) そのハムレットの問いを言い換えてみたいと思います。

兵士になるか、ならないか。

宣教師になるか、ならないか。

父親になるか、ならないか。

それに誠実になるか、ならないか。

キリストの弟子となるか、ならないか。

末日聖徒イエス・キリスト教会には、この問いに対する答えがあります。それは、私たちは証の力によって、真の弟子、キリストに従う者となり、最後まで忠実であることができるという、神から与えられた答えです。

私たちの世の人々に対する証は、イエスがキリストであり、私たちの救い主、贖い主であること、また、ジョセフ・スミスはこの地上に真理を回復した予言者であり、この教会は神の教会であるというものです。私もまたこれらのことを、イエス・キリストのみ名によって証致します。アーメン。

ふれあい



十二使徒定員会会員
デビッド・B・ヘイト

— ユーヨーク・フィルハーモニー交響楽団
— の有名な指揮者、故アルツロ・トスカ
ニーニ氏は、ワイオミング州の人里離れた
山地に住むある独り暮らしの羊飼いから、
短いしわくちやの手紙を受け取りました。

「トスカニーニ様へ、私が持っているもの
のと言え、ラジオと古いバイオリンのふ
たつだけです。そのラジオの電池もなくな
りかけてきました。バイオリンは音が狂っ
ていて使えません。そこでお願いがありま
す。次の日曜日、コンサートをお始めにな
る前に、「ラ」の音を出していただけません
でしょうか。ラさえ調律できれば、あとは
自分で調律できますので。そうすれば、ラ
ジオの電池がなくなっても、バイオリンを
弾くことができます。」

次の日曜日、カーネギーホールで行なわ
れた全国向けラジオコンサートの始めに、
トスカニーニ氏はこう呼び掛けました。「ワ
イオミングの山地にお住まいの聴取者であ
り、友人である方のために、これからラの
音を弾きます。」そう言って、全員で一斉に
ラの音を響かせたのです。

この羊飼いはたったひとつの音があれ

ばよかったのです。ほんの少しの助けを与
えるだけで、そこから先は自分で進むこと
ができます。ひとつの音をだれかに助けて
もらうことで、他の音も簡単に調律するこ
とができたのです。こうして、調律をすべ
て終えた孤独な羊飼いは、心のふれあいと
喜びの源を知って、心高まる調べを奏でる
ことができたことでしょう。

きょう私は電池が弱くなり始めたり、調
律の必要な神の子ら、言い換えれば、主や
主の僕らの言葉や教えに心を動かされた経
験がありながら、この世の楽しみや営みに
心を奪われてしまった人々に向けてお話し
たいと思います。そのような方の中には、
教会での意義ある責任にまったく召されな
かったり、十分な働き場がなかったりする
人、また傷つけられたとか心の痛手を受
けたと感じる人、自分はふさわしくないと
思っている人がいるかもしれません。

ほかに、自分から音を狂わせた人もいま
す。音の高さが狂って、楽譜にはない音を
出しているのです。救い主は、生きるため
の指針をお与えになるとともに、関心と励
ましを示すための愛の原則を与えて下さい
ました。

「すべて重荷を負うて苦勞している者は、
わたしのもとにきなさい。あなたがたを休
ませてあげよう。

わたしは柔和で心のへりくだった者であ
るから、わたしのくびきを負うて、わたし
に学びなさい。そうすれば、あなたがたの
魂に休みが与えられるであろう。

わたしのくびきは負いやしく、わたしの
荷は軽いからである。」(マタイ11:28—30)

主は「完全なる者はわたしのもとにきな
さい」と言っておられるのでもなければ、
富める者だけ、あるいは貧しい者だけ、健
康な者だけ、罪のない者だけ、長く祈る者
だけ、病に苦しむ者だけ来なさいと言っ

おられるわけでもありません。そうではなく、次のように言って、すべての人に両手を広げて呼びかけておられるのです。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。」「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

主がすべての人に説いておられるのは、神を愛すること、神の子らを愛すること、神の戒めを守ること、イエスがキリストであり神の御子であると信じることです。(Iヨハネ5：1-3参照)

救い主の教えを受け入れてバプテスマを受けて教会に入った人の中にも、今その囲いから出てしまった人がいます。自分から選んでそうした人もいますが、多くの場合私たちの冷淡な態度が原因しています。

マタイは、イエスが昇天される前に弟子たちを訪れられた時の様子を述べています。弟子たちは主から命じられた山に集まり、主を待っていました。そして、生活の中心である主を拜しました。その時、主が間もなく自分たちから去って行かれることに、弟子たちは気づきます。主が去られた後、彼らはどこへ行けばいいのでしょうか。何をすればいいのでしょうか。世に逆らって生きる11人の弟子たちに、主はどのような言葉を残されるのでしょうか。

「イエスは彼らに近づいてきて言われた、『わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。』

それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、

あなたがたに命じておいたいっさいのことに守るようには教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。』」(マタイ28：18-20)

この最後の教えで言われているのは、人

を見つけてバプテスマを施すだけでなく、人々を教えよということです。弟子たちがこれから先何をしたらよいか、はっきりと示されたわけです。人々をキリストに導き、教えること、これが弟子たちのおなすべきことです。このことはまた、今日の教会とその会員にも言えることです。人々に主の戒めを教え、福音の原則を教えなさい。神の愛と、互いに愛し合わなければならないことを教えなさい。みたまによって、愛をもって教えなさい。そうする時、人々は主の戒めに従い、それにそった生活をするができるようになるでしょう。

ひとりたりとも失ってよい人はいません。すべての人が、主の僕らを通して主の愛を感じられるようにしなければなりません。福音の教えを全世界の人々に伝えるには、バプテスマを受けたすべての人々の活発な参加が必要であることを、主は御存じでした。一部の人の働きではなく、すべての人の働きが必要なのです。

キリストの時代にはユダヤ人社会の中にはっきりとした境界線が引かれていました。しかし、救い主にはそんな境界線はなく、取税人や罪人も自由に交われました。このことは、罪人を自分の家に招き入れようとしないうるバプテスマの激しい反感を買うもとなつたのです。

キリストはバプテスマのそうした心の狭さを叱責して言われました。「丈夫な人には医者はいらぬ。いるのは病人である。」(マタイ9：12)

イエスが罪人と交わり、食事を共にすることを、バプテスマ人は非難しましたが、イエスは御自分のやり方が間違っていないことを示され、悔い改めた罪人に対する神の愛の深さと、ひとりの罪人が悔い改めた時に天にある喜びについて、はっきりと教えられました。



救い主はこう問うておられます。「ある人に百匹の羊があり、その中の一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、その迷い出ている羊を捜しに出かけないであろうか。

もしそれを見つけたなら、よく聞きなさい、迷わないでいる九十九匹のためよりも、むしろその一匹のために喜ぶであろう。

そのように、これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない。」(マタイ18:12-14)

続けて言われました。「家に帰ってきて友人や隣り人を呼び集め、『わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから』と言うであろう。よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きいよこびが、天にあるであろう。」(ルカ15:6-7)

不活発から立ち直ったマイケル・ダフィーは次のように述べています。「私は彼らがモルモン教会の者だということ以外、彼

らの名前も、話もまったく気に留めませんでした。どのようにしてか、私がモルモンだったことを見つけ出した彼らは、ホームティーチャーとして訪問してもよいかどうかと聞いてきました。何せ、16年間も教会に行っていなかったものですから。

その時なぜ『どうぞ』と答えたのか、よくわかりません。いろんなことがあって人生に何か物足りなさを感じていたのです。以前、モルモンの家族の隣に住んでいたことがあります。私たちは教会へ行きませんでした。私の心にはいつもふたりの息子がまだ祝福を受けていないことと、一度も教会に行ったことがないことが浮かんでくるのでした。

妻はモルモンではありませんでした。クリスチャンではなかったのです。妻も何か満たされないものを感じていました。

間もなくホームティーチャーからの連絡が入り、定期的な訪問が始まりました。これが契機となって何カ月にもわたる変化の日々が訪れ、私たち家族は永遠に向かって変わり始めたのです。

やがて私は神権会に出席し始めました。始めのうちは時折出かける程度でしたが、だんだんと毎週出席するようになりました。そして知恵の言葉の問題もやっと克服することができました。5歳の一番上の息子が日曜学校に参加するようになりました。また、什分の一も少しですが納め始めました。妻は私をいろいろ助けてくれましたが、まだ教会には関心がないようでした。

そのようなある日、ふたりの宣教師が私たちの家を訪れました。それから数カ月後、長老に聖任されたばかりの私は、自分の手で妻にバプテスマを施し、教会員に確認したのです。その後私たちはワシントン神殿で家族の結び固めを受けました。」

彼は続けて話しました。「これまでのい

ろいろな状態を思うにつけ、私は監督会や長老定員会の会長会をはじめ多くの兄弟姉妹の愛と祈り、温かい援助の手を心にしみじみと感じます。

このように不活発会員に熱心な働きかけをしているワード部に属していたなんて、私たちは本当に祝福されていたと思います。長老定員会の会長（今は私とその責任をいただいています）が、活発化を特に心がけて下さったこと、またステーキ部長会の方々までが私たちに個人的な関心を向けて下さったことを、うれしく思っています。」

予言者エゼキエルはこう警告しています。

「あなたがたは……群れを養わない。

あなたがたは弱った者を強くせず、病んでいる者をいやさず、傷ついた者をつつまず、迷い出た者を引き返さず……」（エゼキエル34：3-4）

ロサンゼルス空港まで、ある多忙なラジオ放送局の方と車を走らせた時のことです。私は、このアダムソンという名の兄弟もその奥さんも教会員の家庭に生まれながら、一度も教会に出席したことがないことを知りました。パーティーなどのおつき合いや週末の娯楽、それに忙しい仕事から逃れて旅行をすること、これらが彼らの生活でした。

結婚8年、3人の子供に恵まれて生活していた彼らは、自分たちの生活を考え直し始めながらも、取り立てて何もしませんでした。

何組ものホームティーチャーが訪れては去っていきました。そしてまた新しいホームティーチャーがやって来ました。今度は本物の羊飼いでした。やがてこの新しいホームティーチャーは、彼に一度教会に来るよう勧めました。しかし、アダムソン兄弟は、タバコやアルコールをやめることはできないと答えました。知恵の言葉は守らな

いという彼の決意は固いものでした。そして、そのことで教会が受け入れてくれないのなら、それで結構と言うのです。ホームティーチャーは答えました。「よくわかりました。では私がお迎えにあがりましょう。」

日曜日、アダムソン兄弟は教会に出席しました。タバコの臭いのしみついた自分を嫌ってだれか逃げ出すのではないかと思っていました。でも何も起こりませんでした。「集会の祈りや責任を頼んでくるだろう」と思っていました、やはり何も起こりませんでした。

ホームティーチャーは日曜日の朝に彼に電話を入れませんでした。彼に行かない言い訳を言わせる機会を与えないようにするためです。直接家に行って、「準備はよろしいですか」と声をかけるのです。こうして、1年以上もホームティーチャーは毎週迎えに寄りました。

アダムソン兄弟は家族で「奇しきみわざ」を読み始めていました。その本を通して、教会には知恵の言葉だけではなく、ほかにもいろいろな教えがあることを知りました。そして自分の生き方に関することをもっと聞きたいと思うようになったのです。（また、自分が知恵の言葉を守っていないので、教会は自分に何も与えてくれないのだと感じていました）

間もなく、この夫婦はこの教会が恐れ教会ではなく、愛の教会だということがわかりました。彼らは救い主と天父の使命について、また悔い改めについて学びました。そうすると、自分たちが生まれた時から属していたこの教会のことを誇りに感じるようになり、知恵の言葉がそれほど深刻な問題ではなくなってきたのです。彼は習慣を改めるのにそれほど苦しい思いをしなくてすみました。こうして、数ある福音の原則が今では彼らの生活の大切な部分となって

いるのです。

アダムソン兄弟は言っています。「気がつくとは私は私たちの新しい礼拝堂を建てるための働きかけをしていました。そして、ある日、私は監督にこう耳打ちしました。「もう大丈夫です。頼まれればお祈りもできます」と。」

救い主はペテロにこう教えられました。「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい。」(ルカ22:32)

教会員は教会の加護の下に置かれます。すなわち、正しい道を歩めるよう見守られ、導かれ、その名を書き留められ、養いが与えられるのです。(モロナイ6:4 参照)

アイダホのある小さなモルモンの町に、生まれてこの方ずっとモルモンという老夫婦が住んでいました。夫86歳、妻84歳で、夫はいまだアロン神権の祭司でした。教会に関心を向けないこの老夫婦のことを聞いた新しいホームティーチャーは、彼らに訪問してもよいかと尋ねました。

この老夫婦は心にかけてくれる人がいることを知って大喜びでした。ホームティーチャーが福音の原則を説くと、ふたりはよく聞いてくれました。こうして86歳のこの祭司は長老となり、妻と共に神殿に入り、この世と永遠にわたって結婚をする機会に恵まれたのでした。

もしも思いやりの深いホームティーチャーがこの家庭を訪問していなかったら、彼らは恐らく福音の本質とも言える数々の祝福を受けずに世を去ったことでしょう。もし心あるホームティーチャーがずっと前に現われていたなら、この老夫婦の子供たちが巣立つ前から、彼らに手を差し伸べることができたでしょう。でもこうしてホームティーチャーが最後に勇気を出して訪問してくれたことを、ふたりは心から感謝していました。

真の教えからそれてしまった人々というのは、心に何かむなしいものを感じているものです。そうした人の心には、わずかながらも真理がまだ息づいています。名声や富、この世的な快樂は、真理に取って代わることはできないのです。

救い主は弟子たちの真ん中に幼な子を立たせて、幼な子のようにならなくては天の王国に入ることはできない、と教えられました。主はこう言われています。「人の子は、滅びる者を救うためにきたのである。」(マタイ18:11) また、すべての罪人に悔い改めをさせるために来たのです。

マイケル・ウィアーは次のように言って



います。

「私は結婚に失敗しました。私の生活は教会の教えとは正反対のものでした。私は不活発な会員でした。教会に戻る力もないと思っていました。私は事業で成功し、高級車を乗り回し、ぜいたくな服を着るといった、世の人が追い求めているすべてのものを持っていました。

ところがある日、同僚がケン・ウィーラーという人物を雇ったのです。私は彼の振る舞いから、モルモンだとわかりました。私たちは親しくなり、私は彼に教会に誘われました。行ってみようかなと思っはみましたが、自分がふさわしくないことを知っていました。それで彼から誘いを受けるたびに断わっていました。内心は教会に戻りたいと思ったのですが、その勇気がなかったのです。

ある晩、アパートに独りでいると、私は何ともわびしくなり、とりとめもなく涙がこぼれました。私は主に祈り、助けを求めました。翌日、ケンは私に何かを感じたのでしょうか。どうしているかと声をかけてくれました。彼は私の肩に手をかけると、こう言いました。『主は今もあなたのことを愛しておられます。そしてこの私も。家にお戻りになったらどうですか。』これこそ私の祈りの答えでした。昨夜求めた主の助けだったのです。

私は家に帰りました。初めのうちは落ち着きませんでしたが、みんなの心遣いを感じて、だんだんと心が和んできました。今はもう、高級車を乗り回していませんし、ぜいたくな服も身につけていません。それなのに、今の方がずっと裕福だと感じています。」

彼は続けて語っています。「一度道を踏みはずしてしまうと、立ち戻りたいという思いが強くなるのに、その一歩が踏み出せ

ないのです。彼らは証を失ってしまったのではありません。自信をなくしているだけです。」

道をそれた人には友人が必要です。しかも羊飼いでえられる主を知っている友人が必要なのです。教義的な理由で教会に来なくなる人はめったにいません。彼らは心からの愛や親しみのある応対を待っています。そして心の傷や疑いの心を癒そうとしているのです。

ニーファイはこう証しています。「主なる神は決して暗いことを為したまわない。

主なる神は世のためになることでなければ何事もなしたまわない。あらゆる人を自分のところへ引きよせるために、自分の命をぎせいになさるほど深く世の人を愛したもう。……

主なる神が……『世界の隅々に至る一切の人々よ。われにきて……』と仰せになる。……

また、神がこれまでに神の与えたもう救いにあずかってはならないと仰せになったことがあるか。ごらん、そうではないのであって、かえってその救いを無料で万人に与えたまい、その上に悔改めをあらゆる人にすすめよとその民に言いたもう。」(II ニーファイ26：23—25, 27)

私たちは主の民です。神は私たちに、調律の必要な人を見つけ出し、教え、正しい音を取り戻せるようにすることを期待しておられます。私たちがキリストの純粋な愛に導かれて、そのような人のために正しい「ラ」の音を響かせることができますように。

神は生きておられます。イエスはキリストです。これはまさに主のみ業です。これらをイエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

私たちの時代の予言者、 ジョセフ・スミス



十二使徒定員会会長
エズラ・タフト・ベンソン

私は今朝、今の世の人々に与えられた近代の予言者の召しと使命についてお話してみたいと思います。

ジョセフ・スミスが神の予言者であること、また彼がモルモン経が世に出ると宣言したのは、1823年から1827年にかけて天使の訪れを受けていたからであるという主張が、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員の信仰の基になっていることはよく知られているところです。

この主張を聞いて、現代の世の中に天使が地上を訪れるなどというばかげたことはないかと反論する人々もいます。

聖書の中には、神は4千年以上もの間、啓示によって、また必要な時には天使の導きを通して、御自身の教会の業を導かれたということが載せられています。ヨハネはイエス・キリストの再臨に至るまでの末日の状態を述べた新約聖書の言葉の中で、主の再臨の前に、神の裁きの時が迫っているという警告が世の人々に与えられると予言しました。その警告は「永遠の福音」を宣言する天使によってもたらされるはずでした。ヨハネの言葉を読んでみましょう。

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め。』」（黙示14：6—7）

黙示者ヨハネの証を受け入れる人なら、新たな啓示、天のみ使いの訪れを待ち望んで当然です。

私たちは、この天のみ使いが19世紀の初頭、予言者ジョセフ・スミスに現われたことを厳粛に証します。神から遣わされた天使が、私たちの時代にひとりの予言者に姿を現わしたというこの宣言は、新約聖書にある予言と完全に符合するものであり、熱心に真理を探し求めているすべての人の心を引きつけるに違いありません。

主は、御自身の再臨の前の末日には真実の予言者と偽りの予言者の両方が出てくると言われた。そのことを考えますと、「ジョセフ・スミスは神に代わって話したのだろうか、本当の予言者だったのだろうか」という問いが重要な意味を持ってきます。

私はきょう、現代の予言者としてのジョセフ・スミスの使命を裏づける幾つかの証拠を挙げてみたいと思っています。全能の神の代弁者であるというジョセフ・スミスの断言を裏づける最もはっきりとした証拠は、神聖な書、モルモン経を世に出したことです。

モルモン経は古代アメリカ大陸の住民の記録であり、イエス・キリストがエルサレムで天に昇られた後、この大陸の人々を訪れ、教えと導きを施されたことを記したものです。この記録が書かれた最も大切な目的は、後の代の人々に、イエスがキリスト

にして神の御子であるということ信じさせることにあります。したがってモルモン経は、イエス・キリストの神性について聖書と対をなす証人であると言うことができるでしょう。

ジョセフ・スミスはこの古代の記録を、ヨハネが予言した通りに、天のみ使いから授けられました。ジョセフに現われたこの天使は、古代の記録がどこにあるかを教えました。その記録は金属の板に刻んだものであり、石の箱に入れて土の中に埋めてありました。時至ってこの若い予言者はその金属板と、それを翻訳するための道具を与えられました。そしてその記録は神聖な書物として世に出されました。

また、ヨハネの証にもあったように、この書物の中には「永遠の福音」が載せられています。そして今、宣教師によって世の人々に宣べ伝えられているのです。

モルモン経の起源に関するこの私たちの証が確かなものかどうかを試してみたいと思います。モルモン経を読み、今話した事柄が真実かどうかを天父に尋ねるのです。あなたの思いが真摯なものであるなら、私たちの証が真実であるという聖霊による確認を受けることができると約束します。数多くの正直でまじめな人々が、その確認が神から与えられたものであることを知っていると言っています。

真の予言者は、神から託されたメッセージを宣言するという明確な特徴を持っています。真の予言者は、神から託されたメッセージに対して言い訳をしたり、あざけりや迫害につながる反動を恐れたりはしません。

ジョセフ・スミスは年若い頃から真理を探求していました。既成の諸教会の間の混乱に直面して、彼はどの教会が正しいかを神に尋ねることにしました。その祈りに答

えて、まばゆい光の柱が現われたと書かれています。彼の言葉を読んでみましょう。

「その光が私の上に留った時、私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有したもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたもうのを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまひ、他のお一人を指して『こはわが愛子なり、彼に聞け』と仰せられた。」(ジョセフ・スミス 2:17)

ジョセフは2番目の御方、すなわちイエス・キリストに、どのキリスト教派が正しいかを尋ねました。そして、どの教派も間違っているから、そのいずれにも加入してはならないと言われたのです。

ある人々は彼の証をひどく非難し、偽りの話を作り上げ、彼に対する迫害を煽り立て始めました。若い予言者は古代の使徒パウロと同じように、決して自分の証を否定することなく、次のように言って貫き通しました。

「私は示現を受けたのであるからそれが事実であることを身を以て知っている。私は、神がそれを知りたもうことを知っている。私はそれを打ち消すことはできなかった。また敢て打ち消そうともしなかった。私は少くとも、本当にあったことを打ち消すならば神の怒りを受けて罪の宣告を受けることを知っている」(ジョセフ・スミス 2:25)

真実の予言者かどうかを判断する最後の試金石は、主のみ名によって語ったその言葉が成就するかどうかという点です。主はこの基準について、モーセに次のように説明しています。

「もし預言者があって、主の名によって語っても、その言葉が成就せず、またその事が起らない時は、それは主が語られた言葉ではなく、その預言者がほしいままに語ったのである。」(申命 18:22)

ジョセフ・スミスの予言で、この試金石

を用いることのできるものが数多く記録として残されています。ふたつの例を見てみましょう。

1832年、ジョセフ・スミスは、間もなく内戦によって北部諸州と南部諸州が分裂し、また、この戦いを期に世界中に戦争が広がり、ついにはすべての国を巻き込み、多くの人々の死と苦難を見るようになると言いました。特に、彼はこの悲惨な南北戦争がサウス・カロライナの反乱が始まると言いました。(教義と聖約87章) この予言が公にされたのは1851年のことです。

この国の学校の生徒ならだれでも知っているように、南北戦争はサウス・カロライナ州の連邦脱退という形で始まりました。そして他の諸州がそれに続いたのです。リンカーンがサウス・カロライナのサムター要塞の合衆国軍に物資補給を行なったのを期に、南部連合軍がサムター要塞への砲撃の火ぶたを切ったのです。1861年のこの運命の日が始まって、世界の人々は戦争による死と苦しみに見舞われてきました。

予言者ジョセフ・スミスは合衆国を流血の闘争から救いたいと念じていました。彼は奴隷制度の非道さを認め、それを廃止し、奴隷所有者には国有地売却金の中から補償するという案の採択を合衆国議会に強く働きかけました。しかし、その案は結局取り入れられることなく、南北戦争では50万近くの死者を出したのです。

もうひとつ、ある人に向けて宣言された特筆すべき予言があります。それは、ジョセフ・スミスが数人の人々の前で、スティーブン・A・ダグラスという若い判事に語ったものです。こう記されています。

「判事、あなたは合衆国大統領になりたいと考えるようになるでしょう。ただ、もし私や末日聖徒に対してその手を挙げるようなことがあるなら、あなたは全能者のみ手

が重くのしかかるのを感じることになります。そして、私があなたに証したことが真実であることを、その目で見ることでしょう。それは、きょうのこの話し合いのことが生涯あなたの頭にこびりついて離れることがないからです。」(History of the Church「教会歴史」5:394)

事実、スティーブン・A・ダグラスは合衆国大統領の座に野心を抱きました。そして、彼は教会を擁護することもできたのですが、1857年の政治演説の中で、教会を「思慮分別を備えた大多数の人々の中に存在する、いとわしく、かつ、思まわしい病巣」であるとして、激しく非難攻撃し、教会を排除するようにと議会に働きかけたのです。

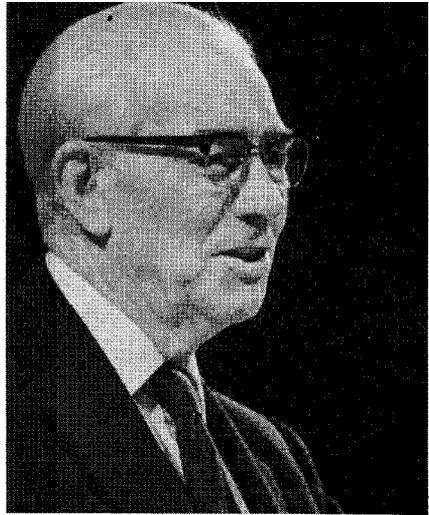
大統領最有力候補としてダグラスを挙げる人々もいましたが、選挙の結果は、選挙人得票でわずかに12票を得たにとどまり、人知れぬ開拓地から身を起こしたアブラム・リンカーンに敗北を喫しました。

その選挙が終わってから1年、ダグラスはまだまだこれからという時期に、失意の内にこの世を去りました。

主御自身が、真の予言者かどうかを見極めるために、定められた試金石が、もうひとつあります。その規準はつまり、「あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである」(マタイ7:20) というものです。ジョセフ・スミスの教えが結んだ「実」を幾つか考えてみて下さい。

末日聖徒イエス・キリスト教会はその会員からの什分の一や捧げ物によって、貧しい人、助けを必要としている人々の世話をしています。末日聖徒は「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」(マタイ25:40) という救い主の言葉を厳粛に受けとめています。

予言者ジョセフ・スミスは、女性独自の



組織ができるまで教会が完全に組織されたとはいえないと語りました。そして1842年、彼は扶助協会を組織しました。これは現在、世界最大の婦人組織となっています。

ユタ州は、婦人に選挙権を初めて与えた州のひとつです。

今朝の話にもありましたが、この教会は伝道の教会です。イエスは再臨の前に起こるひとつの時のしるしについて語られました。それは、王国の福音が、すべての国民への証として、全世界に宣べ伝えられるというものです。(マタイ24:14参照)

伝道という奉仕の業がすべての若い男性、そして多くの夫婦に求められています。訓練は家庭の中で始まり、教会の責任の中でさらに鍛えられていきます。若人への神権者としての訓練は12歳の時に始まり、生涯を通して続けられます。また教会が運営する訓練センターがありますが、そこで宣教師たちは、それぞれの国の言葉で福音を宣べ伝えるための教育と訓練を受けます。

訓練の効果のほどはどのようなものなのでしょう。最初の100万人を改宗するまでは117年を要しました。それから200万人に達するまでは16年、そして200万から300万になるまでは9年、300万から400万までは6年、400万から500万まではわずか3年でした。

この20年足らずの間に、300万の人が教会に加入しているのです。現在、世界71カ国で3万人の宣教師が働いています。多くの宣教師が自分の時間を捧げ、自費で、あるいは家族の援助を受けながら奉仕しています。ジョセフ・スミスを初め、その後を継いだ人々も、すべての教会員に教育の大切さを強調してきました。それは注目すべき幾つかの成果となって表われています。

カリフォルニア大学の学長を務めたクラーク・カー博士はこのように言っています。

「ユタ州は教育に関して、国内的にも、また国際的に見ても、傑出した位置にあります。……

ユタ州の3歳から34歳までの人々の就学率は、合衆国で最高のものです。

年齢層別の就学率を見ても、16歳から17歳の層を除いて、皆最高の数字を示しています。……

また、25歳以上の人々の平均就学年数においても、やはり最高です。……

総合的に見て、ユタは教育振興、指導者層の厚さという面で他の範となってきました。」(“New Areas for Leadership” 1974 University of Utah Commencement Address 『リーダーシップの新分野』1974年度ユタ大学学位授与式における講演 pp.2-4, ユタ大学発行)

ジョセフ・スミスに与えられた啓示の内、科学的な吟味の余地を持つものとしては、知恵の言葉として知られる、ある種の飲食物を禁じた健康の律法があります。1833年に与えられた啓示の中で、教会員はコーヒー、茶、タバコ、すべてのアルコール性飲料を口にしないようにと教えられました。

この戒めに従う人には、「そのへそに健康を受けその骨に髓を受けん」という約束が

与えられています。(教義と聖約89:18)

これまで末日聖徒を対象に、幾多の科学的な調査が行なわれてきました。そのひとつの調査は、ユタ州の末日聖徒の肺癌罹患患者数は、合衆国全体の平均と比較して65パーセント以下、心臓疾患については35パーセント以下という数字を報告しています。(Church News 「チャーチ・ニュース」1979年6月23日, pp. 5, 10参照)

州の総人口に対するモルモンの比率が2パーセント以下という、カリフォルニアで行なわれた研究では、末日聖徒でもある、カリフォルニア大学ロサンゼルス校のジェームズ・エンストローム博士がさらに驚くべき報告をしています。エンストローム博士の調査によると、カリフォルニアでのモルモンの肺癌罹患率は全国平均値よりも75パーセント、癌全体については45パーセントも低いというのです。彼はその研究調査のまとめの中で、「モルモンが健康のためになる、価値あることを行なっているのは確かです」と言っています。(ビル・デビッドソンによる引用 “What Can We Learn About Health from the Mormons?” Family Circle 『健康に関してモルモンから何を学ぶか』「ファミリー・サークル」1976年1月号, p. 82)

ジョセフ・スミスが知恵の言葉の啓示を受けたのは1833年のことでした。そして今日、医学がこの啓示の中にある知恵の確かさを立証しているのです。

そうです、確かに「あなたがたはその実によって彼らを見わかる」のです。(マタイ7:20) ジョセフ・スミスの教えが結んだ実は150年以上にわたる詮索、批判、迫害に耐え抜いてきました。このメッセージ、この教会、この民は彼の証と働きが真実であることを証するものとして、変わらず立ち続けています。昔の予言者たちが自分の故

郷で敬われるどころか、迫害され、殺されたように、ジョセフ・スミスも人々にあざけられ、殉教の死を遂げました。

ジョセフ・スミスは神から遣わされた予言者だったのでしょうか。確かにそうです。私たちは断固としてそのことを宣言します。「彼は神とその民の眼前に偉大なる生涯を送り、偉大なる死を遂げたり。而して、昔主の聖任したまいし者らのほとんどすべてが然ありし如く、彼の使命と事業とを己が血を以て結び固めたり。」(教義と聖約35:3)

私は皆さんに、神が再び天からみ言葉を語られたこと、そして、父なる神とその御子イエス・キリストの訪れは、イエス・キリストの復活以来の、この世における最も偉大な出来事であることを証します。神は生きておられます。イエスはキリストであり、世の贖い主です。キリスト教界の多くの人が言う、偉大ではあるが、単なる道徳の教師というような御方ではありません。人類の救い主であり、まさに神の御子なのです。

ジョセフ・スミスは生ける神の予言者であり、かつてこの地上に生きた予言者の中で最も傑出したひとりであることを証します。彼は神のみ手の器として、この神権時代の開幕を告げました。これはすべての神権時代の中で最も偉大な時であり、主の再臨に備えるための、まさに最後の神権時代なのです。

現在、私たちはこの教会の長として、生ける神の予言者を頂いています。この予言者こそが天父のプログラムを推し進め、神の子らに祝福をもたらすために必要な、すべての権能を有しているのです。

神が生きておられるように、私はこれらのが真実であると知っています。そして皆さんにこれらの証を残します。イエス・キリストのみ名によって、アーメン。

予言者に従う



十二使徒評議員会会員
マーク・E・ピーターセン

フェザーストン兄弟の祈りの中にもありましたが、末日聖徒が愛唱する讚美歌のひとつに、教会の大管長のための祈りの歌があります。フェザーストン兄弟が読まれたこの素晴らしい主題の歌は全世界の集会で歌われています。また、私たちの思いはみなこの歌詞と同じだと思います。

恵みたまえ 予言者を
かれ、年経て 老いるも
喜びもて 明るく
輝きつつ 変らず
在ますように 祈らん

予言者のため 祈らん
日ごと福音を 教えて
われらのため 導く力
かれに 与えて
みわざ強く させたまえ
(讚美歌259番)

この教会で、スペンサー・W・キンボール大管長ほどに愛されている人が、ほかにだれかいるでしょうか。世界中の教会員が彼のために祈りを捧げています。そのよう

な人がほかにだれかいるでしょうか。

しかし、キンボール大管長は多くの聖徒から愛され、敬われるだけでなく、自分自身も聖徒たちを愛し、尊敬しています。また聖徒たちのために祈り、固い決意の下、飽くなき努力をしています。彼はキリストのような優しさを備え、自分にして欲しいと思うような態度で、すべての人に接する人です。

主は彼に副管長として、聡明で偉大な人を与えられました。N・エルドン・タナー副管長、マリオン・G・ロムニー副管長、そして、新たに召された、ゴードン・B・ヒンクレー副管長がその人々です。ヒンクレー副管長はどこをとってもまさに神の人であり、深い知恵、力強さ、雄々しい信仰を備え、その堅忍不拔の精神はジブラルタルにそびえる岩山のようなものです。

この三人は献身ぶりにおいて大管長と変わるところがなく、常にすべてを主のみ業に捧げ、大管長を支え、あらゆる問題に対し、愛と深い知恵をもって補佐しています。

大管長会は教会のひとつの定員会であり、聖きみたまの力の下、完全に一致して働き、聖徒たちに靈感あふれる導きを与えています。

大管長会は教会の管理評議会でもあります。教会のすべてを管理しています。また、この神権時代のすべての鍵、権能、賜、祝福を有しています。

大管長は管理大祭司です。副管長は大管長から委任を受け、神の力によって地上に組織されたこの最高位の定員会の職務を遂行し、大管長と共に管理の業を行ないます。大管長会の4人はそれぞれに、主イエス・キリストの使徒であり、予言者、聖見者、啓示を受くる者でもあります。

神権の系統の中で、その次に位置するのが十二使徒評議員会です。十二使徒評議員

会の会員たちにも神聖な鍵が与えられていますが、それらの鍵をすべて行使できるのは大管長だけです。その特権が与えられるのは、地上で一時代にひとりの人だけだからです。十二使徒もまた大管長の委任の下に働きます。彼らは大管長から責任を受け、全力を尽くしてそれを果たします。

この現代の教会に使徒を初めとする予言者を置かれたのは、ほかならぬ主御自身です。ですから、予言者、聖見者、啓示を受ける者として、大管長会、十二使徒会を支持する時の挙手は、決して無意味なものでありません。彼らは神によって選ばれ、権能を持つ者から正しく手を按かれ、聖任と任命を受けたのです。

彼らは、使徒パウロがヘブル人への手紙で言ったのと同じ方法で、アロンのように、神から召されました。(ヘブル5：4参照) 彼らは啓示を通して任命され、他の生ける予言者から聖任を受け、主イエスのみ名によって行なうためのすべての権能を託されています。

神は私たちの偉大な指導者を通して語り、そのみ言葉によって、御自分の民を導いておられます。「わが声にて言われるも、僕らの声にて言われるもみな一つなり。」(教義と聖約1：38) これは主御自身のみ言葉です。

確かに神の生ける代弁者であり、地上の管理大祭司である大管長は、予言者ジョセフ・スミスと同じように、神聖な賜を付与されています。大管長はジョセフ・スミスの衣鉢いぼつを継いで、この神聖な職にあるのです。

大管長は聖任されて、すべての鍵、賜、神権の権能を持っていますが、それらは、この末日に再び教会が建てられた時に、聖なる天使から予言者ジョセフ・スミスに与えられたものです。

教会の大管長はそのすべてを有しています。

この最後の神権時代のみ業は、他の方法をもって推し進めることはできません。ジョセフ・スミスがこれらの力をすべて墓の中に持って行ってしまったとしたら、どのようなことになっていたでしょうか。神は正しい方法で権能を受けた人を通してしか働きをなされません。ですから主のみ業は止んでしまったでしょう。

皆さんは昔アモスが、主はその僕である予言者によらないでは、何事もなされないと言ったのを御存じでしょう。(アモス3：7参照) また、神が神聖な権能も、主のみ名によって語り、行なう権能も与えずに、予言者を地上に遣わされたことがあったでしょうか。

古代のキリストの教会に予言者や使徒を置かれたのは、救い主御自身ではなかったでしょうか。彼らが召され、聖任されたのは、「聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ」るためではなかったでしょうか。(エペソ4：12)

パウロが言ったように、救い主が隅のかしら石であり、彼らが真の教会の土台だったのではなかったでしょうか。(エペソ2：20参照)

彼らは「わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さに」至るまで、教会に存在し続けるのではなかったでしょうか。(エペソ4：13)

また、私たちが「もはや子供ではないので、……様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることが」ないという状態になれるように、存在し続けるはずではなかったでしょうか。(エペソ4：14)

そのような導きが必要なことは、実際に様々な教の風が聖徒たちを襲い、偽予言

者が出て「だまし惑わす策略により」（エペソ4：14）人々に教えたペテロやパウロの時代も、今の時代も同じです。

現代の聖徒たちも、古代の教会員たちと同じように、予言者を通して与えられる神の教えを必要としています。この神権時代に生きる私たちも、靈感を通して与えられる導きと神の絶えざる教えとに頼って、神のみ業を進め、完成への道を歩まなければなりません。

現代の状況は、多くの点で古代と非常に似通ったところがあります。当時と今と、人々のものの考え方に本質的な違いはありません。不道德な行ないを含めて、基本的な問題は同じです。

主は現代の教会の中に予言者を置かれましたが、彼らの使命は古代の予言者たちの使命と同じものです。

過去の時代の聖徒たちのように、現代の私たちも予言者の声に耳を傾けなければなりません。どちらも同じ教会、信仰であり、救いの教えも同じです。

古代の人々は、自分たちの指導者をただの漁師、天幕作りに過ぎないと見るような目を捨て、彼らの神聖な召しを心から受け入れました。なぜならその指導者たちは、神の選ばれた僕としての新たな働きを主御自身から与えられたからでした。私たちも現代の予言者に対して、過去の職業や個人的な行ないではなく、神の僕としての今の姿を見るようにしなければなりません。

ペテロやパウロがそうであったように、現代の予言者たちも靈感を受けています。彼らの召しも同じ神からの召しです。神御自身が私たちに与えて下さった指導者なのです。神は彼らを、特にこの時代のために立てられました。私たちはその指導者に不従順でいてよいのでしょうか。

私たちは非常に難しい時代に生きていま

す。悪魔は敢然として聖徒に戦いを仕かけています。悪魔は私たちをありとあらゆる形の誘惑、敵意、偏見、墮落で取り囲もうとしています。

悪魔のやり口は予言者ニーファイもはっきりと言っているように、非常に狡猾です。こう書かれています。サタンは「ある人々の心に入って荒々しい行いをさせ、またこの人たちに善い事を怒らせる。

またほかの人々をなだめ、この人々をすかして肉欲をほしいままにさせるから、その人々は『シオンの中では万事よろしい。シオンは栄えて実に何事もみなよろしい』と言う。このように悪魔はこの人々をだまし、心を配って地獄へつれて行くのである。

悪魔はまたほかの或る人々にへつらってこの人々を迷わせ、地獄はないものであると言い、また悪魔はないものであるから私は悪魔ではないと言い、このように耳にささやいて一度かかったら決して逃れられない恐い鎖でとうとう縛ってしまう。」（II ニーファイ28：20—22）

皆さんのこれまでの人生で、今ほど誘惑の多い時代があったでしょうか。多くの大人が、自分たちが成長したのがこんなに墮落した時代でなくて、本当によかったと言っています。

大人たちはこれから成長していく若い世代の人々に、彼らの前に立ちはだかるものすべてについて警告を発しています。麻薬性の乱れ、また、映画、雑誌、新聞等に見られる退廃的な現象を初め、様々な形の誘惑があります。

兄弟姉妹の皆さん、それでは安全な場所は一体どこにあるのでしょうか。教会、そして私たちを守ってくれる、イエス・キリストの福音という囲いの中以外に安全な所が果たしてあるのでしょうか。

現代は、わずか8人を残し、すべての人

が洪水で滅ぼし尽くされたノアの時代と、非常に似たところがあります。

そのような洪水があったかどうか疑いをさしはさむ人がいますが、私たちは現代の啓示によって、それが実際の出来事であるということを知らされています。その啓示が与えられてからすでに1世紀以上の時が流れています。ノアは人々に悔い改めを説きましたが、骨の髄までかたくなだった彼らは、耳を傾けようとしませんでした。

私たちにもノアの時代の人々と同じように、予言者の警告の声が必要なのではないのでしょうか。私たちの、聖見者、啓示を受くる者に従おうという気持ちには、ノアの時代の人々に比べて少しでも勝るところがあるのでしょうか。私たちは彼らの過ちから何も学ぶことができないほどに愚かなのでしょうか。

聖典には、聞こうとしない人々がたくさんいると書かれています。しかし、主を心から信ずる人々は主の僕に従い、その警告の声に耳を傾けるとも記されています。邪悪な人々にどのような苦しみが下されようとも、忠実な人々には神のみ守りが与えられるでしょう。

神はノアとその家族を洪水から救われなかったのでしょうか。

また、リーハイの家族をエルサレムの破壊から救われなかったのでしょうか。

主は、もし私たちが神に仕えるなら、私たちを守り、栄えさせると言われました。

私たちはこれだけ邪悪な時代に生きていながら、現在の差し迫った状況を理解し得ないままではいるのでしょうか。私たちは、聖地に立つために必要な良識、適格な判断力を備えているのでしょうか。

また、私たちは実際にどのようにしてその備えを行なっているのでしょうか。そうです、予言者に従うことによってです。

私たちには、どのようなことがあっても敵の激しい攻撃から神の王国を守るという気持ちがあるのでしょうか。実際にどういう風にそれを行動に表わしているのでしょうか。予言者に従うことによってです。次のように聞かれた時、喜んでそれに応ずる準備ができているのでしょうか。

主の方に立つはだれか
心示すは今にあらずや
我らはただにそれを望む
主の方に立つはだれか
主の方に立つはだれか

もし私たちが主の方に立っているとしたら、主の予言者にも従うはずです。

私は皆さんに証します。彼らは神の人です。また、偉大な指導者スペンサー・W・キンボール大管長は、モーセ、イザヤ、ジョセフ・スミスたちが呼ばれたと全く同じ意味で、聖見者、啓示を受くる者、予言者であり、彼らがそうであったように、神聖な権能を授けられています。

私たちは自分自身と家族のために、また身を捧げて働いているこの回復されたイエス・キリスト教会のために、そしてまた天の祝福を得るために、主に仕え、その戒めを守ろうではありませんか。

私が十二使徒評議員会の一員となってから、ほぼ38年になりますが、その間6人の大管長に仕えてきました。私は彼らと共に集い、重要な決定がなされるのを見てきました。そして長年にわたって彼らを見、愛し、神聖なものを感じてきています。

私は自分の体験から、神の力が彼らに働きかけるのを見たことを証します。私たちが生きているのは啓示の時代であり、彼らが神から召された主の僕であることを知っています。彼らは神に代わって語る人々なのです。

主の僕たちに従うということは、彼らを召した主に従うということではないでしょうか。

逆に、もし主の僕たちに反抗の手や声を挙げたり、その教えをないがしろにしていたとしたら、それは彼らを御自身の僕として召された聖なる御方に刃向かうことになりはしないでしょうか。そのようなことが果たして許されるものでしょうか。

予言者に対する態度は、私たちが心の奥深く秘めている神御自身に対する思いが、そっくりそのまま表われたものと言えるのではないのでしょうか。つまり、体裁や見せかけを一切取り除いた、何の飾りもない、ありのままの姿の信仰なのです。

神を真実愛していると言いながら、その僕を拒むようなことができるものでしょうか。

本当に神を愛しているなら、主が油注がれた人を愛し、敬うはずですし、それが当然のことです。

彼らが子供の頃の姿を、その近所にいて知っており、別に何か特別神聖なものを感じた覚えもない、あるいは、次々と起こる世の中の様々な出来事を体験しながら、毎日平凡な生活を営んでいた頃の彼らを知っているというような場合はどうでしょうか。私たちは状況が変わっていることをはっきりと理解しなければなりません。

神は今や彼らをそうしたごく普通の生活の中から取り上げ、それまでとは違った新しい型の生活を与えておられるのです。神はみ業を進めるために、彼らに高い召しをお与えになりました。彼らの上には神から託された権能、予言という神聖な衣がかけられています。

彼らは新たな声をもって語り、天からの光によって導かれています。彼らはもはや普通の人ではないのです。彼らは油注がれ

た人々、選ばれた人々、それも全能の神によって選ばれた人々なのです。

これまで教会には12人の大管長、別な言い方をすれば12人の神の偉大な大祭司が出てきました。そしてその一人一人がみ業のためにその生涯を捧げてきました。その中のひとりとは殉教者として、暗殺者の銃弾に倒れましたが、ほかの人々は長く生き、死の間際まで信仰のために雄々しく働きました。

主はその忠実な僕たちについて、「これらの者は信仰によりて打ち勝った者であり、「この故に、すべての者は皆彼らのものなり。……彼らはキリストのもの、キリストはまた神のものなり。……これらの者は、神とキリストとがすべてを審きたもう者にて在す天にその名を誌さるる者なり。……その光栄は日輪の光栄にしてすなわち神の光栄なり。この神の光栄たるや最高の光栄にして……」と語っておられます。(教義と聖約76:53, 59, 68, 70)

主はその予言者たちを永遠に尊ばれることでしょう。なぜなら、主は彼らを神の相続人、しかもキリストと共同の相続人とされるからです。(ローマ8:17参照)主はその民である私たちに、彼らを敬い、支持し、従うように望んでおられます。私たちが心からの祈り、また誓約でもある、この素晴らしい讚美歌を、いつも心の底から歌うことができるように願うものです。

感謝を神にささげん 予言者の導き
末日に福音を 光とたまいぬ
ゆたかなみ恵みに われらは感謝せん
喜び仕えつつ いましめ守らん
(讚美歌170番)

主イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

神の業に 敵対するもの



七十人第一定員会会長
カーロス・E・エイシー

今回割り当てられた話のテーマを何にしたらよいか深く考えていた時に、私はある用事があって十二使徒定員会のひとりの方と電話でお話をしました。その時私は、「大会の割り当てにふさわしい話を選ぶように助けて下さいませんか」と頼みました。

彼は力づけるような声で「お助けしましょう」と答え、それからこう言いました。「カーロス、祈ってごらん下さい。」

私は多くの祈りを通して得たことを皆さんにお話ししたいと思います。祈りの気持ちを持って従順に、へりくだってお話ししたいと思います。

1857年11月1日、ジョージ・A・スミス長老は実に印象的な説教をしました。彼はその中で次のような中国の古い寓話を引用しています。

「ひとりの旅人が田園地帯を抜けて、繁栄をきわめた大きな都にやって来ました。彼はその都を眺めて案内人に言いました。

『この住民は心の正しい人々に違いない。これほど大きな都だというのに、小さな悪

魔が一匹しか見あたらない。』

案内人は答えて言いました。『それは間違いでございます。この都は完全に邪悪に包まれております。……ですから、すべての住民を従わせるのにたった一匹の悪魔がいれば、それで十分なのでございます。』

しばらく行くとでこぼこ道にさしかかりました。見ると、ひとりの老人が荒々しい形相をした7匹の巨大な悪魔に取り巻かれながら、丘の斜面を登ろうとしていました。そこで旅人は言いました。

『何てことだ！あの老人はひどい悪人に違いない。あんなにたくさんの悪魔に取り囲まれているなんて。』

すると案内人が言いました。『国中で正しい人間はあの老人だけなのでございます。何とかあの老人を正しい道からそらせようと、最も力の強い悪魔が7匹でやっきになっているのですが、それができないのでございます。』(Journal of Discourses「説教集」5:363-64)

この寓話を紹介した後で、スミス長老は次のように付け加えました。「悪魔はこの世を完全に思いのままにしているので、世の人々を支配するのにわずかな悪魔しか必要としない。」そして、「悪魔の全軍団はモルモンに的を絞っており、人の子らの心を扇動してモルモンをこの世から抹殺させることに専念している。」(「説教集」5:364)

サタンは、すべての神権時代において、あらゆる機会をとらえて大勢の神の子供たちを破滅へ導こうと企てています。サタン自身がその役を買って出ることもあれば、彼に従う人々を通して働きかけることもあります。例えば、モルモン経の中に、3人のキリストに背く者の話があります。3人共サタンに斯かれ、キリストを信じる人々

に敵対する説教をし、公然と神の教会を滅ぼそうとしました。人々を欺くために彼らが用いた手段は皆似かよっています。偽りの教義を教え、うそを言い広め、予言をばかげた伝説だと言い、教会の指導者たちが神の正道を曲げていると非難し、信仰などは愚かでむなししい望みだと言って誘いをかけるのです。(ヤコブ7 ; アルマ1章, 30章 参照)

キリストに反対した人々の話を読むと、彼らの考えが背教に陥っていく過程に驚きを覚えます。また、人々を巧みに誘惑したことに驚かされます。あるいは人々はなぜそんなにだまされやすく、そんなに簡単に迷わされてしまうのだろうかと思惑に思います。私たちはこのように驚いたり不思議に思ったりしながらも、反キリストの風潮を古代史の片隅に追いやってしまい、自分は無防備のまま生活する傾向があります。これは危険です。信仰を失い、霊的な意味で滅びるといった結果を招くこともあるからです。

1820年の春以来、ルシフェルは末日聖徒



とその指導者たちに執拗な攻撃をしかけてきました。反キリストや反モルモン、あるいは背教者のグループが次々と現われました。これらの多くはいまだに私たちを取り巻き、次々と悪質なうそや根拠のない非難を浴びせかけています。彼らは聖徒の信仰を打ち崩して証を奪う者であり、個人的な接触や印刷物、ラジオやテレビ、その他の手段を利用し、疑いの種をまいたり、真の信者たちの平和をかき乱したりしています。

2カ月前に私たちは、ある監督から心の痛む手紙を受け取りました。その手紙には、彼が改宗して間もない人の破門にかかわったことが書いてありました。この改宗したばかりの人は、ひとりの熱烈な背教者の影響を受けて、自分の証を失ってしまいました。ジョセフ・スミスや代々の予言者たちに対する疑惑を引き起こすために、この背教者は、教会の出版物の内容に変更が加えられてきたことを指摘したようです。

この背教者の用いた手段は、光よりも闇を好む人々の間に用いられるものです。彼らの論法で行くと、ルカの記録がマタイのそれとまったく同じではないから、あるいは、ダマスカスの道でパウロが受けた示現について使徒行伝の中に異なった記述があるから(使徒行伝9 : 1-9 ; 22 : 4-11 参照) 新約聖書を焼いてしまえ、ということになるでしょう。多くの背教者の生活には、現代の予言者と絶えざる啓示に対する信仰が欠けています。彼らは、現代の予言者と生きた信仰以外のものに救いの望みをかけようとするのです。

ここで次のような質問が出てきます。私たちはこのような悪意ある企てにどのように応じたらよいのでしょうか。やり返しま

すか。対応の仕方を提案したいと思います。この提案は救い主の教えに調和するもので、過去および現代の予言者の賢明な勧告とも一致するものです。

1. **信仰を奪おうとする人を避ける。**信仰を失なわせるような人は遠ざけることです。彼らが人々の心や頭の中に植えつけた種はガン細胞のように成長し、徐々にみたまを破壊します。神の真の使いは、破壊者ではなく、建設者です。私たちは全世界に宣教師を送って、世の人々が規則に規則を加えられてやがて完全な福音を受け入れることができるように、彼らを教え、助けているのです。(教義と聖約 98 : 12 参照) 改宗したばかりの人が次のように証しました。「私の前の教会は現世というひとつの章を与えてくれました。末日聖徒イエス・キリスト教会は、前世と来世に関する 2 章をそれにつけ加えてくれました。」

2. **戒めを守る。**ブリガム・ヤング大管長は次のように約束しています。「私たちのなすべきことは、前に向かって、また天を目指して進むこと、そして天父と神の戒めを守ることです。そうするならば神は私たちの敵を打ち砕いて下さいます。(Discourses of Brigham Young 「ブリガム・ヤング説教集」 p. 347) 神の律法に従うならば、私たちは「神の武具」で身を固め、悪魔の策略に対抗して立つことができるでしょう。

(エペソ 6 : 11—18 参照) さらに従順であるならば、聖きみたまの導きとみ守りを受けることができます。

3. **これまで勧告されてきたように、生ける予言者に従う。**教会のある指導者は教えています。「いつも教会の大管長に目を向けていなさい。そして、もし彼が何かするようにと言った時に、たとえそれが間違

っていても、言われた通りにするならば、主はあなたを祝福して下さるでしょう。……でも心配する必要はありません。主は決して主の代弁者を通して人々を間違った道に導くようなことはなさらないからです。」

(ヒーバー・J・グラント、マリオン・G・ロムニーによる引用、*Conference Report* 「大会報告」1960年10月、p.78) 神から聖任された者以外の人の教えを受け入れる時、それは地雷の埋めてある未知の野原を歩くようなものであり、私たちの身と霊を危険にさらしていることになります。(教義と聖約 43 : 2—7 ; 52 : 9)

4. **教義について論争しない。**主はこのように警告しておられます。「争いを好む心ある者はわれに属くものにあらずして悪魔に属くものなり。」(III ニーファイ 11 : 29) 正しい結論を得ようとする時にサタンの方策を用いるならば、それは矛盾したことになります。このような矛盾は心に不満を生じ、みたまを失わせ、敗北を招く結果になります。「われらは、自らの良心に従い、全能なる神を礼拝する特権ありと主張す。また、われらは、すべての人々にこの特権を許す。(信仰箇条第11条)

5. **聖典を調べる。**聖典を生活の指針あるいは羅針盤とするならば、横道へそれたり道を見失ったりすることは、まずないでしょう。(アルマ 37 : 44 参照) 鉄の棒とは神のみ言葉のことです。それにつかまっているならば、決して落ちることはないのです。

6. **教会の使命から注意をそらさない。**皆さんの注意を正しい道からそらせて、時間やエネルギーを浪費させようとたくらむ人々がいます。サタンは荒野でキリストを誘惑しようとした時にこの手段を使いました。救い主の断固とした答え、「サタンよ、

退け。」(マタイ4:10)は、私たちにとって良い模範となります。

7. **敵のために祈る**。キリストはニーフアイ人にこう言われました。「敵を愛し、のろう者を祝福し、憎む者に善を為し、汝をないがしろにして責め苦しむる者のために祈れ。」(Ⅲニーフアイ12:44; マタイ5:44; Ⅲニーフアイ12:10-12も参照) 十字架の上で救い主はこのように嘆願されました。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカ23:34) 真理を知りたくても、それがどこにあるか知らないために真理から遠ざかっている人がたくさんいます。(教義と聖約123:12参照)

8. **「純粋な宗教」を実践する**。クリスチャンとしての奉仕に携わって下さい。病

んでいる人や困っている人を助けて下さい。父親のいない家庭や夫に先立たれた姉妹の家を訪問して下さい。そして教会の内外を問わず、あわれみ深くあつて下さい。(ヤコブ1:27; アルマ1:30参照)

9. **今ある疑問の中には答えを得ることのできないものもあるし、また信仰によってしか受け入れられないこともたくさんあることを忘れない**。主の天使がアダムに尋ねて言いました。「汝何故に主に犠牲を捧ぐるや。」と。アダムは答えて言いました。「われその故を知らず、ただ主の誠命に従うのみ」(モーセ5:6) いつか私たちもモリヤの山に呼ばれ、事前に十分な説明もなしに愛するイサクをいけにえに捧げるように命じられることがあるかも知れません。信仰は福音の第一原則です。そしてそれは



進歩の原則なのです。

サタンとサタンに従う者が実在することを、専任宣教師以上によく知っている人は少ないのではないかと思います。なぜなら、宣教師は、罪との戦いの最前線で働く時に頭上をかすめて飛んでくる悪魔の放つ火矢にさらされるからです。しかしながら、私はすべての宣教師とすべての教会員に約束したいと思います。もし、今述べた9つのことに堅実に従うならば、皆さんは勝利を得、決して信仰と証を失うことはないでしょう。

同時に、私は次のように断言します。

1. 私たちのみ業に敵対するものの存在が、み業の神聖さを証しています。私たちがサタンの軍勢にとって脅威でなかったなら、彼らは力を結集して私たちに向かってくるでしょうか。

2. もし私たちがこの敵対するものと戦って勝利を得るならば、それらは私たちの人生を精練して清める役割を果たすでしょう。讚美歌の一節に次のようにあります。

「つらき試しのある時

わがあわれみ与えられん

試し汝をそこなわす

ただ黄金と屑とを分け
えらぶための手段なり」

(「主のみ言葉は」讚美歌96番)

救い主はさまざまの苦しみによって従順を学ばれました。(ヘブル5:8参照) ジョセフ・スミスに敵が与えられたのも、彼の経験のため、彼に「善からんため」でした。(教義と聖約122:7参照)

3. 私たちが泳ぎ慣れた水は、ジョセフ・スミスや他の人々が泳いだ苦難の川に比べれば、ほんの水たまりにすぎません。(教義と聖約127:2参照)

4. 敵がいくら力をふるったとしても、私たちの携わる業は正しく、必ず勝利をおさめます。初期の聖徒たちは次の言葉に支えられていました。「何人かよくかよわき腕をさし伸べて、神の命じたまえる水路を流るるミズーリの流を止め、またはこれを逆流せしむることを得んや。もし、よくこれを為し得れば全能の神が末日聖徒の頭上にいと高き所より知識を注ぎたもうを止むることを得ん。」(教義と聖約121:33)

ブリガム・ヤング大管長は言いました。

「モルモニズムに敵対する時、あなたはその成長を助けているのであって、決して妨げているのではない。全能の神がそう定められたのである。」(*Discourses of Brigham Young* 「ブリガム・ヤング説教集」)

信仰のへりを歩いている人々は、どうか中央の安全な道を歩むように努めて下さい。そのためには、指導者の勧告に耳を傾け、聖徒たちとの交わりを絶やさず、神の徳高き言葉によって自らを養うことです。信仰のない人に影響されて、正しい道からはずれたり、自らを滅ぼしたりすることのないようにして下さい。(モロナイ6参照)

私は、最も悪質な盗みを働く人々のために、すなわち貴重な証を人々からはぎとる盗人のために祈りたいと思います。そのような行ないを続けても、夜見る夢のむなしさと空虚さを味わうだけです。(II ニーファイ27:3, 使徒5:33—39参照)

神は私たちが罪と戦う時に助けて下さいます。私たちの数は少なく、支配をする領土は小さいかも知れません。しかし、「義と大きな栄光にかがやく神の能力とを以て武装し」(I ニーファイ14:14) 前進しようではありませんか。イエス・キリストのみ名によりお祈り申し上げます。アーメン。

「わたしの羊は わたしの声に聞き従う」



七十人第一委員会会員
菊地 良彦

兄弟姉妹の皆さん、私はこの会で皆さんの前に立ってお話ができますことを特権と感じると共に、へりくだる思いで一杯です。主のみたまを通して英語で皆さんに私の気持ちをお伝えできるよう祈っています。

私は、天の御父が生きておられることを全身全霊で知っています。天父はまことに生きておられます。天父は幕の彼方にいて、私たちの心からの祈りを聞こうとしておられます。天父は過去も現在も、子供たちに語っておられます。そして、天父はアメリカ大陸に住んだ人々に御子イエス・キリストを紹介されました。

モルモン経は次のように証しています。「……天から出てくるような声が聞えたが、群衆はこれが何を言っているか解らなかつたのであたりを見まわした。この声は荒々しい声でもなく、また高い声でもなかつたが、小さな声でありながらもこれを聞いた者たちの骨の髄までつき通るようであって、かれらは全身ことごとくふるえおののいた。この声はまことにかれらの中心にまで浸みわたり心が燃えるような感じを与えた。

さて、この声は三度まで聞えたが、かれらはこのたびはよく聞き分けるように心を注いで声のする方向へ目を向け、その声が出てくる天をじっと眺めた。

すると三度目にはその声の意味が解った。その声は、『わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け』とかれらに仰せになっていた。」(Ⅲニーフアイ11：3，5—7)

私は、この同じ天父が東半球でもユダヤ人に語りかけられたことを知っています。主イエス・キリストがバプテスマをお受けになった時のことを、聖書は次のように証しています。

「……すると、見よ、天が開け、神の御霊がはどのように自分の上に下ってくるのを、ごらんになった。

また天から声があつて言った、『これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。』(マタイ3：16—17)

1820年の早春のある朝、ニューヨーク州で、御父と御子が少年ジョセフ・スミスに姿を現わされました。ジョセフ・スミスは次のように証しています。

「私は自分の真上に太陽にも増して輝く一つの光の柱を見た。そしてその光の柱は次第に下りてきて、光はついに私の上にふり注いだ。

……そしてその光が私の上に留った時、私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有ちたもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたもうのを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまひ、他のお一人を指して『こはわが愛子なり、彼に聞け』と仰せられた。」(ジョセフ・スミス2：16—17)

私は、ジョセフ・スミスが父なる神と御子イエス・キリストにまみえたことを知っています。また、ジョセフは神のまことの

生ける予言者でした。現代のジョセフ・スミス、東西両半球における古代の弟子たちと同様に、私は天父の証、すなわち「ナザレのイエスはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。彼に聞け」と言われた言葉が真実であることを知っています。

ナザレのイエスはユダヤに生まれ、ガリラヤの海辺を、そしてパレスチナの野を歩まれました。私たちは、主御自身が友人ラザロの妹マルタに語った証に耳を傾ける必要があります。

「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。

また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか。」(ヨハネ11:25-26)

兄弟姉妹、私は心からこのことを信じています。この同じイエスが、地上に神の王国を再び建設するために必要なすべての権威と権能を、ジョセフ・スミスに授けられました。これにより、すべての人が御父の愛子の声に耳を傾ける機会を得たのです。

天の御父は私たちをこよなく愛しておられるため、愛する御子を通して、私たちが

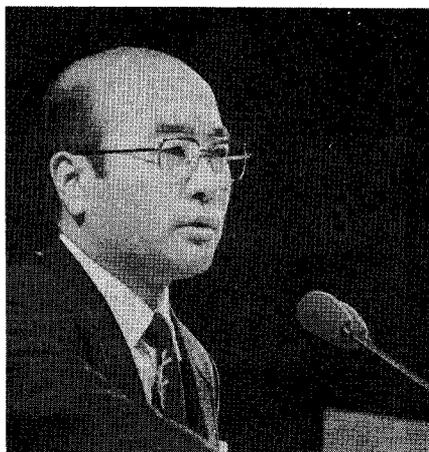


この世で進むべき道を示して下さいました。また福音の回復により、永遠の幸福を見いだす道を備えて下さいました。

兄弟姉妹の皆さん、日本と韓国でも多くの天父の子供たちが、天父の証を信じ、御子の言葉に耳を傾けようとしています。

私はこの大会に出発する少し前に、13年前に夫を失くしたひとりの未亡人から手紙を受け取りました。その手紙には次のようなことが書いてありました。「私は女手ひとつでふたりの息子を育ててきました。高校に通っている長男のバプテスマ会に出席して、温かい雰囲気にも包まれるのを感じました。私は聖徒の皆さんの温かい心に感動しました。そして心が高鳴り、またへりくだるのを感じました。息子が白い衣をまとって、水の中に入って行きました。ステーキ部長の奥様が、水に洗められることによって息子の罪が洗い流されることを、小声で説明して下さいました。その美しい光景に、涙がこみ上げ、心に喜びの声を上げていました。私が自分自身のことを考えたのはその時です。私はどうなのだろう。私はどうなのだろう。私も罪を洗い流されるのだろうか。罪が洗い流されて清くなるのであれば、私もバプテスマを受けたい。」

それから4日間、主に祈り求め、宣教師と共に学んだ彼女は、救い主のもとに来てバプテスマを受けました。それから少しして、彼女の末の息子さんもバプテスマの水に入りました。今、この阿南政子姉妹とふたりの息子さんは、東京神殿で、亡くなった父親と共にこの世から永遠にわたる結び固めを受ける準備をしています。悲しみと絶望から幸福と喜びへ、人々の心を変える福音の力は何と偉大なことでしょうか。ジョセフ・スミスに授けられた力が人々の心を変えることができるのは、何と大いなることでしょうか。



私は福音が回復され、神の真実の教会がこの地上に回復されたことを知っています。私はすべての友人たちに、来てこの命の水を飲み、次の御父の証を信じるようにお招きします。「〔こは〕わが喜ぶ愛子……わが愛子に聞け。」(Ⅲニーフай11：7)

私は、御父の愛したもう御子の声を聞きたい人々にとって、モルモン経が聖書と同じ親しさをもって語りかけることを知っています。モルモン経は神の言葉であり、人の心を変える力を持っているのです。

ここで、救い主の声を聞いたある韓国の兄弟の話をししましょう。長兄弟が妻とふたりの子供、それに母親を残して家を出てから9カ月が過ぎていました。そしてある日、光州で伝道していた宣教師が、長兄弟の家族を見つけました。家族は宣教師と勉強を始め、後にバプテスマを受けました。宣教師はこの家族と家庭の夕べのプログラムを始めました。

ある日、7歳になる上の娘が宣教師からモルモン経を買い求め、それに父親のために、彼女の短いながらも美しい証を書きました。それからふたりの宣教師がそのモルモン経を持って父親のところに行き、福音

が真実であり家庭が大切であることを証しました。父親は、見ず知らずのそのふたりが、なぜ自分や自分の家族のことを心配するのだろうと考えました。そしてその夜、彼はモルモン経を読み始め、あの声を聞いたのです。そして彼は、娘が書いた証を見つけました。こう書いてありました。

「アボジ、アボジ、アボジ。(父親の意)お父さんと家庭の夕べをしたいです。お父さん帰って来て。お父さんがすきです。大すきです。お父さん、モルモン経を読んでください。天のお父さまはお父さんをあいしています。」

モルモン経の言葉と娘の証に心を打たれた長兄弟は、宣教師にバプテスマを施してくれるように頼みました。こうしてこの家族は再びひとつとなり、長兄弟は光州第3ワード部の監督に召されました。彼はモルモン経から救い主の声を聞いた生ける模範として、今この会場に出席しています。

御子についての御父の証をすべての民に伝えようと働く宣教師は、何とかかけがえない存在でしょうか。皆さんの周りには、たくさんの方の長監督や阿南姉妹がいるのです。

私は、スペンサー・W・キンボールが主の予言者であることを知っています。大管長は、主の再臨が近いので歩みを速めるように、しかも今それを行なうように指示しておられます。皆さんは主の業のために全身傷だらけであるかもしれません。しかし、皆さんは次の山に登る備えができています。私たちは皆さんを愛しています。皆さんが必要です。

兄弟姉妹の皆さん、へりくだって予言者の言葉に耳を傾けて歩みを速め、別の長監督、阿南姉妹とこの美しい福音を分かち合おうではありませんか。へりくだり主イエス・キリストの聖なる名名により、お祈りします。アーメン。

理由を諭す^{さと}



七十人第一定員会会員
ポール・H・ダン

兄弟姉妹の皆さん、再びこうして皆さんの前に立ち、みたまを感じるができることをたいへんうれしく思っています。私たちは皆、同じみたまを享受し合う「福音の友」であります。

御存じのように、大会は霊を高揚させ、友と交わり、賢明な助言を受ける最高の時です。この大会でいろいろな助言を聞きながら、ある若いスポーツマンのことを思い出していました。この青年はほとんどのスポーツは手がけていましたが、スカイダイビングだけはやったことがありませんでした。そこでジャンプの仕方を教えるコースを取って講議を受けることにしました。

その内に、初めて空を飛ぶ日がやってきました。ところがこの青年、空を飛ぶのが少々怖くなり、講師のところに行って、こう言ったのです。「どうも、飛ぶ気がしないのですが……」

講師が言いました。「大丈夫だよ。危なくないように君にはふたつ余分にパラシュートを付けておこう。」

飛行機は離陸し、上昇を続けて900メートル上空にやってきました。青年は怖れと

震えを覚えながら、青空に向かって飛び出したのです。

急降下を続けながら、青年は600メートル辺りまで降りてきた時に、パラシュートのひもを引くことを思い出しました。そして、ひもを引いたのですが、パラシュートが開きません。次に、2本目のひもを引いたのですが、これも開きません。ついに、3本目のひもも引いたのですが、パラシュートは全く開かないのです。

青年はあわてました。すると、地上からひとりの男が上昇してきて、すぐそばを通りかかりました。パラシュートの青年はその男に向かって叫びました。「失礼ですけど、パラシュートについて何か知っていますか。」

その男は答えました。「いいえ。」そしてこう叫んだのです。「私は石油ストーブの爆発で飛ばされてきたんですけど、コールマン製の石油ストーブの使い方御存じありませんか。」

私たちはだれでも良い助言を必要としています。両親だけでなく、多くの若者がよくこう尋ねてきます。「福音を意義のあるもっと役立つものとするためにどのような教え方をしたらよいのでしょうか。」そこで見かねる考え方、あるいは原則であろうと、それを学び、行ないを改めるのに必要な5段階があると私は考えています。その大切な5段階について説明しましょう。

まず第一に、当人を福音の中にさらすことです。第二に、反復し、繰り返すことです。第三に、なぜそうするのか、その理由を教えること（理解させること）です。年齢の如何を問わずすべての人はただ福音を原則として受け入れるだけでなく、なぜ福音に従わなければならないのかを知りたいと思っています。これは教育の中でも最も大切な要素のひとつです。理由を理解させ

ることなしに、第4の確信、そして第5の応用はあり得ないからです。

若人に理由を聞かれて、「聖典にそう書かれているから」とか「指導者がこう言っているから」といった答えが多過ぎるように思われます。若人はなぜ聖典にそう書かれているのか、なぜ指導者がそれほど心配するのかを知りたいがっています。

大分昔のことですが、ある大学で私が実際に経験したことをここで少し述べてみたいと思います。

ある時、私は若人との特別な集会に参加していました。そこで私たちは神殿結婚について話し合いました。集会を終えて、私は3人の女性と一緒に歩きながら部屋を出ました。その内のひとは、特に私がよく知っている人でした。この女性は以前から教会員以外の人とデートをしていると聞いていましたので、人は普通、デートの相手と結婚するようになるということをそれとなく話し、その後でこう言いました。「君が神殿結婚をする日には、ぜひ結び固めをさせてもらいたいと考えているんですよ。」

すると彼女は私を見て、こう言ったのです。「でも、私は神殿では結婚しないかもしれません。」

「それはどうしてですか。」私は尋ねました。それから彼女は何ともげんそうな面持ちで私を見つめて、こう言いました。

「じゃ、なぜ私は神殿で結婚しなければならないのですか。」

さて、父親、母親そして教師の皆さんは、この質問に何と答えたらよいでしょうか。

ほとんどの教師と同じように、私も一瞬どう答えてよいかわかりませんでした。そして、聖霊の導きを願いながら、こう答えたのです。「それでは、あなたはなぜ神殿結婚をしないのですか。」

彼女は私をじっと見て、こう言いました。

「本当にその理由が知りたいのですか。」

「はい、そのわけを教えてください。」

「私のお父さん、知っているでしょ。」

「ええ、かなりよく知っているつもりですけど……」

彼女は答えました。「父は人前でいいかっこをしているだけなんです。確かに、素晴らしい人だと思えますが、少し偽善者のなどころがあります。一度、父が家で母や私たちに何と言っているか御覧になったらいいと思います。もちろん、父と母は神殿で結婚しました。でも私は、あのような結婚生活をしたくはないのです。」彼女は続けました。「それから、何々兄弟姉妹を知っていますか。」別の知人の名が挙げられました。

私は答えました。「ええ、知っていますよ。」

「ある時、私は彼らの子供たちのベビーシッターを引き受けたことがあります。彼らも神殿で結婚したのですが、とにかくあのような結婚生活は送りたいかと思っただけです。」そして、彼女はこう言いました。

「それでは何々氏御夫妻を御存じですか。」この御夫婦は私たちが住んでいる地域で最も模範的な夫婦だと言われている人でした。教会員ではありませんが、子供が10人います。彼女はこう続けます。「私はこの夫婦の家のベビーシッターもしたのですが、私は彼らのような結婚をしたいと思いません。」

さて、御両親、そして教師の皆さんは何と答えますか。それでもなお聖典にはこう書かれていますと言いますか。残念ながら、ほとんどの指導者はそのようにしか教えないのです。若人はなぜそうなるのか、その理由を求めています。

私はこの若い女の子の話聞きながら、正直言って何と答えてよいかわかりませんでした。そして、そばにいたもうひとりの女の子に尋ねました。「あなたはどう思いま

すか。」

彼女は福音がよくわかっている子でした。

その友達に向かって、こう言ったのです。

「ジャン、あなたの言っていることは少し不公平じゃないかしら。」

「どうして？」ジャンは尋ねました。

「だって、あなたは私たちが信じたり、教えたりしていることや、このような生活をしなさいと言われてることを必ずしも守っていない人の例を引っぱってきて、教会全体を批判しているんですもの。それじゃ、私の質問に答えて。最近、何か精神的に困ったこと、たとえばデートや試験で失敗したとか、悩みの原因となるような困った状況に陥ったとかであなたが苦しんでいる時に、お父さんが部屋に入ってきてベッドの端に腰かけて頭をなでながら、「ひとりで悩んでいるようだったら、お父さんが祝福してあげようか」と言われたことがある？」

ジャンは彼女を見て答えました。「私のお父さんはそんなことしてくれないわ。」

友達の女性は言いました。「私のお父さんはいつでも祝福を施してくれるのよ。」

それからふたりは彼女の父親が普段からどのようにして家族を教えているかについて話し合いました。彼女は家族の祈りについて触れ、その利点を8つか9つ、一息に説明しました。私にはジャンの気持ち少し変わってきたことがわかりました。「わかったわ。私もそのような結婚をしたいと思う。」

それから数カ月後、私は、その女性の結婚式を神殿で執り行ない、大きな感動を覚えました。あの集会からの帰りの夜に、彼女にひとつの大きな変化が訪れたのです。

結婚の前後に起こる誤った選択は反抗とか故意による過ちが原因ではなく、そのほとんどが誤った知識、誤解、理解不足によるものです。大抵の場合、夫婦が永遠の結

婚とはどういうものであり、なぜ大切なのか、またどうすれば永遠の結婚をすることができるかよく知っているならば、だれも正しい選択をするように教える必要はありません。反対に人から正しい選択をしないよう言い負かされることもないのです。

若人の皆さんにお尋ねしたいと思います。皆さんは神がなぜ私たちに制限を加え、あることをしないように勧告し、助言し、そして命令を与えられるのか考えたことがあるでしょうか。神の戒めは気まぐれで与えられたり、テストのように人を試したりするだけのものでしょうか。それともある人にとっては大切だが、ある人にとっては関係がないといったごく大ざっぱなものでしょうか。

私はそうは思いません。神の戒めは賢明な父親が与える愛にあふれた勧告の言葉です。神が感情、感覚、体を有し、しかも愛にあふれた天父であるということから考えてみても、ほかに考えようがないのです。神が戒めを与えられる唯一の理由は、私たちを愛し、私たちに幸せになってもらいたいからです。純潔を守ることはその最もよい例だと思えます。純潔を守ることはそれ自体が大きな祝福であり、永遠の伴侶のために自分の身を守ることはふたりの絆をさらに美しく、喜びの多いものにするのを、神はよく知っておられました。それは、目の前の一円玉をとるか、それともずっと後のダイヤモンドをとるかといった問題かもしれませぬ。結婚前の肉体関係によってもたらされる喜びはほんの一時的なものであり、結婚してから味わう大きな喜びとは比較になりませぬ。しかも結婚前の肉体関係は、結婚後の喜びの可能性をも破壊してしまうのです。

純潔を守ることは銀行に預金をするようなものです。自分の身を守ることは、自分

が捧げる唯一の人のために喜びを貯えることにほかなりません。それは、「私はすべてあなたのものです。ほかにだれにもこの身をあげたことがありません」と言う喜びでもあります。

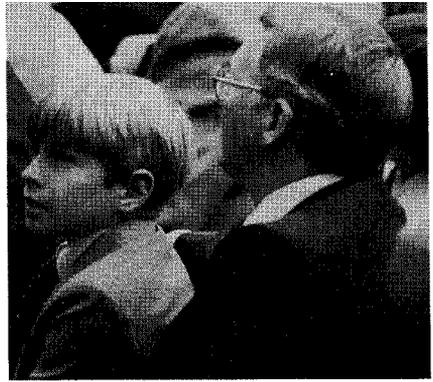
しかし、ある人はこう言うかもしれません。「すでに結婚する相手が決まっていたり、婚約も済ませ、結婚式を待つだけだったら、どうでしょうか。」

結婚は単なる儀式ではありません。誓約です。神と、そして自分の伴侶と交わす誓約の儀式です。その時まで待つことが真の愛を表わすことであり、互いに尊敬し合うことなのです。

ある人はまたこう言うかもしれません。「私たちはお互いに愛し過ぎるほど愛し合っていますので、これ以上待つことはできません。」しかし、愛には愛し過ぎるということはありません。利己心が強過ぎるので、神の勧告をないがしろにし、貞操を犯す利己心に強過ぎるということがあっても、愛には強過ぎるということはないのです。

いかなる愛であろうと、永遠の愛と呼ばれるようになるためには、その中に尊敬、信仰、信頼、賞賛、誉れがなければなりません。そして肉体的、感情的なものだけでなく、霊的、精神的なものがなければなりません。この世だけの結婚にしろ、永遠の結婚にしろ、こうした霊的、精神的な要素のない結婚関係は存在し得ないのです。メロドラマはこのような要素が欠落したために起こる悲劇を描いたものです。

皆さんの中で肉体的な愛に支配されやすい人がいるならば、その人は何としてもそれを抑制し、愛の他の要素に目を向けるべきです。「抑える」という言葉は、アルマがその息子シブロンに勧告を与えた時に使った言葉です。「一切の欲を抑えて愛に満ちよ。」(アルマ38:12) 情欲を抑えることによっ



て強さと力が増し、愛が深まってきます。馬を御す方法にふたつあります。ひとつは馬を殺すことであり、もうひとつは馬の欲を抑えてしまうことです。アルマは情欲を殺してしまえとは決していいませんでした。情欲は邪悪なものであり、持つてはならないものともいいませんでした。むしろ、私たちは欲するものを抑え、手にいれたい力を抑えるように努力する必要があります。

馬は人間よりも力があります。ですから、人が馬を抑え、その力を支配して役立つものとするのです。同様に、情欲も私たちより強いものです。そこでその情欲を抑えてその力を統御し、活かして結婚の絆を強め、永遠へと至らせるのです。人が馬を御すると同じように、情欲を抑えることを知らなければなりません。

肉体関係は浪費し、無駄に使うにはあまりにも美しく価値あるものです。ちょうど輝やく銀のスプーンのように、晩さん会の前にさびさせてしまっただけではもったいないではありませんか。

私たちが学ぶ時、「なぜ」と問いかけ、その理由を尋ねることが正しい態度を養い、行ないを変えることを覚えていただきたいと思います。神の恵みがあって、私たちが知恵をもって教え、賢くしかも正しい理解をもたらすことができるよう、イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン。

憐れみ



七十人第一定員会会員
マリオン・D・ハンクス

私はきょう、憐れみというテーマで話したいと思います。かの詩人は慈悲は「二重に祝福にみちている。与える者を祝福し、そうして受け取る者を祝福する」と言い、加えて「地上の力は、慈悲が正義を和らげる時、神の力に近いものとなる」と語りました。（「ヴェニス商人」第4幕、第1場。菅泰男訳）

今私の話を聞いている方は、慈悲の心は大切なものであると考えている人ばかりだと思います。しかし、単なる原則としての憐れみ、口先だけの憐れみは、行ないのない信仰、うわべだけの悔い改め、見せかけの愛と同様、何の役にも立ちませんし、力もありません。

何年前のこと、私はある人から少々居丈高な呼び出しを受け、新任の伝道部長としてその人に会いに行きました。なかなか立派な人なのですが頑固なところを持っている人でした。私を呼んだのは、ある宣教師が犯したひとつの間違ひについて話し合うためでした。

その間違ひというのも悪意でしたことで

はなく、ちょっとした誤解が元で生じたものでした。当の宣教師は誠意を尽くしてわびていましたし、私もその潔い態度に満足していました。しかし彼はそうではありませんでした。何らかの罰を、しかも公けの場で与えるようにと言って譲りません。そんなことをすればその宣教師に恥をかかせることになるのは目に見えています。彼は絶対に罪の償いが必要で、私ができるように取りはからわなければならないと言うのです。

私たちはお互いに相手を説得しようと思いました。正義は償いを求め、憐れみが正義の働きを奪うことはできない、というのが彼の考えでした。

私はそれも確かにその通りであり、彼のその言葉はモルモン経のある箇所に出ているものであると言いました。そこには、かつて自分もすがるような思いで憐れみを請い、その願いを聞き届けられた経験を持つひとりの神の僕が、今度は自分の息子を論じている言葉が書かれています。その息子は重大な罪を犯しながら悔い改めをせず、それを弁明しようとしていました。アルマという名の父親は息子のコリアントンに贖罪の意義とそれがもたらす結果について教えましたが、正義の働きを認めながらも、キリストの神聖な賜を通して与えられた「憐みの計画」について3度も証しています。

「憐みは悔改めをする人々に及ぶ。」

「憐みを受けるに足る一切の人々に憐みが及ぶ。」（アルマ42：23、24）

「悔い改めもまた許されている。憐みは悔い改めを要求する。そうでなければ、正義は人に要求して律法をきびしく行ない……」（アルマ42：22）

コリアントンは父親の言葉に従って悔い

改め、罪の赦しを得ました。そして、「この偉大な憐みの計画がこの国の民にも及ぶように民が悔改めをするため」再び伝道活動に戻ったのです。(アルマ42:31)

コリアントンの罪は大きなものでしたが、その宣教師の場合は、悪意によるものでもなければ、それほど大きなものでもありませんでした。それで私は話し合いで解決がつくと思っていたのですが、そうは行きませんでした。

私を呼んだその人はテーブルの上に身を乗り出すようにし、激しい口調でこう言いました。「正義を要求します。」

私は静かに、「憐れみを望みます」と答えました。

彼は3回も、声高に「正義を要求する」と繰り返しました。

彼は段々と熱を帯びた口調になってきましたが、私の方はその度に声を落としながら、静かに「憐れみが必要だと思います」と応じました。

結局私たちは、然るべき制裁を加えるか憐れみを加えるかを決めるのは私の責任であるということを確認してその話し合いを終えました。

その彼も今ではこの世の人ではなく、永遠の世界において報いを得ています。彼のことを思う時、心に敬愛の念を覚えます。私は彼の人柄がよくわかり彼が好きになりました。そして彼にも私たちと同じように、キリストが罪を悔い改める人に約束された憐れみが必要なのだということを知ることになりました。

「正義です」「憐れみです」と言い合ったあの時のことをよく思い出します。

そして最近のことですが、今話したことがあった場所から地球を半周した所で、私



はもうひとりの立派な男性と同席する機会を得ました。彼が入ってくると、部屋の中には、明るく、また暖かでもとても楽しい雰囲気がかもし出されました。彼は教会に入る前と後の自分の生活について話してくれましたが、私は非常に興味深くその話を聞きました。この教会に入る前の彼は名ばかりのクリスチャンで、荒くれ男たちに交じって激しい労働をしていました。そして彼には人につられるとどんな悪い習慣にでも身を染めてしまうところがありました。また奥さんや子供たちのことを顧みることもなく、かえってうるさがるという風でした。その上、ひどく健康を害していたのです。

そしてある時、ふたりの青年が彼の家のドアを叩きました。彼らは主の代理人でした。ふたりは彼と彼の家族に、永遠の真理のおとずれを伝えました。イエス・キリストの福音と教会の回復について、また、神の目にはすべての個人、家族が大切な存在であること、神の計画を通して知ることができる人生の目的と意義、家族の絆は永遠のものにすることができるということ、そしてそれらが真実であるかどうかを自分で知るための方法が備えられており、熱心に

求める人には聖霊による証が与えられるということなのです。

彼はその言葉に耳を傾け、信じました。そしてすぐに悪い習慣を捨て去りました。奥さんと子供たちもそれにならい、新しい生活が始まりました。彼らは学び、祈り、主をあがめ、教会員となりました。そしてみたまの光の中に生きようになりました。仕事の方も良くなり、新しい機会が与えられ、信頼されて周りの評判も打って変わって良くなりました。

彼は話の最後に確固とした非常に印象的な言葉を残しました。その中には一片の自意識も見られませんでした。また決して大言壮語をしたわけでもなく、二心があって言ったのでもありませんでした。彼はこう言ったのです。「私にもひとつだけ主に似たところがあります。それは持ち前の憐れみ深さです。」

持ち前の憐れみ深さ。

聖典を読んでいながら、父なる神と御子もこの特性を有しておられるということに気がつかないような人はいないと思います。

天父は憐れみという特性を備えておられます。イザヤの時代、主は御自身の民に厳しい忠告と訓戒の言葉を与えられました。「彼らはそむける民、偽りを言う子ら、主の教えを聞こうとしない子らだ。

彼らは先見者にむかって『見るな』と言ひ、預言者にむかっては『正しい事をわれわれに預言するな、耳に聞きよいことを語れ、迷わしごとせよ……』と言う。」(イザヤ30: 9-10)

主は民が心をかたくなにして不法な行ないをし、主を拒み、俗世の権力に頼んでいることを挙げました。にもかかわらず、聖書には次のように書かれています。「それゆ

え、主は待っていて、あなたがたに恵みを施される。それゆえ、主は立ちあがって、あなたがたをあわれまれる。主は公平の神でいらせられる。すべて主を待ち望む者はさいわいである。」(イザヤ30: 18)

主は慈悲深くも私たちを待っていて下さり、憐れみをもって愛して下さるのです。予言者たちは主を「あわれみ深き父」と呼んでいます。(IIコリント1: 3) 彼らは主の「豊かなあわれみ」(Iペテロ1: 3)について語り、「悔い改めてその心をかたくなにせざる者は……憐れみを求むる権利を受く」(アルマ12: 34)と宣言し、神の「智恵……憐れみと御恵み」(IIニーファイ9: 8)を強調しました。そしてこれらすべての上に来るのが、天父は「いつくしみを喜ばれる」という証です。(ミカ7: 18)

天父は憐れみ深い御方です。

憐れみは救い主の特性でもあります。

主は御父から聞いたことを世に語りました。「わたしは……ただ父が教えて下さったままを話していた」。(ヨハネ8: 28)

聖典では、主は人のかたちをとり、「わたしたちの弱さを思い」やられ(ヘブル4: 15)、「神のみまえにあわれみ深い忠実な大祭司となって、民の罪をあがなうために、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった」と教えられています。(ヘブル2: 17)

寛大に受け入れ、苦しみを共にして下さる御方がおられます。この御方は誤解を受けて人々に拒まれ、例えようのない孤独感を味わわれました。また、貧しく「まくらする所」(マタイ8: 20)もなく、心の中には激しい苦しみと葛藤がありました。

主は寛容な御方です。

主は赦しを与え、やすらぎを与えて下さ

います。

救い主の特性は憐れみ深さです。

そして主は私たちにもその特性を身に付けるように求めておられます。

「あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ。」(ルカ 6 : 36)

私たちはミカを通して、人としての義務をすべて教えられています。私たちはへりくだって神と共に歩み、同胞の中であって正義を行ない、「いつくしみを愛」さなければなりません。(ミカ 6 : 8)

主は私たちが皆憐れみを必要としていることと、憐れみを受ける上で欠かすことのできない条件について、礼拝をするために神殿に上って行ったふたりの男のたとえ話の中で説明されました。ひとりとは自分が完成された義人であると誇らしげに祈りまし

たが、もうひとりの人は「目を天にむけようとししないで、胸を打ちながら言った、『神様、罪人(つみびと)のわたしをおゆるし下さい』と。」主はこの正直で謙遜な人について「神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった」と宣言されました。(ルカ 18 : 13-14)

主は激しく打ちのめされて道端に捨てておかれた人のたとえ話の中で、憐れみの意義を教えられましたが、その最後に、助けようと思わずに行ってしまったふたりの人と立ち止まって助けを与えた人について質問をしました。主はこの3人の内、強盗に襲われた人の隣人になったのはだれかと尋ねられました。次のように書かれています。

「彼が言った、『その人に慈悲深い行いをした人です』。そこでイエスは言われた、『あ



なたも行って同じようにしなさい。』(ルカ 10:37)

このように、神がして下さったように、私たちも憐れみを示さなければなりません。助けを必要としていない人はだれもいませんがそれだけ憐れみが必要とされる機会も多いということです。詩篇の作者はこう叫んでいます。「主よ、わたしをあわれんで下さい。わたしは悩み苦しんでいます。」(詩篇31:9)

人は皆悩み苦しんでいます。善を行ない、罪を犯さない正しい人は世にいません。(伝道7:20)

たとえ話の中でのことですが、救い主はひとつの重要な意味を持つ質問に答え、自分こそがその飢え、渇き、裸でいた者であり、家を失くし、病に苦しみ、獄に入れられていた者であると言われました。「あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ……旅人であったときに宿を貸し」と記されています。(マタイ25:35)

この世の苦勞、また、罪の汚れ、貧困、心の痛み、無力感、孤独、肉身を失った悲しみ、疎外感などの重荷に苦しんでいる人が無数にいます。キリストが約束された憐れみは、キリストを知り、キリストに頼る人に必ず与えられます。風と波を静められた主は、罪人や悩み苦しむ聖徒に平安をもたらすこともできるのです。私たちは主の代理人としてそのみ言葉を語るだけでなく、主に代わって、主がここにおられたらなさるように、主の最も小さな兄弟たちにみ言葉を実践するのです。

アジアのある難民キャンプに、かつては教務についていたひとりの若い女性がいました。彼女は国の中での残忍な殺戮を目にし、母親と共に隣国へ逃げたのです。彼女

自身もひどい暴行を受けて、この墮落した世の中ではもう二度と言葉を口にしまいと、心に固く誓っていました。それは彼女と無数の人々に加えられた非道な行為に対する彼女なりの抗議のしるしでした。5年以上もの間、彼女はひと言もしゃべりませんでした。そしてある時、彼女はこの教会の幾人かの教会員に会い、心を動かされたのです。その教会員たちは毎日、数カ所の難民キャンプで素晴らしい愛の働きをしていました。私たちに代わってそこで働いていたこの無私の精神の姉妹たちには、医学の心得があったわけでも、心に傷を負う人々を診る専門的な資格を持っていたわけでもありませんでした。この姉妹たちは彼女のために祈り、彼女の手を取って愛の言葉をかけました。すると彼女がそれに答えたのです。5年ぶりの初めての言葉でした。以来、彼女の口には言葉が戻ってきました。「静まれ、黙れ」(マルコ4:39)と言われた御方のみたまが傷つき波立つ心のただ中に注がれ、苦しみの風と波を静め、人に対する信頼と希望をよみがえらせたのです。

あの愛すべき兄弟は、憐れみへの道を見だし、謙虚な態度で「それは持ち前の憐れみ深さです」と語った言葉を体現してみせてくれました。私たちも彼が掲げた旗と同じ旗を掲げることができるようにと、自分自身と家族、そして皆さんのために祈るものです。

「だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座(みざ)に近づこうではないか。」

(ヘブル4:16)

イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

世界に広まる ジョセフ・スミスの証



十二使徒定員会会員
ジェームズ・E・ファウスト

1824年6月28日、金曜日の朝、場所はイリノイ州。じりじりと照り付ける太陽が上がってから大分なっていました。医師のウィラード・リチャーズとサミュエル・H・スミス、そしてほかに9人の人々がその日の朝の8時から、イリノイ州のカーセージとノーヴーをつなぐほこりっぽい道を歩き続けていました。重々しい雰囲気行列の中には2台の馬車が入っていましたが、その上に載せた荷を強烈な太陽の光から守るために、かん木で覆いをしていました。

馬車に積まれたその荷とは、身の丈1メートル80センチ、38年の歳月を生きてきたジョセフ・スミスと、彼の兄であり、上背ももう少しある、⁴⁴歳のハイラムのなきがらでした。

疲れた体でノーヴーへの道を進むリチャーズ医師と殺されたふたりの兄弟であるサミュエル・スミスは、前の日、顔を塗り鉄を持った暴徒たちにジョセフとハイラムが射ち殺された時のことを話していました。多分、身を守るためだったのでしょう。ふたりの犠牲者はリチャーズ医師とジョン・テイラーと共にカーセージの牢獄に泊まっ

ていました。そこへ、150人から200人もいようという暴徒たちがなだれ込み、目的のジョセフとハイラムを射殺したのです。

ふたりの死の知らせは、末日聖徒イエス・キリスト教会の本部のあるノーヴーに、すでに届いていました。遺体を載せた馬車と疲れた足をひきずる警固の人たちがノーヴーに入って来た時、数千人の市民が深い哀惜の情をもって一行を迎えました。

ノーヴー・マンションで馬車からそっと運び降ろされた、ふたりの血に染まった遺体は、頭からつま先まで、丁寧に汚れを拭き取り、たくさんある傷の部分には綿を詰め、薬を塗りました。その後、デスマスクを取り、質素で美しい服が着せられました。これらの準備が済むと、その夜は遺族を初め、生前親しくしていた多くの人々との対面に付せられました。そして明るく土曜日、悲しみに沈む1万人以上もの聖徒が、愛する予言者ジョセフと、その兄の祝福師ハイラムの遺骸に向かって、最後の別れを告げたのです。それから、ふたりの遺体は秘密の内に丁寧に埋葬されました。(History of the Church「教会歴史」6:614-31参照)

ジョセフ・スミスに敵意を持っていた者たちの中にはその恥ずべき行為に狂喜する者もあり、彼が回復し、自らの命を捧げたこの教会は、彼と共に滅びるだろうと言う人も多くいました。

しかし、敵にとっては驚きだったことでしょう。教会は死に絶えることもなく、ジョセフ・スミスが始めた業もその死と共に終わることはありませんでした。それから1世紀半の間に起きた事柄は、この並外れた人物ジョセフ・スミスが成し遂げた事柄の永遠性を雄弁に証しています。彼が回復した教会は世界各地で驚くべき成長を見してきました。そこから生まれた宣教師制度と福祉プログラムは、他の何ものにも勝って

優れたものです。その統治形態により、すべてのふさわしい男性会員には、神から与えられた神権の権能と権威が授けられますが、同時に、女性も男性と同様に高貴な存在であることを認めています。教会には啓示を通して与えられた健康の律法があり、現世における喜びについても、世の人々よりもはるかに恵まれた状態にあります。また教会は神の啓示によって諸々の鍵と、人の救いに関わる原則、生者と死者の双方に永遠の救いをもたらす儀式を授けられています。

これらのほかにも様々な理由がありますが、何百万という人が末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になっています。しかし真の教会員と呼ばれるには、ジョセフ・スミスが真理の啓示を受けた神の予言者であることを確信できるようにならなければなりません。父なる神と御子イエス・キリストがジョセフ・スミスに現われ、この地上にキリストの教会を再建するという召しを与えられたことを、一人一人が確信する必要があります。

私にはその確信があります。私は謙虚な気持ちで、ジョセフ・スミスとその働きに対する私の証を支える事柄について、幾つか皆さんにお話したいと思います。私の証は霊的なものであり、科学的なものでも、歴史的なものでもありません。予言者ジョセフ・スミスを通して地上に回復され、その後を継いだすべての予言者によって教えられたままのイエス・キリストの福音が、科学的な方法だけで完全に証明され得るものとは、私には思えません。それは信仰によって受け入れ、神の賜と力とによって理解されるべきものはずです。例えば、1833年2月27日にジョセフ・スミスを通して明らかにされた真理は、茶、コーヒー、タバコ、アルコール性飲料の有害性を説いてい

ます。そして今日、この教えが確かなものであることは科学的に証明されています。しかし、私が思うに、知恵の言葉（教義と聖約89章）にある偉大な約束は霊的なものです。そこには、知恵と知識の大いなる宝と、イスラエルの子供たちを過ぎ越していったように、さつりくの天使は私たちを過ぎ越していくという約束がされています。

（教義と聖約89：19、21参照）

ジョセフ・スミスが貢献した事柄で最も重要なのは、古代の記録を元にする、神のみ言葉を載せた神聖な書物すなわちモルモン経の翻訳と出版です。それが初めて世に出された1830年には、モルモン経は金属板を原版とし、南北両アメリカ大陸の古代の文明について語ったものであるという、ジョセフ・スミスの言葉の裏付けとなる科学的な証拠や歴史的な証拠は何ひとつありませんでした。しかし今日ではそうした外的な証拠が数多く発見され、ジョセフ・スミスがモルモン経について言っていたことの真実性を裏書きしています。

しかし、私たちはそれでもなお、モルモン経に対する確信をさらに強いものとするために霊的な証を求めます。批評家たちは長年にわたってモルモン経に対する他の解釈を試みてきましたが、成功した試しがありません。その起源に関する様々な説があわのように浮かんでは消えていきました。そしてモルモン経は今もなお、イエスがキリストであることを証し、生き続けているのです。

何の偏見も持たず、物事を分析的に判断する学者たちは、ジョセフ・スミスのような、アメリカの辺境で育った無学の少年がモルモン経を書き著わすことはとても無理であると言っています。その中には非常に多くの高遠な概念が記され、また、様々な文体で書かれ、ひとつにまとめられた事

実を見ても、ひとりの人がそれを著わしたということは全く考えられないことです。真剣に尋ね求めるなら、信仰による導きを受け、ジョセフ・スミスは変体エジプト文字を刻んだ古代の金版からモルモン経を翻訳したことを信じるようになるでしょう。ジョセフ・スミスがモルモン経を翻訳したことに強い疑いを向ける説もありましたが、確かにその通りと認められて、今なお残っているものはひとつもありません。これまで1世紀半にわたって証拠が積み上げられてきました。そしてそれらの証拠は、ジョセフ・スミスが何の欠けるところもなく、率直かつ謙遜に真理を語ったことを、ますます強く断言してきています。

ジョセフ・スミスに対する私の証を申し上げましたが、私は彼が偉大な霊的な力と共に、人としての弱さを持っていたことも承知しています。ジョセフは自分を神のような人間だと言ったこともなければ、完全な人間だと言ったこともありません。彼が言ったのは、神から与えられた神聖な務めを果たそうと心からの努力をしてはいるが、自分も人間としての感情と不完全さを持つ、死すべき存在であるということだけです。1842年10月29日、ノーヴーに到着したばかりの幾人かの教会員に与えた勧告が記録として残されていますが、ジョセフ・スミスはその中で自分自身について言っています。「私は彼らに、自分もひとりの人間に過ぎず、完全だと思われては困ると言った。もし彼らが私に完全さを求めるなら、私もそれを彼らに求めなければならない。しかし、彼らが私や兄弟たちの弱さに耐えてくれるなら、私も彼らの弱点に耐えていこう。」(History of the Church 「教会歴史」 5 : 181)

私は彼の偽ることを知らない率直さに感銘を覚えます。というのは、彼は自分の人

間的な弱さを認めるだけでなく、自分に向けられた、愛に満ちた主の叱責の言葉をも記録していたのです。時には優しく、時には厳しく、そのような戒めの言葉が神から与えられましたが、その度に彼は神の代弁人として、それを他の人に口述筆記させていたのです。そのひとつの例が教義と聖約5章21節にあります。「^{しん}而して、われ今汝わが僕ジョセフに、悔改めをなしてわが前に一層まっすぐに道を歩き決してもはや人間のいざないに負けぬように命ず。」

ジョセフは完全さを求めて努力しましたが、決して自分を完全な人間だとは言いませんでした。途方も無い偽りをでっち上げ、人を欺き、だまそうというのなら、どうして自分の弱点をそのまま人に知らせるようなことをしたのでしょうか。自分の弱さを認め、神の慈悲深い懲らしめの言葉を明らかにするという彼の真つ正直な態度は、彼の誠実な人柄をよく伝えています。それは人が陥りやすい性癖や利己心とは真つ向うから対立する宣言であり、告白です。そのゆえにこそ、彼の言葉は確かな礎の上に立っていたと言うことができるのです。

彼とてもそのようなことをすれば、憎しみ、あざけり、非難の言葉が浴びせられるようになることは承知していました。それでも、ありのままの事実を話したのです。彼はその召しを受けて間もない頃、そのような困難な生涯に対して心構えをさせられていました。父なる神とイエス・キリストの輝かしい示現を受けてわずか3年後の1823年、彼は天使モロナイから、自分の名前がすべての国民、血族、国語の民の中に善くも悪くも語り伝えられることを聞かされていました。(ジョセフ・スミス2 : 33 参照) それでもなお、悪魔の執拗な攻撃と迫害とはジョセフを驚かし、「どうして、暗の力が聯合して私に逆らって来たのである

か。私がまだ幼い時に私に対して反対と迫害が起ったのは何故であるか」と言わしめたのです。(ジョセフ・スミス2：20)しかし、彼はそれらの困難と敵意とに打ち勝ち、かえって強さを増し加えていったのです。

ジョセフ・スミスも時として罪を犯すことがあり、人間的な弱さを持っていたことを、針小棒大に言うことは妥当ではありません。それらはどんな人にもある小さなことだったのです。神はジョセフとその働きを祝福されました。ある時、主はジョセフにこのように言われました。「誠に主かくの如く汝に告ぐ、わが僕ジョセフ・スミスよ。われは汝の爲したる捧物と、汝自ら弱きを認めたるを喜ぶ。そは、世の弱き者によりてわが智恵を示さんための目的に対し汝を挙げたればなり。」(教義と聖約124：1)

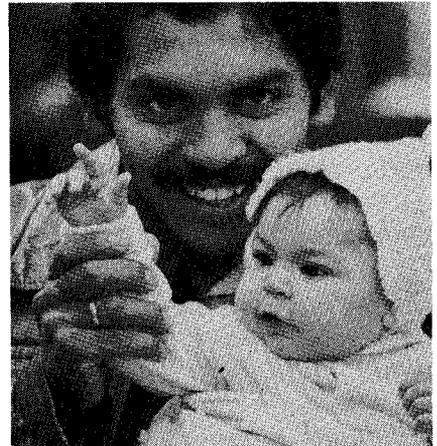
私はジョセフ・スミスと親しくしていた人々にも強く胸を打たれるものがあります。彼の性格は多くの人を魅了し、年齢、階層を問わずあらゆる人々を引き付けました。彼から靈感を受けた人々の中には、聡明、また献身的で才能に恵まれた人が数多くいました。彼らがジョセフ・スミスが進めた業に対して示した勇氣は、その犠牲、苦しみ、献身ぶりと共に、常人の考えをはるかに越えたものでした。

初めに、私は医者ウイラード・リチャーズについてお話ししましたが、彼のジョセフ・スミスに対する忠実さは典型的なものです。ジョセフはカーセージの牢獄に行く前に、リチャーズ医師にこう言いました。「『私たちが監房に行く時には、あなたも一緒に行きますか。』」それに対して、彼は答えた。「ジョセフ兄弟、あなたは川を渡る時にはそのように尋ねませんでした。カーセージへ来る時も、獄舎に入る時も尋ねませんでしたね。なのに、今私があなただを見捨てると思うのですか。私がどうするかお話ししましよ

う。もしあなたが反逆罪で絞殺されることになったら、あなたに代わって私とその刑を受けましょう。そしてあなたは自由になるのです。」ジョセフが『それはできない』と言うと、医師は『私はそうする積もりです』と答えた。」(History of the Church「教会歴史」6：616)

ジョセフ・スミスが殉教し、その後を継いだのは、実地に多くの経験を踏み、豊かな才能に恵まれたブリガム・ヤングでした。彼はジョセフ・スミスについてこう言っています。

「私が初めて彼の説教を聞いた時、彼は天と地とをひとつにしました。その頃の聖職者たちはだれも、天国や地獄、神、天使、悪魔について私に何も正しいことを言うことができませんでした。彼らの無知はエジプト人のそれと同じでした。私がジョセフ・スミスを見ていた時、彼は、比喩的に言うならば、天をその手に取り、それを地上まで降ろし、地を取ると、高く上げ、神に属ける事柄を簡潔明瞭に説き明かしたのです。彼の説教は見事なものでした。」(Discourses of Brigham Young「ブリガムヤング説教集」



この教会が1世紀半の間に成し遂げてきたことは、ジョセフ・スミスの話が真実であったということをはっきりと物語っています。この教会の進展ぶりは人々の驚異的のです。末日聖徒の多くはジョセフ・スミスとその働きに対する証を固く守っています。ジョセフの時代から始まって、何百万という人が、天父と御子にまみえ、イエス・キリストの純粋な福音を地上に回復したというジョセフ・スミスの言葉を、信仰によって受け入れ、聖霊によってそれが真実であることを確信してきました。

ジョセフ・スミスはこの世の生を終えましたが、これからも、彼の歴史について細かな吟味や粗探しがなされ、批判や疑問を浴びせられ、厳しく調べられていくことは疑いのないところです。しかし、彼の言葉の真実性に対する確証もますます強いものとなるでしょう。また、回復された福音を受け入れた人々の献身、決意もこれまでと同じように厳しい試しが与えられ、過去においても多くの人々が経験したように、大きな信仰の試しがあるでしょう。しかし、ジョセフがそうであったように、多くの人々は最後まで、彼によって回復された福音を忠実に守って生きていくことでしょう。時の流れと共に、ジョセフ・スミスはより大きな存在としてそびえ立ち、人々からますます大きな称賛を受けていきます。そして多くの人々が、彼が伝えてくれたメッセージと、彼が地上に回復したみ業の永遠の目的が神から与えられたものであるとの強い証を持つようになるでしょう。私もそう強く確信しています。

私の家系には、ジョセフ・スミスが進めた業が真実であるという証が、ひとつの遺産として代々受け継がれてきています。私はそれを幼い頃、母のひぎの上で学びまし

た。私の高祖父エドワード・パートリッジは、予言者ジョセフ・スミスが迫害の結果命を落とすことになるまでの数年間、彼と非常に親しくしていました。(History of the Church 「教会歴史」4 : 132参照) 彼はジョセフからバプテスマを受けました。そして、予言者に授けられた啓示によって、回復された教会の最初の監督として召されたのです。

彼はその召しのゆえに、無法な暴徒たちからひどい苦しみや屈辱を加えられ、辛い思いをしましたが、それでもなお、忠実さを変えることはありませんでした。その召しを与えてくれた啓示が真実なものかどうかを疑ったことなどは決してなかったと思います。予言者と親しかった人たちと同じように、彼もジョセフの思いと心をよく知っていました。決してだまされていたのではありません。その生き方、死に方を見れば、彼が偽りを言ったのでないことは明らかです。高祖父の献身、苦しみ、犠牲を見ると、彼がジョセフ・スミスは靈感された神の僕であると何の疑いもなく信じていたことがよくわかります。

私にはこの遺産に加えて、心の奥に秘めた確たる証があります。それは、予言者ジョセフ・スミスが神の器として、救い主が自ら地上に足跡を残されて以来人類に授けられてきた膨大な量の真理の言葉を、人々の前に明らかにしたということです。

2日にわたってこの説教壇から話されてきたことは、予言者ジョセフ・スミスによって私たちすべての者に贈られた遺産がさらに発展を遂げてきた、その延長線にあるものです。それは主イエス・キリストの導きのままに、人類を救い、昇栄させるために与えられたものなのです。厚い感謝の念と共に、よみがえられたキリストのみ名によってこのことを証します、アーメン。

「自分が何者であるか 思い起こしなさい」



第一副管長
N・エルドン・タナー

こうして皆さんと共に午後の集会に参加できたことをうれしく思います。今大会は、私がこれまでに経験した中で、最も素晴らしい大会のひとつだと感じています。大管長が欠席しておられる中で、私たちは特に主のみたまを必要としていたこととあります。主のみたまは確かに私たちと共にありました。私は説教をして下さった方々と、美しいコーラスを聴かせて下さった聖歌隊の皆さんに、心から感謝します。大会のそれぞれの部会において、私たちは教会員としてどのような行動をとるべきか学び助言と勧告とを受けました。デビッド・O・マッケイ大管長の時代に、大管長が大会に出席できないことがありました。その時、マッケイ大管長は副管長の私に、「タナー副管長、聖徒たちに自分が何者であるのか思い起こさせ、それにふさわしい行動をとるように教えて下さい」と言いました。この「ふさわしい行動をとる」ということは、今の私にとって非常に大切なことです。

皆さんに自分が何者であるのか思い起こしていただくために、信仰箇条をいくつか引用したいと思います。第1条に、「われら

は、永遠の父なる神と、その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず」（信仰箇条第1条）とあります。さて、確かに私たちはその通り信じています。しかし、自分が神の霊の子供であり、イエス・キリストが救い主であることを日々思い起こしているならば、それをどのように行ないに表わすでしょうか。信じていることを行動に移すでしょうか。もっと情熱を込めて行なうでしょうか、それとも何もせずにじっとしているでしょうか。きょうのこの集会の中で私はみたまの導きを強く感じることができました。私は今私の心に強く感じている、福音の中で何にも増して大切なことを申し上げたいと思います。それは、主の教えに従って毎日生活することです。皆さんにお願いします。人々に自分が何者であるのか思い起こさせ、それにふさわしい行動をとるように勧めして下さい。ふさわしい行動をとろうとすれば、神の戒めを守ることでしょう。私たちは、「永遠の父なる神を信ず」と宣言していますが、神が私たちの霊の御父であることを本当に信じ、それにふさわしい行ないをしてるでしょうか。また、「御子イエス・キリストを信ず」と言いますが、イエス・キリストが私たちの救い主であることを本当に信じ、それにふさわしい生活をしているでしょうか。そして、いかなる時にもこれらのことを心に留めたならば、それを行ないに表わすようになるでしょうか。

「われらは、正直、真実、貞潔、慈善、高德なるべきこと、およびすべての人に善を行うべきを信ず。」（信仰箇条第13条）私たちはいつも正直に生活しているでしょうか。真実、貞潔、慈善、高德を行ないに表わしているでしょうか。私たち教会の兄弟姉妹は、家庭において、子供や隣人と接する時において、あるいは会社において、そのような生活をしているでしょうか。この



信仰箇条をいつも心に留めて実践していくならば、それは何と素晴らしいことではないでしょうか。

ひとつの例を挙げて、私の考えていることをお話ししたいと思います。(私が以前に聞いた例ほど適切ではないかもしれませんが) 私がカナダのアルバータ州政府の代表としてテキサス州のダラスへ行き、多くの法律家を前に話をするように頼まれた時のことです。テキサス州知事は、私を次のように紹介しました。「タナー氏はモルモン教会の監督を経験され、現在はカナダのエドモントン支部の支部長を務めておられます。あの教会の監督であると御紹介すれば、ほかに何も申し上げる必要はないかと思えます。」この賞讃の言葉は私に向けられたも

のではありません。彼の周囲で役職を持っていた教会員に向けられたものです。彼らはそれほど信望を得ていたのです。私はその時こう思いました。「帰還宣教師が『私は戒めをきちんと守っている帰還宣教師です』と言えば、『ほかに何もお聞きする必要はありません』と言われるようになったら、どんなに素晴らしいことだろうか」と。

主はあらゆる人の生活を御存じです。その主から信頼されていると一人一人の神権者が自覚することができたら、それはどんなに素晴らしいことでしょうか。この教会の会員はそのようなふさわしい生活をするというきわめて重要な責任を負っています。そして、私たちの善い行ないを見て、人々が神を賛美するようにならなければならないのです。私たちは、毎日そのことを実践しなければなりません。この教会の4百万人の会員に加えて、福音すなわち福音の原則を実践するすべての人々が、正しく正直に行動し、あらゆる点で信頼される人間になることができたならば、人々は私たちに、それ以上の紹介は求めなくなるでしょう。

この大会を終えるにあたり、心から祈りたいと思います。これからはもっと正しい生活をしようと心に感じた人が、ひとり残らずその決意を行ないに表わすことができますように。また、正直に行動し、完全に十分の一を納め、自らを備えて、永遠の結婚と家族への結び固めを可能にする神殿へ入ることができますように。

兄弟姉妹の皆さん、私から皆さんにお願いすることは、よりよい生活をしようという決意を家庭に持ち帰り、生涯にわたってそれを実践することです。そして、人々の模範となって良い影響を与え、教会の大きな力となることです。これらすべてのことをイエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

「愛はいつまでも 絶えることがない」



副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

愛する姉妹の皆さん。タナー副管長、ロムニー副管長、そしてスミス会長から責任をいただきましたので少しお話ししたいと思います。扶助協会のテーマは、「愛はいつまでも絶えることがない」です。私はこのテーマに心から感謝しています。

昨夜、1856年に移住したウィリー隊とマーティン隊のふたつの手車隊について少し調べる機会がありました。併せて千人を越したこのふたつの隊は、スカンジナビアと英国からの改宗者の隊でした。彼らは合衆国に遅れて到着したため、アイオワシティーを発ってこの盆地への長い旅についたのは、時期的に非常に遅れていました。その結果、ふたつの手車隊はワイオミングで雪に見舞われ、道を拒まれてしまいました。ところが幸いにも、イギリスから帰る途中の数人の宣教師が一行のそばを通りかかりました。そして彼らは手車隊の聖徒たちの窮状を見るや、この盆地に駆け戻り、ブリガム・ヤング大管長に手車隊の状態を知らせたのです。その日は土曜日で、丁度10月の大会が行なわれていました。翌日曜日の朝、ヤング大管長は、この一画にあった旧タバナク

ルにおいて人々の前に立つと、次のように語りました。

「私はこれから本日を含め大会期間中に話をされる長老たちに代わって、この民にひとつの課題を与えたいと思う。それはこういうことである。……私たちの多くの兄弟姉妹が今手車を引いて平原を渡っている。おそらく多くの人々は現在、ここから700マイルの所まで来ているだろう。彼らもこの地に連れて来なければならない。そのために私たちは救援隊を送る必要がある。私が申し上げたい課題というのは、『彼らをこの地に到着させる』ことである。……

これが私の信仰であり、私が受けている聖霊の命令である。すなわち手車隊の人々を救うことである。」

ヤング大管長は、救援に向かう隊員と幌馬車と御者を募り、それからこのように述べました。

「姉妹の皆さんには、これらの手車隊にいる男性や婦女子のために毛布、スカート、靴下、靴など……フード、冬用のボンネット、ガーマントその他どのような衣類でも持ってきていただきたい。」

この呼びかけが行なわれたのは日曜日でした。そして2日後の火曜日の朝には、食糧と物資を積んだ16台の荷馬車が、27人の若者の御する16頭の強健なラバに引かれてこの町を出発したのです。

これが救援隊の派遣の始まりでした。その後も救援の荷馬車はあとを断ちませんでした。そして、男性が荷馬車とそれを引く動物を手配し、女性は自分たちの乏しい貯えの中から食物や衣類、毛布その他の必要な物資を集めてきたのでした。(Leroy R. Hafen, *Handcarts to Zion* 「シオンに向かう手車隊」 pp. 119—26参照)

私たちの歴史をひとつ残らず振り返ってみても、これほど雄々しい出来事はほかに

ありません。手車でシオンに向かったこれらの貧しい人々の多くは手足にひどい凍傷を負い、ある者は息も絶え絶えの状態で盆地にたどり着きましたが、その時、この地の婦人たちは彼らに家を開放し、食物を与え、傷の手当てをしました。そして、その長い厳冬の間中、彼らを養い励まし続けました。

「たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鏡鉢（はうはち）と同じである。」（Iコリント13：1）

その当時と同様今も、貧しい人々に援助の手を差し伸べ、寄る辺ない人々の友となり、飢えたる者に食物を与え、病人を看病している扶助協会の女性たちを、神は祝福しておられます。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」（マタイ25：40）主はこのように言うておられます。

ところで、異なったタイプの愛について一言お話ししたいと思います。

赦す、他人の欠点に寛容である、仲間を嫉妬したり悪く思う気持ちを自制する、といった意味での愛についてお話しします。

かつては大の親友だったふたりの女性がいました。ところが、一方の女性が彼女に落ち度はなかったものの、事故によって結局もう一方の女性の子供を死に至らしめた加害者となったのです。その子の死によってどちらの女性が一番苦しんだかは言うに難いのですが、死亡事故に巻き込まれた母親でない方の女性は、以来何年もの間、亡くなった子供に対してはもちろん、その不幸な事態における自分の責任について、それにおそらくは子供を失った母親の気持ち以上に深く悲しみ、涙を流してきました。我が子を失ったことを嘆き悲しむ母親が憎しみを感じたことは、よく理解できます。しかしながら彼女の方でもずっと前に、友人に罪はなく、友人も涙を流していることに気づくべきでしたし、仕返しよりもむしろ愛を寄せるべきでした。愛がなかったためにこの女性は心をむしばまれ、幸福を



失い、日夜心の苦痛と悲しみにさいなまれる結果となったのです。

「この愛はキリストの純粋な愛」(モロナイ7:47)であるとモロナイは教えています。カルバリの丘で十字架におかかりになり、苦しんでおられた贖い主が、御自身を残酷にも十字架につけた人々を見下ろして、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカ23:34)と言われたその愛です。

私の話をお聞きになっている人の中で、もし人に恨みを持ったり憎しみをおぼえている人がおられたならば、私はその方々に心を変える努力をするようお願いしたいと思います。必ず憎しみや苦々しさは消え去ります。しかし、愛はいつまでも絶えることはありません。(Iコリント13:8参照)

この問題にはもうひとつの面があります。私たちの間に批判の風潮が広がっていることです。これもおそらく時勢なのでしょう。私たちは、新聞の記事やラジオ・テレビの解説者の話から絶えず影響を受けています。私にはそれらの主たる目的があら捜しをすることのように思われます。批判的で、時には悪意のある非難も見られます。政治に携わる人々のあら捜しをします。また教会指導者の批判をします。私たちはだれしも完全ではありません。だれでも時には間違いをします。この世に生を受けて完全だった人はただのひとりしかいません。重責を担っている人々が必要としているのは非難ではなく、励ましなのです。方針を立てる人に反感を抱いていながら方針に従えるはずがありません。

皆さん一同に、若い方にも年配の方にも、舌を制して他人の批判をすることのないようお願いしたいと思います。人のあら捜しをすることは実に簡単です。しかし、よい面を積極的に認めることは、はるかに

気高い行為です。

ここで母親の皆さんにもうひとつ申し上げたいことがあります。最近の新聞で読み、悲しく思ったのですが、私たちの社会のある地域で高校生を対象に行なわれた世論調査によると、宗教の異なる人々に対して差別意識や対立意識を持っている徴候が見られたというものでした。その世論調査の信頼性については、私には何も分かりません。もしその結果が事実だとすれば、私は何と申し上げたらよいか分かりません。皆さんが子供たちに家庭の夕べを通して、人に親切にすること、寛容であることの大切さや、自分と意見の合わない人々にも愛と、思いやりと、役に立ちたいという心をもって接することの必要性を教えて下さるように願っています。

さて最後に、私たち皆の模範であるひとりの人について少しお話ししたいと思います。その人は、カミラ・アイリング・キンボール姉妹です。この数週の間、私は、彼女が病気の夫に日夜付き添っておられる姿を何度となく目にしました。彼女の夫に対する献身、変わらぬ愛、愛情の込められた心遣いは、美しいタピストリーを織りなした糸のようです。夫のために捧げる彼女の祈り、主への嘆願は、一生が永遠の父なる神からの贈り物であることを知っている、強さと謙遜さを備えた女性のものです。

キンボール姉妹にはまた、私たちにとって模範となるべきもうひとつの面があります。そこで、その点を特に若い女性の皆さんに申し上げたいと思います。キンボール姉妹は大家族に生まれました。教育を受けるために家を離れたのは、子供たちの中で彼女が最初でした。彼女は知識を渴望し、そして知識を得たのです。それから自分の選んだ職業の資格を取ると、収入の一部を送って弟妹に教育を受けさせました。キン

ボール姉妹の家からは世界的に名を知られた人物が出ています。

キンボール姉妹が向学心をなくしたことは一度もありません。読書は彼女の人生にまさしく不可欠のものです。若い時に読書を楽しんだ彼女にとって、年を取った今でも読書は慰めと力となっています。世界中の女性にとって、彼女は絶えず成長し、心を広げ、理解力を高め、あらゆる時代の偉大な人物の思いで心を豊かにすることの大切さを教えてくれる素晴らしい模範です。

キンボール姉妹は、まさに親切と思いやりにあふれた人です。彼女は若い時に貧しさというものを知りました。御自分では気づいておられなかったのですが、しかし、そうした若い時に養われた価値観から、彼女は愛と思いやりをもって、窮境にある人々のために手を差し伸べてこられました。

私は皆さんが彼女の模範に従われるようにお勧めします。主の祝福が彼女と彼女の愛するキンボール大管長の上にありますように。人生が希望と夢に満ちあふれている若い女性の皆さんの上に祝福がありますように。そしてその夢が実現しますように。また子供たちの養育、教育に重要な役割を負っている若い母親の皆さんの上に、そして人生をよく知り、その素晴らしさと悲哀を悟っておられる年配の女性の皆さんの上に、祝福がありますように。

愛はいつまでも消え失せることがありません。この愛は「キリストの純粋な愛であって永遠にづくもの」なのです。(モロナイ7：46—47参照)

神が皆さん一人一人を祝福して下さいよう、イエス・キリストのみ名によりへりくだりお祈り致します。アーメン。



転機の時の 扶助協会



中央扶助協会会長
バーバラ・B・スミス

先頃、主人と私がソルトレークの谷を見渡せる丘にある我が家に帰ったところ、近所中の電気という電気がみな切れていました。私たちが暗くなった我が家に向かっていて、暗やみの中を家に戻る私たちを見ていたのか、近所の幼い男の子が駆け寄って来て、ランタンを差し出しました。そして、こう言ってくれたのです。「ぼくの家にはもうひとつあるの。だから、これ、必要だけ使っていいよ」と。

私は、この幼い男の子が示してくれた心遣いに深く感動しました。彼は進んで分かち合うという光を持っていました。そして、私たちのことを心から気遣ってくれました。彼には、私たちが困っている時に助ける備えができていたのです。

その後何日かの間、私はこの男の子について何度となく考えました。男の子はとても頼もしい、明るい子でした。また進んで自分の光を分かち合いました。

私には、この子の行為は、イエス・キリストの福音の基本的なメッセージと、扶助協会の標語「愛はいつまでも絶えることがない」を表わしているように思えます。そ

の理由は、何よりもまず、私のこの幼い友人には備えができていたからです。男の子とその家族は、主たる光源が一時的に消えても、自ら闇を貫く光を手元に持っていました。

私たちはそれぞれ、備えをするようにという勧告を真面目に考える必要があります。10人のおとめのたとえを思い起こして下さい。10人のおとめは「それぞれあかりを手にして、花婿を迎えに出て行(った)。

その中の五人は思慮が浅く、五人は思慮深い者であった。

思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった。

しかし、思慮深い者たちは、自分たちのあかりと一緒に、入れものの中に油を用意していた。」花婿が着いた時、思慮深いおとめたちは用意ができていました。そこで彼女たちは、「花婿と一緒に婚宴のへやにはいり、そして戸がしめられた。」(マタイ25:1-10)

私たちは、ふさわしいキリストの弟子になるために、真理を理解し、真理に完全に従って生活することによって自ら備えるという分別を持たなくてはなりません。そして、キリストを生活の中心とすることによって、私たちは自らを昇栄するにふさわしい者とならしめる、そうしたキリストの属性を養うことができるのです。私たちはさらに力をつけ、人を愛する能力を高めることができます。またいざという時の備えをしておくことによって、愛の示し方を改善することもできます。

私の幼い友人はまた、必要に気づくほど心を配ってくれました。彼は、暗やみの中を帰っていた私たちの所に走ってきて、道を照らす明かりを差し出してくれたのです。

イエスは同様のことを次の心打つたとえ話の中で教えています。

「あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていた時に飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである。」(マタイ25:35-36)

主は、私たちが周りの人々によく気を配り、物質的、靈的に求めているものに進んで応えなければならないことをはっきりと述べておられます。これを行なうことが愛なのです。それはまたキリストの純粹な愛の第一歩でもあります。

先だって、あるワード部の扶助協会の集会で、ひとりの若い母親の話を書く機会がありました。彼女は自分が視力を失いつつあることを話し、これまで自分のために本を読んだり、約束の場所に車で送ってくれたりした姉妹たちや、ピアノを教えてくれている姉妹に対して感謝の言葉を述べていました。扶助協会の姉妹たちは、思いやりのある行ないを通してその明かりを彼女に提供し、光のない世界に入って行くという非常に苦しい時期にあった彼女の恐れを和らげてあげたのです。

私たちはだれしも心を乱し悩ませるような変化に直面することがあります。そして、それは一人一人異なっています。重い病気や不治の病はそのひとつに過ぎません。子供や夫の死、現世では結婚できないと自覚すること、離婚、伝道地からの帰還、子供に恵まれない結婚生活、末子の結婚、従軍生活を終えて市民生活に戻ることに、若い女性から扶助協会への移行、大学進学、転居など様々です。

これらの状況はどれも、それぞれ独自の順応を必要とします。新しい生活様式は取り組みがいがあるかもしれないし、またつらいものかもしれません。変化に順応するためには様々な新しい方法を見いださなけ

ればならないのです。

私たちはいつでも新しいチャレンジに応えられるよう、また人々が困っている時に進んで、快く援助の手が差し伸べられるよう自らを備えなくてはなりません。扶助協会は転機にある姉妹たちの光となる必要があります。そのためには、役員と教師と会員が組織だって姉妹たちの直面している精神的なストレスや心痛に気を配らなければなりません。

最近夫を亡くしたある姉妹は、それまでずっと人のために働くことに満足感を得てきましたが、逆に援助を求めるのはとても難しいことがわかりました。しかし賢明な彼女は、そうすることが人の助けになると言った手前、自分も援助を求めました。彼女にはまた、自分が立ち直った時にほかの人を助けてあげられることを理解するだけの信仰がありました。

またある若い姉妹は、宣教師の責任から解任された後も今なお人々を改宗させることに心が動かされます。しかし彼女はこうも話しています。「たとえデートや水泳や小説を読んだりすることが苦痛に感じられることがあっても、この新しい環境の中であって、私は現実を直視して、優先順位を決めることを学んでいかなければならないと思っています。」

独身者の大会に出席したひとりの姉妹も、結婚後25年を経た最近になって離婚し、その痛ましい現実を話してくれました。「独身の人々で一杯のこの部屋に入ってくるだけでどれだけ勇気があるか、おわかりにはならないと思います。今は自分もそのひとりであることを承知していますが、どんなに苦しいものかとても言葉では説明できません。」

私たちはほかの人の苦しみを実際に理解することができるのでしょうか。たぶん本当

には理解はできないでしょう。しかし私たちは転機にどう対処すればよいか大切な事柄を幾つか学んでいますから、苦しい転機にあっても、自分自身あるいは他の人をもっとよく理解することができるのではないのでしょうか。

1. 転機は、靈的、肉体的、知的、精神的に成長・発達する機会にもなれば、非常に墮落する時期ともなります。そして直面する状況は未経験で、困難なことが多いものです。この転機を成長の時期とするためには、大きな勇気と、しばしば他の人の支えを要します。

2. 転機において、変化に順応すべく自己の能力を磨くことは幼年時代に受ける精神的な傷手ほど大きくありません。大抵の場合、大きな影響を与えるのは他の人との人間関係の問題です。積極的に前向きの、相互に支え合う関係は、人生の重大な転機において非常に心強い頼みとなるものです。

3. 変化に順応しようとする時にまず大切なのは、変化それ自体ではなく、それよりもむしろ変化が生じた時点でその変化が個人の環境にどのように適合するかということです。人は様々ですから、たとえ転機が同じように見えたとしても、適応の仕方は各人各様です。

4. 転機に直面した時には混乱してしまうことが少なくありません。しかし友人や仲間の頼りになる支えがあれば、順応も速くまた確実です。

ここまでお話しすれば、扶助協会での姉妹関係がどんなに大切であるかおわかりになっていただけるでしょう。友情と信仰が確かなものであれば、人生の転機もうまく切り抜けることができます。夫を亡くした女性が援助を求めた時、離婚した女性が勇気を得た時、帰還宣教師が新たな生活に自ら順応しようとした時、そして若い母親



が視力が次第に衰えていく中でおもい人生の目的を失わずに生きていこうと努力した時、そこには確かな友情と信仰がありました。

さて、人生において私たちに影響を及ぼすこうした転機というものがあることがわかってくると、もうひとつ明らかになってくることがあります。それは、私たちが住んでいるような複雑な社会にあっては、社会の変化と共に転機と呼ばれるものの内容も深刻なものになってくるということです。

このような状況の中で、私たち末日聖徒の女性には何ができるのでしょうか。

まず多くの女性のために「家族」としての役割を担ってあげることが必要になってくるでしょう。つまりだれもが信頼を置くことのできる友情の輪を作り、自分の力だけでは困難を乗り越えることのできない人たちに助けを与えるのです。

また私たちは人のために働く能力が増してくると隣人が何を必要としているかがわかるようになります。また時には、不必要な偏見や先入観によって、無駄な時間を費やすことのないように努力することも必要

でしょう。

私たちは人を救し、優しさと親切とを持って接するというクリスチャンとしての基本的な徳を心に留めることによって、愛と思いやりにあふれた行動が取れるようになります。また人々の間に救い主の降誕の先触れとなった善意を育み、天の御父に平安と敵に立ち向かう時の力を願ひ求めるように導くことができます。

しかしだれひとりとして見過ごしにはできないということを考えると、善意だけでは決して十分ではありません。プログラムが必要です。そして行動しなければなりません。扶助協会はこのために組織されたのです。ノーヴーでの最初の扶助協会の集会で、ルーシー・マック・スミスは次のように述べています。「この組織は素晴らしい組織です。私たちはお互いに愛し合い、見守り合い、慰め合い、知識を吸収し合うようにしなければなりません。」(*History of Relief Society 1842—1966*「扶助協会史1842—1966」p.20)

扶助協会のプログラムは、私たちにはまだ見えない問題に対しても効果的に対処できるように備えてくれます。あるひとりの訪問教師の話ですが、彼女はクリスマスの時に担当の姉妹一人一人にカードを送りました。ところが訪問教師準備会でも同じことをするように言われました。でもメッセージ教師はそれに何か言葉を添えて出すように提案したのです。

この訪問教師は迷いました。すでにカードは送っていたのですが、言葉を書き添えてはいなかったからです。しばらく考えた後、結局彼女はもう一度、言葉を添えてカードを出すことに決めました。

1月になって担当の姉妹たちを訪問することになった時、彼女はまず不活発な姉妹の家を訪ねました。部屋に通されて見ると、

クリスマスのもは一切片づけられていましたが、1枚のカードだけが小さなテーブルの上に置いてありました。それは、ほかに言葉が書き添えられたカードでした。その姉妹は、教会員でない友人に自分の教会の会員が2マイル行く人々であることを示すために残しておいてあるのだと説明してくれました。彼女は言いました。「友人たちには以前にもこのことを言ってきましたが、このカードこそ姉妹たちの気持ちを表わすものですね。」

訪問教師が翌月訪問した時、彼女の家はきちんと片づき、家具のほこりも払われていましたが、あのカードはまだテーブルの上にありました。その翌月もまだそのままでした。そしてその次の月も、またその次の月も。

訪問教師は、この不活発な姉妹がはつきりと目に見える気遣いを求めていたことに気づいていませんでした。と同時に、どんなに小さくても親切な行ないは大きな影響を与えるということを知ったのでした。

扶助協会の召しを果たすことによって、姉妹は他の人々を理解する能力を高めることができます。他の人が苦しい転機を消極的な状態から積極的に取り組む状態に変えるように助けているうちに、どのように心を配ればよいかわかってくるものです。扶助協会のすべての責任は、奉仕の機会を与えるだけでなく各人の成長をも促します。つまり神の属性を養いながら自分が定めた生涯の目標に向かって前進し、自分自身と家族と社会的関係を強めるのに役立ちます。また扶助協会のレッスンはどれも福音の原則を理解するのに役立ちます。福音の原則とは何か、どのように生活の中に表わすことができるか、どうすればもっとよく人々のために働けるかということがわかってくるのです。

ホームメイキングのミニクラスは単に技術を教えるだけの場ではありません。楽しく技術を身に付ける場であるとともに、私心を捨てて人々に与えるという特性を育むものでなければなりません。

現在、扶助協会が抱えている重要な課題は、これから人生におけるきわめて重要な仕事を引き受けていく若い女性一人一人に手を差し伸べ、彼女たちに教会の女性には限らない機会があることを理解させることです。指導者の立場にある皆さんはこれらの若い扶助協会の姉妹たちに仕える時、彼女たちの可能性や能力、望み、扶助協会の責任を共に果たしたいという気持ちを過小評価してはいけません。若い姉妹たちの霊的な準備や旺盛な体力、活発な頭脳の働きが身体の成熟を追い越してしまうことがよくあります。若い姉妹たちを中に入れ、教えて下さい。また彼女たちからも学んで下さい。

そして若い扶助協会の姉妹の皆さん、私

たちは皆さんの貢献によって扶助協会がより力強いものになっていることを知っています。皆さんが一層大きな自信とビジョンをもって大人への道を歩めるように、扶助協会にそのお手伝いをさせていただけないでしょうか。

さて、年を取ってからの転機も忘れてはなりません。統計によれば大多数の女性が未亡人になることになっています。ほとんどの女性は、一昔前には想像もできなかったような時代まで生き長らえるでしょう。老年期は美しい達成の時期にもなれば失意の時にもなります。

あるワード部扶助協会会長の言葉を耳にした時、私は心が痛みました。その会長は年老いた扶助協会会員の娘さんと呼んで、こう言ったのです。「あなたのお母さんはワード部で長い間奉仕してこられました。でも、お母さんももうお年です。それで、もしお母さんに集会や親睦会に出席して欲しいとお思いになるのであれば、お母さんを



お連れする責任はあなたが引き受けて下さい。私たちの方ではしませんから。」

この母親のような年老いた姉妹たちに対して、扶助協会は老齢に伴って起こる身体的な衰えを考慮し、どうすれば彼女たちの役に立てるかを考えて応えなければなりません。私たちは年老いた姉妹たちを快く、また進んで助けてあげるべきです。孤独は病気と同じように私たちの精神を弱らせます。そしてその弱った状態から逃れるすべはないように思ってしまうのです。多くの場合、年老いた姉妹たちは絶えず自分はもう役に立たない、迷惑をかけるという気持ちを抱えています。私たちはそうした年配の姉妹を扶助協会に入れる責任があります。年配の姉妹からも学ぶ機会は沢山あります。

扶助協会には、老若に関係なく、ひとりとして無視されたり忘れられたりすることのないように、実際に即した連絡網が設けられています。訪問教師の皆さんにお願い致します。どうぞ各家庭に扶助協会の精神を持って行って下さい。寄る辺のない人々のお世話をして下さい。病んでいる人を看病してあげて下さい。そして暗やみに包まれた世界に福音の光を輝かせて下さい。

ジェームズ・トムソンはこのように書いています。「光よ！ 自然のきらめく衣よ、その美しさがなければ万物は闇に包まれていたであろう。」(*The New Dictionary of Thoughts* 「思想新辞典」 p.363より)

暗やみを追い払い、真理の光をもたらして下さい。あなたの感覚により、理性によって、そして一番大切なことはみたまによってそれを行なって下さい。自分がどんな人間であるか、今どういう生活をしているかということは問題ではありません。真理の光は見つけられるのを待っています。見つけられ、神の子一人一人の人生に光を投じる日を待っているのです。

転機、それも大きな転機の場合に、人々は聖霊の啓示を受けるよりも暗やみで身動きがとれなくなってしまいやすいものです。私たちが彼らを捜し、福音の光を分かち合うように求められているのはそのためです。このことを一人一人の姉妹が決意しなければなりません。

「ウィンターセット」という劇の中で、ミオはこう言っています。「私は闇の中に光を捜し求めて、夜明けから走ってここにやって来た。そして朝に巡り会った。」私は、皆さんがそれぞれ自らを備え、たとえ皆さん自身が真っ暗やみの中にある時でも、ご自分の光を惜しみなく放って下さるように願っています。そのようにする時に、皆さんもまたすがすがしい朝に巡り会えるでしょう。モーサヤ書に教えられているバプテスマの誓約を思い起こして下さい。アルマは私たちにこのように質問しています。私たちは「互いに苦難を軽くするために喜んで助け合うこと、悲しむ者を思いやって共に悲しむこと、慰めが要る者を慰めること、また……いついかなる時でも、どのような所に居ても、どんなことについても……神の証し人になりたいと心から思っている」(モーサヤ18: 8-9)かと。

この聖句には、私たちが主の教会の女性として、また転機には互いに助け合う扶助協会の姉妹として負わなければならない役割が見事に描かれています。それはこの聖句が、思いやりをもって与えること、同情ある理解を示すこと、行き届いた配慮を約束することを述べているからです。

自分自身がいつまでも絶えることのない愛によって照らされ、元気づけられていることがわかるまで自らの光を輝かし、愛を差し伸べるだけの知恵が私たちにありますように、イエス・キリストのみ名によりお祈りします。アーメン。

絶えず学ぶ ことの特権



中央扶助協会第二副会長
シャーリー・W・トーマス

若いスティーブンは9月に中学生になりました。彼は他の少年たちほど背は高くありませんでした。母親が彼の新しいズボンのすそを丈に合わせて折り返しているとき、彼はすそを12センチ程長めにしておいてくれるように頼みました。「今年はグリーンと伸びるんだから」というのが彼の言い分でした。

私たちは背丈が伸びることにはそれほど関心はないかもしれませんが、何カ月も先を見越し、自分を大きく成長させようと真剣に考えているのでしょうか。

ある初期の教会指導者はこのように断言しています。「進歩成長を求められるこの移ろい行く世の中にあつて、私たちは知識を増し加えていかねばならない……神の人にその成長がやむという時はない。」オルソン・ハイド、*Journal of Discourses*「説教集」7：151)このような義務を考えた時に、私たちは扶助協会の中に絶えず学ぶことのできるプログラムを備えて下さった慈愛に満ちた御父に感謝せずにはいられません。

扶助協会のレッスンはすべて末日聖徒の女性に役立つものです。第一日曜日には霊

的生活のレッスンが、そして第二日曜日には母親教育のレッスンが行なわれます。すべての扶助協会の姉妹に子供がいるわけでもないのに、レッスン時間の約4分の1が母親教育に充てられているのは少しおかしと思われるかもしれません。

教会の女性は「族長」や「族長制度」という言葉をよく知っています。私たちがそれらの言葉から永遠に関する事柄や家や教会における神権の働きなどを連想します。

しかし私たちはあまり「女族長」という言い方はしません。かわりに母親という言葉を使っています。母親は家庭における族長の助け手、パートナーです。母親としての働きもまた永遠に関わる基本的な務めと言えます。それは生命と愛をもたらす業であり、人が理解しておかなければならない大切な業です。

ある若い大学生たちは、扶助協会の会員として他の姉妹たちと一緒に毎週地元のあつてある養護施設を訪問し、そのことを学びました。最初の訪問で彼女たちは、その施設にいる女性の多くが何の希望も持たず、無気力の中に沈んでいるということを感じました。生きている間何かをしようという気持ちを持っている人はほとんどいませんでした。ただ死ぬのを待っているだけなのです。しかしその学生たちは、短い音楽プログラムを用意したり、本を読んであげたり、手紙を書くのを手伝ったりしながら訪問を続けました。こうして次第にその女性たちは毎週の訪問を心待ちにするようになりました。そしてこの若い扶助協会の姉妹たちのはつらつとした雰囲気は1週間ずっとその婦人たちの中に余韻となって残ることもありました。この姉妹たちはその婦人たちが興味を示したことは、どんな小さなものでも見逃すことなく大切に立上げていきました。この施設で以前キルティングを

していたことを知ると、早速必要な備品をそろえ、キルティングを始められるよう準備してあげました。彼女たちはすぐに素晴らしいキルトを1枚完成させ、2枚目にとりかかるほどでした。また学生たちが用意してきた他のプログラムに加わる人も何人かいました。そして、このような生気にあふれ、心はずませるようなことがまだまだ続くのです。この若い学生たちは新たな生命と愛をもたらしました。彼女たちは、年老いた姉妹たちの「母親」となったのです。

母親教育とは、出産に至るまでの医学的な知識を教えるものではありません。その目的は、すべての神の子供たちが光の中を歩むことができるように、その力となる特質を養うことにあります。私たちが福音の原則に焦点を置き、姉妹たちの現在の必要に合わせてレッスンをすれば、母親教育はすべての扶助協会の会員にとって必要なものというだけでなく、進歩させるものとなるはずです。

私たちはモーセの書4章26節で、アダムが自分の妻をすべての生ける者の母という意味でイヴと呼んだことを知らされています。私たちはみなイヴの娘です。扶助協会の非常に重要な責任に就いているあるひとりの姉妹のことが思い出されます。彼女は独身で子供もいませんが、自分の専門分野で重要な働きをしています。若者たちの知と情に触れ、恵まれた才能や教育をフルに活用し、他の人々の生活に愛と光をもたらしています。私は彼女の役割が、8人の子供の母親である私の隣人の役割と同様に、主に導かれ、受け入れられているものと信じています。母親の役割には他と違ったところもありますが、相通ずる部分もあります。しかし私たちはそれぞれ母親としての役割に関連した原則を活用するよう努力することはできます。

絶えず子供たちの必要に気を配り、同時に子供たちの生活の模範者とならなければならない若い母親は、最も優れた人に求められる責任を受けているのです。彼女たちこそ忍耐を学び実践し、愛をもって説き教え、強制によらず正すことを覚えなければならない人なのです。つまり母親としてのあらゆる特質を伸ばしていかなければならないのです。

しかし私たちは全員そのような特質について学び、それを身につけるための方法を見いださなければなりません。なぜならイヴのように、私たちは常に母親としての召しを果たしていかなければならないからです。

社会や教養、そして第5週目の奉仕に関連したレッスン、それらは皆神権に属する福音の原則を含んでいますが、それがよりどころとなって、これらのレッスンが、主の示された道に従って歩むという私たちの日々の努力に対して有意義なものとなっていきます。またこれらのレッスンは、芸術や人間に対する私たちの理解力を高め、この世界的な教会に対する認識を深めさせてくれます。

肯定的な面を強調するという方法で行なわれる援助は、管理者同士の関係においても効果があります。たとえば、各クラス教師とワード部の教育担当副会長との月例集会は、教師にとっていろいろなレッスンを知るよい機会となります。この一対一のやりとりは、レッスンに対する教育担当副会長の意見が建設的で明確なものであれば、非常に効果が上がります。

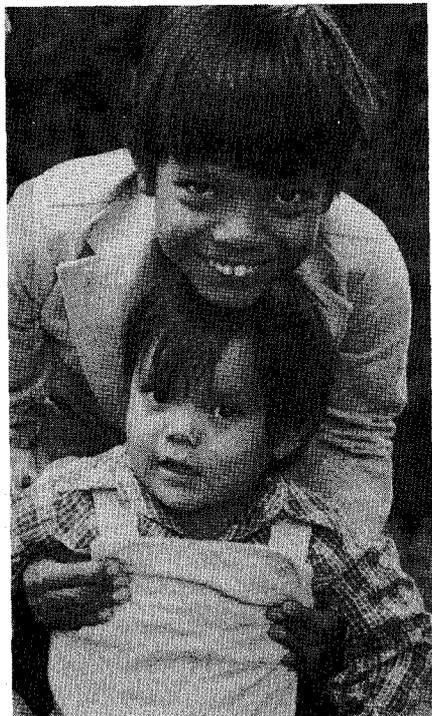
教師は自分のレッスンのどこがまずかったか自覚している場合が多いものです。教師はその点を話し合いに出そうとするかもしれないませんが、そのことについて改めて注意を与える必要はないでしょう。それより

も教師というものはどこが最も良かったかということになると自分ではよくわからないところがあり、称賛の言葉をかけると喜んでくれるものです。だからといって教師がとても素晴らしいレッスンだったというような称賛の言葉しか受けないとしたら、その教師はレッスンを成功に導いたものは何か、また自分の力をどの程度信頼したらよいかを知ることができないでしょう。しかし、もし教育担当副会長が生徒の注意を引きつける導入法や生徒の意見の上手な扱い方など具体的な要素に目を向けるならば、それは肯定的な面を強調した援助となり、教師の力になるのです。

最後に、現在の扶助協会の中で与えられている学習は、みたまによって学び教えるという状態にまで姉妹たちの生活を高めるでしょう。このみたまによって教えることの大切さを私に教えてくれたひとりの姉妹について、少しお話したいと思います。

彼女は先輩の方で、シオンを目指しながらも結局ニューヨークまでしか来ることのできなかった大勢の移民団のひとりでした。彼女はそれまであまり勉強の機会に恵まれず、なかなか新しい環境に溶け込めずにいました。私はある晩行なわれたステーキ部指導者会に出ましたが、該当するクラスの出席者は私と彼女のふたりだけでした。

管理役員は私たちにレッスンの準備をどのようにしているかを話すように言いました。私は教師としての訓練を受けていたので、レッスンの計画や目的といったことについてあれこれ話しました。しかしこの素晴らしい姉妹は習いたてのたどたどしい言葉で、どのようにして教材を調べるか、またその後で、レッスンの中で自分のワード部の姉妹たちに強調すべき点はどこかをひざまずいて主に何うと話しました。そして「主はいつも私を導いて下さいます」と言



いました。私は彼女の話聞いて、その清らかな思いに触れ、主は確かに導きを下さるという確信を得ました。彼女が教えてくれたことは、私に欠けていたものだったのです。マンハッタンでのあの晩からもう何年もたちますが、彼女と彼女の言った言葉を忘れたことは一度もありません。

私たちは主のみたまを導き手として学び続けながら、主の降臨に対して備えをしているのです。主は再臨時にはだれも御自分がキリストであることを隣人に知らせる必要はないと言われました。それは、すべての人が自分で悟るからです。私たちが知恵と知識を増し、その輝かしい出来事に備えることができるように、イエス・キリストのみ名により、お祈り申し上げます。アーメン。

扶助協会と福祉



中央扶助協会第一副会長
マリアン・R・ボイヤー

福祉と扶助協会との関係は、扶助協会創設の時に始まります。と申しますのは、扶助協会の最初の集会の席で、予言者ジョセフ・スミスは助けを必要としている人を探し、必要なものを与えなさいと姉妹たちに勧告しているのです。

姉妹たちがどれほど良くその求めに応じたかは、1843年8月5日付のノーブー「必需物資調達委員会」の報告書の中に見ることができます。

「ジョーンズ姉妹とミッチャム姉妹、当ワード部を訪問。私も加え3人ですすべての家を回る。病人が大勢いる……年老いたミラー姉妹は病気だが、ベッドも寝具も、着替えもない。ブルームリー姉妹も重病、食べ物は何もない。」(エイミー・ブラウン・ライマン編、扶助協会中央管理会議事録、1842—1892, p. 72)

姉妹たち一人一人が立ち上がり、必要な物を寄付してくれました。ウーリー姉妹は「上等なモスリンを1ヤードとネルの下着……60セント……」ジャーマン姉妹は「年老いたミラー姉妹に服を一着あげる」ことになりました。(同上)

ノーブーに住む数人の子供を持つ若い未亡人、エレン・ダグラス姉妹が、1844年4月14日英国にいる両親にあてた手紙の中に、初期の扶助協会の活動ぶりをかいま見ることができます。

「体をこわしてしまいました……時々死ぬのではないかと考えたこともあります。それからかわいそうな子供たちのことも。でも子供たちのためにも元気になれるようにと祈りました。私だけではなく、多くの兄弟姉妹が同じように祈ってくれました。そしてその祈りは答えられました。」(ケイト・B・カーター編、*Our Pioneer Heritage* 「開拓者たちの遺産」3:159)

ダグラス姉妹は病状が良くなり始めると、ひとりの友人を訪ねました。その友人は「女性組織の扶助協会に、私自身と家族に必要な衣類を何がしか頼んでみたらどうかと言ってくれました。……ためらう気持ちもありましたが、その言葉に従って私たちは〔扶助協会〕のひとりの姉妹を尋ね、……病気の間繕い物ができなかつたため、子供たちの着ている物がすり切れてしまったことを話しました……2、3日してから……彼女たちは馬車を引いてきました。そして私に今まで世界中のどこからも受けたことのないような素晴らしいプレゼントをしてくれました。」(同上)

ソルトレークの谷間で、姉妹たちは時には劇的な方法でその働きを続けていきました。ジョージ・A・スミス長老の妻ルーシー・ミザーブ・スミス姉妹は、回想録の中にそのような出来事を書き残しています。古いタバナクルで10月の大会を管理していたブリガム・ヤング大管長のもとに、手車隊が近づきつつあるという知らせが届いた時のことです。彼女はこのように記しています。

「ヤング大管長はじめ人々は非常に心騒

がせ、その隊の人々が山中で雪に襲われはしないかという心配から、大会をそのまま続行することができない状態になりました。大管長は人手と、ラバ、衣類、食糧などを募りました。……姉妹たちはすぐその場でペチコートやくつ下など分けてやれるものをすべて脱ぎ……山越えしようとしている姉妹たちに届くようにと馬車に積み込みました。」(ルーシー・ミザーブ・スミスの回想録、稿本、1886年末日聖徒イエス・キリスト教会歴史部蔵)

このほかにも様々な時と状況の下、福祉事業の中での扶助協会の役割に関して数々のチャレンジ、また、それへの対応がなされ、新たな開拓者が出てきました。そして、それは今の時代も同じです。

私たちの周りには今なお貧しい人々がいます。難民や家のない人々がいます。また老人の数は増える一方です。失業者や病人、家族に先立たれた人、心の貧しい人々、個人的な悩みや重荷に苦しんでいる人々がいます。都会においても孤独感に苦しむ人が増えています。あらゆる社会問題が何らかの形で私たちに影響を及ぼし、援助と問題の予防策を求める声が上がっています。

それでは、一組織として扶助協会はそれらにどのように応えているのでしょうか。またこれからどのように応えていくべきでしょうか。指導者としてはどうでしょうか。扶助協会の一会員としてはどうでしょうか。

現代という時が抱える問題はとてつもなく大きなものですが、私たちにはそれらを解決するための素晴らしい手段が与えられています。扶助協会の最高の財産である150万の会員に加え、教会の福祉機関として重要な一翼を担っているのです。なぜかと申しますと、まず、扶助協会の第一に目指すところが常に福祉と関連しているからです。そして、その次に扶助協会の教科課程を挙

げることができます。レッスンでは福祉の原則について学び、それを実践する機会も与えられています。それによって姉妹たちは個人や家族の備え、また親としての義務、家事などについて訓練されていきます。第3は、扶助協会という組織を通して、既定の教会の福祉プログラムが運営されているという点です。そして最後に、扶助協会は、福祉活動のための女性ボランティアを迅速に手配できる実践的な組織であるという点を挙げるべきでしょう。

ではその具体的な例を挙げてみましょう。南ベトナム政府が倒された後、1975年に大勢の難民が合衆国に送られてきました。

「最初のグループがサンフランシスコのプリシディオ陸軍基地に到着すると、付近に住む扶助協会の姉妹たちが基地にやって来て、夜の間中子供たちの入浴から食事の世話、衣服の着替えなどをしてあげたのです。また扶助協会の姉妹たちは朝の4時に基地に来て、一日中種痘の注射をするのを手伝いました。」(扶助協会テキスト1980—81年、霊的生活レッスン第6課) この姉妹たちは家をなくした子供たちを慰め、世話をしながら伝染病の予防にあたりました。

扶助協会は一組織として、災害時にすべての女性が迅速な援助を受けられるようにするための連絡網を敷いています。1976年、アイダホ州ティートンのダム災害の時には、隣接するステーキ部の扶助協会会長たちから、それぞれのワード部の会長に、ボランティアの救援活動を要請する呼びかけがなされました。それはさらに、訪問教師主任、訪問教師、扶助協会会員という流れで伝えられ、姉妹たちが喜んでその要請に応えたのです。このようにして、非常に短時間の内に必要な援助を得ることができました。

福祉の問題に対処していく時に忘れてはならないもうひとつの力として、分別と思

いやりとを備えた扶助協会の指導者たちを挙げることができます。

福祉活動委員会に出席して有意義な意見を述べる、あるいは、会員たちが必要としている事柄をよく観察して、その情報を委員会の討議事項の中に入れてもらう、そして委員会の決定事項を実施に移す時に自分たちの責任を果たす、このようなことを通して扶助協会の会長や副会長は、扶助協会の福祉の目的を遂行しています。監督の指示を受けて、援助を必要としている家族を訪問するワード部の扶助協会会長は、生活に困っている人々の力となっています。また、訪問教師たちに貧しく困っている人々を見いだすように指導している会長は予言者の指示に従っているのです。

しかし、そう簡単には見いだせないこともあり、貧しい人々が見過されることがたびたびです。従ってワード部の扶助協会の会長は訪問教師たちに、悩み、孤独感、物質的な必要などの兆候を見逃がさないようにするにはどうしたらよいかを指導しなければなりません。

よく気をつくひと組の訪問教師が歯科医学校を出たばかりの若い父親の家庭を訪問しました。この家族はだれの力にも頼らず、苦しい家計の中、夫の学業期間を耐えてきました。ふたりの姉妹はその家を訪問した時、床の上で遊び回っている小さな子供たちのくつ底がすっかりすり切れて、くつの用を足していないことに気がつきました。このことは内密事項としてすぐに扶助協会



左より中央扶助協会第一副会長マリアン・R・ボイヤー、会長バーバラ・B・スミス、第二副会長シャーリ・W・トーマスの各姉妹

の会長に伝えられました。そしてその両親は、若い父親が働いて収入が得られるようになるまで少しでも援助を受けるようにしてはどうかという勧めを受けました。

扶助協会はいろいろな方法で福祉の目的を推し進めています。最も良い成果が出てくるのは、それによって一人一人の姉妹が、自分が必要としているものを事前に見極め、それを満たしていくようになる時です。なぜなら、福祉上の問題については、それがまだ芽の内に摘み取るのが最良の解決策だからです。したがって、会員一人一人の皆さんが日々福祉の原則を実行していくなら、それは、自ら世の問題を減らしているということになります。また家族の貯蔵品に、特に家庭菜園から取れた作物や自分で縫った衣類、自分で調理した物など自分の手になる物を加えるなら、あなたは福祉の上で必要とされる物を最も効果的な方法で満たしていることになります。また姉妹一人一人が病気の予防をし、バランスのとれた食事、家計管理などの面で自分にできることをするなら、福祉活動が本来あるべき姿で進められていることになります。さらに子供たちに働くことを教え、会員として自分自身や子供たちが教育を受けて良い職業につくならば、将来の問題を回避することができます。

扶助協会の姉妹たちがお互いに分かち合うことのできる精神的な支えや力は、食物や家と同様に、あるいはそれ以上に重要なものとなります。ある姉妹の御主人は最近失業してしまいました。彼女は、食糧貯蔵もしてあり貯金も幾らかあったので、ある程度の経済的備えはできていたと語っています。しかし失業というものが与える精神的なショックには何も備えができていなかったのです。そこで扶助協会の姉妹たちは、そのようなショックが少しでも和らげられ

るようにと、心からの愛と思いやりを示しました。それは彼女の家族にとって唯一の大きな助けでした。

数年前の霊的生活のレッスンで、私たちは次のように言われました。「財力やその他の条件がそろっていないことを気づかずにいては、いつまでたっても愛を示すことはできません。」(「扶助協会テキスト」1980—81、霊的生活レッスン第6課) 私たちはまた次のように考えてしまうこともあります。すなわち「すべての飢えている者に食を与え、よるべない者に宿を提供し、また悲しむ者に慰めを与えることはできない……だから助けないでおきましょう」と。(同上) しかしアルマは私たちにこのように言っています。「小さくてやさしい事から大きな事がでてくる。」(アルマ37:6)

わずかな福祉基金や断食献金、一日ボランティア活動、(たとえばあげるものがなくとも) 訪問することなど、150万の会員たちによって何倍にも大きくなるそうした行ないが、多くの苦しみを和らげることになるのです。

現在福祉の必要性は1842年当時とは異なった範囲に及んでいますが、今日の扶助協会に対するチャレンジは当時と少しも変わっていません。すなわち貧しい人々を見だし彼らの必要に応えること、学び教え福祉の原則を実践することによって問題を未然に防ぐことです。主はジョセフ・スミスに次のように言われました。

「また汝ら貧しき者、乏しき者および病める者、悩める者たちを万事に憶えて憐れむべし。これらの事を為さざる者はわが弟子にあらざればなり。」(教義と聖約52:40)

これらのことをイエス・キリストのみ名によりお話し申し上げます。アーメン。

栄えある女性の務め



十二使徒定員会会長
エズラ・タフト・ベンソン

二こから見る光景は靈感あふれる素晴らしいものです。皆さんと共にこの会に出席できることは、私の大いに名誉とするところであり、心高められる思いです。私は今宵、皆さんを必ずしも教会の扶助協会という偉大な組織の会員としてではなく、選ばれた女性、天父の娘とみなして話をしたいと思います。

去る4月、私は恵まれて神権を持つ兄弟たちに、父親の責任についてお話ししました。きょうは姉妹の皆さんに、天父の永遠の計画の中で女性に与えられている誉れある務めについてお話ししたいと思います。

不変の原則、永遠の真理は、私たちがそれを生活の中に取り入れることを忘れたり、他の理論に惑わされたりすることのないように、何度も繰り返されなければなりません。

世の中の状況は悪くなる一方です。私たちの知る限りでは、これほどに誘惑の大きな時はかつてありませんでした。それはますます悪化していますが、こうした状況にかんがみ、スペンサー・W・キンボール大管長は地区代表たちを前にして次のように

言っています。

「妻の座にある人や母親たちは、神から与えられた母親としての務めを果たしていく中で、その責任の尊さと大切さについて理解の目を開かなければなりません。その点について扶助協会の指導者や教師は、自分たちに何ができるかを考えなければなりません。母親が家庭を愛と学びの場、また慰めと訓練の場としていくのを助けるために、私たちには何ができるでしょうか。」(Ensign「エンサイン」1978年5月号, p.101)

サタンが永遠の天父の計画を挫こうとしていることを決して忘れてはなりません。敵のもくろみは、モルモン経の中では「青年」と呼ばれている(アルマ5:49参照)教会の若人と、家族という単位を減ぼすことです。

初めに、神は女性に神権者の連れ合いとしての務めを与えられました。神はこのように言いました。「人独りなるは善しからず、これを以てわれ彼にふさわしき一人の助け手を彼のために造らんと。」(モーセ3:18)

女性は助け手として男性に与えられました。この互いに補い合う関係は、地上における最初の両親アダムとイヴの永遠の結婚にその理想を見ることが出来ます。ふたりは共に働き、子供を産み、共に祈り、子供たちに福音を教えました。これこそ神がすべての義なる男女に倣うように求めておられる模範なのです。

地球が創造されるに先立ち、天上の会議において女性のあるべき姿と役割とが定められました。皆さんはシオンにおいて妻、母親となるべく、神によって選ばれたのです。日の光栄の王国に昇栄するかどうかは、その召しに対する忠実さにかかっています。

時の初めから、女性の最も重要な第一の役割は、天父の霊の子供たちをこの世に迎え入れることでした。

初めに、顔に汗してパンを得よと言われたのはアダムであって、イヴではありませんでした。今世の中に広く行きわたっている考えと相入れるものではありませんが、母親としての本分は家庭の中にあるのです。

この真理は今の時代の状況にはそぐわないものであると、皆さんを説きつけようとする声私たちの中にあるのを知っています。それを聞き入れて従うようなことをするなら、皆さんは大切な責任を省みないようになるでしょう。

世の欺きの声は女性に向かって、「自分の好みに合った生き方」なるものを盛んに訴えています。人によっては結婚して母親になるより、仕事に生きる方が向いている場合があるというのです。

こういう人々は、家事よりもっと面白い、達成感の味わえる仕事があると主張し、その不平不満をまき散らしているのです。教会員も家事と育児だけの「型にはまったモルモン女性」という姿から脱皮すべきだなどと、平気な顔をして言う人もいます。その上、自分の目標や好きなことをする時間をもっと持つためには、子供はあまり持たない方がいいなどと言い出す始末です。

私は皆さんの中には必ずしも理想的とは言えない状況下に置かれている人がかなりいることを知っています。といいますのは、心は家にあっても、やむを得ない事情があって、子供を人に預けて働きに出なければならない母親の皆さんと、何度も話をしたことがあるからです。私はそのような人々を愛し、その立場を理解しているつもりです。この思いを知っていただきたいと思えます。また、私は皆さんが天父の恵みを得て今の不本意な状態を補うことができるように祈っていますが、この祈りがかなえられ、皆さんが今の状態を脱する日が1日も早くくることを待ち望んでいます。

夫に先立たれたり、離婚をした姉妹たちがいることも承知しています。私の心中にはそのような姉妹たちのこともあります。教会幹部の兄弟たちは皆さんのために祈り、皆さんの必要としているものが満たされているかどうかを見守る大きな責任を感じています。主を信頼して下さい。主が皆さんを愛しておられ、私たちも皆さんを愛していることを、しっかりと心に留めて下さい。苦しみに負けたり、ひねくれて素直な態度を無くしたりすることのないようにして下さい。

また、教会のすべての姉妹がこの世で結婚し、母親になる機会に恵まれるとは限りません。しかし、そのような中にあっても戒めを守り忠実に耐え忍ぶならば、慈悲と愛に満ちた天父が必ずすべての祝福を授けて下さいます。すべての祝福をです。

数においてはまだ少ない皆さんと、妻や母親としての務めを果たす機会に恵まれ、それを果たすべき立場にある教会の大多数の姉妹たちとは、問題解決への道筋も違ってくる。

女性が夫と子供のいる家庭を出て、万一の場合のために、より高い教育を受けて経済的にも備えるべきだというのは、誤った考え方です。私は教会の姉妹たちの中にあっても、自己の価値や成功度を計るための基準として、世間一般の常識を使うことがあまりにも多すぎるのではないかと危惧の念を持っています。

キンボール大管長はかつて、末日聖徒の服装に関して「教会員独自のスタイル」が必要であると言われたことがあります。成功や自分自身を見る目についても「教会員独自のスタイル」を持たなければなりません。

末日聖徒の中にも、もっとこの世的な財産を持って、より良い暮らしをすれば、自

分自身に対する価値観も高くなるなどと誤って信じている人がいます。自分を価値ある存在と見ることができるとかどうかということ、その人の経済状態との間にはあまり関連性はありません。救い主の母であったマリヤは、この世的には貧しい生まれの人でしたが、自分の責任をよくわきまえ、それを喜びとしました。マリヤがいとこのエリザベツに言った「この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。今からのち代代の人々は、わたしをさいわいな女と言うでしょう」(ルカ1:48)という謙虚な言葉を思い出してみてください。マリヤの力は内面的なものであって、外面的なこの世の富によるものではありませんでした。

母親の責任というものは、託児所や学校、保育所やベビーシッターなどの他の人の手に任せて、それで済ませることができるようなものではありません。このことは非常に大切な真理です。

幼い子供たちを家庭外の保育園や幼稚園などに通わせた方が良いという人の教えに惑わされている人々がいます。これは家計に圧迫を加えるばかりか、幼い子供を母親の影響の届かない所に置いてしまうことにもなります。

また子供たちが流行を追い求めるあまり、父親の収入だけでは生活が苦しくなり、母親が子供たちのために自分も働きに出なければならないと思うようになる例もかなりあります。しかし、それは非常に短絡的な物の考え方です。

子供の最も重要な発育期にその基本的な人格を形造るのは、母親の影響力なのです。

家庭こそ、子供が信仰について学び、愛を感じ、母親の生きた模範から正義を選ぶことを学んでいく場所なのです。

このように、母親の影響力と家庭における教えは非常に重要なものであり、それを

怠った場合に表われる結果は非常にはつきりしています。

私はだれの心を傷つけるつもりもありませんが、活発な末日聖徒の家族でありながら、母親がその居るべき場、すなわち家庭にいないために、子供たちのことで問題を抱えているケースが多いのは皆さんもよく御存じのことです。

アメリカのある有名な雑誌に、次のような恐るべき数字が載っていました。「6歳から13歳までの子供たちの母親で、外で働いている人の数は1,400万人。またその年代の子供たちの3分の1が、毎日かなりの時間大人の監督を受けていないとみられている」(U.S. News and World Report 「U.S. ニュース・アンド・ワールドリポート」1981年9月14日号, p.142) というのです。

母親が外に出て働く時、往々にして離婚の種がまかれ、子供たちの問題が始まります。母親は、生活のための共稼ぎをしようと決める前に、それによって支払わなければならない犠牲について入念に考えてみる必要があります。子供にはお金よりも母親が必要なのです。

ジョセフ・F・スミス大管長はこのように言っています。「子供が両親の保護と導きのもとにあり、両親が彼らに対して責任を持つ間に、もしも両親が子供に対する義務を無視するならば、シオンの両親は、子供が8歳になるまでとは限らず、全生涯にわたって子供たちの行動に責任を持つことになるだろう。」(「福音の教義」p.277)

モルモン経の中には、聖典の中でも最も感動的な成功談のひとつが載せられています。それは家庭で息子たちに福音を教えたレーマン人の母親たちの話です。この2千人の若者たちは、母親のひざの上で神への信仰を教えられました。後に戦争に行った時、彼らは大いなる信仰と勇気とを示しま

した。

彼らの指導者であったヒラマンは2千人の若者たちについて、「また疑いを抱かないならば神が必ず自分らを救いたもうとその母から教えを受けていた」(アルマ56:47)と言いました。

ここにその鍵があります。すなわち、彼らは「その母から教えを受けていた」のです。随分と昔のことですが、ある人が自分の母親に、全部で19人もの子供をどのようにして立派に育て上げたのかを手紙で尋ねました。その母親は次のような返事を送ってきました。

「子供の教育法について書くなどということは、とても私の柄ではありません。余生を送るだけの生活に入ってもう何年にもなります。そんな私が自分の子供を育てるためにどんな風に時間を使い、心配りをしたかを話しても、人の役には立たないと思います。文字通りの意味でこの世的な事柄を捨てない限り、私がしたと同じ方法をとることはできません。人生の盛りの20年以上の歳月を、子供の魂の救いのことだけを考えるとすべてを捧げるような人は、たとえいるにしてもそう何人もいないものではありません。それほどまでにしなくても救うことはできると考えているからでしょう。下手であろうと、うまくいかなかろうと、とにかく私が最も大切に考えていたのはそのことなのです。」(フランクリン・ワイルダー *Immortal Mother* 「永遠の母」 p.43)

この母親はスザンナ・ウェスレー、また手紙を書いた息子はかの偉大な宗教改革者ジョン・ウェスレー(1703—1791、イギリスの神学者、伝道者)です。子供たちの魂を救うことに人生の盛りの20年もの年月を捧げる。これほどに技量、才幹、勇気、知恵、創造性を求められる仕事はほかにあるでしょうか。

皆さんは母親として成功するための法則を知りたいと思いますか。それは子供たちがまだ幼い内に時間をかけて、福音とそれを実行するための原則を教えることです。皆さんも「この世的な事柄を捨て」「人生の盛りの20年以上の歳月を、子供の魂の救いのことだけを考えるとすべて捧げる」必要があるかもしれません。

どんなに偉大な事柄を成し遂げても、それは神の息子または娘の人格を形成するという仕事に勝るものではありません。

私はこの話を準備するにあたり、末日聖徒の女性が直面している問題の解決策について意見を寄せて下さるようにと、何人かの既婚女性にお願いしました。ここで、この世での自分の召しをよく理解している聡明で信仰篤いこれらの立派な主婦たちの言葉を聞いてみていただきたいと思います。

妻であり母親でもあるひとりの姉妹はこう言っています。「私は主婦、妻、母としての自分の役割に心からの喜びを感じています。家の中の仕事に喜びを見いだすように母から教えられました。母も自分の主婦としての仕事を喜んでいたので、いつも思います。近年騒がれているウーマンリブというようなことは一言も口に出しませんでした。それは、私たちにとって良い妻であり母であることこそ、女性としての本分だったからです。」

もうひとりの姉妹は、「私は妻であり母であることを何よりもエンジョイしています。とても楽しんでやっています」と書いています。そして姉妹たちに次のように勧めています。「家事が性に合わないという人は、楽しんでできるように主に祈ってみてください。そうすれば主は助けて下さるでしょう。主に頼るのです。人間の腕に依り頼んではいけません。(IIニーファイ4:34参照)物事を永遠という観点から見て下さい。特に、

いつになったらおむつや夜中の授乳から解放されるのかしらと思う時にはそうです。あなたは主の望まれることをしているので。必ず祝福が与えられます。」

さらにこう続けています。「妻であり母であることに誇りを持って下さい。だれにも弁解する必要はありません。テレビのメロドラマ、雑誌記事、いわゆる専門家と呼ばれる人々の話など、あなたの務めをさげすむようなものには接しないことです。」

また他の若い母親は次のように書いてくれました。「妻であり母であり、そして子供を産むことは私にとってすべてに優先することであり、大学の学位や仕事、才能を伸ばすこと、その他のどんなことよりも大切です。他の人間の人格を形造ることよりも大切な仕事がこの世に存在するでしょうか。」

この母親は姉妹たちを悩ます問題の解決策を次のように書き送ってくれました。「立派な聖徒と言うこともできるかも知れませんが、高潔な女性が持つ偉大な力は、救い主に対する証と、その代弁者すなわち予言者でありイエス・キリストの使徒である人人に対する信頼感の中にあります。そして、主とこれらの使徒たちに従うなら、キリストの恵みによってキリストの平安を得、その結果自分の長所を伸ばし、情緒的な安定が得られます。また、問題を解決して力をつけるための手段として救い主の模範に倣うことができるようになり、自分自身や家族や周りの人々を愛する源としてキリストの愛を身につけることができるようになるでしょう。妻、母として自信を持ち、家庭における自分の務めの中に喜びと達成感を感じることができるようになります。」

私もこの賢明な勧告が確かなものであることを、すべての姉妹たちに証します。

もうひとりの立派な姉妹は、次のように書いています。「一生懸命やっているシオン



の母親たちをほめるようにしてあげて下さい。そして私たちを愛し、私たちのために祈りを続けて下さい。と申しますのも私たちは教会幹部の兄弟たちの勧告を信じ、その言葉をとても大事に思っているからです。」

この依頼に励ましを得ると共に、ベンソン姉妹の有益な助言を受け、皆さんに次のように申し上げたいと思います。

家庭内の管理に喜びと満足を感じていることを体で表わすようにして下さい。家庭内の仕事に対するあなたの姿勢を模範によって示して下さい。あなたの態度によって子供たちは、あなたが「私はただの主婦にすぎない」と思っているか、それとも「家庭内での務めは、女が望む最も大切に導く職業」と考えているかを知るのです。女の子にはパンや菓子を焼いたり、料理、裁縫、部屋の整理整頓などをさせ、腕をみがく機会を与えて下さい。

毎日家族の祈りを捧げて下さい。毎朝毎晩家族の祈りをすることによって、主に頼ることを子供たちに教えることができます。そして家庭で聖典を読むことを習慣にして

下さい。

御主人の管理の下に、毎週家庭の夕べを開き、定期的に、特に安息日には聖典を読むようにして下さい。家族で共に聖典を読み、集会に集い、その他のふさわしい活動をする事によって安息日を聖くして下さい。

家庭では良い文学や音楽のみを勧めて下さい。子供たちに一流の芸術、音楽、文学、催し物を鑑賞させて下さい。子供たちの間違いを指摘するよりもほめることに重点を置くようにして下さい。どんな小さなことでもほめてあげて下さい。

分担を決めて子供たちに家事を手伝わせるようにして下さい。家庭菜園、庭仕事、掃除などで家族が何かを行なう時は、全員に割り当てを与えて下さい。

家庭が家族の社交や文化活動の中心となるようにして下さい。ピクニック、家庭の夕べ、ミュージカル、屋外でのゲームなどをして、子供たちが余暇は家で過ごしたいと思うように仕向けて下さい。

不断から子供たちの話に耳を傾けて、悩み事や質問がある時には、黙っていても皆さんのところに相談にくるような下地を作っておいて下さい。男女交際、性に関する問題、そのほか心身の成長や発達に影響を及ぼす大切な事柄について話し合ってください。これは疑わしい所から知識を得たりすることのないように、早い時期に始めて下さい。

いつも来客がある時のように、子供たちに敬意を払って優しい態度で接して下さい。詰まるところ、来客よりも子供たちの方があなたにとっては大切な存在なのです。他の人に家族の悪口を決して言わないように教えて下さい。互いに忠実でいて下さい。

他の人々に奉仕したいという望みを子供たちに植えつけて下さい。年寄りや病人や

孤独な人々を思いやるように教えて下さい。福音を知らない人々に祝福を与えることができるように、小さいうちから伝道に出る準備をさせるようにして下さい。

物質的な事柄を追い求める誘惑から身を守って下さい。もっと若く見せたい、流行に乗り遅れたくないというやむことを知らない熱狂、母子双方健康的に何の不安要因もないのに子供の数を制限しようとする事、人を助ける喜びを忘れさせる利己心、これらの問題はすべて、感謝する心を失わせ、人を無慈悲にし、情緒を不安定にさせるものです。

家長としての責任を果たすことができるように御主人を支持し、励まし、力づけて



あげて下さい。皆さんは御主人のパートナーなのです。皆さんが御主人の人生に対して持っている責任は、御主人を高め、崇高な標準を保つ手助けをし、自ら義しい生活をすることによって永遠にその王妃となるための備えをすることにあります。

家庭とは愛、理解、信頼の場、そして皆が自分は受け入れられているという気持ちと一体感を味わう場なのです。もし妻として、母として、また娘として自分自身と家族と家庭に対する責任を十分に果たし、扶助協会の姉妹たちのように互いに親密な関係を保つならば、若人と両親を悩ませている今日の問題の多くは、皆さんの上を何事もなく過ぎ去って行くことでしょ。

マッケイ大管長は次のように言われました。「子供たちが、真理、名誉、徳、自制などの人生の教訓、教育と正直に働くことの価値、そして人生の意義と特権とを学ぶ上で、最初の場となるのが家庭である。そしてこれは最も効果的な場でもある。子供たちを教養育てる場として家庭に代わるものはない。いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできないのである。」(デビッド・O・マッケイ「家庭の夕べ」テキスト、1968—69)

なぜサタンが、母親たちに子供の養育を人の手に委ねさせ、家庭を崩壊しようとしているのか、これでおわかりになったでしょうか。サタンは非常に多くの家庭で成功を収めているのです。

本能的に子供を肉体的な危険から守ろうとするのと同様に、このような危険からも家族を守ってあげて下さい。

家族全員がそろって日の栄の王国に行くことを、伴侶と共に家族の目標として決めて下さい。皆さんの家庭が地上における小さな天国となるよう努力し、この世での生涯を終えた時、次のように言うことができるようにして下さい。

みんながここにいる。

父、母、姉、妹、兄、弟、
愛する家族がみんないる。

空いてる席はひとつもない、

家族がみんな顔をそろえてる……

みんな。みんながここにいる。

(チャールズ・スプリング、*The Writings of Charles Sprague*「チャールズ・スプリング著作集」)

私は永遠の伴侶フローラの献身と明るさ、信仰、忠誠を心から感謝しています。妻は家族にとって常に洞察力と靈感の源でした。ぴったり合った呼吸、素晴らしいユーモアのセンス、そして私の仕事に示してくれる関心など、彼女は妻として私の心に喜びを与えてくれます。またその無限の忍耐力と的確な洞察力とをもって、非常に献身的な母親として務めてくれます。彼女は自分のことを忘れて、喜んで夫と子供たちのために尽くし、立派な妻、母になるという神から与えられた栄えある召しを全うしようと、固い決意を示しています。

今夜、このように皆さんのお顔を拝見し、私は「この重大な時期に、シオンの中の妻、母として取っておかれた皆さんは何と素晴らしい霊だろう」と思います。皆さんは地上にある唯一の真のイエス・キリスト教会の会員です。夫と共に忠実であれば、日の栄の王国で永遠の生命を受けることができます。これが皆さんへの約束の言葉です。

愛する姉妹の皆さん、私は皆さんが女性として受けている栄えある務めが真実であり、永遠のものであることを証します。

神が皆さん一人一人を祝福し、この世から永遠にわたって喜びと幸せとを授けて下さるように。イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

愛は限りなく



管理監督会第二副監督
J・リチャード・クラーク

兄 弟姉妹の皆さん、福祉部の新しい実務部長である、グレン・ベース兄弟には15歳になる娘さん、リッキー・ベースがいますが、彼女が学校で友達と次のような会話を交わしたそうです。

友 達：「あなたのお父さん、どこで働いているの？」

リッキー：「教会本部よ。」

友 達：「教会本部ってどこ？」

リッキー：「神殿のそばのあの高層ビルよ。」

友 達：「どんな仕事？」

リッキー：「福祉部の責任者よ。」

友 達：「福祉部ってなに？」

福祉部について何度説明しても、特別きわだった印象をこの友達に与えることができません。それでも、この会話に終止符を打つべくリッキーはこう言いました。「言い換えれば、今から福千年までの間に、教会の会員の中で空腹のためにだれかが死ぬようなことがあるとしたら、私のお父さんのせいになるのよ。」

福祉活動に対しては、いろいろな見方があります。応々にして、福祉は、農場や、

かん詰工場、監督の倉庫、デゼルト産業等と結びつけて考えていますが、福祉活動は、教会の中心となる使命、すなわち、聖徒を完き者にするという使命に欠くことできないものです。福祉活動は、個人に対する福音の実践です。単なるグループや団体のための活動ではありません。永遠の救いは個人個人にもたらされるものであり、救い主のレベルまで致達するには、はしごを自力で登っていかなければなりません。完き者となるには、イエスのみ言葉と同じようにイエスのみ業を行なっていかなければならないのです。使徒パウロは、キリストの弟子たるべき人は、「神の性質にあずかる者」（Ⅱペテロ1：4）になるようにと言っています。またこうあります。「あなた方は、御足の跡を踏み従うようにと、召されたのである」（Ⅰペテロ2：22）1897年、カンザス州トベカに住む若い牧師が「キリストの足跡」と題した本を書きました。それは、彼の新しい試みをもとに書かれたものです。彼は、失業中の印刷工を装い、トベカの街路をうろついてみたところ、この「クリスチャン」の住む町から受けた待遇に驚いたとあります。小説の中でこの牧師は、次のような興味深いチャレンジを自分の会衆に与えたとあります。

「イエス様だったらどうなさるだろうか、と、まず問いかけてみてから何事でも行なう……これをこの1年間、忠実にまた正直に実行して下さる方はいませんか。私たちの目的は、当面の結果の有無にかかわらず、イエスがここにおられたら、と仮定して行動することです。言い換えれば、イエスが弟子たちに教えられたように、イエスの足跡をできる限りそのままにたどって欲しいということなのです。」（チャールズ・M・シェ

ルドン、*In His Steps*「キリストの足跡」
p.16)

この本には、このチャレンジを受け入れた人々のおもしろい体験が書かれています。この試みに私は好奇心をそそられました。もし今日、末日聖徒の間でこの試みが実行に移されたとしたら、どのような結果が得られるだろうかと思えます。私たちは末日のクリスチャンとして、愛という尊い律法を行動で表わすとは「弱きを扶け、垂れたる腕を挙げ、かよわきひざを強うすべ(き)」(教義と聖約81：5) ことであると理解していますが、この言葉の意義を現実のものとして把握しているでしょうか。私たちの救い主への愛がどれほどのものかがわかるのは、困っている人を捜し、その人のために力になってあげる時です。

哲学者ウィリアム・ジョージ・ジョーダン¹は、人生の4つの飢えとは、体の飢え、精神の飢え、心の飢え、魂の飢えであるとしています。これらは皆実在するものであり、したがってその実在を認め、食物を与えてやらなければなりません。

1)体の飢えは、だれもが自覚できる生物学的欲求です。肉体的に何か欠乏している時は、霊的にも強くなるのが難しくなります。

2)精神の飢えは、知性、教育、個人の進歩などを渴望することです。

3)心の飢えとは、孤独感を感じたり、自尊心を失ったり、人に理解されなかつたり、話し相手や、同情、評価を求めたりする状態のことです。この場合ひとつ気がつくことは、隣人の心の飢えを満たすことによって自分の心の飢えも癒されるということです。

4)魂の飢えとは、永遠の真理を知りたいと切望することです。霊が神と交わること

を望むのです。(ウィリアム・ジョージ・ジョーダン、*Crown of Individuality*「個人の尊さ」pp.63-75)

回復されたイエス・キリストの福音は、これら人生の飢えを満たすための解決法をもたらしてくれます。「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない」とイエスは言われました。イエスのように、この世的な飢えを軽くする力を持つことは、だれしもが望むところです。しかし、私たちにできる簡単な道がたくさん備えられていることを忘れてはなりません。私たちが自分を犠牲にして人のために尽くす時、問題なのはその犠牲の大きさよりも、その助けが時機を得てなされたかということです。そのことを覚えておきましょう。

有名なコラムニスト、アーマ・ボンベックは、自分の経験談としてきさいなことで大きな意味を持つことがあると言っています。ある朝、彼女は飛行場に行こうと急いでいたのですが、直前にたくさんの電話があり、大変な思いをしました。そしてようやく飛行場に着的いたわけですが、その時の様子をこう書いています。

「飛行場に着的いた私はほっとしました。

『飛行機が離陸する前のこの貴重な30分間、とうとう私のものになった。ひとりになって、考えごとをしたり、本を読んだり、ぼうつとしたりできる。』ところがそう思った矢先に、隣に座っていた年輩の婦人が『シカゴはきつと寒いでしょうね』と話しかけてきました。

私は全く無表情で『そうかもしれませんね』と答えました。

すると婦人は『私は3年間シカゴに行っ



ていないんです。息子がおりますけど』と
言いました。

私は本から目を離さずに『ああそうです
か』と言いました。

『私の主人の遺体がこの飛行機に乗って
います。53年間の結婚生活でした。私は車
の運転ができないんです。主人が亡くなっ
た時、私たちはカトリックでもないんです
けれど、尼さんが病院から家まで連れて行
って下さったんですよ。飛行場までは葬儀
屋さんがお連れ下さったんです』と婦人は
言いました。

私は、その時ほど自己嫌悪に陥ったこと
はありません。ひとりの人間が、話を聞い
て欲しいと必死で全く見も知らずの人に話
しかけてきたというのに、冷たいその相手
は生きた人間のドラマより、小説のほうに
心を引かれていたのです。彼女は忠告も、
お金も、援助も、専門家の意見も、それ
に同情さえも求めていませんでした。話を聞
いてくれる人が欲しかったのです。彼女は
飛行機に乗るまで、無感動な口調でひっき
りなしに話していました。彼女は私とは離

れた場所に座席を見つけました。ところが
コートをかけていると彼女が隣の人に哀れ
を誘う声で話しかけるのが聞こえてきまし
た。『シカゴはきっと寒いでしょうね。』

『神様、どうぞどなたか彼女の話し相手
を見つけて下さいますように。』私はそう祈
らずにはいられませんでした。(アーマ・
ボンベック、*Chicago Sun-Times*「シカゴ・
サンタイムズ」)

私たちは、だれかが博愛に満ちた行ない
をしたのを見て、「どうしてあんなこと思
いづかなかったのだろう」と思うことがよく
あります。私たちがこうしたいと思うこと
をやっている人たちは、気づく技術をマ
スターしているのでしょうか。そういう人
人は自分のことを考える前に、ほかの人が
必要としていることに敏感になる習慣を身
につけています。絶好のチャンスは早々と
逃げてしまい、またまた心構えだけで終わ
ってしまうことがよくあります。心がしよ
うと思っている正しい望みと、親切な行為
が一緒になったらどんなに良いことでしょ
う。

やらなければいけないことを遅らせる癖
を一掃する意味で、詩人ジョン・ドリング
ウォーターは「祈り」と題して次のように
言っています。これはその一部です。

「私たちは自分の歩む心の道を知っている。
そこにはあなたの言葉が書かれている。
でも神よ、後生ですからそれ以上のもの
をお恵み下さい。

思い通りに行なう力を
知識通りに働く力を
鋼鉄でふち取りされた目的を
私たちに下さい。

私たちは知識はいらない。
知識はあなたが貸して下さい。

のどから手が出るほど欲しいのは『意志』。私たちに強い意志の心を恵みたまえ。

行ないを、行ないを。」

親切な行為を実践に移す人のことを考える時、すぐ思い当たるのが監督と扶助協会会長のことです。彼らがワード部の会員のために自己を忘れて、多くの時間を費やしていることを知っている人は、比較的少ないようです。彼らは、真に原則を行動に移している人たちです。

私はここで、開拓者たちの心温まるお話を引用したいと思います。

「ユタ州南部のある小さな町に、私の曾祖母が住んでいた。彼女はそこで扶助協会の会長に召されていた。教会の歴史の上でこの時期は、モルモンと教会外の人々との間には相容れない、非常に気まずい雰囲気があった。

私の曾祖母のワード部で、ひとりの若い姉妹が教会外の男性と結婚した。当然のことながら、モルモンも教会外の人々も、全くこれを喜ばなかった。やがてこの若夫婦に子供が生まれた。しかし不幸なことに、その母親は産後の肥立ちが悪く、赤ちゃんの世話をすることができなかった。このことを知った私の曾祖母は、すぐにワード部の姉妹たちの家を訪れ、この若夫婦の家へ交代で行って赤ちゃんの世話をするように頼んで回った。しかし姉妹たちから次々に断われ、結局その責任は曾祖母ひとりが負うことになったのであった。

彼女は朝早く起きると、この若夫婦の家まで長い道のりを歩いて行った。そして赤ちゃんに湯をつかわせ、乳を飲ませると、洗濯物を全部取りまとめ、それを自宅に持ち帰った。それからそれを洗濯し、翌日、届けたのであった。曾祖母は長い間これを

続け、もはや日課となっていた。そうしたある朝、その仕事に出かけることがとても大儀に感じられた。しかしベッドに横たわりながら、もしも自分が行かなければ、その子を世話する人がいないと考えた。そこで彼女はあらゆる力を奮い起こして出かけたのであった。彼女はこの仕事を終えると、家に帰ってきた。曾祖母が家に無事に戻ることができたのは、主の助け以外の何ものでもない。彼女は居間の大きな椅子にがっくり体を落とすと、すぐに深く眠り込んでしまった。この時彼女は、自分の体が火によって焼かれ、骨の髄まで溶かされてしまうかのように感じたと言っている。眠り込むと、彼女は夢を見た。それは、赤ちゃんのキリストに湯をつかわせている夢だった。神の御子に湯をつかわせるとは、何という大きな特権であろうか。その時、主のみ声が聞こえ、こう言われた。『これらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。』（「主から託された私の使命」p.179）

恐らく最も勇敢な行動というものは、静かにほかの人から認められることなく行なわれているのではないのでしょうか。そしてただ慈悲深い天父が、人知ではとうてい測り知ることのできない平安をお与え下さり、「良い忠実な僕よ、よくやった」とみたまを通してささやいて下さるだけなのです。（ピリピ4：7；マタイ25：21参照）

最近、私は、私個人に関連したことで、感銘を受けたことがひとつあります。過去8年間、寝たきりの姉妹がいました。彼女は歩くことも話すこともできない状態でした。この夫婦に忠実なホームティーチャーが割り当てられたのは6年前のことです。

このホームティーチャーは、もし自分の

妻が毎週日曜日の朝、訪問してこの体の不自由な姉妹の面倒を見たら、兄弟に神権会に出席してもらってもよいかと尋ねました。過去6年間、日曜日になるとこのホームティーチャーは、自分の妻をその家に連れて行き、兄弟が神権会に出席する間、妻がその姉妹のそばにいるように取り計らいました。そしてこのホームティーチャーの奥さんは老夫婦のために、毎週お菓子や何か特別なものをこしらえて持っていったのです。

とうとう、病気だった姉妹が亡くなりました。そこでこの夫婦の娘さんが、長い間ホームティーチャーとその奥さんがして下さった行為に対して深い愛と感謝の気持ちを示したところ、奥さんはこう言ったそうです。「私たちに感謝なさらなくてもいいんですよ。優しいお母様とお話できて光栄です。これから私どうしようかしら。日曜日のあの1時間半が、1週間のうちで一番寂しい1時間半になってしまうわ。」

この地上での務めを間もなく終えようという時、救い主は自分の母マリヤのことに、最後まで心配しておられました。これは、私たちにとって模範となっています。年老いて自分自身では何もできない両親を敬う献身的な息子や娘は、主の足跡を歩んでいることになるのです。2年前頃のことですが、新聞でこんな記事を読みました。

「親愛なるアビーさんへ

私は、今飛行機の中で、あなたの記事の中にあったある息子の手紙を読んでいます。その息子は、自分の父親が来たらプライバシーが侵されると、ほんの少しの間だけでもいいから会いたいという父親の願いを拒否したとのことでした。

あの記事は私の目を引きました。というのは、私は今これから、息子からのしつよ

うな依頼があって、オマハの息子のところへ2週間ほど出かけるところだからです。息子の生活を邪魔したくないと思う気持ちから、最初この話には気乗りがしませんでした。

この手紙を書いた息子は、子供の時の自分が父親から奪ったプライバシーというものについて一体考えたことがあるのでしょうか。

子供たちが幼なかった頃、私は子供の面倒を見ないで自分の好きなことができたらどんなにいいだろうとよく考えました。しかし今は、子供たちと共に過ごした時間を惜しむ気持ちは少しもありません。それどころか、もっとその時間があれば良かったと思っています。子供たちが家にいた時間は本当にあっという間だったような気がします。

私はこの手紙はあなたにお送りしません。この種の手紙は何千何万とお受け取りになるでしょうからね。これはほんの私の独り言……

親愛なるアビーさん、私の父は急に心臓マヒで亡くなりました。この半分書きかけの手紙がポケットの中にありました。私や妻は父を亡くして本当に悲しく思っています。お父さんに本当に来て欲しいと思っていた息子より。ウィリアム・スズイク」(Deseret News「デゼレト・ニューズ」1979年12月13日付)

兄弟姉妹の皆さん、けさここで私が申し上げたいことは、もし私たちが主の歩まれた道を歩むとしたら、犠牲を払って自分から飛び込んでいけない限り不可能だということです。簡単にできることはひとつもありません。しかし、奉仕をする機会をいつも求める人にとって、愛は困難をも乗り越越



えて広がっていくのです。

救い主が御自分の使命を果たすことができたのは、神を父としてお生まれになったという理由だけではないと思います。30年の間、御自分の同胞が何を必要としているかを悟る力を養われたのです。

アルマ7章にこう書かれています。

「この男の子は世の中へ出て苦難とあらゆる誘惑である試みとを受けたもう。これはこの方が自分でその民の苦しみと病いとを引き受けると言いたもう言葉が成就するためである。

……また肉体を持つ者として慈悲の心に富みたまい、虚弱の度に依じてその民を救う方法を知るために民と同じく虚弱を受けたもう。」(アルマ7：11-12)

最近、あるステーキ部大会に参加した時、そこで教会における家族の役割について話し合いが行なわれました。その会の後で、私はある婦人から話しかけられました。「監

督、私は未亡人です。きょうお話し下さったことにとっても感謝しています。私には素晴らしい家族がありますけれど、問題事が多くて、助けが必要です。私の神権指導者は御自分の家族をお持ちで、たくさん問題をかかえていらっしゃるようです。私のような者が相談に行けば悩みがひどくなるばかりですから、あまりお邪魔したくないんです。どうしたらいいでしょう。」

「あなたのことをいろいろと世話して下さるホームティーチャーがおられますか」と尋ねると彼女は言いました。「ええ、毎月お見えになられますが、私の家族とは深いつながりはできておりません。」「では、あなたを訪れ、理解して下さる訪問教師はいらっしゃるでしょうか。」私はそう尋ねました。「扶助協会の方が時々来られます」とのことでした。

この時点で、私は正しい返答ができるよう祈っていました。するとちょうどその時

私たちのそばに立って、会話を聞いた愛すべき姉妹がこう言いました。「失礼ですけど、私も未亡人でした。最近、再婚したばかりですけど、あなたのお気持ちはよくわかりますし、あなたの悩みごとでも理解できます。こんどお訪ねしてよろしいかしら。ちょっとおしゃべりしたいわ。」

トム・ドーリー博士は、このような心からの奉仕について次のように述べています。

「アルバート・シュバイツァー博士が最も大切な信条としていたものの中に苦しみと背おった人に手を差し伸べるということがあります。そうした人々は、肉体的な苦しみや、心身の激しい苦痛を身をもって体験したことのある人々です。世界中にいるこのような人々は目に見えない絆で結ばれています。苦しみから救い出された人は、ほかの病人のことを忘れて我が人生を好きなように歩むようなことはしてはなりません。私たちは目が開かれたのです。今こそ苦しみや嘆きと闘っているほかの人を助ける責任があります。自分が救い出されたと同じように、ほかの人をも苦しみから救い出してあげなければならないのです。」

この思いやりの輪には、病気をしたことのある人はもとより、苦しみを味わった人とつながりのある人が皆入ってきます。否、この輪に入らない人がいるのでしょうか。」(トム・ドーリー『苦しみの中にある人に手を差し伸べる』*Words of Wisdom*「知恵の言葉」p.50)

再びシュeldon博士の言葉を引用します。

「キリストの弟子たちが強調しなければならぬのは、この個人的な要素である。『与える者のいない贈物は意味がない。』人の力を借りて救いを得ようとするキリスト教はキリストのキリスト教ではない。クリ

スチャンはだれでも、イエスの歩まれた道を歩む必要がある。その道は、個人の犠牲という道に沿って伸びている。そして、その道はイエスの時代にあった道と全く同じ道なのである。」(チャールズ・M・シュeldon「キリストの足跡」p.184)

きょうのお話は、私にとって難しい責任でした。福祉の原則を実行することが、どのように私たちをキリストに近づけてくれるかを考えた時、理想である救い主から自分がかかりかけ離れていることに気づきました。そこで、私は、困っている人を祝福できる方法についてもっと認識することにより、キリストのような神の属性を達成しなければならぬと思いました。

福祉活動を行なう時には、救い主の特別なみたまが伴うことをここで皆様に証致します。

主がこの働きや、それに従事している何万という聖徒を愛して下さっていることを知っております。モルモン経の中で、誓約の民に勧告なさったように、主は今日も私たちにこう求めておられます。

「われ、まことに、まことに汝らに告ぐ、以上はわが福音なり、わが教会に於てなすべきことは、汝らすでによく知れり。すなわち、汝ら見たるわが行いを汝らもせよ。……汝らその通りに行わば、終りの日に高くあげらるる故に汝らさいわいなり。」

すなわち、……汝らいかなる人物にてあるべきか。まことに汝らわれと同じ人物ならざるべからず」(IIIニーフアイ27:21-22,27)

私たちも主の歩まれた道を歩んで、やがては主と似た者となることができるよう、イエス・キリストのみ名により祈るものです。アーメン。

家庭を平安を得る場と するために



中央扶助協会会長
バーバラ・B・スミス

愛する兄弟姉妹の皆さん、愛、献身、労働、奉仕、そして管理の職とも言われる責任、自立などの福祉の基本原則は、自己の救いの達成に努める上で重要なだけでなく、家庭の中に取り入れるなら、夫婦の関係や家庭を堅固なものにすることができます。では、それをどのように行なったらよいかについてお話したいと思います。

箴言の第31章は、「宝石よりもすぐれて尊い」(10節)高潔な女性が備える立派な特質を数々挙げていることでよく知られていますが、11節には夫婦の関係について注目すべきことが書かれています。「その夫の心は彼女を信頼して」とあります。この心に残る聖句には、まず、その夫は心に思うことをすべて妻に打ち明けること、次いで、妻の方もそれを擁護することが書かれています。この夫婦はひとつの大切な真理をよく理解しているようです。その真理とは、堅固な家庭を築くという誓いをした男女は皆その愛を守るために安全な場所を作っておかなければならないということです。

人ははたいてい、自分がやむにやまれず捧げた熱い思いを大切にしてくれる人に思慕

の情を寄せるものです。ウィリアム・バトラー・イェイツの詩の中にそれを見ることができます。心からの願いの言葉をしたためて、それを愛する人の足下に置いたばかりの男の人が訴えます。「そっと歩いておくれ、あなたが踏んでいるのは、私の夢なのだから。」(『かの人は天の衣を望む』*The Oxford Dictionary of Quotation*「オックスフォード引用句辞典」第3版, p. 585)「最愛の誠実なる良人へ」と題した詩の中で、清教徒の女流詩人アンネ・ブラッドストリートも同じような思いを書いています。

「心を一にしたふたり、それはあなたと私。妻に愛された良人、それはあなた。」(*The New Oxford Book of American Verse*「新オックスフォード版アメリカ詩集」p. 6)

人と人との絆の中の信頼というものは、福音に従って生活するための信仰に匹敵するものです。すべてはそこから始まります。その基礎の上にさらに積み上げていくのです。愛は信頼のある所にその花を咲かせます。

そしてその愛の上に立って、神聖な目標に向けてふたりの一生を捧げるのです。愛を守るためには、そのような決意が必要です。先に挙げた箴言の一節を注意して見て下さい。夫は自分の心の奥底まですべて明かしています。条件つきでもなければ、半分だけでも、一部分だけでもありません。すべてです。

献身とは持てるすべてを捧げ尽くすことです。一組の男女が聖なる神殿で結婚の誓約を交わす時、新しくかつ永遠の家族という組織を築く第一歩を踏み出しますが、これは、アブラハム、イサク、ヤコブに約束されたすべての祝福を受け継ぐものです。この組織は「人に不死不滅と永遠の生命をもたらず」(モーセ1:39)という、主の

神聖な目的のために捧げられるものです。

結婚を間近に控え、結婚したら何としてみても「自分だけの生活」を持ちたいなどと考えている若い女性がいたら、その人は善い結婚生活に求められる無私の人となりを理解していないと言われても仕方ありません。結婚生活に求められる精神とは、「自分の利益を求め」ることのない愛です。(Iコリント13:5) 立身出世を第一にして将来の計画を立てている男性は、自分が日の光栄の家族の中で身につけなければならない責任に対して十分に理解しているとは言えません。

少しの間、愛と献身を基とする結婚生活の良い点について考えてみたいと思います。

1. 夫婦がお互いに、相手を持てる可能性を十分に発揮できるように助け合う気持ちを持っています。例えば、デビッド・B・ヘイト長老は奥様がスペイン語のクラスに出席できるように、夕食の準備をなさるといいますが、本当に素晴らしいことだと思います。夫婦双方の成長というものは、ふたりが互いに愛を深め、相手が自分の可能性を發揮してより完全になり、才能を生

かして証を強めていくことができるようにする時にもたらされるものです。夫婦の絆を強いものとするためには、相手からだけでなく自分自身の中からも最善のものを引き出すことにより、個人として成長する気持ちが必要です。妻が神から与えられた賜を發揮するように求められた場合、夫はそれを助けなければなりません。妻の方も、夫が家族を導く場合に、助けるようにしなければなりません。

2. 愛と献身によって守られた夫婦は、意見の食い違いを認め合うことができます。

大小様々の意見の相違点がありますが、夫婦がひとつとなるためには、それらを譲り合い、取り除いていかなければなりません。そうするならふたりの絆は強いものとなります。意見の相違があっても仲たがいをすることはありません。ふたりの間には、共に互いを愛し、神の王国を築き、永遠の家族を作っていくという3つの前提があり、意見の相違について納得のいく答えが出るまで率直に話し合うことができます。すべてこの3つの基本的な前提に照らして考えることができるのです。その前提が崩れない限り、解決に至るまでの過程で激論が交わされたとしても、ふたりの間にひびが入ることはありません。

ある婦人が自分の妹夫婦を訪ねた時、そのような話し合いを目にしました。意見の食い違いについて答えが出るまで、その夫婦は穏やかに、そして率直にお互いの考えを述べました。その婦人は自分の家庭の中ではそんな話し合いはとても考えられないと、もらしました。「うちでは意見の食い違う点について話し合うなんてとてもできません。どんな小さな問題でも、夫との間がこじれてしまいます」と言うのです。一時休戦状態というような間柄の夫婦も中にはいます。それでも、信頼、献身、愛をすみの



頭石として据えるならば、家庭はふたりにとって憩いの場となり、互いに相手の意見を尊重するようになるでしょう。そして、意見の違いは愛によって優しく包まれ、ひとつになっていくのです。

3. 両親の愛と関心が子供たち一人一人に注がれます。

公平にえこひいきなく扱うなら、嫉妬の種をまくこともありません。モルモン経を読むと、民が心から主に従い、聖霊がとどまった時の状況描写が、どれもよく似ていることに気がつきます。例えばニーファイ第四書にはこう記されています。

「一人のこらずみな互いに正しく扱った。

そればかりでなく、一同は一切の所有物を共有したので富んでいる者と貧しい者との区別もなく……誰もかれも……天の賜を授けられた。」(Ⅳニーファイ2-3) これこそ愛の賜です。

4. 結局、愛と献身が幸福への基礎となります。このことについても、ニーファイ第四書の中に記されています。「民はその心に神の愛を保っていたから、全国に何ら不和がなかった。

また、嫉妬、争闘、暴動……がなかったから、まことに……この民ほど幸福な民があるはずがなかった。」(Ⅳニーファイ15-16)

愛の内に建てられ、献身によって守りを固くしている家庭を維持していくのは、労働と奉仕です。このことを忘れないで下さい。働き手が敬われるなら、家庭はその働きによってさらに強いものとなります。家族が何も感謝の気持ちを表わしてくれないために、自分がしていることに対して自信をなくしている女性がよくいます。また、家の中が快適な状態に保たれていることに慣れてしまって、そのために払われている必要な働きやエネルギーなどを忘れてしま

う場合が往々にしてあります。

私たちは、家事の切り盛り全力を尽くしている母親に感謝の意を表わす必要があると思います。母親の働きがなかったら、家の中のことはうまく運ばなくなってしまう。母親がしている働きを認めると共に、どうしたら母親がもっと楽になるかを考えましょう。そうすれば、家族のほかの人たちの手助けがなければならぬということに気がつくはず。それは何か特別な仕事をするのかも知れませんが、また、家事がもっと楽になるように自分たちの生活習慣を変えるのかも知れません。

秩序のある家族は幸福をもたらします。しかし、その秩序を築き、維持していくのは、確かにその第一の責任は母親にありますが、家族全体が心に留めなければならないことです。母親が外に出て働かなければならないようなことになると、どうしても家事全般の協力関係が危なくなってくるものです。

夫や父親の働きに対して敬意を払うことも忘れられがちです。実際に働いている姿を目にすることがないため、どれだけ尽くしてくれているかがわからないのだと思います。家庭の夕べの時に、父親に自分がしていることを全部説明してもらい、その仕事について理解させることもできます。そうすれば、単に知識を得るだけでなく、父親が一生懸命働いていることがはっきりとわかるのではないのでしょうか。男性が働いて得たお金は確かに欠くことのできないものです。しかし、多くの父親にとっては、家族が自分の仕事を誇りにしてくれることの方がもっと大切です。

小さな子供たちにも、大切な仕事を与え、それに責任を持たせることによって、働くことの大切さを教えることができます。家庭の中であれば、間違いがあってもそれが

大きくなる前に直すことができますし、赦してもらふこともできます。ですから子供は安心して、どのように働くかを学ぶことができます。両親に良い仕事をするこの大切さを教えてもらえる子供は幸せです。

子供たちが大きくなってどのような仕事に就くか、私たちにはわからないかも知れませんが、成功するように備えを始めてやることはできます。子供たちは愛する両親の指導の下に、道具や器材を責任を持って取り扱うことや、指示に従うこと、慎重にまた喜んで仕事を進めること、また、うまくいくまで根気よく責任に取り組むなどのことを学び、将来への備えをすることができます。このようにするなら、大抵の職業訓練プログラムに必要なものは前もって済ませておくことができます。

仕事も人に頼まれてからする場合はなおさらですが、自ら進んでそれをする時、またほかの人を助けるためにする時は、奉仕となります。奉仕することは家庭の中で教えなければなりません。私は奉仕の精神が見られる家庭には、祝福がもたらされると心から確信しています。

私の心に強く残る家族がいます。私の友達の話ですが、彼女の家の隣にとっても親切で、よく人々に助けの手を伸べる人がいました。私のその友達も助けてもらったことがあります。その人は思いやりにあふれた態度で、また手際よく病人の世話をし、引っ込み思案の人に心を配り、元気を無くした人を励ましていました。

ある日、私の友人が何かの講演会に出席していた時、隣に座っていたひとりの母親が、体の具合の良くなかった子供を外に連れて行こうとして、あたふたと立ち上がりました。彼女も何か助けることはないかと行ってみると、そこにはすでにひとりの婦人がいました。何をなすべきかをよくわき

まえたその沈着冷静な看護ぶりがありにも隣の家の人に似ているので、私の友人はもしやその人が自分の隣人のことを知っているのではないだろうか、思い切って尋ねてみました。そうしたところ、何とその人と隣の家の人とは血を分けた姉妹だということがわかったのです。そのふたりは家庭で人に奉仕することの意味を教えられていたのです。家庭内での助け合いはその無私の精神の当然の結果として、霊性を高め、愛の絆を固くします。

責任感の仕事をする上で欠かすことのできない条件です。責任感とは家庭内の仕事に一貫した方針を与え、夫婦生活に秩序をもたらします。責任を明らかにし、報告をどのようにしたらよいかを決めておけば、家族の中の不一致は影を潜め、しつけの上でも良い機会となるでしょう。

責任ということを学ばせるためには、真剣な態度で臨ませる必要があります。たとえ小さな子供でも、自分が最善を尽くして行なったことに対して口先だけのほめ言葉を言われたとしたら、それと気がつくものです。

責任ということについて理解するなら、朝夕の祈りは報告の機会となります。また家族プロジェクトの計画や反省の会を家庭の夕べで行なえば、一人一人が家族への帰属意識と、自分も必要とされているのだという気持ちを持つことができるでしょう。教会、仕事の世界、そして最も大切な天父との関係の中で奉仕の業を行なうように家族を備えさせる方法として、意義のある仕事を責任をもって行なわせることほど良い方法はありません。

福祉の基本原則は私たちを強め、私たちに安らかな気持ちを与えてくれます。この原則によって、家庭は安全を守るとりとなり、社会からの攻撃に対する防御、嵐の

時の避難港となります。家族はふたりの人間がひとつになることから始まります。そして子供がいくら増えても、家族の組織の霊的な計算方法によると、家族はずっとひとつなのです。両親は安全な場所、避難港を備え、子供たちは愛の絆によって強められていきます。

家族組織は血縁という大きなつながりの中の一部分であり、また、教会より大きな輪の中の一部でもあります。家族は永遠の組織として完全でなければなりません。また自立する必要があります。

しかしよく考えてみれば、家族に何の助けも与えられないということではありません。主のみ業に献身するなら、主のみたまが常にその上にとどまるのです。

一時的に援助を仰がねばならないような困難な状態に陥った家族でも、そうした状態を主からの祝福に転じることができることを知っています。また、自分たちにはまだ生活を立て直す力もあることをはっきりと自覚しています。夫婦のどちらかが亡くなっても、その家族は変わることなく完全な組織を保ち、強さを失うこともありません。主がそのみ力をもって支えて下さるからです。自立は個人と家族が福音の原則に完全に従い、主の力を受けてさらに強められる時にもたらされるものです。そして、逆境の苦しみ、また時の流れや勢いに強く立ち向かう力を与えてくれます。

妻子を持ち、大学では自分の専門分野の学部長を務めていた人が、神殿長の召しを受け、それが終わると今度は伝道部長の任に召されました。そして伝道部長の任を終えた時、その人は脳いっ血で倒れ、体の自由がきかなくなってしまうました。しかし、彼の奥さんはつばやいたり、自己憐憫



をしたり、人に辛く当たるようなことはせず、それまで常に生活の一部としてきた福音の力に頼り、この全く初めての試練に立ち向かいました。彼女は夫を優しく励ましました。「私たちはこの日のために備えをしてきたのよ。私たちには福音の原則という土台があるわ。これを生涯最良の日々にするために、できることは何でもするつもりよ。」

物質的な援助は一時的なものです。福祉は永遠のものです。この世の生活は時間的にも空間的にも制限があります。しかし、原則は永遠です。皆さんが愛、労働、献身、奉仕、管理の職と呼ばれる責任、そして自立などの福祉の原則を十分に活用し、神殿、家庭などの安全で神聖な場において、夫婦や家族の絆を強めていくことができるように、へりくだり、イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン。

人に仕えることによって 得られる喜び



ジョアン・ランドール

愛する兄弟姉妹の皆さん、きょうこのように夫婦で、福祉の原則が奉仕を通して家庭にどのようなよい影響を及ぼしたか、お話できますことをうれしく思います。

先日我が家で、クリスマスのツリーや御馳走、贈り物などをすべてほかの人にあげてしまった家族の話をしたところ、子供たちがとても感心していました。それは、このような話でした。12月24日の明け方に火事があって1軒の家が焼けました。ところが、火事のことを知ったその家の子供の友達の家ですぐに家族会議が開かれ、クリスマスを分かち合うことを、全員一致で決めたのです。

早速、仕事に取りかかることにしました。まず、贈り物の名前を張り替え、箱にクリスマスのお菓子や食事を詰め込むことから始めました。そして最後には、クリスマスツリーまでも持っていくことにしました。こうした贈り物を秘かに届けて家に帰った時、その家族の心は愛につつまれ、はつらつとした気持ちで一杯になっていました。

(レオン・R・ハートショーン、*Memorable Christmas Stories* 「忘れられないクリスマス

スの思い出」p.41参照)

この話を聞いて、子供たちが言いました。プレゼントが何もなく「そのあげた方の人、つらくなかったのかな。」「贈り物、受け取りにくかったんじゃないかしら。」

ところがそれからしばらくして、私たちが奉仕を受けることになったのです。この町に引っ越してきて1カ月しかたないというのに、私は8番目の赤ん坊の出産のために2カ月間も寝ていなければならなくなりました。最初は自分たちだけで何とかやっていけると考えていました。子供たちはそれまでもよく手伝い、家の周りの仕事もきちんとやってくれていました。ところが、どんなに計画を練って一人一人の責任を増やしても、どうしても助けが必要であることがわかりました。

人々に奉仕し、自分も奉仕を受けることについて、これまでに何年も教えられ、耳にしてきたのですが、いざ助けを借りるとなると、多少の抵抗を感じました。しかし、実際に助けを受けてみると、私たちの心はそうした人々の思いやりに感謝する気持ちで一杯になりました。

現役を退いた御夫婦が一番下の子供を、朝の散歩に連れ出してくれるようになりました。監督は祝福された聖餐を私の家まで運ぶように手配して下さいました。また何人かの姉妹たちが、忙しい中を定期的に立ち寄っては話をして下さいました。私が皆と会って話をしたいということをおわかって下さっていたからです。また御夫婦でわざわざ持ってきて下さった御馳走と一緒にいただいたこともありました。またワイシャツがいつの間にか消えたかと思うと、きれいにアイロンがかけられて返ってくることもありました。

こうした経験から、「何かできることがあれば言って下さい」という言葉がどれほ



どの意味を持つかが改めてわかりました。人はそのような申し出はなかなか受けられないものです。私たちの家を訪れた方々は逆に、「台所をきれいにしましょうか。それとも掃除機をかけた方がいいかしら」といった言葉をかけて下さいました。彼女たちは皆、助けになることを考えるだけでなく、実際に行なってくれました。そういった意味でみんな私たちにとってよい模範でした。

さらにどうしても私の心を捕らえて離さなかったことがあります。奉仕を受けるたびに、私はこう思いました。「この人は私たちの家族のためにこんなにして下さいただ、もし私たちに問題がなかったら、同じことを御自分の家族のためにしてあげられたはずだわ。」でもどうでしょう。子供の大勢いる家族の人が、缶に一杯に詰めた手作りのアイスクリームを持ってきて下さいました。また、素敵な女性が娘の卒業式のドレスを作って下さいました。ある友達は、私たち家族がお店のパンよりも手作りのパンの方が口に合うだろうと、毎週、両手に一杯の手作りのパンを作ってきて下さいま

した。また祖母は家を空け、2週間も私たちの所に泊まってくれました。

その時の私の日記にはこう書いてあります。「私は、自分が元気になった時、この親切という贈り物だけは忘れないようにしましょう。」こうして奉仕は生活の基本原則になり、私たちは人々に奉仕したいという強い望みをいつも持つようになりました。

その結果、子供たちの疑問にも答えられるようになりました。「あげる方はつらいんじゃない？」そうです。それは、だれかが犠牲にならなければならないからです。「受けることもたいへんじゃない？」そうです。でも、私たちは助けしてくれる人々を愛し、自分が助けようとしている人々を愛することができます。

私たちの近所には、ペンキを塗り替えたいと思っている未亡人や引っ越してきたばかりの家族はいないかもしれません。でも、小さな声のささやきがあって、だれかのために善いことをするように導かれることがあるはずです。アイダホに住んでいた頃、私たちはワード部切っの開拓者「ジョー

おじさん」を助けていました。こちらに引っ越してきてからも、時々このおじさんのことを思い出しては、手紙を書いて「ジョーおじさん」を励ました方がよいと感じていました。みんなの考えがまとまり、ようやく一通の手紙を書き上げて送りました。ところが遅かったのです。手紙を出した翌日に、「ジョーおじさん」が亡くなったという知らせが入りました。私たちは最初感じた時に実行を怠ったために、奉仕の機会を失ってしまったのです。

私たちの宝物のひとつに、前にいたワード部のある姉妹からいただいたものですが、感謝の言葉をつづった1枚のカードがあります。この姉妹の屋根のふき替えを計画した時に、早朝だったのですが、夫は3歳と5歳の子供を連れて行った方がいいと強く感じ、そうしました。ところが外に出たこの姉妹が、ふたりの幼い息子たちを見つけて感謝をして下さったのです。息子たちは困っている人々を助ける喜びをこの時に知りました。

こうして奉仕の精神が家族の中に広がっていきました。ですから、娘が困っているある家庭の玄関に食物を置いてくる画期的な計画を提案した時も、私たちはすぐに実行できました。

家族による奉仕活動は決して人目を引いたり、独創的なものである必要はありません。福祉農園に家族で出かけることも、レクリエーションのために外に出ると同じくらい楽しいものです。

次に、皆さんにもできる幾つかの奉仕活動を紹介しておきます。

1. 近所の子供を初等協会に連れていく。私たちも続けてみてわかったのですが、この小さな友達はずぐに日曜日にはいつも私たちが迎えにくるものだと思っていたそうです。

2. 初等協会や日曜学校の教師やホームティーチャーに感謝の言葉をつづったカードを送る。自分のことを心にかけてくれる人がいることを知って、彼らは驚くでしょう。

3. ワード部聖歌隊に喜んで参加する。指揮者から感謝されるだけでなく、音楽を通して奉仕することにもなります。

4. 家庭菜園でできた作物を分かち合う。

5. 普段ひとりで生活している人を夕食に招待する。

6. 秘かに奉仕する。みんなでお菓子を作って、だれかの家の玄関にそっと置いておくことなどはとても楽しい活動です。

7. 娘に、夫婦で神殿に参入する人たちのためにベビーシッターをするように勧めます。

8. 近所の人と持ち寄りの食事を開いて友情を深める。こういった類の奉仕は教会員でない人々に非常に良い影響を与えます。

9. 前もって計画する。伝道の召しがいっつも来てもいいように銀行預金を始めて下さい。

10. 福音を中心とした生活をして自ら模範を示し、他の人々を励ます。

昔の扶助協会の話の中に、ケーキを作っている母親に話しかけた子供の話があります。子供は母親にこう尋ねます。「そのケーキ、今度はだれのところに持っていくの？」このちょっとしたやり取りの中からも、この子供の家では日頃から人に奉仕することを習慣としていることがよくわかります。

このほかにも家族が奉仕をすることによって人々に喜びをもたらす方法はたくさんあります。私はまた、奉仕を受けることによって証を強めることができたことを心から感謝しています。これらのことをイエスキリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

奉仕によって 証を強める



ナイル・ランドール

丁度5年前の9月のことでした。私たちの家族は当時まったく予期せぬことから、あることを引き受けることになりました。ところが、そのことが私たちの家族を完全に变えることになったのです。それは養子をもたらすことでした。

私はその日のことを今でもよく覚えています。子供は明日やってくるというのに、私たち以外の引き受け先が見つからないというどうしようもない状態でした。確かに私たちは、養子をもたらすために努力を重ねてきました。しかし突然にそれが現実になって、自分たちが決心したことに対して、あらゆる面で不安が募ってきたのです。自分が腹立たしく思えたことも確かです。すでに自分たちの手に余る子供を抱えていると感じていたからです。子供は5人ですが、みんないたずら盛りで散らかすことはよくするのですが、片付けようとしません。その上に、自分の子供でない子をもうひとりわが家に迎えようというのです。

こうした不安な状態の中で、私たちは子供たちと話し合い、養子を迎える準備を始めました。子供たちは、子供特有の信仰に

よって、すぐに養子のお姉さんを受け入れる気持ちになりました。

養子のお姉さんのジーンがやって来ました。彼女は私たち家族よりもっと不安な気持ちでいたようです。ジーンは17歳でしたが学校は2年遅れていました。我が家では一番上の子が9歳で、もちろんジーンのような大きな子を持ったことはありません。とにかく、彼女のためにいろいろなことをすぐに身につけなければならないと痛感しました。そのほか、その後の生活がどのようなものになるかいろいろ想像してみたのですが、当たっていたのは学ばなければならないということひとつだけでした。

早速、新しい問題が起こってきました。それはシャワーを浴びて体を洗うことを教えなければならないということでした。その問題には、彼女が来てほんの数日後に気づきました。結局、家長である私の務めだという家内の判断で、私が娘と話すことになりました。話し合いは本当にうまくいきました。おかげでそれから3カ月間、私たちはお湯のない生活をしました。ジーンがあまり一生懸命シャワーをやるものですから、ボイラーの温度が上がりすぎたのです。

今振り返ってみるとわかるのですが、ジーンを預かっていた数カ月間に、私たちはいろいろなことを学びました。その幾つかをここで御紹介したいと思います。

私たち夫婦は、まずこの子を差別しないで自分の子供たちと同じように受け入れることで苦しみました。特に最初の2、3日は、自分たちの子供をひいきしないようにと懸命に努力しました。このことは私たちにとってかけがえのないレッスンとなりました。今では、だれでも素直に受け入れられるようになりました。もしこういう機会に恵まれなかったら、生涯人を受け入れる

ことを学ばずに終わったかも知れません。また私たちだけでなく、子供たちも学ぶことができ、心から感謝しています。

ジーンから学んだ2番目のことは、私たちは人から多くのことを学べるということです。ジーンは子供たちに多くのことを教えてくれました。ジーンは働くことが好きで、いつも自分から仕事を積極的にやり、しかも上手にします。その上、ほかの子供たちの仕事まで手伝います。私たちが子供たちに何とかして教えようと考えていた原則を、子供たちの心の中にまで浸透させてくれました。当時、私たちが子供たちについて考えていた最大のチャレンジは、いかにして子供たちに仕事を引き受けさせ、しかもそれを最後までやり遂げさせるかということでした。子供たちはいつも仕事を少なくし、できればやらないで済む方法はないかと考えていたようです。ところが、ジーンの教え方は違っていました。大抵の親子がそうであるように、私たちの子供たちも私たちとは衝突するのですが、ジーンと言うことなら素直に受け入れるのです。

例えば、ジーンは手でお皿を洗うのが好きでした。皿洗い器を使いません。そして今ではうちの娘までもお皿を手で洗うようになりました。

ジーンが私たちに教えてくれた3番目のことは、子供たちとどのようにして意思の疎通を図るかということです。ジーンは子供たちの中で一番年上ということもあって、状況を把握する場合、基本的には私たちと同じように感じていたようです。そこで、問題は理解することにあると考えました。最初、私たちの間には言葉の壁がありました。ジーンは何でもかんでももうなずいて「はい」と答えるのですが、その内にジーンは言っていることがわからなくても言葉が途切れればそこで「はい」と答えていたのだ



ということがわかりました。このことから私たちは、自分たちの子供についても同じようにもっと深く考えてあげなければならないと思うようになってきました。毎日の子供を育てる過程の中で、子供たちにあまり多くのことを期待し過ぎて、家族の中で起こっていることは当然理解しているはずだと思うことがあります。また時には、自分の子供より隣近所の子供の方を大切に扱っていることもあります。このような貴重な教訓を得られたことを感謝しています。

4番目に学んだことは、家族として初めて伝道活動に参加したことです。私たちはジーンのことを「スポンジさん」と呼んでいました。何でも吸収したいと思っていたからです。ジーンはよく質問してきます。

なぜみんなと一緒に座って食事をするのかとか、祈る時になぜひざまずくのか、どうして毎週日曜日に教会に行くのか、どうして食事のたびに違う種類の食物を食べるのかなど、一つ一つ尋ねるのです。そして福音の話になった時、特別の親しみを覚えたようで、知り得る限りのことをすべて知り尽くしたいと思うようになりました。

ある時、私たちはジーンを連れて一緒にキャンプに出かけました。車を止めて外に出ると、ジーンはすぐにキャンプを張る所を掃き始めました。子供たちはただ驚いてじっと見ているばかりでした。それでもジーンは手を休ませることなく、あたりをきれいに掃いて、土や松の葉をかき集めたのです。ところが、それだけではなかったのです。ジーンは子供たちのそばに来てひざまずくと、数分間自然をきれいにすることの原則について話し始めたのです。つまり、キャンプや野外活動をする時に周りをきれいにすることがどんなに大切なことなのか、そしてこのようなちょっとした心がけで、生活がどんなに生き生きとしたものになるか話してくれたのです。しかも驚いたことに、子供たちがその話を熱心に聞いているではありませんか。私たちはニューメキシコの砂漠ではなく、コロラドの山間に住んでいたことをただただ感謝しました。これがニューメキシコの砂漠だったら、どんなに一生懸命掃いても固い地面は現れないからです。

丁度3週間前、ジーンがふたりの子供を連れて私たちの家を訪れました。ジーンは静かな口調で、どうしたら自分の家族と子供たちにより影響を与えられるかと尋ねていました。

こうした話を聞くと、すべて楽しくよいことばかりであったように思われますが、決してそうではありませんでした。まさに

人に奉仕することと同じで、喜びの陰には多くの犠牲がありました。奉仕によって得られる深い満足感はほかの方法では味わうことができません。犠牲は人を変え、そして人に非常に大切なものへの備えをさせます。

私たちはジーンに永遠に感謝します。それは、ジーンが私たちの娘となったから、あるいは、ジーンが私たちの家庭に喜びをもたらしてくれたからだけではありません。私たちが感謝するのは、彼女が人に奉仕する機会を私たちに与えてくれたからなのです。私たちは両親として、福音の原則を教え、それを家庭で応用し、完成に向かって努力するために多くの時間を費やすことができるということを学びました。時には、努力している割には子供たちにそれ程影響を与えていないと感じられることがあります。しかし、奉仕を通して福音の原則に従った生活を始めると、素晴らしいことが起こり始めたのです。私たちがこれまで長い間教えようとしてきた福音の原則を、子供たちが自然に理解するようになったのです。

私たちは家族みんなで奉仕をして、それ以上に多くのものを受けました。これほど素晴らしいことがあるのでしょうか。その人がひとりではできないことを行なって助けることによって、私たちは自分ひとりでは得られない祝福を得るのです。これが本当のイエス・キリストの福音です。人々に奉仕することによって、家族と個人は強められ、祝福されるのです。そしてシオンに住む民は備えをすることができます。

イエス・キリストは生きておられ、この教会には完全な福音の計画があります。また福祉の原則が福音の実践にあることを証します。これらをイエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

「高潔な心で 受けられるように 知恵を使って与えなさい」



十二使徒定員委員会
マービン・J・アシュトン

最 近行なわれたブリガム・ヤング大学後援の教育週間の部会に出席した時のことです。聡明な教師であり、ステーキ部扶助協会の会長でもあるレーゼル・マックブライド姉妹が、スクリーンに1枚の写真を映し出しました。それは、髪を乱したまま腕を組み、考えにふけている明るい目をした少年の写真でした。そしてその写真にはこう書いてありました。「僕は大した存在なんだ。だって神様はつまらないものをお造りにはならないのだから。」もう一度繰り返しましょう。「僕は大した存在なんだ。だって神様はつまらないものをお造りにはならないのだから。」

この言葉は福祉事業のテーマになると思います。

人間は社会的あるいは経済的なあらゆる場において、自尊心と自立心を確立するために助けを必要とします。福祉事業が真にその効力を発揮できるようにするには、全人的な改善に関心を寄せなければなりません。人が自分自身に対して抱くイメージは、他の人との交わりや経験を通して学んできたものにほかなりません。これは注目に

値することですが、先ほどの少年が自分の本質に気づいたのは、だれかの助けがあったからなのです。それは母親か、初等協会の先生か、隣人か、あるいは「わたしは神の子」(「子供の歌」B-76)のような歌であったかもしれません。少年は何らかの助けによって自分が何者であるかを悟ったのです。自分がつまらない存在ではないこと、大きな可能性を秘めていること、そして天父に愛されているひとりの人間であるということを知ったのです。

伝道の書の4章9節から10節にはこう記されています。「ふたりはひとりにまさる。彼らはその労苦によって良い報いを得るからである。すなわち彼らが倒れる時には、そのひとりがその友を助け起す。しかしひとりであって、その倒れる時、これを助け起す者のない者はわざわざいである。」

福祉事業の原則の正しい応用とは、他の人と働く機会を与えて、相方の改善をはかることにほかなりません。

優れた教師について最近是这样言われています。「彼は人生の質問に対して答えを与えない。むしろ、各々の生徒が自分で答えを見つけることができるように指導する。また、生徒に自分は愚かな人間であると感じさせるようなことはしない。むしろ生徒に自信と勇気を与え、しかも決して強制はしない。」

きょうの大会で私たちは教会の偉大なプログラムについてお話してきました。このプログラムは、技術や自給自足や自尊心について教え、それらを育むことにより、すべての人に個人の価値を認識させるために始められたのです。福祉事業は私たちに続けて奉仕し、学ぶ機会を与えてくれます。それを通して私たちは、自己や隣人に対する信頼と働きかけを決して失ってはならないことと、周囲の状況に決して負けてはな

らないことを学ぶのです。

福祉事業や家庭生活の中で失敗があるとすれば、それはお互いの信頼を失った時だけです。忍耐力、辛抱強さ、真の愛、これらのものは、神のすべての子供たちを助けるために熱心に働く時にこそ教えられ、学ぶことができるのです。

先日、日曜学校の後で、ある教師が私のところへ来て、特別に握手をして欲しい子供がいると言いました。私は手を差し出してその少年と握手をしました。その時、おそらくこの子にできることと言えば、教師の本をクラスに運ぶことぐらいではないだろうかと思いました。この思いやりのある教師は少年にどのような責任を与えていたでしょうか。本を運ぶ責任でした。この教師は生徒の能力に合わせて自立を教える方法をわきまえていました。このような指導者がいることを、私は神に感謝しています。

ロバート・ルイス・スティーブンスンの次の言葉は私たちにこの事実を思い起こさせます。「本来あるべき自分になり、自己の持つ可能性に到達することが、人生のただひとつの目的である。」(バーゲン・エヴァンス、*Dictionary of Quotations*「引用集」p.393) 救い主は「父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」(ヨハネ20:21)と述べておられます。人にはそれぞれ特別な生きる目的があります。自分自身でそれを見いだすことができる人もいれば、助けを必要とする人もいます。互いに助け合ってこの地上での目的を果たすならば、私たちすべてがこの靈感により与えられた福祉活動の一部となるのです。

サタンは全力を尽くして私たちの邪魔をし、私たちの進歩を妨げて失望させようとするでしょう。試しを受けた時は、経済恐慌の時代に「イギリスの勇気の獅子」と言

われたウインストン・チャーチル首相の次の有名な言葉を心の中で繰り返してみるとよいでしょう。彼は独特の人格と強さを持ってこう言いました。「決して、決して、決して、決して、決して、あきらめてはならない。」この彼流の力強い言葉は、もうひとりの偉大な指導者の言葉と共鳴します。「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。」(ヨハネ8:31-32)

ニュース解説者であり著述家であるポール・ハービーは言いました。「いつの日か私が世に言う成功者になって、『あなたの成功の秘訣は何ですか』と尋ねられたら、簡単にこう答えたいものだ。『転んだ時に起き上がることです』と。」

中には、現在の福祉の原則は時代遅れで、過度に強調されていて、現今の世界状況のもとでは実現不可能であると、信じ込ませようとする人がいます。そういう人々に申し上げたいと思います。疑い深い人にとっては、学ぶよりはあきらめる方が易しいのです。仕える者になるより批評家になる方が易しいのは当然のことです。今日の、そしてこれから先の不確実な時代の中で、福祉事業は世に高くかかげられた光となって存続することでしょう。その土台は自らを助くる人々の岩の上に建てられていくのです。正しく実施されるならば、人々に必要な援助は、教会のこの大切なプログラムを通してほとんどまかなえるはずで

す。福祉事業は神様のプログラムです。私たちが正しく参加していくなら、この確信が得られるに違いありません。物資、日用品、お金、食糧、労力、技術、これらに加えて信仰がなくてはなりません。神様の方法で助け、導き、従うという信仰です。その際

の導きと力については、繰返し引用される大切な聖句、教義と聖約第104章の14節と16節に記されています。「主なるわれは諸々の天を上げ、わが手づから創れるもの、すなわちこの地を築きたり。されば、その中にあるよろずのものはわがものなり。……

されどその事たるや、必ずわが道に適いて行われざるべからず。見よ、この道は主なるわれ、わが聖徒らを扶養するため命を下したるところにして、貧しき者は高くせられ、それにて富める者は低くせられんことこれなり。」

自立は、自由意志と責任とがほどよくバランスのとれた時に養われます。私たちは共に生活し、教え、分かち合う時、自分自身と他の人々の中に自立の精神を養っているのです。

福祉事業を活用し、成功させるには、すべての教会員が正しく参加しなくてはなりません。主の方法には、個人と家族と教会とが常に含まれており、これらは互いに協力して働きます。福祉事業と家庭とが密接に結びつく必要があるのです。理解力と賢明な準備、それに祈りを通して得られる導きは、欠かせない要素です。秩序を保ち、



効果を上げるためには、正しい経路を通してすべての行動を行なうことです。

計画を念入りに作成し、プログラムを設定し、真剣に準備する、それだけでは十分ではありません。ほとんどの人はそれを行なう力を持っています。しかし、多くの人には私たちの信じている原則を実践する時に苦しい経験ををするのです。中にはそれを避けようとする人々もいます。

ここで良く覚えておいて欲しいことは、一番強力な助け手はしばしば自分に最も身近なもの、すなわち自分自身の手にあるということです。問題が起こった時、あなたはまず自分の力で解決してみようと思いませんか。それとも両手を上げて「ダメだ」とか「私にできるわけがない」と言いませんか。静かに座り、現状を分析し、可能な行動をすべて挙げることができますか。原因を見きわめ、対処する方法を決定することができますか。冷静になって黙想すれば、興奮状態にいるよりも早く問題を解決することができます。

マリオン・G・ロムニー副管長はよくこのように言われます。「自尊心のある会員ならば、自らを扶養するという責任を他人に転嫁するようなことはないだろう。私たちの責任は自分自身を養うだけにとどまらない。私たちは家族をも養うのである。」(「聖徒の道」1981年9月号、p.146)パウロはこの点について次のように言っています。「もしある人が、その親族を、ことに自分の家族をかえりみない場合には、その信仰を捨てたことになるのであって、不信者以上にわるい。」(Iテモテ5:8)

家庭は福祉活動の中心でありますが、その家庭と家族は、すべての活動に常に参加して自尊心を保てるようにすべきです。個人の福利を実現しようとするならば、家族全員が参加しなくてはならないということ

を、いつも頭に入れておく必要があります。

家族は互いに最も良く理解し合っているものです。一団となって働くことによって問題を色々な角度から見るができるでしょう。論争をせずに家族会議を開くならば、チャレンジに対する、新しくより良い解決法が生まれることでしょう。

家族がお互いに助け合って問題を解決し、自立心と責任感を養っていくならば、それらの努力と援助の積み重ねが家族全員に自信と安全という報いをもたらすでしょう。

もちろん、私たちの中には教会に助けを求めなければならない人もいますでしょう。個人あるいは家族が必要な援助を与えることができない時に、このような助けに頼れるということは、大きな慰めではないでしょうか。この場合も、定められた正しい経路を通して行なわれます。感情的になつたり狼狽したりしては、従うべき道を見つめることはできません。すべてのことは、現代の予言者によって明確にされた主の方法に則って行なわれるのです。

個人と家族に最も多くの報いをもたらす計画のひとつとして、可能な限り負債を避けることが挙げられます。負債それ自体は、良いものでも悪いものでもありません。どちらにも成り得る経済上の一手段です。事業における負債は生産性の増大と拡張のために使われます。しかしながら、個人で負債をかかえている人について考えると、そのほとんどが平均的な生活水準にありながら、一時的な財政危機に陥っています。彼らはお粗末な浪費癖の犠牲者であり、多くの場合、正しい財政管理の重要性について何の考えも持っていません。またクレジット、特にクレジットカードを乱用し、予算の範囲内で、つまり自分で処理できる範囲内で生活しないのです。多くの人々にとってクレジットは、普段行けないような所へ

自分を運んでくれる魔法のじゅうたんのよ
うな物です。最初はただで乗れても、すぐ
後で支払いをしなければならぬことを忘
れています。元金に利息が積み重なり、そ
の額に驚いてしまうことでしょう。

負債は深刻な家庭争議の原因にもなりま
す。収入のほとんどを借金の返済にあてな
ければならぬ夫婦が、結婚生活に破綻を
来たすのは、よくあることです。

今日の市場では、そうです、あなたの隣
近所や町や市では、悪質な詐欺師が心をそ
そるあらゆる手段を使って、すぐ惑わしに
乗る人々をねらっています。残念なことに、
私たちの中でもたくさんの人々が耳元でさ
さやかれた甘い話に乗ってだまされていま
す。「一生に一度のチャンスですよ」とか「あ
なたにだけですよ」と言って誘いかけるの
もめずらしいことではありません。このよ
うな話は疫病を避けるように、避けるべき
です。

主は、邪悪で無法を働く者が何も知らない
弱い人々から不当な利益をだまし取るの
を見た時目を覚まして警戒を怠らないよう
にとおっしゃっています。末日聖徒は、他
人を利用したり、不正を働いたり、うそを
ついたり、盗んだり、ごまかしたり、だま
したりしてはなりません。私たちの責任は、
互いに助け合って幸福を破壊する力を持つ
ものを締め出すことです。

倅約の習慣は時代遅れではありません。
私たちはたとえ物がなくても、あるいは、
新しい物が買えなくても、収入の範囲内で
生活できるように自分自身を訓練しなけれ
ばなりません。賢明な人は、必要な物とた
だ欲しい物とを区別できます。予算をたて
ることはとても骨の折れる仕事かもしれま
せんが、私はお約束します。それはやれば
必ずできることなのです。

負債は破壊的な力を持ち、経済的な束縛



や倒産、さらには自尊心の喪失を招く原因となります。金銭を賢く管理し、適切な予算をたて、什分の一と断食献金を納める家族は、主の方法で自らを助け、隣人を助けているのです。負債は必ず返済すべきです。主は、私たちが仕事の上で立派に成功して、自分の財産を個人や家庭や教会や地域社会のために役立てるように望んでおられます。

イエスは、「わたしの羊を飼いなさい」(ヨハネ21:16)と言われました。もし、羊の居所がわからなければ、羊を飼うことはできません。また羊に反感を抱かせるようでは、羊を飼うことはできませんし、えさがなければ、飼うことはできません。また、愛がなくとも、働く意欲と分かちあいの精神がなくとも、飼うことはできません。

迷える羊がどこにしようと、助けに必要なことは思いやりの気持ちです。思いやりは、相手の気持ちを理解し、その人が感じていることをそのまま感じ取る能力です。この気持ちなしに、本当の意味での援助はありえません。思いやりを示すには、相手の信頼を得、目と耳と心で話を聞き、相手の気持ちを理解しようと努力し、そして本当に理解していることを態度で表わすことが必要です。思いやりということを実に理解し行なう人は、相手の問題を解決したり、

口論したり、もっと悪い例を引き合いに出したり、非難したり、自由意志を束縛したりしません。ただ、その人が自ら努力して解決法を見つけられるように、その人の自尊心と自己に対するイメージを高めてあげるので。

援助を必要とする人々は、あらゆる年齢層に及びます。ひとりぼっちで迷っている若い羊がいます。疲れ切って病に伏している年老いた羊がいます。私たちの家族の中に、近所に、あるいは断食献金によって手を差し伸べられるはるか世界の片隅に羊たちはいます。ある羊は食物に飢え、またある羊は愛と関心に飢えているのです。

もし私たちが主の羊の反感をかうようなことをすれば、彼らを養うのは不可能とまでいかなくとも、かなり困難なことになります。皮肉な態度やばかにした気持ちで教えたり助けたりしてはなりません。命令するような口調や「私が正しくあなたは間違っている」といった態度は、迷える羊を逆に遠のけてしまいます。そこには厚い壁ができてしまい、どちらのためにもなりません。

相手が自尊心を失うようなことを勧めてはいけません。さもないと、その人は去ってしまい、助ける機会は失われてしまうでしょう。もうひとつ忘れてならないのは、何も求めずに与えるだけでは神の子供を本当に助けることにはならないということです。すべての教会員は、受ける物に対して働くという自立自活の精神を持つべきです。迷える羊に与える最も良き食物は、真の愛と高潔な心の回復なのです。

私たちは愛を行ないで表わします。もし行動が伴わないとしたら、愛の言葉はむなしなものとなるでしょう。主の羊は世話をしてくれる羊飼いの関心を必要としています。羊飼いは羊たちを進歩の道へと導き、そこで

彼らが神の戒めに従う価値を知り、高遠な目標に到達することに崇高な思いを抱けるように助けます。

愛は、私たちの家庭の中から始めなければなりません。あまりにも多くの人が、家庭という輪の中で最も愛が必要とされている時に、家庭外へその愛を向けています。

古いセルビアのことわざに、「親切は、権力で命ずることも金で買うこともできない唯一のサービスである」という言葉があります。困っている人の世話をしして助ける際に愛を示す最良の方法は、親切によってその愛を日々表わしていくことです。真実の愛は生命と同様に永遠のものです。

この2、3日、キンボール大管長の手術後の回復の間に、私は大管長に対する愛と感謝の言葉を多くの人々からうかがいました。大勢の人々が、キンボール大管長の奉仕と無私の愛に対してどのように感謝を表わそうかと考えています。私は恵まれてキンボール大管長と親しく交わってきましたので、参考になることをお教えできるかと思えます。それは、人種、信条、肌の色にかかわらず、すべての神の子供を無条件で愛し、キンボール大管長がされているように、努めて奉仕することです。これは福祉活動の土台となる原則です。教義と聖約50章26節を思い出して下さい。「およそ神より聖職に按手任命せられて遣わさるる者は、彼いと小さき者にてすべての人の僕なりとも、任命せられていと大いなる者とせらるるなり。」

主は私たちに心を配って下さり、奉仕に必要な指示と自立心を育む機会を与えて下さいました。主の原則は一貫して、決して変わることはありません。状況によって方法は変わるかもしれませんが、主の原則は常に一定です。福祉事業の成否は、その土台となる基本的な福音の律法に従うか

否かにかかっています。福音の教えの範囲内であれば、奉仕する上でより良い方法を求める時に、自由意志を用いたり新しいものを導入したりすることもできます。

終わりに、私たちが福祉事業に参加する根本的な目的を幾つか申し上げたいと思います。

1. 自立することによって自尊心を養う。
2. 主の方法で、すなわち自由意志と責任のバランスを保ちながら援助し、奉仕する。
3. 援助を提供するのは、(1)個人 (2)家族 (3)教会の順であることを理解する。
4. 主の羊を養うためには、羊の名前と居所を知る必要があることを理解する。
5. 正しい援助をするには、愛と思いやりと高潔な心を回復してあげることが必要であることを理解する。
6. 最後に、福祉事業には、計画、基本的な福音の原則に従うこと、そして、すべてに勝って、私たちの予言者のように無条件の愛をもって喜んで奉仕しようという気持ちが必要であることを理解する。

神様の助けがあつて、私たちが知恵を使って援助し、相手の人が高潔な心をもってそれを受けられますように。「神様はつまらないものをお造りにはならない。」この言葉は真実です。私たちは神の子供です。神は私たちを愛しておられ、私たちが自分自身と家族と隣人を心から愛するようにと望んでおられます。私は、教会にこの偉大なプログラムがあることを本当にうれしく思っています。これは、靈感によって与えられた生活方法です。全人類に幸福と利益をもたらす永遠の原則の実践です。それが福祉事業なのです。これらのことを私の証と愛と共に、イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

福祉の原則に添った生活をする



第二副管長
マリオン・G・ロムニー

私に与えられた責任は、福祉の原則に添って生活することについてお話することです。私は40年以上の間、教会の福祉プログラムの原則を勉強し、教えてきました。私はこの原則に親しみを抱いています。また、これがクリスチャンとしての生活をなすものであることをはっきり理解しています。これまでこの会で話された事柄に感謝します。どれも福祉の原則に添った生活をすることによって個人と教会にどのような結果が得られるかを示すものでした。

1936年、J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は次のように述べています。「福祉計画の真の長期的な目標とは、与える側と受ける側、双方の教会員の人格を築き上げることである。また、その人の中に眠っている良い点をすべて引き出し、霊の持つ潜在的な可能性を開花させて実を結ばせることである。結局のところ、これがこの教会の会員に課せられた使命であり、目標であり、存在理由である。」(1936年10月2日、ステーキ部長会特別集会)

皆さんの多くは、いろいろ問題のある人が助けを得、最終的に自立できた姿を見て

心温まる思いをしたことがあるでしょう。また、主の方法に従って助けが与えられる時、貧しい人も高められるという真理を目にしてきたことでしょう。

しかし、きょう私が述べたいのは、福祉の原則に従って生活することによって、援助される側が受ける影響ではなく、援助する側が受ける影響の方です。1936年のクラーク副管長の言葉をもう一度見てみましょう。「福祉計画の真の長期的な目標とは、与える側と受ける側、双方の教会員の人格を築き上げることである。」主は貧しい人の世話をするのに私たちの力を必要としません。私たちの助けがなくとも、おできになるのです。主はこう言われました。「主なるわれは諸々の天を上げ、わが手づから創れるもの、すなわちこの地を築きたり。されば、その中にあるよろずのものはわがものなり。あらゆるものはわがものなれば、わが聖徒らを扶養するはわが目的なり。」(教義と聖約104：14—15)

石油の鉱脈や宝石の原石がどこにあるかをキンボール大管長に啓示するのは、主にとって簡単なことです。もしも主がそうして下さったら、私たちは人を雇って採掘し、巨額の金を手に入れるでしょう。そうです。貧しい人の世話をするのに主は私たちを必要としておられません。必要としているのは私たちの方なのです。経験のために必要なのです。したがって私たちは、どのようにして互いに助け合うかを体験を通して学んで初めて、キリストのような愛と思いやりを育むことができ、やがて神のみもとへ帰るに必要な資格を身につけることができるのです。

私たちは、多大の犠牲を払わずに真のキリストの弟子になることはできません。1831年6月7日にカートランドで予言者ジョセフに下された啓示の中に、この真理が見事

に強調されています。この啓示の中で、主は28名の長老たちに、ふたりずつ連れだつてカートランドからミズーリ州ジャクソン郡へ旅立つように命じられました。旅先で福音を宣べ伝えながら、別々の道を通って行くのです。覚えていると思いますが、当時の生活は貧しく、しかも目の前には未開の地が広がっていました。ジョセフ・スミスと彼の同僚たちは、馬車と時々小舟を利用しながらオハイオ州のシンシナチに向かい、そこからケンタッキー州のルイビルを通して、汽船でミズーリ州のセントルイスに到着しました。さらにその町からミシシッピ川に沿ってミズーリ州全体を横切り、ジャクソン郡のインデペンデンスまで歩きました。その距離は300マイル近くに及んでいます。(ジョージ・Q・キャンオン、*Life of Joseph Smith the Prophet*「予言者ジョセフ・スミスの生涯」p. 117参照)

これらのことをお話しするのは、主が旅立つ長老たちに次のように語られた時の背景を、心に描いていただくためです。主はこう言われました。「汝ら貧しき者、乏しき者および病める者、悩める者たちを万事に憶えて憐れむべし。これらのことを為さざる者はわが弟子にあらざればなり。」(教義と聖約52:40) 想像できるでしょうか。主は極貧に近い長老たちに、「貧しき者、乏しき者を……憶えて憐れむべし」と言われたのです。

この戒めがすべての民に向けられたものであるということは、ベンジャミン王が貧しい人々に対して語った次の言葉にも強調されています。

「次に私は貧しい人たちに告げる。物が残るほど持たなくとも、日々の用にことを欠かないほど物を持ちながら、自分がのこりを持たないからと言って物もらいに与えることをことわる人々よ。お前たちは心の

中で『物が無いから施さないが、もしもあつたら施したであらう』と言うと思う。

さてもし、このようなことを心の中だけで言うのなら罪に当らないが、もしそうでなければそれは罪に当る。お前たちはまだ得ていないものを貪るから、それが罪に定められることは当然である。」(モーサヤ4:24-25)

自分には与える義務があると確信したら、次に学ぶべきことは、真心から奉仕することが何よりも大切であるということです。よこしまな心で施す人についてモルモンは次のように述べています。

「このような悪い人は捧物をして神に祈っても、もし真心からこれをしないなら何の役にも立たない。

その行いが義しいと認められないからである。

もし悪い人であるなら、捧物をしても惜み惜みするので、捧物をしないと同じことであるからその人は神の前に悪い人であると認められる。」(モロナイ7:6-8)

隣人に豊かな愛を注ぎ、進んで与えることをしなければ、モルモンが「キリストの純粋な愛」(モロナイ7:47)と定義した愛を育むことはできません。モーサヤ書にはこう記されています。

「アルマは……教会の聖徒らがみな各々その持物の多少に応じてその幾分を施すように命じた。たとえば、豊に持つ人は豊に施し、少しばかり持つ人は少しばかり施して何にも持たない人に与えると言ったようなことである。

しかし、このように人に施す財産の幾分は、神の御前に善いことを行いたいと言う心で自分の自由意志から施さなくてはならない。」(モーサヤ18:27-28)

そこで次のように尋ねる人がいるかもしれませんが。「どうしたら真心から施すこと

ができるのですか」、「惜しむ気持ちを克服するにはどうしたらよいでしょう」、「どうすれば『キリストの純粋な愛』を自分のものにできますか。」私の答えはこうです。すべての戒めを忠実に守って生活し、自分自身を捧げ、家族を大切に、教会の召しを果たし、伝道活動を行ない、什分の一と献金を納め、聖典を勉強し……私の答えはまだまだ続きます。皆さんが自分を忘れて奉仕するならば、主は皆さんの心に触れてそれを和らげ、ベンジャミン王の時代の祝福された民と同じ思いを、しだいに授けて下さるでしょう。彼らはみたまに動かされて、このように言いました。「まったく、われらは王の言われた言葉をみな信じ、またその言葉が確に真実であることを知っている。それはわれらの心を非常に改めさせ、悪を行う性質をなくして常に善を行う望みを与えたもうた全能の主の『みたま』に由るのである。」(モーサヤ5：2)

この完全な愛は、主が行なわれるすべてのみ業に表われています。主は創造された無数の世界をモーセに見せて、こう言われました。

「見よ、わが力の言によりて過ぎ行ける多くの世界あり。また今ある世界多くあり。これらは人にとりて数限りなし。……

一つの世界とそれにつける天の過ぎ行く時は、誠に別の世界を生ず。かくしてわが業にもまたわが言にも終りなし。」(モーセ1：35、38)

広大な創造の業をモーセに顯わしてから、主はこのすべての業の目的について次のように述べておられます。「見よ、これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ1：39) この聖句から、天の御父が利己的な心をまったくお持ちでないことがわかります。すべてのみ業と栄光は、神の子供たち

に永遠の生命と幸福とをもたらすためにあるのです。それゆえ、この人生における私たちの目的は、真心から人に仕えることに置くべきではないでしょうか。もしそうしなかったら、神のようになるという望みを果たして持てるでしょうか。私たち個々の人間が「キリストの純粋な愛」(モロナイ7：47)で満たされるようになれば、私たちが集まった教会は「心の清き者」(教義と聖約97：21)になります。そして、聖典に記されているエノクの民のようになるのです。「主はその土地を祝し……その民をシオンと呼びたまえり。彼ら心を一にし、精神を一にし、義に住みたればなり。されば彼らの中に貧しき者一人もなかりき。」(モーセ7：17-18)

イエスが十字架でお亡くなりになった時、新大陸では大変動が起こり、ようやく生き



のびたニーファイ人たちは、その後福音に従って生活するようになりました。聖典にはこう記されています。

「真心からその罪を悔い改めた者はみなイエスの御名によってバプテスマを施されて聖霊を受けた。……住民がみな心を改めて主を信ずるようになったので、その間に何の不和争論もなく一人のこらずみな互いに正しく扱った。

そればかりでなく、一同は一切の所有物を共有したので富んでいる者と貧しい者との区別もなく、自由な者と奴隷との区別もなく、誰もかれも自由となり天の賜を受けられた。……まことに神が造りたもうたすべての民の中でこの民ほど幸福な民があるはずがなかった。」(Ⅳニーファイ1, 2, 3, 16)

なぜこの民はそんなにも幸福だったのでしょうか。それは、彼らが利己心という束縛から解き放たれ、主が御存じのこと、すなわち究極の喜びは奉仕を通してのみもたらされるということを知っていたからです。

「心の清き者」を構成する民になることは、見はてぬ夢でも不可能な目標でもありません。なぜなら、それは主が私たちに命じておられることだからです。聖典にはこう記されています。「主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわない……。」(Ⅰニーファイ3:7)

私たちが「キリストの純粹な愛」を持つ状態になると、人に仕えたいという望みが高められ、奉獻の律法に完全に従って生活しようという気持ちになるでしょう。奉獻の律法に従って生活すれば、貧しい者は高められ、富める者はへりくだった心を持つようになります。そしてその過程において、双方が清められるのです。貧しい人々

は、貧困という不名誉な制約や束縛から解放され、自由な者となって、物質的にも靈的にも自らの持つ可能性を発揮できるようになります。富める人々は、奉獻の律法に従って余剰の財産を貧しい人々に分かちことにより、しかも強要されてではなく、自由意志に基き自ら進んでそれを行なうことにより、モルモンが「キリストの純粹な愛」と定義したその愛を同胞に示すのです。こうして与える者と受ける者が共通の基盤の上に立ち、神のみたまにより祝福されるのです。

人々が完全な福音に従って生活できるように助けるのは、この最後の神権時代に立てられた教会の使命です。主の民は「心の清き者」となり、山々や高き丘の上で繁栄し、祝福を受けるでしょう。そして神と共に歩むでしょう。彼らは心をひとつにし、精神をひとつにし、義に住むからです。また、彼らの中には貧しい者がひとりもいないからです。

これらのことを心に留めて、この偉大なプログラムを推し進めようではありませんか。福祉の原則は永遠です。福祉プログラムは奉獻の律法の原則の上に築かれます。私は自分の経験から、これが確かに神のみ業であることを知っています。キリストのようになるために私たちを備えてくれるのです。皆さんが自分の置かれている最も神聖で尊い立場について考えてみるならば、私たちがしなければならぬ最後のことは、同胞を助けることはもちろんのこと、自分の持てるすべてのものを神の王国を建設するために捧げることだと思い当たるでしょう。私たちはそれを実行することにより、福千年の到来を早めることができるのです。

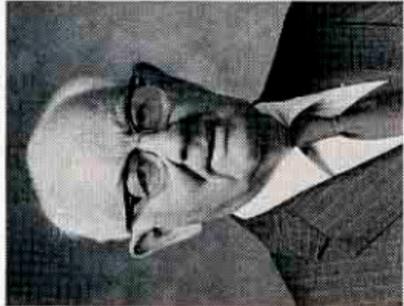
神の助けがあつて、私たちが失敗することのないように、イエス・キリストのみ名によりへりくだって祈ります。アーメン。

末日聖徒イエス・キリスト教会 教会幹部

大管長会



第一副管長
N・エルドソン、タナー



大管長
スベンスンサ―、W・キンボール



第二副管長
マリオン・G・ロムニー



副管長
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒定員会



エズラ・タフト・ベンソン



マーク・E・ピーターセン



リダランド・リチャーズ



ハワード・W・ハンター



トーマス・S・モンソン



ボイド・K・パッカー



マービン・J・アシントン



ブルース・B・マクコンキー



L・トム・ペリー



デビッド・B・ヘイト



ジェームズ・E・ファウスト



ニール・A・マックスウェル

七十人第一定員会会長会



フランクリン・D・リチャーズ



J・アルバートソン



カールロス・E・ヤング



M・ラッセル・バラード



タイロン・L・カンノン



ロイチン・G・リッカド



G・ホーマー・ダラム

最初の仕事はラジオ修理店の掃除でした。床に落ちている真空管がまだ使えるかどうかを調べるのも仕事で、そのためラジオに興味を持つようになりました。オークス長老は持ち前の熱心さで勉強しました。16歳で第1種無線免許を取り、商業向けラジオ局の送信機を扱うことができて、ラジオ関係の仕事が見つかりました。局の担当者は技師もアナウンサーもこなせる「両刀使いの人」を雇いたかったのですが、「私の声は相変わらずでした」とオークス長老は笑います。しかしほどなく、変われば変わるもので、彼はアナウンサーとして定期の仕事を受け持つことになりました。

夫人との初対面は、大学1年で高校のバスケットボールの試合のアナウンスをしているときでした。近くのスパニッシュフォークの高校に通っていたジュン・ディクソンを、試合会場で人から紹介されたのです。

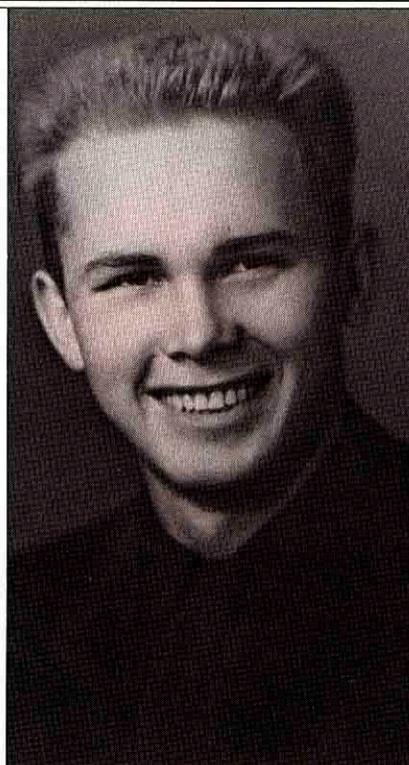
ふたりは1952年6月24日に結婚しました。両方ともBYUの学生のときでした。折しも朝鮮戦争たけなわで、オークス長老はユタ州民軍に入り、いつでも召集を待つ臨戦態勢にありましたが、近隣部隊が戦争に加わる中、彼の部隊は戦場に赴くことはありませんでした。戦争中のため、当時伝道に召される青年は少数で、ワード部の割り当てに空きがなく、彼は宣教師になりませんでした。

「夫は伝道に出られたらよかったです。これまでいつも考えてきたと思います。でも後にシカゴのステーク部伝道部長をしましたし、伝道部長も立派に務めましたよ。」ジュン夫人は語ります。

彼女は早くから夫の力量を認めていました。オークス長老はBYUの大学生時代を通じて、週30時間ラジオ局で働き、後半はふたつ目の仕事として家具運送会社のマネージャーも勤めました。

会計学の学士号を得た後はシカゴ大学法律学部に進学しました。(このときにはシャーモンとシェリーの女の子ふたりがオークス家に恵まれています)彼は学費を借金して学業に専念し、最終年度には学校の名だたる法律評論雑誌を編集して、優秀な成績で卒業しました。

「夫が法律大学院に通っておりまして、朝出かけるのは毎日7時で、帰宅は夜の11時でした。日曜日以外は」とジュン夫人。「ぼくより賢いやつが法学部にはわんさといけるけれど、ぼくより頑張



る者はひとりもないよ」と言ったオークス長老の言葉を記憶しています。

「苦しい時代でした」と夫人は言います。しかし彼女は、不仲になって夫をみじめにする女子学生が多い中で、その間違いは犯しませんでした。精神的に自立して、自分の世界を伸ばしていく必要があることを悟ったのでした。

卒業後、ダリン・オークスは勤勉と学力を認められ、合衆国最高裁判所のアー・ウォーレン裁判長の書記の仕事に抜擢されました。任期を終えた1年後に、彼はシカゴへ戻り、開業します。

息子のロイド・オークスは法律大学院在学中の最後の年に生まれ、もうひとりの息子ダリンと末から2番目の娘トルアンはシカゴ時代に生まれています。

この時期はオークス長老が教会活動に大きな進展を見た時期です。1961年にシカゴステーク部のステーク部伝道部長に召されました。仕事が夜にもわたるため、この新しい召しを果たすことができるかどうか彼は心配していたとオークス姉妹は語りますが、オークス長老は信仰をもって召しに臨みました。責任に全力を注ぐとき、道が幾度となく開かれて、仕事

娘のシェリー(左)とシャーモン。父親がブリガム・ヤング大学を卒業して法律大学院に進んだ頃には、共に家族に加わっていた。

高校時代、若きダリンはユタ州プロボのラジオ局でアナウンサーの仕事をした。

を早く終えたり、時間内に思ったより多くのことができたと言います。

1961年、シカゴ大学法科に勤務する機会が訪れました。オークス長老は報酬とチャレンジを求め、それを受けました。

1963年にはシカゴ南ステーク部の第二副ステーク部長に召されました。リスル・R・カフンステーク部長、ジョン・ソネンバーグ第一副ステーク部長と共に働きましたが、3人はいずれも十二使徒会地区代表の職に就いています。(ソネンバーグ兄弟は1984年10月、七十人第一定員会会員に召されました)

ダリン・オークスは教会の責任が変わらぬ積極さをもってあたりました。ソネンバーグ長老はこの同僚が日曜日を主のために取っておいたが、それはいわゆる「堅苦しい」ものではなかったことを思い出します。彼の奉仕と聖典の勉強は、神を知ろうという誠実な努力の一端であったことがよくわがわれました。

この時期、オークス長老は多くの責任に忙殺されました。そのひとつがシカゴ大学懲罰委員会の委員長で、1969年2月の17日間に及ぶ学生による大学本部座り込みに対する懲罰決定に際しては、彼の公正さと外交手腕が学生、教職員、地域の賞賛を集めました。

1964年の夏に法律大学院の副学部長および学部代理、1968年の夏はミシガン大学法律大学院の客員教授となり、1970年にはイリノイ州クック郡州代理人補佐として法曹界に名を高めました。この年に、イリノイ州憲法制定会議の権利宣言委員会法律顧問、1970年から翌年にかけて





ボランティア活動の必要性を訴えるレーガン大統領(右)、中央は合衆国商業会議所議長ドン・ケンドル氏、左側トーマス・S・モンソン長老

福祉プログラムに対して多大な関心を抱いていることを示し、教会の福祉制度が「これまで政府が果たしたいかなる施策よりもはるかに優れています」と賛辞を呈した。

『「飢えた者に魚を与えても、明日は再び飢える。しかし漁の仕方を教えるならば、再び飢えることはない」と、古くから言い慣わされた言葉があるが、これまで政府がよかれと思ってやってきたことも、魚を与える結果となっていたようです」と

教会福祉制度をたたえ

レーガン大統領、ボランティア活動を推奨する

【ワシントン=チャーチ・ニュース】レーガン大統領は、近日ホワイト・ハウスで持たれた実業家や財団、主な団体の指導者との朝食会で、現在アメリカ合衆国政府が背負っている重荷をボランティアグループが肩代わりすべきであると述べた。その席には教会を代表して十二使徒定員会会員のトーマス・S・モンソン長老が招かれた。

「米国を特徴づけていたボランティア活動があまりにも疎んじられています。政府は、地域社会や近隣の人々が本来なすべき事柄を、なんでもかんでも背負い込み過ぎているきらいがあります」と、レーガン大統領は語った。

またレーガン大統領は、特にモンソン長老をその席に特別に招待することによって、教会の

述べ、教会の労働倫理に基づいた福祉のあり方を称賛した。

また最近の諸教会の指導者との会談から得たこととして、「諸教会の聖職者たちは、本来ならば教会員が行なうべき隣人同士の助け合いが、これまで政府に押しつけられてきたことに気づき始めています」と述べ、こう続けた。「援助の手を差し伸べる際に、まずなされなければならないのは、個人の努力であり、次に近隣の人々あるいは地域社会の援助であって、政府からの援助は最終段階のものです。」

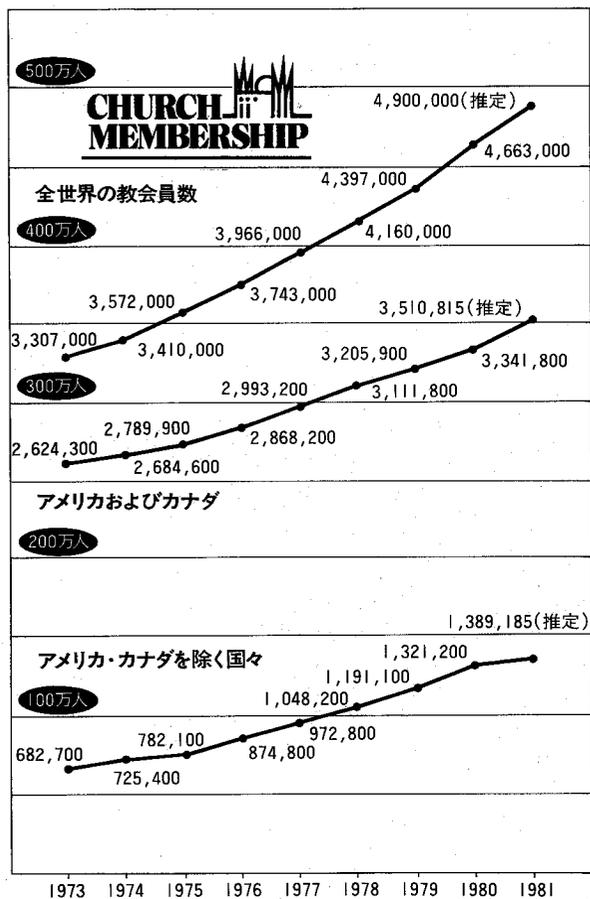
「レーガン大統領は、教会の福祉プログラムについてよく理解しており、情報を適確につかんでいる」とモンソン長老は語っている。

なお、昨年の12月2日、レーガン大統領はボ

ランティア活動やアメリカの困窮者に対し民間による慈善活動を推進するために、ホワイトハウス福祉活動特別委員会の委員として44名を任命した。その委員に十二使徒定員会会員であり、中央福祉活動委員会第一副会長のトーマス・S・モンソン長老を初め3名の末日聖徒が任命され

た。他のふたりは、女性クラブ連合 (*General Federation of Woman's Clubs*) の第一副会長であるジェリ・J・ウインガー姉妹と、市民ナショナル・センター (*The National Center for Citizen Involvement*) 所長のジョージ・W・ロムニー兄弟 (前ミシガン州知事)。

教会員数500万人に達しようとする 歩みを速めたキンボール大管長の8年間



キンボール長老は、1973年12月30日に当教会の予言者、聖見者、啓示を受ける者、第12代大管長として聖任されて以来、「歩みを速める」とこと「実行 (*Do it*)」することのふたつのモットーを旗印に、教会の世界伝道プログラムを強力に推し進めてきた。

1973年に約330万人だった教会員数も1981年末には490万人までの増加が見込まれ、数カ月の内に500万人に達すると推測される。また改宗者数は、1973年当時の約80,000人から1981年中には約230,000人へと約3倍に、宣教師数は17,000名から29,500名に、ワード部数7,500から12,600に、ステーク部数が630から1,275へと、それぞれこの8年間にほぼ倍近くの増加を示している。

(チャーチ・ニュース1981年12月19日付)



良彦長老、田中健治長老
左から佐藤龍猪兄弟、菊地

クモラの丘^{くわ}霊園^{るま} 鍬入れ式

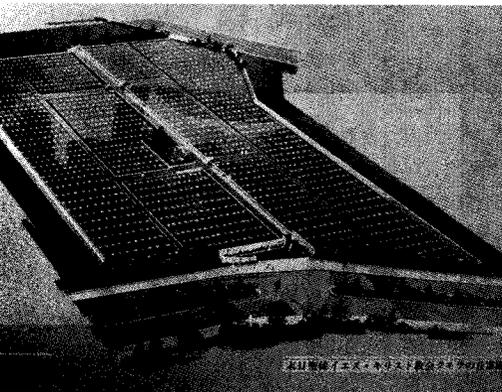
去る2月4日(木)午前11時から、埼玉県入間市毛呂山町長瀬1313番地にある武蔵野霊園で、菊地良彦長老の管理の下に「クモラの丘霊園鍬入れ式」が行なわれた。

武蔵野霊園は池袋から電車で1時間程の所に位置し、秩父連山を望むなだらかな丘の上にある。その9万平方メートルの公園墓地の一角に、

6,600平方メートルの永代使用権を購入したのは、31年前の昭和25年12月19日のことである。当時、佐藤龍猪兄弟の尽力によって購入されたものであるが、その後いろいろな問題が生じ、最終的には今年の1月に正式に教会から開発の許可と予算が承認され、使用できるようになった。

「クモラの丘霊園」の命名は、墓地委員会(代表:菊地良彦長老)によってなされ、モルモン経のモロナイ書10章34節で「霊と私の体とが再び相合するまで神の楽園で安息に就く。……」と結んだモロナイが金版を封じたクモラの丘にちなんで名づけられた。

霊園の造成完成予定日は、今年の8月末で、一区画3平方メートル23万円(予定)で永代使用権を入手できる。申し込み締切は7月末。詳しくは、東京都港区南麻布5-10-30、末日聖徒イエス・キリスト教会、「クモラの丘霊園事務局」(担当:今井一男兄弟)まで。



クモラの丘霊園の 開園にあたって



日本・韓国地域代表役員
菊地良彦

このたび大管長会の特別の承認を得まして、長い間の懸案でありました「武蔵野霊園」の永代使用権の分譲のための手続きが完了し、「クモラの丘霊園」として、末日聖徒イエス・キリス

ト教会の会員の皆様にお渡しできるようになりました。

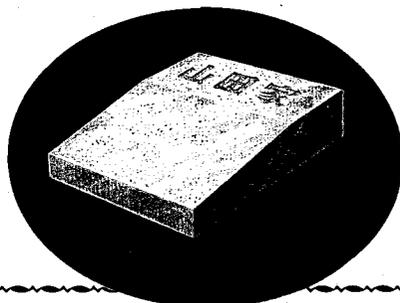
この霊園は、前北部極東伝道部長であられたポール・C・アンドラス部長が、故デビッド・

〇・マッケイ大管長の承認のもとに購入された
 ものであります。現大管長会副管長であられる
 ゴードン・B・ヒンクレ副管長ならびに、前
 日本・韓国地域代表アドニー・Y・小松長老や
 前地域監督アーサー・K・西本兄弟、その他多
 くの方々のご協力により、造成、開発までこぎ
 つけることができました。

本来、当教会は墓地経営をいたしません
 が、購入当時の国情をかながみて、大管長会が特別
 に許可されたものでありますので、教会が墓地
 運営をするのは今回限りとなります。

万軍の主が、天の軍勢と共に栄光の雲をたな
 びかせながら能力と栄光の衣を着け、天の雲に
 乗り、再び地上にお帰りになられる時まで、聖
 徒たちがしばしの間休まれる場所「クモラの丘
 霊園」をお渡しできることを喜んでおります。

夜明の星が空いっぱいに輝き、
 五彩の美しい雲がたなびくとき、
 東の空に現われる太陽は、黄金の光を放って、
 あまねく天と地にその恵みを与える。
 創造主が創られた、生きとし生ける
 すべてのものが、再び脈々とよみがえる瞬間、
 天父が神の子等に恵まれた「生命」に
 深い感動と歓声を覚え、天父の御前に合掌する。



▲墓石の完成予想図

1981年度中に召された110名の

日本人専任宣教師出身別合計—日本人宣教師訓練センターの報告から

東京ステーク部	13名 (3名)	東京南ステーク部	2名
東京北ステーク部	9名 (3名)	神戸ステーク部	2名
沖縄ステーク部	9名	高松ステーク部	1名
福岡ステーク部	8名 (2名)	仙台ステーク部	0名
東京東ステーク部	7名 (1名)	広島ステーク部	0名 (1名)
大阪ステーク部	6名 (1名)	岡山伝道部	9名 (2名)
大阪北ステーク部	6名 (2名)	福岡伝道部	4名
札幌ステーク部	5名	札幌伝道部	2名 (2名)
横浜ステーク部	4名 (4名)	名古屋伝道部	2名 (2名)
名古屋西ステーク部	4名 (2名)	仙台伝道部	1名
札幌西ステーク部	3名 (1名)	東京北伝道部	1名 (1名)
高崎ステーク部	3名 (5名)	東京南伝道部	0名 (2名)
町田ステーク部	3名 (2名)	大阪伝道部	0名
静岡ステーク部	3名	神戸伝道部	0名
名古屋ステーク部	3名 (4名)		

*括弧内の数字は今年度1～3月に召された日本
 人宣教師数。

*今年1月の統計によると、日本で伝道する日本
 人専任宣教師の占める割合は1,388名中187名で
 約13%である。

教会教育部

開校2年目を 迎える

東京インスティテュート

▼視聴覚資料を効果的に使った
授業が行なわれている。



◀東京インスティテュート
で学ぶ学生たち

昨 年4月に開校

された東京インスティテュートは、登録者が550名を越え、相応の成果を挙げて

きた。2年目の今年度もまた、神学をわかりやすく、かつ深く学ぶ機会とすると共に、様々な活動を通じて、学生たちの成長に寄与することが期待されている。

特に、インスティテュートで学んだ兄弟姉妹たちが証を強くし、力強く伝道に出かけて行く姿には目を見張るものがある。

今年度は全国的に「日の光栄の結婚の準備」のコースが設けられ、東京インスティテュートでも、そのコースを中心に予定が組まれている。また、「旧約聖書」「末日聖徒の歴史」など新しいコースも幾つか設けられ、全部で17コースの学課の中から選択できる。

《テーマソング、シンボルマーク募集》

現在、日本におけるインスティテュートのテーマソングとシンボルマークを募集しています。下記の要領で奮ってご応募下さい。●**応募資格**／インスティテュートの登録者(ただし学生であること)●**締切**／1982年5月末日(消印有効)●**送付先**／〒150 東京都渋谷区桜丘町3-4 黒川ビル4F／東京インスティテュート(TEL.03-496-6954)●**応募要領**／未発表のものに限ります。(作品はお返し致しません)①**歌**——楽譜(歌詞付き)に録音テープを添付する。共同作品も可。②**シンボルマーク**——彩色すること。●**審査**／審査委員会ならびに全国のインスティテュート登録者による審査。●**表彰**／①**歌**——**最優秀賞**(1名)……京浜地区以外での入賞者は東京へ、京浜地区での入賞者は札幌へ、それぞれのインスティテュートの授業参観旅行(7月中旬予定、2泊3日)／**優秀賞**(1名)……図書券5千円(TDCの図書のみ有効)②**シンボルマーク**——**優秀賞**(1作品)……図書券5千円(TDCの図書のみ有効)

「兄弟よ、われらまことに偉なる大義^{むか}に向って進まざらんや。進み行きて退くことなかれ。奮^{ふる}い起てよ、兄弟たち。進み進みて勝利に至れ」(教義と聖約128:22)との聖句を掲げ、宣教師となる準備を進めてきた3人グループがある。インスティテュートで共に学び、大学のMIAグループで活動してきた慶応大学学生、山本公也兄弟(3年生)、永野卓司兄弟(57年卒業)、中塚祐文兄弟(57年卒業)である。今月号では、日本人の手による伝道の業がさらに進展するようこれらの兄弟たちの証を紹介する。



私の転機となった日

◀「私の転機となった日」と題して証を投稿した3人。左より中塚祐文兄弟、永野卓司兄弟、山本公也兄弟。山本・中塚両兄弟は、日本札幌伝道部に、永野兄弟は日本名古屋伝道部に召された。

宣教師との出会いから

1974年1月12日。「こんばんは」の声に玄関先に出ると、そこには見知らぬ外人がふたり立っていた。まっ赤な頬ときらきら輝く瞳、満面に微笑をたたえて。

「聖書に興味ありますか。」「はい。」善い人でありたいと考え、また自分の人生哲学にキリスト教の教えも加えたいと考えていたので、レッスンを聞いてみようと思った。私は「どの宗教にもたくさん宗派があるのは、宗教が人間の考えだからだ」という強い信念を持っていた。宣教師から受けたジョセフ・スミスの見神のレッスンは、この信念に強い衝撃を与えた。「もし、これが真実なら大変なことだ」と何度もレッスンを思い返すのだった。レッスンを重ねるうちに「この教えが真実かどうかはわからない。でもとても素晴らしい」と考えるようになった。

中塚 祐文
(横浜第1ワード部)

しかし、ひとつの戒めに問題があって先に進むのをためらった。

何度か彼らと会った時、いつもこう自問した。「なぜ彼らはこんなに自分のことを思ってくれるのだろうか。これほどまでに自分を思ってくれる友人が他にあるだろうか。」そう思った時から祈りは真剣さを増した。祈りの答えは、信号待ちで自転車を止めた時に得られた。「自分のめざす善い人とはどんな人なのか。あの宣教師のような人ではないのか。それなら、そのような人になるのに何をためらうことがあるか。」そう思った時、信号は青に変わった。同時に込み上げてきた熱いものを抑えることができなかった。それこそまさに、クリスチャンへのゴーサインであり、宣教師のようになりたいとの志を抱いた日であった。

仙台ステーク部独身成人大会で

山本 公也

(横浜第1ワード部)

伝道を決意したのは、1981年5月5日のことだった。仙台ステーク部独身成人大会に参加することによって、日頃忙しさの中に忘れがちであった伝道に出たいという僕の単なる望みが、堅い決心へと変わっていった。「東北に来てよかった。」今もあの時のことを考えると胸が熱くなる。東北の人たちの温かさや従順さ、信仰の強さに触れ、私の思いは高められた。

特に「にっころがしグループ」の仲間たちの人柄と信仰に感謝したいと思う。一緒に活動していて、自分は彼らを昔から知っているように思えてならなかった。そして、だれもが神の子なのだという証が私の中で大きくふくらんだ。また「家庭の夕べ」では彼らの証で僕の霊は清められ、伝道についての素直な思いやビジョンを語り合えた。さらに大会の伝道セミナーで受

けた感動も私の歩むべき道を示してくれた。

翌朝の聖典勉強会で読んだ「人の心には多くの計画がある。しかし、ただ主のみ旨だけが堅くたつ」(箴言19:21)との聖句が、私の思いを決定的なものとし、あらゆる不安と惑いが消え去った。この時こそ、私にとって大いなる転機の日だった。



走行不能のバイクから

永野 卓司

(自由ヶ丘支部)

1980年9月18日、朝帰りの私を待っていたのは、部品を盗まれて走行不能になった私のオートバイだった。いつもは通らない道を肩を落として大学へ向かう私は3年生になっていた。

中学3年の時、大喜びでバプテスマを受け、活発に集い、証も得た私ではあったが、2年半後には、ちょっとしたことで教会に行かなくなってしまった。そうなる、福音が真実だとわかっていても、祈りの回数は減り、聖典を読まなくなり、悪い思いが自分の霊を弱めていくのがわかった。

大学に入ってから、知恵の言葉も破るようになり、束の間の楽しみはあっても、魂は奈落の底をさまようという状態が続いた。しかし、いつかは必ずこの状態を脱け出したいという望みを捨てることはなかった。そして、ついに導き

となる宣教師との出会いがあった。

いつもはオートバイで走る大学への道を歩いていると、私の前に大きな人が立ちふさがった。その宣教師の笑顔を見て私は、自分と神様との間に作ってしまった壁を壊す決心がついた。

そして教会に戻って3カ月たった1980年11月に、慶応の三田祭があった。MIAの名でモルモンパピリオンを催していた中塚、山本両兄弟、帰還宣教師でもある佐久間兄弟の熱心な活動に接し、証を強めた。また、ボンヤリと感じていた伝道への希望もある姉妹から言われた「兄弟は絶対に伝道に行くべきです」との言葉が決意を固める起爆剤となった。その時に、家に帰ってからキンボール大管長の『すべての若人は伝道に出るべきである』との「聖徒の道」のメッセージを読み、今まで他人事のようにであったこ

親、兄弟、知人との話し合いから、末日聖徒のひとりとして警察官になるべきだとの結論を見、決断を下しました。しかし今考えますと、それほど深く考えて警察官という仕事を選んだのではなく、一種の憧れが先行していたような気がします。

やがて警察官になった私は、あまりにも強烈な社会の裏面ばかりを見せられ、教会でそれまで学んできたことをどう活用したらいいのかわからなくなり、自分の信仰が次第に無くなっていくのを感じたことがありました。そうなるとサタンの力は増し、私を暗黒の世界に引きずり込もうとして、あらゆる方法で誘惑をしてきました。

私はその頃、新米刑事として事件や事故を扱うようになっていたのですが、ほんの数時間前に親しく話していた師友が事故に遭い、この世の人でなくなってしまいました。そうした場合、私どもは変死人として死因を究明しなければならぬのですが、その時私がたまたまその師友の検視をする羽目になりました。眼前に横たわる師友の姿を見て、ほんの数時間前に楽しく語

り合っていた師友の死が信じられませんでした。それと同時に、師友を死の直前まで生ある者として支えていたものは何だろうか、その力は何れによってもたらされていたのかといった疑問が心にわいてきたのです。そうした瞬時の師友の死によって神の偉大なる力と慈しみ、さらに戒めと福音が真の自由と守り、平安を与えてくれるものであることを再認識させられました。

私はその時のことを考えると、あの時師友の死を通して、神が、サタンの支配下におかれようとした私を救ってくれたのではないかと思います。その時から私は神が教え導くことを忠実に行なうように心がけました。その結果たくさん祝福にあずかることができるようになり、信仰への迷いがなくなってきたのです。

私は法の本質は真の自由にあると自分なりに理解しています。末日聖徒であり、かつ刑事である私は、法の本質を正しく理解し、この世における真の自由を育む者の一役を担うことが使命であると考えています。

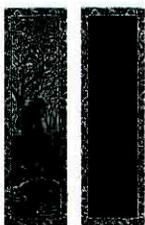
(たかくわ・はるのぶ：1947年生まれ、現在札幌ステーク部高等評議員)

〒DCだより

★新刊紹介

「若い女性テーマ
聖句のしおり」

サイズ：182×57mm
価 格：10枚100円



「若い女性を
教える」

A 4 判 26頁 150円



小冊子(「若い女性を教える」)は、若い女性の追加レッスンをする際の資料となるものです。参考に挙げられている14のレッスン例は、効果的に教えるのに大いに役立つでしょう。

★編集室から

現在のローカルページを拡充し、さらに読者の声を紹介するコーナーとして新たに「読者のひろば」を設ける予定です。「聖徒の道」を読まれてのご意見、ご感想、「聖徒の道」の活用例など、ハガキでどしどしお寄せ下さい。イラストも大歓迎。所属のワード部/支部名、年齢、職業も忘れずに記入して下さい。

●宛先/〒158 東京都世田谷区上用賀4-9-19/東京ディストリビューション・センター/「聖徒の道」編集室

末日聖徒イエスキリスト教会

浦和ワーカーズ部

付属図書館

